

F≠S 《インフィニット・ストラトス》

バンビーノ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二人目の男性IS操縦者、出路桐也。

春の陽射しがウララな季節に差し掛かる頃に行われた全国男性IS適性検査で、遺伝子がどんなハツスルをしたのか打鉄を動かした少年が一人。

そんな彼と一夏はIS学園に入れられ——以下省略。

※割りと不定期となります。

目次

01.	ハッスル遺伝子	1
02.	貴族と庶民	13
03.	下準備	25
04.	代表候補生と挑戦者	38
05.	不完全停止二人	51
06.	キブンリンリン	64
07.	才能と過去と	76
08.	代表対抗戦と襲来と。	88
09.	一時沈着	103
10.	真夜中の訪問者	114
11.	初めましてのドロップキック	126
12.	面倒積もり	141
13.	僕は私	152
14.	彼の認識	166
15.	賽は投げられた	179
16.	気持ちの余裕	190
17.	いい奴	204
18.	苦労人	218
19.	気持ち転換	230
20.	キヲテラエ	245
21.	やらかしの代償	258
22.	打鉄二機推参	269
23.	マイフレンド	282
24.	初めてのお買い物	293

25.	夏と心のオアシス	306
26.	思慕―暫定的結論	319
27.	九天の境界線	331
28.	暗雲低迷	343
29.	暗転急落	355
30.	重見天日	369
31.	小さなナイト	384
32.	夏休み一幕	396
33.	彼らの家は。	410
34.	セカンドシーズン	423
35.	友人定義	435
36.	定義―不明瞭	446
37.	変化≠逆戻	458

01. ハッスル遺伝子

春の陽射しがうんたらかんたら前略、拝啓両親含め先祖様へ。あんならの遺伝子はどうなつてやがりますか？

つい先日、女性にしか動かせないはずの現代で最強の象徴であるISというものを動かした一人の男がいました。名は織斑一夏、テレビで見たかぎりイケメンでした。いえ、そんなことは前置きであり重要ではありません。

その織斑一夏が見つかったあとに、日本全国の男がISの適性検査を受けさせられるという珍事が起こりました。女性権利擁護団体などは税金の無駄だ止めろ、なんて声を大にして主張していましたが、私も珍しくその団体の言う通り無駄なものと内心で思っていました。

適性検査が始まり一週間、世間では春休みが終わろうとしている時期。ついに私にとっては運命の日がやってきました。こう書くとオチが見えたも同然ですね。俺……失礼、私の遺伝子やらなにやらがハッスルしたのか日本でメジャーな量産機である打鉄に触れたそのとき。

頭のなかに熱した鉄を流し込んだかのような痛みとともに打鉄の情報が流れてきました。是非ともあの痛みは皆さま方体験してみやがれと言いたいレベルで脳髓をガリガリと削つていくかのように、脳漿を沸騰させるかのように情報を上書かれるかのようにでした。

さて、次の瞬間私は地に伏していました。理由は単純明快、頭痛に毒を吐いていた私を警備員たちが確保したからです。ええ、世界で二人目の男性IS操縦者です。貴重ですし逃げられるわけにはいかない、取り押さえる気持ちはわからなくもないですとも。しかし、私からすればそんなこと知らねえつてもんです。

ちよいとばかり組伏せるというには甘い締めから私は力付くで抜け出し、体勢の低い警備員の顔にヤンキーキックを叩き込みました。それこそボールは友達と言わんばかりの勢いで。

こちらからすれば訳のわからない頭痛に苛まされた直後にいきなり襲われたのですから許してほしい。そこからは大乱戦、殴り殴られ

蹴り蹴られ——ることなく、私が一方的に攻撃。向こうはなるべく無傷で捉えようとしているのか再び取り押さえようとしてきました。そんな気遣いするなら元から丁寧に扱えと思った、のはその後数には勝てず再度取り押さえられたときでした。

あれから三日後、晴れてIS学園に入学してた。俺の心は曇ってた。受験勉強がパーになったことや受かったことを涙ながらに喜んだこととか、全部無駄になったのはまだいい。まあ、君は世界の男たちの礎になるんだよとか言われて解剖されたり実験されるよりはマシだ。

——けど、けどな考えてみろや。

全校に女しかない学園に男二人だけだ。死ぬる、別にコミュ障なわけでもないし一日、二日程度ならなあなあで何とかする、一ヶ月なら気合いで耐えてやる。けど三年って政府は俺を遠回しに殺したいのかとすら思う。

今でも物珍しさからか、織斑一夏と俺がいる一年一組には多くの女子生徒が集まってきている。

不気味なのは俺と織斑一夏から半径約1メートルほどの空間には誰もいないことだ。妙な緊張感に包まれていやがる……正直織斑一夏と話して気を紛らわせたい。というよりも三年間ここで過ごすなかで唯一の男友達なり得る存在。親睦を深めたいのだが妙な緊張感のせいで身動きを取りづらい。あれだぞ？俺が欠伸かみ殺すだけでも一瞬空気が揺らぐのがわかる。どんだけ一挙一動に注目してるのか。

これは動物園の動物というよりも、美人のスカートがパンチラしそうなときに謎の集中力をもってして視線を送る男に見られるパンツの気持ちだ。パンツの気持ちかわかるなんてIS学園はすげえな。

「……………」

織斑一夏も姿勢を正したまま動かない。たまにどこかに視線を送ってるように見えなくもないが、返信がないので気のせいか相手に着拒されているようだ。

それからチャイムがなるまで寝た振りをしたい衝動にかられつつ耐えきった。

さて、そこから入ってきたのはナイスおっぱいこと山田真耶先生だ。担任ではなく、副担任であると自己紹介していたがベビィフェイスに似合わぬ胸がインパクト強すぎて内容がほぼ頭に入ってこなかった。

「じゃあ、それでは皆さん名簿順に自己紹介していきましようか」

その言葉を受けクラスメイトたちの自己紹介が始まったのだが織斑一夏で止まった。止まったというか思考に耽っていたのか自分の番が来たことに気づいてなかったようだ。

そして名前しか言わないというとても斬新かつシンプルな自己紹介を終えた織斑一夏は席に沈んだ、沈んだんだ。原因は、恐らく教室の後ろから音をたてず入室し、さながらアサシンのように気配なく織斑一夏の背後に立った女性。その手に輝く漆黒の出席簿が目にも止まらぬ速度で自己紹介を終えた彼の頭へと振り下ろされたからだ。

「ち、千冬姉!?! なんでここに……入学したのか!?!」

「織斑先生だ。あと歳を考えろ馬鹿者、さらに言えばお前はまとも自己紹介もできんのか」

再度振り下ろされた出席簿にうぼあ、なんて言語にならない織斑一夏の口から漏れた返事を聞いた彼女はツカツカと教卓に向かい教室の生徒たちへと向き直る。

「私が担任の織斑千冬だ。私の役目は半人前未満のお前たちを一人前にすることだ。全員一流程度には叩き上げてやる、だからついてこい。わからなくてもハイと言え。いいな!」

「はい……あれ?」

織斑教諭が言い放った言葉に反応したのは俺一人。いや、取り敢えずハイって言えって言ったじゃん。そう思った直後、静寂が破られた。クラス内では声援というか喝采というべきか、キャー千冬サマー的な音の暴力が吹き荒れる。机の上のシャーペンがカタカタいつてるし窓枠も心なしか震えてる、ここはコンサート会場か? 熱気が凄いい、しかし汗臭くなくフローラルな香りとはこれ如何に。たまにキツ

めの香水の匂いも……まあ許容範囲だ、男の汗の臭いより千倍マシだ。エクセレント。

「よくもまあこんだけの馬鹿たちが毎年入学してくるものだ。なんだこの一組は馬鹿の吹き溜まりスポットか？ おい馬鹿者共、返事はどうした！」

「「ハイっ！」」

普通なら嫌われそうな物言いをする教諭なのに妙な信頼感とかブレない安定感がある。これがカリスマなんだろうかね、指揮力あるなし置いといて凄い人に指示する役職とか向いてそうだ。指揮官というより将か、私についてくれば勝利を与えてやる的な。世界一というだけあって真実味が増し増しの倍ドン。

「さて、自己紹介の続きをしろと言いたいが時間がない。もう一人の男子生徒、お前だけしておけ」

「わーい、ヤッタゼ」

「棒読みの返事はいい、織斑とお前だけ特殊な立場なんだ。自己紹介くらいしておけ」

若干いびりかと思つた……いや、世の中女尊男卑だし。ただの純粋な気遣いだった。

「どうも、名前は出路桐也^{でじとうや}。まあ、名前でもあだ名なら“でつち”でも適当に呼んでももらえりや幸いツス……えー、他は趣味はそこいらの菓子を買ひ漁って食うこと。というか食うのが好きか、あと読書、以上。今後よろしくお願いします」

「よし、質問があるやつは」

織斑教諭のその言葉で空気がピンと張りつめる……スタートダッシュは逃さないという感じがありありと伝わってくる。しかし、

「各自休み時間聞きに行け」

続けられた言葉により再び空気は緩む。残念ながら俺は休み時間織斑一夏に友達申請に行くのだ、受信拒否されたら人生リセットしたくなるけど。授業終わりのチャイムとともに気にせず突撃開始ことにする。織斑一夏もこちらへ来ようとしてたらしい、目線が合いお互い救われたような顔になった。

だがしかし、俺は遅すぎた。スロウリイだった。

「一夏、少し良いか？」

「つと……なんだ筈」

「久し振りに会ったものだから積もる話を少々……と思ったのだが。デジ、出路だったか。すまないがこの時間だけ借りて構わんか？」

「いいぞ。まだ俺と織斑一夏は知り合ってすらいないし許可もとらなくもいいぞ……」

丁寧にも俺にまで確認してくれた大和ナイスおっぱい撫子に、出鼻をくじかれた俺は机に伏しつつ返答する。そうか、織斑一夏には知り合いがいたのかチクショウ……羨ましいなおい。そして二人が去ったあとの教室は静寂に包まれては、いないな。ヒソヒソと声が聞こえるが動くやつがない。

ふう……あれか、俺から動かないといけない感じか。受け入れる姿勢を整えろと、待ってるだけじゃ始まらないって誰かも言ってたしな。

両手をバツと開きウエルカムと態度で示す。誰もかれもが首をかしげるだけで動かねえ死にたい。

「質問でもなんでも受付中！」

大丈夫ダイジョウブ、まだ致命傷だと内心思いつつめげずにそう宣言する。そうすると一人のこう、ゆるふわとした雰囲気のカラスメイイトが来た。来てくれてありがとう、危うく人生の選択ミスったと思っただけから飛び降りるところだった。人生にセーブポイントは無いがリセットボタンならあるんだぜ？

「でつちーはズバリたけのこ派？　きのこ派？」

「おう、渾名で呼んでくれてありがとう。名前も覚えられてないのほんとしたクラスメイイトさんや」

「布仏本音だよ、でどつち派？」

「布仏か、きつと覚えた。きのこ派だけど？　たけのこは——」

——次の瞬間クラス内ほぼ全員で戦争が起きた。たけのこ派vsきのこ派の壮絶な戦いが。

俺は教室の片隅で眺めてた。話を聞けば布仏もただ菓子趣味の

確認をしたかっただけのようでのこの惨事は予想してなかったそうだ。うん、そりゃ普通予想できねえわ……あ、金髪ロールな子が教室の外に出てった。

あれじゃん、きのことたけのこの差って生地がビスケツトかクツキーかの違いじゃねえか。クラスメイトたちのノリの良さはわかったけど些か度が過ぎる。どのくらいかってと織斑教諭が鎮圧しにくるくらい、制圧ともいう。

「何が原因だ」

「私がでつちーにきのこ派かたけのこ派か聞いて〜」

「俺がきのこ派と答えた結果この状態です」

「はあ……ここは本当にバカの吹き溜まりか？」

いや、たしか狭き門を潜り抜けてきた才女たちのはずだが。譲れないもののために戦ったんじゃないか？

「休み時間にはしゃぐことは咎めん、ただ節度を守れ！」

「ハイ！」

こうして休み時間は過ぎ去っていった。因みに布仏はたけのこ派らしい。あれも美味しいけど手が汚れやすいんだよな、それがネツク。

そんな世にも下らん第一次クラス内戦が終結した後、入学した日にも関わらず授業が始まる。きのこ派とかたけのこ派とか言ってる暇じゃなかった、俺の頭がアポロに乗って月までサヨナラしてる。

クラスの席順、先頭にいる織斑一夏も頭から残念な感じに煙が出るように見えなくもない。

今教壇に立っているのは山田先生、きつと彼女の説明は分かりやすい部類なんだと思う。教科書通りの説明ではなくかみ砕き、ときには補足して授業は進行している。

ならなんで俺がわからんかと言われれば、入学までに三日しかなかった俺になにを準備しろと？

とにかくノートに書きまくる。山田先生の説明、板書を可能な限り殴り書きしていく……うわー、あとで綺麗にまとめないとまともに読

めねえ。くそめんどい帰りたーい。チツ、そーいや帰る家が既にな
いフラック!

「織斑くん、出路くん、質問があつたら遠慮なく聞いてくださいね？
なにせ私は先生ですから」

あまりにも間抜け面を晒していたのか、見かねた山田先生がえっへ
んという感じで胸を張る。張られたおっぱいの自己主張が激しくて
眼福ありがとうございますじゃなくて綺麗さっぱりわからないとか
言えるわけなかった。

そこで手をあげたのは織斑一夏。その姿は男らしく――
「ほとんど全部わかりません！」

向こう見ずなやつだった。山田先生が泣きそうになりながら今の
段階でわからない人がいないか聞いてくる、やめろこつちにまで流れ
弾が来たじゃねえか……! 被弾者は俺一名、俺も泣くぞ。

悲しいかな、手をあげたのは俺一人。山田先生がさらに泣きそうに
なってる。ごめんなさい、ホントごめんなさい。

「織斑、出路。入学前の参考書は読んだか？」

参考書……? んなもんあつたろうか。織斑一夏が電話帳と間
違って捨てたと言いつかれるのを横目に記憶をえっさほっさと掘り
返すが記憶にないぞ。

あ、いやあつたわ。手元にはないけど記憶にあつた。入学が決まっ
て参考書を昨日家に送りますねって言われた……家はもうないん
じゃねえかなあ、保護プログラムとかなんとかのせいできつとない
ぞ。ここ三日ホテル暮らしだったし。

「出路、お前は読んだか？」

「入学が急遽決まったのが一昨日、その後ドタバタして昨日に家に
一式送ると言われたんですが来てません」

「……お前にも今週末までには発行してやる。読め、そして覚えろ」
「はい」

電話帳と間違えるくらい分厚いやつめんどくさいなー、めんどくさい
ことばっかだな。

その後の授業もひたすらノートをとる作業に徹した。

そして二限目の休み時間がやって来た、織斑一夏もやって来た。正直ノート書く作業でグロッキーになって動く気力に欠けてたのでありがたい。お互い簡単に自己紹介して握手、互いのホロリと流れた涙は見ないこととする。

「それにしても桐也は大変だったな。三日前に入学が決まったんだろ？」

「ああ、一昨日に学園アリーナで試験官とのIS勝負に制服採寸。昨日はマスコミその他もろもろ書類処理をしてたら入学前必読参考書が既がない自宅に届けられる始末だ……誰か俺の人生の不具合直してくれねえか」

「お疲れさまとしか言えないな……」

「失礼、ちよつとよろしくて？」

そんな楽しくない苦労話で楽しく駄弁つてると金髪ロールなクラスメイトが声をかけてきた。あー、クラス内戦勃発したときに出ていった奴だ。

一夏と……えー話を聞くにセシリアさんが話し合うのを眺めてる限り、イギリス代表候補生（エリート、たぶん強い）であるセシリアわたくしと同じクラスになったのだから喜ぶがよい的な話をされる。

一夏が生返事することでセシリアという天然無自覚の煽りで火に油を注いでる。具体的には『代表候補生ってなに？』とか言つて。一夏は中々の煽りスキルを持っているようだ。

ちなみに代表候補生ってのは各国にはIS操縦者のトップとして国家代表つてのがいるんだけど、その候補生のこと。割りと一般的に知られてるはずだが一夏はISにかなり興味がなかったのか。

「大体あなたISについてなにも知らないくせして、よくこの学園に入れましたわね」

ペーパー試験受けてないカラナー……いや、ほんと他の生徒に申し訳ないけど無理矢理だったんだ。ISで戦おうつてのだけ受けただけ負けた、そりゃ負けた。

「そちらのあなた、ずっと黙ってますけど何か言うことはありませんの？」

「強いて言えばもうちょっと会話に加わりやすい言葉のパスが欲しかったいやなんでもないです」

「……あなたも授業ほとんどがわからないと言ってましたがわたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも教えてあげなくてはならないですわよ?」

恐らく彼女なりに目一杯譲歩して言葉をパスし直してくれたらしい。優しさが身に染みる。言葉は悪いけど、言葉のパスをやり直してくれたあたりイイ人と思う。

「じゃあ、参考書を貸しておくれ。発行されるまでお願いします」

「そういえば貴方は手違いで届かなかったのでしたわね……いいですわ、貸してあげますわ。そもそも同じスタートラインに立てないのはフェアじゃありませんもの」

フン、と言わんばかりのドヤツとした顔をしながらも貸してくれるという。本当に良い人か、態度が悪いというか当たりがキツイ気するけど外国人だし日本語になれてないんだらう。そういうことにしておく。

「おお、助かるありがたい」

「なんてことないですわ。入試で唯一教官を倒したわたくしほどにもなれば、あの程度の内容は既に覚えていることですので」

「電話帳レベルに分厚い内容覚えてるとかセシリアさん天才かよ」

「ええ、エリートです——」

の!、もしくは、わ!、と続いたんだらうきつと。でも残念ながら続かなかつた、だって教官を倒したのは一人じゃなかつたんだから。

「あれ? ISを動かす試験のことなら俺も教官倒したぞ」

「……は?」

「ブルータス……お前も天才か」

セシリアさんはプルプルと震えてる。倒したのは自分だけじゃなかつたという事実からか、授業内容についていけてなかつた一夏が試験官を倒したということを受け入れられないのか。

しかし、この会話はここで終わった。チャイムが鳴ったんだから生徒は席に着かなければならない。それじゃあ座るか、とか言つて一夏

は席に戻った。おいふぎけんな、爆弾に火を着けたまま置いてく
よ。

「……わたしくも、戻り、ます、わ」

「……おう」

震えていた彼女も席に戻ったが周りの子がちよつと引いてる。
こつち見んな、原因は知ってるけどそうなった理由は知らねえから。
「では授業を始める前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者、
つまりクラス委員長だ。それを決める。クラス対抗戦は入学時の各
クラスの実力推移を測るものだ、あとは競争による向上心か」

はーん、クラス委員長か……しかしあれだな。こういうのは手をあ
げる人間が少ないと思われがちだがここはそうじゃなかった。次々
に女子が手をあげて織斑くんと出路くんが推薦されたからな、単純に
好奇心からなんだろうがさっきの授業の惨状を忘れたのか。泣くぞ。

一夏がようやく現実を認識したのか驚いて立ちたがり拒否するも
織斑先生に拒否を拒否された。

「待つてくださいい！ 納得できませんわ！ そんな好奇心でしか選ん
でいないような選出認められませんわ！ クラス代表者とはすなわ
ちクラスの実力を示すものになるのに、さきほどあんな醜態を晒して
いた者に任せるなんて……！」

そう声をあげたのはセシリアさん、随分と耳に痛いことを言う。
まあ、普通に醜態だったし否定しないが怒れる彼女は止まらず益々
ヒートアップ。

「そもそも男が代表なんていい恥さらしですわ！ そんな屈辱耐えれ
ません、実力から行けば私がクラス代表になるのは当然。それを物珍
しきから——」

そのまま流れるように日本までD i sるセシリア選手、しかし負け
じと一夏選手もイギリスメシマズプギヤアと言い返した。両者譲ら
ない割りとうどうでもいい戦いが今ここに始まる——！

「決闘ですわー！」

「いいぜ、四の五の言うよりわかりやすい」

本当に始まりやがった、なんなのお互い自国大好きっ子なのか。

「では代表決定戦を織斑、オルコット、出路の三名で一週間後に行う。なにか質問のあるものは」

「ナチュラルに俺の名前が入れられているところについて少し」

「クラス代表者候補三人中二人が決めた方法に乗っ取っただけだ、公平だろうか？」

「大人って汚ねえ……じゃあ俺もクラス全員推薦でバトルロワイヤル形式を」

「時間切れだ、というかさすがにそんな推薦認められんぞ。せめて名指ししろ」

名指しか……唯一名前を記憶している布仏さんをチラリと見ると首を千切れんばかりに横に振られた。巻き込み失敗。

だが個人的な争いをそのままクラス代表者決定の方法に変えるなんて、なんて一石二鳥……そこに俺が巻き込まれてなかったら完璧だった。クラスメイト全員道連れも失敗した、まあ別に代表選出に参加するのは嫌なわけではない。ただなんか個人的な決闘に乱入した感じで気まずいだけだ。

「ハンデはどのくらいにする？」

「さっそくハンデの申し込みとは素人なりに身の丈はわかってらっしゃるようですね」

「なにいつてるんだ、俺の方がだぞ」

「なら便乗して俺もエネルギー半分くらいのハンデ欲し——あつれー？」

おつかしいな。便乗したはずが出来なかったぞ、なんか凄く噛み合わない会話が今ここに成り立った。いや、噛み合っていないし成り立ったとは言えないか。なんか凄く噛み合わない会話が不成立した。

三人がお互いに微妙な表情で顔を見合わず。さっきまで喧嘩腰だった二人もなんか興が削がれたとでも言いたそうな表情しやがる、なんだ俺のせいかな、俺が悪いのか？

「んんっ！ では来週第三アリーナでクラス代表の決定戦を行う、ハンデはなしだ。以上！」

結局、織斑先生によって締められるまで微妙な空気は続いた……ハ

ンデはなしか、敗色濃厚から敗色一色になった気がしたけど気のせい
だろ。

だって、たぶん元から敗色一色だしな。ウハハ、帰る家ないけど
帰って引きこもりてえー。

02. 貴族と庶民

放課後、授業中に板書から先生の発言まで殴り書きしたノートを別のノートに書き写す。てか殴り書きした方のは今日俺が書いたはずなのに既に読解困難な文字がかなりある。

だから読めなくなる前に復習がてら今日のうちに写しておこうと、明日以降使うつもりだったノートを消費してるわけだ。

バカなのにペンだこ出来そうで困る。

「なあ桐也……」

「断る」

「まだなんも言っていないのか!？」

「今は人様のお願ひ聞ける余裕がねえんだよ、見ろこのノート何語かわかるか日本語だ。これが読めるうちに日本語擬きを日本語に書き直すのに必死なんだ」

「いや、そのノートのことなんだが」

「板書しつかり取りやがれ」

うっし、大体終わった。明日からは授業内容はノートじゃなくてルーズリーフにでも書くかね。しかし書き直したにも関わらず一割も頭に入ってこないのは俺の頭がポンコツなのか、基礎が足らんだけなのか。PICスゲエ、だけ覚えた。

「桐也ああ、ノートおおお」

「寄るなゾンビいいい！ まあ、貸し一つな」

「助かる……なかなか汚い字だな」

「るっせ、授業についていけないやつが全部写したらそうだったんだよ。そっちは明日まで貸せるからそれで勘弁してくれ」

見やすい方は復習用だ。正直めんどくささしかないというより受験シーズンまで復習したことない俺が、復習しないとイケないと思うとか我ながら重症。

ひとまず疲れを抜いてからホテルに帰ろうと思いい机に伏す。一夏は晩飯を作るためとかで先に帰った……自炊か、すごいな。

なんとなく机に接してる面から疲労が抜けていってる（気のせい

の) 感覚に任せたままブーツとしていると、ふと人影が視界に入った。
「あら、まだいらしましたわね」

「ヴあああ……あ、セシリアさん」

「おおよそ人間の口から漏れたと思いたくない音ですわね」

「ちよつと待つてくれ、色々な疲労が口から漏れ出ただけだからその家畜見るような目は止めてほしい」

もつとも元々冷ややかな視線なんだから、その温度を下げて絶対零度にしないでくれ。今は春なんだからそんな冷たさ望んでない、いや一年通していらんが。

写し終えたノートを畳む、さすがに綺麗に書き直したとはいえ丸々板書を写しただけのノート見られると恥ずか……おつと既に馬鹿なのはクラスに知れ渡ってるので問題なかった。

「こんな時間にどうした？ 忘れ物か？」

「まさか。あなたがまだいらつしやると風の噂で聞いたので約束のものを渡しに来ただけですわ。早い方がよいでしょう」

「……あ、参考書」

机の上にドンツと置かれたそれは参考書だった。例の入学前必読なはずが入学前に渡してもらえないという、なんかよくわからねえなって事態に陥ったやつ。

そして叩きつけるような音が鳴ったが別に叩きつけられたわけではなく、ただ上から落とされただけ。広辞苑とまでは言わんがなかなかのポリリウム、電話帳と間違えて捨てた一夏の気持ちもわからねえもない。これは捨てたくなる。

「助かる、わざわざありがとう」

「ええ、感謝なさい。夕食のため部屋を出るついでとはいえわざわざ持ってきて差し上げたのですから」

「ふむ……礼に晩飯なにか奢ろうか？」

「……そうやって現金で、即物的ななにかで礼をしようとする、近寄ろうとするあたり男は嫌ですわ。本当に……そういう人間は、嫌いですわ」

なんか、ごめん。セシリアさんから全国の男の心象を下げるのに貢

献してしまった。今後の人生でセシリアに関わる男に頭を下げしておく。なんだろう、下心のようなものがあると思われたのだろうか？

けど、めげてられんので謝って感謝は伝えておく。

「すまん。頭とそういう配慮とかの察しは悪くてな。じゃあ、貸しひとつつてことで。何かあつたら言ってくれ、手伝うわ」

「別にわたくしは見返りを求めてやったわけではありませんわ。貴族として庶民にほどこしとして与えただけ、それは当然のこと。よって見返りはいりませんわ」

こう、あれだな。口に出さないが、ちよつと親切だがこの意固地な性格……は失礼か、とにかく自分のなかにそういう曲げられない信念みたいなものがあるんだろうな。

今日の休み時間からの話を聞くにセシリアさんはいい家の令嬢、てか本人の言う通り貴族なんだろう。

こう、なんか食い違う価値観の出所はきつとそこだ。俺は日本人の根っからの庶民、彼女はイギリス人で恐らく貴族——国籍も異なれば家柄の位も違う。これで価値観に違いがない方がどうかしている。

「じゃあ庶民としてありがたく」

「ええ、それでいいのですわ」

これからクラスメイトとしてやっていくのだから出来るかぎりの価値観の擦り合わせを、相違を知っておきたいところだが……難しそうだ。どうにも一夏や俺、男に対する話題のとき彼女は無関心、無関心を装いつつ拒否感嫌悪感が出ているような気がする。

いや、こうして参考書をわざわざ貸してくれるあたり、俺の思春期特有の被害妄想って可能性もなくもないんだが、やはりセシリアさんから向けられる視線は他の生徒たちのものとは質が違う。

——なんてごちゃごちゃ考えたが今はどうでもいいんだよな、参考書に感謝感謝。貸してくれるイコールで俺のなかではいい人だ。性格はちよつと難しそうだけどいい人なんだ。

しかし、こう小心者としては与えられてばかりも怖いのだ。察してくれ貴族様。

「ついでに庶民として借りひとつということだ」

「……話聞いてましたの？ 二度と同じ言葉を繰り返されないと理解できない猿にも劣る頭をされているのかしら？ まさか日本の男性は本当に猿でしたの？」

「キツいな、おい。いやいや貴族としての立場重々承知の上で庶民としての気持ちちをいうと、与えられるだけというのは心苦しいからどうか借りひとつにして」

元から睨むような眼をしていたソレを更にキツくし眉間にしわを寄せ真っ直ぐ俺を、俺の目を覗き込んでくる。ナニかを探っているような、見抜こうとしているような——やっべえ、顔と顔が机ひとつ分の距離しかない、超緊張するので視線を外したい。たぶん実際は一分足らず、俺の体感数十分たつぷり視線をかち合わせていたが不意に彼女はため息を吐いた。なんか諦めたような、なんだお目目合わせてる間にセシリアさんの中で何があった。

「はあ……わかりましたわ、勝手にしなさいな」
「おうや」

そうして出ていこうとした彼女だったがふと足を止める。思い出したかのようにこちらを振り返りながら確認をする。

「ああ、あとひとつよろしいでしょうか？」

「いくらでも」

振り返った彼女の表情、明らかにナニかが変わった。明言できない雰囲気のような、彼女のまとう空気とでも言うべきか。ただ感じ取れるのは拒絶、いや嫌悪感……その類いのモノだ。

「男性は女性より親切にされるとそれだけで好意と受けとると聞きます」

「まあ、そうだな。人によるが消ゴム拾ってもらっただけで好意を抱かれてると勘違いしちゃう悲しい生き物なんだわ」

「ええ、そうらしいですね。ですのでわたくしはハッキリと言っておきます」

——わたくしは貴方が、男が、男性が大嫌いです。

「では、また明日。予習復習を欠かさないよう頑張ることですわ」

「……おう、また明日」

そう言い捨てると踵を返しそのまま教室から去っていくセシリアさんを見送る。

なんか、あれだな。好かれてるとは思わなかったけど正面からの拒絶は中々に堪える。ああ、気のせいでもなんでもなく嫌悪されてたなあ。というかここまで嫌いと言いながら、親切に振る舞えるセシリアさんってば大人すぎねえか？ 自分でも貴族と行ってたがそれだけ苦勞の多い人生だったのだろうか——やめだ、止め。んなこと考えても推測、妄想でしかねえ。ただ事実として明確な嫌いを叩きつけられただけだろ。

うん、素直に受け取った方が好感度下げずに済んだんじゃないかとか、絶賛後悔中のでつちが教室で頭抱える姿なんてなかった。なかったんだよ、かっこわりー。

そんな事実があったりなかったりしてたら教室に織斑先生がやって来た。放課後の教室なのに来客が多いな。ようこそ、放課後の教室へ。忘れ物ですか？

「こんな時間まで何をしているんだ」

「いや、授業で書き殴ってミミズがのたうち回ったかのようなノートを新しくまとめてました」

「ほう、入学初日から精が出るな。三日坊主せずにそのまま頑張れよ半人前未満」

「齒に衣着せなさに涙が止まらない……で先生はどうされたんですかね？」

そして伝えられる衝撃の事実、ホテルにはもう帰らず寮に暮らせと。あれだ、命の危機があるからとかそんな理由だろう。これからは女だらけのここで生活……SPのおっちゃん（ハゲ）が恋しくなるぜ。

「織斑と同じ1025号室だ」

キーを投げ渡される。ひたすらどうでもいいけど、鍵を投げる動作だけで様になってて織斑先生カッケェな。

何て考えていたら急に近づかれた、それはいい。近づいたタイミンが視界に入ってたのにわからなかった怖い怖い怖い。けど真面目

な顔をしてるので話を聞くため姿勢を整える、決して睨まれてるようで棘み上がったわけじゃない。

セシリアさんのウン億倍威圧感がすごいとかちつとも思ったわけじゃない。

「少し真面目な話をするぞ」

織斑先生から話された内容は一夏と俺の立場について、現在世界中で二人しかいない男性IS操縦者としてのだ。

その立場は非常に危うく、男がISに乗れることを快く思わない女に狙われる。ついでに賛成派でも俺を解剖でもして、ISに乗れるメカニズムを解明しようとする奴もいる。

世界に二人という俺たち珍獣もとい珍人を狙う、珍人ハンターたちはゴロゴロといる。日々彼ら彼女らは俺の身体を狙ってるらしい、いやん。

「そこに酷なことを言えばお前は織斑よりある意味狙われやすい」

「ああ、織斑先生の有無の差ですか」

「その通りだ。これでも元世界最強の身で……逆にそのせいで織斑が狙われることもあるかもしれんが手の出しにくさはお前と比べるまでもない」

嫌だなあ、めんどくせえなー。なんとなく自分でも理解してたけど他人から言われつと重みが違うよな。たぶん卒業後のこととかも、在学中にどうにかしないとイケないんだろうし……俺の青春どこ行つたんだらうか？

「うーん、卒業したら解剖されて各国で誕生日ケーキを切り分けるかの如く俺の身体を……ゾツとしないなあ」

「そこまでマイナスに考えるな。何も考えなくていいとは言えんが、この学園にいるかぎり進路についても私たち教員も出来る限りのことはする」

「そこはホントお願いします。ケーキは食うだけで満腹なんで切り分けられるケーキにはなりたくないな。」

入学一日目にして既に濃度的には半年分くらいのイベントをこなした気分になりつつ、悩んでも仕方ないと察へと帰る。我ながら切

り替えの早さは長所だと思っている。切り替えるまでが長いだけだ。借りた参考書にも目を通したいし、寝たいし寝たいし寝たい。情報量が既に脳内キャパをオーバーしてるから整理するためにも睡眠が必要だ。

寮内を歩けば扉が斬り裂かれた部屋もあるが、まあ寮だそんなこともあるだろう。ただ、それが1025号室の扉なのはちよつと見逃せない。脳内のキャパオーバーしてるつってんだろ、ふざけんな。

「待て、桐也！ 待ってくれ、ヘルプ！」

「……なんだよ、その斬り裂かれた扉と関係ないなら助けるが」

「ふむ、残念だったな一夏。見捨てられたぞ、大人しくお縄につけ。桐也だったか、時間をとらせたな。帰っていいぞ」

「いやいや、待て箒。そもそもあれは事故だろ！」

可哀想な扉付きの自室に帰ろうとしたら箒、さんだっけ？ と遭遇。

半強制的に話を聞かされたところによれば、同室者もいないので少し部屋にお邪魔して昔話をしようとしたら——なんやかんやで一夏が箒さんのブラ発掘。

木刀を取り出した箒さんに恐怖を抱いた一夏は自室に逃亡、しかし木刀一閃。無惨にも扉はあの様だ。

待て、なんやかんやでブラ発掘ってなんだよ。なんなの一夏はブラジャーハンターなの？ お、語呂がいいな、極めてどうでもいいが。「私にもわからん、その……一夏は昔からこうなのだ。それで発した言葉が謝罪でなく、あ、箒もブラ着けるようになったんだな？ さすがに堪忍袋の緒が切れたぞ」

ふむ、つまり天性ラッキースケベの女難持ちか。そうかそうか……

「一夏、ギルティ。扉と同じ運命を辿れや、えーつと誰さんだっけ？」

「篠ノ之箒だ、箒で構わん」

「よし、箒さん俺ごとやっちまえ」

「ちよ、桐也!? 離せ、話せばわかるから！」

「残念一夏、離さねえし話すこともねえな。裁判抜きで即刻ギルティだ。主に俺の私怨で法の裁きならぬ、木刀の捌きを受けろ」

羽交い締めにして一夏の動きを止めた俺は再度やれと言う。必死の抵抗をする一夏だが、残念ながら美人の下着をゲットという私怨で強化というか狂化した俺はビクともしない。精神的に若干ダウン気味で八つ当たり半分に意地でも離さん。

そして箒さんから放たれるドアをも斬り裂く木刀——はさすがに一夏が死ぬと思っただのか見事なドロップキック、白色か。俺にも貫通ダメージが来たあたり手加減ならぬ足加減なしの一撃だった。蹴り飛ばされた一夏と俺は部屋の中に転がり込む。ぐえ、一夏と床にサンドイツチされた。

「グホツゲホツ……し、死ぬ」

「美人の下着堀り当てたんだ、仕方無いな」

「そんなものなのか……」

反省しろこの野郎。ほら、箒さんがヤンキーみたいに木刀で肩をポンポン叩きながら来たぞ。廊下の明かりが逆光となりめっちゃ怖い、チビりそう。

「一夏、私は割りと寛大なつもりだ。その上でひとつ問いたいのだが、なにか言うことはないか？」

「ほんつとうにすみませんでしたあああ！」

それは綺麗な土下座だった、へたりこんだ姿勢からどこの筋肉を稼働させたのか甚だ疑問だが跳ねるように上体を起こし、勢いそのままに五体投地。たぶんあれ、何が悪いかわかってないけど反射的に謝ってるな。本能が謝れって訴えたんだろ。そしてそれは懸命な判断だろうな、今の箒さんとはマシンガン持っても対峙したくない。

「そもそもお前は女心がわかっていなさすぎる、完全に理解しろとは言わんが少しくらい察せられるようになれ」

「……はい」

「たとえばだ、少し恥ずかしげに顔を俯かせながらド素人のお前にISについて教えてあげようかという生徒がいる。どう思う？」

「え、顔を俯かせてるなら気が向かないんだろうし断るな。男同士で気楽に桐也とやるさ」

「見ろ桐也、この様だ。しかしこれで惚れる奴があとを絶えんから手

におえん」

あー、鈍感なのか。そして知り合いの箒さんはそれを知っていると。呆れた顔をしつつ、どこか達観してている彼女はどれだけ苦勞してきたのか……

「不躰ながら箒さんはどうなんだ？」

「察してくれ。久し振りに会った男を、初日に大した用なく自室に誘うんだ。普通わかるだろう」

「あー、えー、なんかすまん」

「いい、慣れている。慣れたくなかったがな」

一夏はモテるけど当の本人は鈍感、そしてここは女しかない学園。修羅場の臭いがプンプンするぜ。

このとき俺が抱いたこの思い、何一つ間違っちゃいなかったことをこれから先の三年間で思い知ることとなった。知る、ではなく思い知る。流れ弾がビュンビュン来やがったのだ。

▽▽▽▽

翌朝、今までホテルで寝泊まりしてたんだから寝起きの一瞬ここがどこかわからず微妙に混乱したなんて事實は捨て置きさあ朝飯だ。

正面に座る一夏はご飯、俺はパン。朝はパン派なんだよ。

「ご飯じゃないと腹に溜まらなくないか？」

「むしろ朝から腹に溜めると気持ち悪くなんだよ、今の今まで朝食はパンだ」

「けど朝昼をガツツリ食べて夜を少なめにした方が健康にいいんだぜ？」

「相変わらずジジ臭いな一夏は」

つと、箒さんか。一夏の隣をどうぞと指差す。それが良くなかったのかもしれん。

いや、箒さんを招いたことが悪いのではなく男二人の食事に“女”を受け入れたことか。気づくべきだった、不自然なほど俺と一夏の周りに人がおらず距離をとられてることに。ナニかに遮られているか

のように妙な空間が出来ていたということ。ドーナツ現象的な、いや全くドーナツ現象ではないがイメージ的にそれだ。

そして箒さん一人が何の気なしに幼馴染みの一夏のところへやって来たところで——ナニか、のラインは決壊した。さながらダムが決壊し水が押し寄せるように食堂にいた女子たちが押し寄せてきた。

「ねえ！ 私たちも一緒にご飯食べていい!?!」

「私も!」

「ちよつと押さないで!」

「あー、座れるとこ座ればいいんじゃない?」

「桐也食い終わるの早くないか!?!」

「俺アツサリ食パン一枚、一夏ガッツリ定食プラス一品系。アundas タン?」

「待て、桐也! 待ってくれ、置いてかないでくれ!」

昨日も似た台詞聞いたぞ。それにさすがにこの中に男一人放置するほど薄情でもない、明らかに一夏がホツとしてるが本当に行くと思っただのか? さて、このままでは手持ち無沙汰なのでもう一杯牛乳を飲もうと……ふむ、人が多すぎて身動きがとれん。

「その、たぶん私のせいかな。すまない、私もこういう人の機敏に鈍くてな……血筋というかなんというかな」

「血筋……?」

「いや、なんでもない。とにかく賑やかな朝食になってしまっただけで申し訳ない」

「早いか遅いかの違いだろうか? すぐ収まるだろうし」

「出路くん朝御飯それだけで足りるの?」

「足りる、足りなくても耐えれば昼が来る。むしろ俺は他の皆の朝御飯がそれで足りるのか不安……いや、箒さんが普通に定食頼んでることに対しての遠回しな嫌みとかじゃないから」

「……ふん、私は昔から朝はしっかりと取る質なのだ」

「あー、昔は箒も俺と同じくらい食ってたもんな」

ピタッと全員の動きが音が止まる。これはあれだな、嵐の前のなん

とやら来るぞ来るぞ——爆発、質問の嵐が一夏と箒さんを襲う。すぐ収まるって言ったの誰だ、俺だ爆発してんじゃねえかよ。

——昔からってどういうことなのか、二人はどういう関係なのか、出路（俺）とも昔から親交はあるのかむしろどういう関係なのか。おい、最後の奴出てこいや。

「桐也とは昨日会ったばかりだけど箒とは幼馴染みだ」

「お、幼馴染み……一歩リードされてる……!」

「まだよ、学園生活はまだまだじゃない!」

「はいはい! 二人は何号室にいるの?」

その質問を聞き少し悩む。素直に伝えてよいものなのか、人が押し寄せてきたりしないか。いや俺目当ての子が来るんじゃないかとかそういう脳内お花畑なことを考えてるのではない。単純に身の安全とか考慮した上で、ああチクシヨウ一夏が普通に答えやがった。

……まあ、遅かれ早かれわかることだから問題はないか。昨日、自身のみの危険について聞かされたばかりで少々神経質になりすぎたか? 神経質になりすぎるのもいかな。

「どうした桐也黙り込んで?」

「いや、眠いだけだ。今日のノートとつといてくれ」

「任せろ! ……真っ白なノートになるかもしれないが」

「おい、ふざけんなお前も寝る気か」

そんな下らんことを話してる間にもわいのわいのと押し寄せる人の波。

タイムセールの主婦と無尽蔵の体力持ちの園児、それに十代の女子の活気は底が知れないと思っていたがこれは予想外にパワーがある。そうだよな、園児を経て主婦へと至る途中経過だもんな。そりゃ力あるわ。その後も織斑先生がさっさと飯を食い終えろと言いに来るまでこの波は引かなかった。

「いつまで食べ……騒いでいる! 食事は迅速に効率よく取れ!」

「つまり迅速に食える俺の朝食量はなにも間違ってたなかった。一夏急げ、遅刻したらグラウンド十周らしいぞ」

ちなみに一周5km、十倍にすれば50km。ストレートにいうが

死ぬ、フルマラソン余裕で越える距離じゃねえか。正直体力はからつきしなので勘弁願いたい、なので一夏はさつきと食い終われ。

さつきまで夜灯に群がる羽虫……失礼、とにかく寄って集ってきてた生徒だつて既に姿が見当たらん。つまり時間がやべえんだよ。

「す、すまん！　というか先に行つててくれていいぞ！」

「そうだなこのままじゃ遅刻しそうだし行くべきだろうな、だが断る。待つって言ったし待つぞ。てか口を話すためじゃなく、食物噛み砕いて嚥下するために動かせや。残り5分だぞ」

一夏は残りを掻き込んだ。そして俺たちは走った、残りもう分すら残っていないかもしれない。けど一組が視界に入った、そして一夏が入室、続いて俺も——チャイムが鳴り渡った。

「と、桐也……」

「残念、あと一步踏み込みが足りなかった」

「そうだな出路、そしてその一步が何万倍になるかもわかるな？　喜

べ、お前が今年度かつ一年のなかで遅刻第一号だ」

「二年一組の一号とは何とも景気が良さそうですね」

一夏ならなお景気が良さげだった。

だが50kmか、放課後からやって明日までに終わるか？　自慢じゃないが先述の通り持久力には自信がない、得意なのは短距離のみだ。一夏が本気で申し訳なさそうな顔してるけど別に一夏のせいでもねえし、適当に手をヒラヒラ振つて気にするなと合図しておく。

「……はあ、次からは気をつける。今回は初犯だ、半分で許す」

「ういつす」

「返事はハイだ」

「はい」

えー、半分だから……25kmか。まあ、なんとかなるだろ。その後始まる授業は相変わらずわからないところが多く板書をノートに殴り書きで写す作業となった。親指が炎症起こしそう、早く必要なものが必要じゃないものか判断してノート取れるようになりてえ……隣のノートを覗き見ても俺の半分程度しか書いてない。

——昨日、一夏のノートは後半真っ白だったのは余談だ。

03. 下準備

「桐也すまん!」

一限目が終わり、休み時間。一夏が俺の席にやって来て頭を下げている。大方今朝の遅刻のことだろうし、俺は気にしてないのだが。むしろ頭をあげろ、周りが何事かって感じて見てんだろ。

「謝んな謝んな、俺が待とうと思ってるって待って遅刻しただけだ」

「けど俺が食い終わるのを待ってたから……」

「うるせーうるせー、自己責任だつての。ここは譲らねえぞ、譲ってほしくば俺を倒すことだな。謝るために謝る相手を倒す——この矛盾、一夏は越えられるか!」

「く、クソ! どうあつても謝らせないつもりか!」

ウハハ! この男同士のバカやる感じ楽しいな! ジリジリと距離を測る俺と一夏を見る周りの視線が痛い気がするが男子なんてこんなもんだ。

だいたい女は男より精神的な成長が早いんだつての。たぶん小学生男児がウンコウンコ言ってハシヤいである間に、その差が開いてんじゃないかねえか? 何はともあれ男同士気兼ねなく騒げるのはかけがえないものつて学園に入ってから気づいた。

二限目、山田先生がなんかISが操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアーで包んでいることを、ブラジャー着用に例えてた。以上。実演してもらえたらわかりやすいとか思っても口が裂けても言えなかった。織斑ティーチャーに身体裂かれるつての。

「織斑、出路、お前たちにはISが準備される。が、織斑の分は少々時間がかかる」

三限目が始まってすぐ、織斑先生からそう言われた。ワッツ? 俺たち”のIS?

今現在この世には467個のISコアが存在する。そう、467個”しか”ないのだ。それを二つ俺たちに割り振るって……いや、そうかデータ収集が目的ならわかる。

特に一夏と俺となると比較するにも前提条件が違うんだつた。姉

が世界最強の一夏に親族にIS乗りすらいない俺……まあ、そう考えれば両方のデータが欲しいのも一応わかる。

「織斑のISは現在製作中、出路には国から打鉄が支給される」

んでもって期待値はもちろん一夏が上。包み隠さず言えば羨ましくないってことはない。

けどまあ、ISが動かせること以外なにもない俺にも専用機を用意してもらえただけ上々か……いやでも羨ましいな、新しい専用機とか良い感じに目立ってそうじゃん。かつこ良く目立てばもう会えない父さん母さんに元気だよーって伝えれんじゃん？ 一方通行だけど。けど元気にやってることくらい伝えたい。

「なので出路は、次の昼休みに指導室に來い」

「了解です」

内心でごちやごちや考えてたがどうしようもないのでカット。切り替え切り替え。取り敢えず言われた通りに昼休み時間指導室に向かおうとは思うのだが——叱られないとわかっていても、職員室や指導室に行くことは気が重くなるのは何故だろうか？ 基本的にいい用件で顔出すことが少ないからか。中学では提出物忘れ、上靴を飛ばして窓ガラスを割ったとき程度しか行かなかったからな。

——そうして三限目、四限目を終えた昼休み。セシリアさんが俺と一夏のところへやってきた。

「あなたたちにも専用機が用意されると聞いて安心しましたわ。ですが出路さん、あなたは第二世代の量産機。それでわたくしに敵うとお思いですか？」

「元から勝率なんて地べた這うどころか地中にめり込んでんだ。今さらじゃねえか。それにじゃじゃ馬な機体よりは安定してる量産機の方が幾分マシに動ける、はずだ、動けるといいよね、動けたらいいよなあ……動けると思うか？」

「知りませんわよ」

後半は半分本音で半分見栄だ、俺だって男の子。カッチョいいピーキーな専用機に憧れたりもする。

ま、別に勝てるなんて思っていない。ただ無惨に負けるのはちっぽけ

なプライドが嫌だというのでとにかく一撃くらわせてやる、それが目標なんだよ。ギャフンと言わせれなくとも目を見開かさせて動揺くらいはさせたい。そのためには安定性の高い量産機がいいというのも本音、なんだこのめんどい心情。

「織斑さんはまだ専用機がないようですが」

「やれるだけのことはやるから問題ない……はずだぞ？」

「どうしてあなた方は断言したかと思えばすぐに自信なさげに……」

口に出す瞬間にも考えてないから。

セシリアさんはそれだけ聞くと席に戻ろうとする。なんで俺を男を嫌ってるのに構うのか興味がなくもないけど昨日のダメージが女々しくも尾を引いてるので聞く勇気が湧いてこない。けど好奇心が頭を引っ込める様子もないので困ったものだ。だから、

「なあ、セシリアさん」

「……なんですの？」

「なんで気にかけてくれる？」

男が嫌いなのに、という言葉は形にせず伏せて伝える。そんなことはクラスのだ真ん中でわざわざ言うことでもない、発する言葉は聞きたくないことを聞くためだけがいい。

「何故、ですか」

「俺たちのことが嫌いなのになんでかなーってな、好奇心が止まらなくて猫が死んじまうかもしれないけどどうしても気になって仕方ない」

「完膚なきまでの勝利を掴むためですわ、言い訳の余地なく全力を奮わせそれを叩き伏せオルコットが勝者と胸を張るため———ですので全霊を賭して挑んできなさい」

そう言い残すとセシリアさんは今度こそ席に戻っていった。かつくいいねえ、俺が女なら惚れてたぞ。

……しかし、そういうことね。もし俺たちが一週間怠けて過ごしたとして、それに勝っても意味がないってか。なにもせずにいる素人に勝利しても、セシリア・オルコットには得るものも誇れるものもない。

だからこそ全力で努力して、俺たちにとつての最大限の力を叩き潰して勝つてこそ、最低限の価値がある勝利となる、か。

たぶんあれ織斑先生がハンデなしと言わなかったら、機体の条件まで揃えた上で戦うつもりだったぞ。けど、それが禁止されたからこそ、俺たちが最低限のレベルに達するよう気に掛けるわけだ。

「……オルコツトってこえーな」

「それだけの誇りがあんだろ、取り敢えず俺は指導室に行ってくるわ」
実はチビリそうなほど怖かったことを隠して、カッコつけて指導室に行った。美人ほど凄んだときの迫力ってあるよな。彼女とびつきりに美人だから相当怖かった。たれ目気味な瞳で睨まれたときには、たれ目イコールおつとりのイメージが死滅した。どうしてくれんだ。

——そして現在目の前にいる織斑先生の眼力は、この世で一番怖いと思う。

現在、待機状態の打鉄を渡されたばかりです、形状は指輪、薬指につけて打鉄は俺の嫁とでも言えばよいのだろうか？

「出路、何を考えている？」

「専用機やったぜと」

「そうか、その専用機に関する制約は多いぞ。冗談抜きでよく読んでおけ、銃や刀を常に持つと考えるら」

「緊張するんすけど」

「しておけ、それだけのものだ」

最も秀でた兵器を持つものだからな、と言われる。刀で斬るより容易く、銃で撃つより素早く人を殺めることが出来る。

比喻でもなく歴然たるただの事実でだからこそ持つ俺に聞かせるのだろうか、いざ専用機を持つとなると緊張がマッハで半分も内容が入ってこない。

誰だよ、ピーキーな新しい専用機憧れるとか言ったの俺だった。手綱も握れない機体なんざイラねえ、完全キャパオーバーだったの。ああ、実際にそんなものを常に身につけるとか緊張してきた。なんか視界が狭い気するし父さん母さんごめんさい、あなたたちの息子は蚤の心臓でした。

「打鉄って最高ツスね……いやいや、もう安定性ですよ重要なのは。カッコいい感じに目立つにもむしろ量産機のなかで秀でたほうが

……えー、なんだっけつまり打鉄最高ツスわ」

「少し落ち着け、緊張しておけといったが……あー、難しいだろうがなんだ……心構えだけしつかりとしておけ」

暴走し気味な俺を気難しそうに顔をしかめた織斑先生が宥める。はい下向いて深呼吸、それを数度繰り返し落ち着いてきた。

そして顔を上げるとどこから取り出したのか、マニユアルや規則などを書かれた書類をどっさり渡された。あれよ、入学前必読も読みきつてないし授業についていくのもほうほうの体というのに、IS学園が文字で俺を殺しに来る。

「そう嫌そうにするな」

「え、顔に出てました?」

「目に出てたな」

なにそれ怖い。

「それとその打鉄は今日授業で言った通りお前に合わせて成長する、精々いいものに仕上げろよ」

「うっす」

その後、学園内などでは原則的に展開は禁止されてるなど——誰が展開するというのが——基本的な注意事項のみ聞かされ時間も頃合い。教室へと帰された、中指に指輪をつけた状態で。薬指? 嗜好きが人のような形した生徒で溢れてる学園でしてみろ、明日の朝イチ号外で俺の結婚が噂の中心だ。その目立ち方は嫌に決まってるんだろ。

▽▽▽▽

放課後。やってまいりました、めくるめく果てしなき二十五キロ馬拉ソンのお時間。タイムアップはなし、けどギブアップもない。

春の陽射しが温かく見守るなか陸上部だろうか、なんとも引き締まったグッドな肢体を魅せてくる女子生徒たちに何度も追い越されながら走る走る俺。出来ればしまりの良い尻を追ってペースを保ちたいがあちらが大型バイクならこちらは原付き、追いつけねえ。基礎体力で大きく引き離されてんなこれ。

一夏も付き合うと言っていたがたぶん体力的にボロ負けだし、ヒーコラ言ってる隣で余裕綽々に走られても悲しいだけだ。大人しく山田先生の補習を受けてもらっている。

「一周五キロって長いのかな……」

ようやく二週目に差し掛かったところである。畜生、一夏を待たずに遅刻しないことを選べばよかったと正直思い始めてる。おいおい一夏に謝るな悪いのは俺だって言ったのは誰だって話だが、こんな二十五キロも走っているとそんな前言なんてクズ籠に投げ捨てて撤回したくなる。絶賛、後悔、中！

もう歩きたいけどなんかチラチラ他の生徒が好奇の目線向けてきやがるのが、きつとただの好奇心とわかりつつも織斑先生から送られた監視なのかもしれない。そんな疑心暗鬼に陥って走る脚を緩めれないチキンはここだぜ。

「あつ、遅刻第一号君じゃない。頑張りたまえー」

ああんなんだ？ 先輩らしき美人——といつても学園にいる生徒は基本美人だが——にヒラヒラと手を振り応援され胸が高鳴る。この胸の高鳴りはきつと酸欠にならないため、心臓がかつてなく稼働してるからだけだな。頑張れポンプ機能、俺の全身に酸素を循環させてくれ。

てかクソ、俺が遅刻したことって既に他学年にまで知られてるのかよ！ 胸と心が痛てえ！

宙に散る水滴は汗かはたまた涙か知るのは俺だけだ。

そうして走り続けると日が暮れた。普段通学以外の運動に使うことのなかった筋肉が悲鳴をあげている。過去に戻れるなら是非とも運動部に入って心肺機能を鍛えることをお勧めする。いや、そこまですなくても一夏を待たずに教室に戻ればいいだけか。というかこのどうでもいい思考はなんなんだろう、いい加減限界だろうか？

辺りは薄暗くなり始め足が地を踏みしめる感覚も覚束ねえし、残り一周は頭のなかにサライだかサラミだかがループして流れていた。

そして迎えたゴール、そのまま天使に導かれて天に召されたい気分だったが俺をお迎えしたのは硬いグラウンドだった。いや俺がぶっ

倒れたただけだが。

「ひんやりして気持ちいいな……うおお、脚が痙攣して動かねえ」
グラウンドに伏してビクンビクンなってる気持ち悪い男子生徒がいた。まごうことなき俺だった。残念ながら非常に体力がないことが自覚できた。二流高校に入るつもりがミスって一流大学に入った気分だ。

……さて体を動かすのも億劫だし、不細工な芋虫紛いのほふく前進して体操着を磨り減らすのもなんなんで回復を待つことにする。

が、なんか背中がむずむずする。視線とか意識を向けられてるような気がするんだ、ISを動かせるようになってから感じ続けたソレ。だがしかし、如何せん動きたくないので無視だ無視。気のせいだった場合動いたぶんの体力が無駄だし、見られていたところで問題はねえ。省エネで行かないと部屋に帰る前にここで寝そう^俺だ。

結論、寝た。21時頃にいつまでもたっても帰ってこない馬鹿を心配して、グラウンドまで見に来た一夏に起こしてもらわなきゃ風邪引くところだったぜ。食堂は閉まっちゃまったので購買で適当に夕飯を購入したのち部屋へと戻る。IS学園は購買の品揃えも良くありがたいことだ、ここの生活に慣れるとそこらのコンビニ弁当が食えなくなりそう^俺で怖い。

「くそ疲れた、足が痛てえし筋肉痛になるぞこれ」

「生まれたての小鹿もかくやってくらいに震えてるもんな」

「チツ、気休めだが適当にほぐしとくか」

「お、なら俺がマッサージしてやろうか？ よく千冬姉にしてたし得意だぞ？」

ほーん、姉貴にマッサージってつまり世界最強にマッサージ。なんか世界最強が受けてたマッサージを受けられるって聞くと凄みがある、あるだけだが。聞けば家事全般もしてたとか……何なのこの万能野郎。これで勉学まで完璧だったら高校生活に男友達はいなかったかもしれないねえ、やっぱり主に私怨でな。

「なら頼む」

「おう、じゃあ横になってくれ」

ここからくんずほぐれつのマッサージの時間——カット、取り敢えず気持ちよかった。なんか芯から疲労が落ちていく感じでマジで巧かった。このまま大浴場にでも入れれば最高なんだが残念、そこは桃源郷だ女しか入れねえ。その内どうにかやりくりすると山田先生が言っていたので今後に期待、一夏と胸踊らせている。踊る胸があるのは山田先生だけだったが。

「それで一夏は補習どうだったんだよ？」

「ああ、それなんだけど今日は山田先生が忙しくてな。箒に剣道で稽古つけてもらってたんだ」

「はーん、剣道やってたのか？」

「昔だけだな、中学にあがったときに止めてたからすっかり鈍ってて……箒の竹刀に残像が見えたなあ。こう、受け止めたと思っただけすり抜けてきたんだ」

それはお前が鈍ってるとかの問題じゃねえよ。なんで竹刀に残像が見えるんだよ。すり抜けてくるとか剣道でも剣術でもなくて妖術の類いじゃね？

一夏曰く、箒さんは全国大会の優勝者らしいんだが全国は化け物揃いだってのか……今日は一本も取れなかったという一夏は肩を落とすてるが、なんか人として違うステージにいる気がするので気を落とすなよ。

「桐也も一緒にどうだ？」

「冗談だろ、竹刀なんぞ体育でしか握ったことねえよ」

それにあれだ、馬に蹴られる趣味もない。

「そっか、同じ男子同士なら気兼ねなく出来ていいんだけどなあ」

「ただし俺らどっちもドの付く素人だから、それだと成長しねえぞ？」

「あ、そうか」

俺も打鉄を受け取ったまではないが練習場所がないしどうしようもない。出来ることは空の頭に知識を、体力をつけること程度じゃないかね。あとは付け焼き刃で一撃噛ませるように考えるくらいか……そこは織斑先生や山田先生に相談するか。

が、今は目の前に何故か両手を差し出してる一夏の言葉を聞こう

じゃないか。

「あ、桐也ノート見せてくれ」

「お前ふざげんな！ 今日も寝やがったな!？」

「ね、寝てねえよ！ 追いつけなくなったただけだ！」

「大差ねえよ!？」

▽▽▽▽

——教務室にて仕事を一段落させた織斑千冬は軽い伸びをし一息着く。

今年は何かと面倒な年になりそうだと覚悟していたのだが予想を遥かに上回る厄介さであった。クラスにイギリスの代表候補生がいるからか？ 否、代表候補生などは毎年いるので問題ではない。

「だがアイツの妹に一夏、そして続いて二人目の男子IS操縦者か」「一組の負担が尋常じゃありませんよおー……」

明日の教材の整理に行っていたが山田真耶が教務室へと帰ってくるなり隣で机に突っ伏した。しかし彼女が言うことも最もだ。

ただのガキの面倒程度ならいくらでも捌けるつもりだった千冬にとつて、予想外に引つ掛かりとなったのは実の弟と出路桐也の両名だ。普通この学園に入ってくる者は一見一組の面々のようにバカに見えるようが心構えや予備知識は着けてきていることが前提で入学している。腐っても世界屈指の才女、その金の卵たちなのだ。

しかし今年の男子生徒二名はそれが全くない。当然と言えば当然なのだが、如何せんそこを仕方ないで済ませるわけにもいかない。

「山田君は代表候補生として初めてISを受け取ったときどうだった？」

「え、そうですね……緊張と喜びが半々でしたかね」

「まあ、そうだろうな。そんなものだ」

だから千冬にとって打鉄を出路に渡したとき、あの反応は正直に言えば困ったのだ。内心で舞い上がる者を嗜めることはあってもあそこまで緊張されるとは思わなかった。

下地の、心構えのあるなしの差が出てきたということか、これから更に如実に出てくるかもしれないと考えると千冬の頭痛の種が増える。

一組の雰囲気ならば、なんだかんだでどうにかなりそうかな気もするが、手放しにそれ任せにするわけにもいかない。

逆に一夏に渡すときには緊張感が欠けてそうなことも頭が痛い理由だが、どうにか上手く足して二で割れないだろうか？ と考えるも叶わぬ願いなのは千冬自身がわかっている。

「あ、そういえば織斑先生」

「なんだ？」

「出路くんがまだ走ってたみたいですよ……さっき完走したみたいですよ」

現在、時計の短針は20時に差し掛かっている。今日は16時半には終わりザツと3時間半が経っているが——そうか、基礎体力も出来ていないのだったな。千冬は眉間に指先を当てたため息をつく。

「他の生徒が50kmを大抵5時間前後で走るので忘れていたな」

「はい、けどちゃんと最後まで走るのはいちいち偉いですね」

「というか山田君は誰から聞いた？」

「2年生の更識さんです、陰から覗いてたみたいで……一周ちよつとのところまで声を掛けてみたら、既に余裕のない表情で睨まれたと笑ってました」

「はあ、アイツは……」

2年生の更識といえは学園の生徒会長であるが相変わらず仕事をほっぽって自由に行っているようであった。

まあ出路に関しては3時間半掛けようが完走するだけの気力があるならば、それなりにどうにかなるだろう、いやどうにかなれ。そう思う千冬であった。

▽▽▽▽

来週にクラス代表決定戦を控えた休日、具体的には土曜日。

一夏は午前中から箒さんと例の残像が見えたりする剣道に勤しん

でいる。ISの試合するのに剣道とはこれいかに、と他人事のように考える俺も実は未だにISに乗っていない。

専用機持ちなんだから乗れよと言われそうだが、あいにく場所がないのだ。事務室に申請に行けどもキャンセル待ち状態、早くで一週間後にしか空きがなかった。なので俺の中指に嵌められた相棒は未だに日の目を拝むことはなく、ただのアクセサリー状態だったりする。甲斐性なしでごめんなあ……どうあれ強制的に来週には出番だ。

「……や、て」

無意識に唾を飲み込んでしまうのは、やはりここには学生の本能が拒否感を示すからか。ただし今回に限っては、いや今後はそんなことも言ってもらえない。もともとド底辺スタートなんだ、恥は捨てて頼れるものは頼っていかないとしてもじゃないがやっていけん。

——素人だから、を言い訳にしているは始まらねえ。それはただの事実で怠慢の言い訳にはならない。セシリアさんのような優等生に追いつけずとも、後ろ姿は捉えられる程度にはなりたい。

心の準備のために深呼吸を三度、ドアに手を掛け横へとスライドし入るのは——職員室だ。

「失礼しま」

「さっさと入れ出路、いつまでドアの前で止まっている」

「……織斑先生、なんでわかつたんですかね？」

ドアをスライドさせきる前に織斑先生に見つかった。おかしい、見られていないのに見つかるとはどういうことだ。

「気配でわかるだろう。ドアの前で止まって少し、そのあとに深呼吸を三度だ。なあ、山田先生？」

「ええ!?! わ、わかりませんよ!?!」

織斑先生の超人的な気配察知及び聴覚に山田先生も驚愕してるし、他の先生方も首を横に振っている。織斑先生だけがニュータイプなんだな。良かった、これがIS学園教師の水準だったなら迂闊に愚痴も言えん。

「で、こんな休日になんのようだ？ まさか何かしでかして自首しに来たというやけどもあるまい」

「ここで何かしでかすと自首というか絞首刑になりそうなんすけど……いや、そうじゃなくてですね」

なんとかしてセシリアさんに喰らいつきてえ、その旨を担任と副担任である二人へ伝える。

「とにかく今は機体に慣れろ、と言いたいがアリーナに空きはないんだっただか。そうだな、まず現状では勝つことは不可能に近いと理解しろ」

「おっ、織斑先生!？」

「条件的に考えて星を掴むような確率が残されてるかどうか、と言ったところだ。出路に天性の才でもあれば話は変わるがな」

「まー、そこはわかっています。でもただの噛ませとして戦うんじや道化そのものですし? やっぱ男の子として意地は見せたいんすよ」

入試のときに打鉄に乗ったが残念ながら天性の才がないことはわかった。乗り方を把握してるうちにシールドエネルギーを削られて落とされたからな。

「えつと、そうですね。一撃当てれば引っくり返せる可能性を求めるなら火力の高いものがいいでしょうけど……」

「当然速度は落ちる、そうすればオルコットには簡単に避けられるだろうな」

「考えれば考えるほど絶望的なんですが……なんで織斑先生はこんな試合組んだんですか」

「公正だろう、勝者が代表になるというのは。公平ではないかもしれないがな、世の中そんなものだ。今のうちに慣れておけ。あと今のお前がオルコットに噛みつける可能性を考えると、奇襲くらいだろうな」
「幸か不幸か打鉄の拡張領域パススロットにはブレードしかないのです、他の武装は詰め放題だ。」

なら、なら! 火力と奇襲を両立させる!

「追加で武装を量子変換って出来ますかね?」

「ああ、それくらいなら問題ない」

「先生たちに任せてください!」

戦法っていうほどのものでもないけど、可能性は出てきた。あとは

この出てきた可能性を上げるためにやれることをやるのみ。俺が欲しい武装はひとつなのでメモを書き渡す。

「ほう、他はいらんのか？」

「単純なものしか使える気がしないんでこれで。あとは賽を投げるだけですが、天運に任せるといいいますか」

「はいっ！ 頑張ってくださいね！」

「フツ、その天に匙を投げられんようにしろよ」

あ、はい。

04. 代表候補生と挑戦者

「お、織斑くん！ ISが届きました！」

山田先生が冷や汗を頬に垂らしつつ、喜の感情を表すという器用なことをしている。まあ、中々届かなかった一夏の専用機が届いたのは喜ばしいわな。はて、ならば何故冷や汗をかいてるのか——今日が試合当日だからだ。

「よかつたな一夏、間に合ったぞ」

「間に合ったっていうのかこれは……ツ!？」

「試合前だし滑り込みセーフだな」

正直なところ一週間前に打鉄を渡された俺も乗れずじまいだったし、今渡されようと大差ない。強いて言えば、フォーメット初期化と最適化処理の時間がないことか。

「まあ、俺とセシリアさんの試合からだしそこも問題ないだろ」

「出路、勝算はあるのか？」

箒さんの問いに対する返答としては、もちろん——

「ないな。ちよつとした打算はあるが勝算はさっぱりだ」

「ふ、そこは日本男児なら胸を張ってあると答えるべきだろう」

「大和撫子にそう言われちゃなにも言い返せねえわ……ま、日本男児の役目は一夏に任せるわ」

「俺か!？」

そりああ、お前が日本を馬鹿にされて怒ったことから始まったこの決闘なんだ。お前が日本男児の意地を見せつけずしてどうすんだよ。それに入試のときに勝ったという、一夏の方が可能性がありそうじゃないか。

「一戦目の桐也でも……」

「そんなもん俺には見せつけられねえ。俺は、俺の俺だけの意地を張ってくるよ」

「……そうか、頑張れよ」

「おう」

「出路、そろそろ用意しろ」

後ろを振り返ると織斑先生、少しニヤけてる。これは全部聞かれてたな、小っ恥ずかしい……！

しかし、一夏の高くかざした手にハイタッチし気合いは十分、カタパルト（仮）で打鉄を展開する。掌を握り込み動作確認……ふむ、入試のときと差はないようで安心だ。各センサーがセシリアさんが乗るブルー・ティアーズの情報を伝えてくる。

「じゃ、行ってくる」

だが、そんな基本情報は知っている。なにせ一般的にISの情報というものは国から公開されてるのだ。それをこのIS学園にいて調べないわけがないだろ？

今はそんなことよりも、既に目の前にいるセシリア・オルコットを見るべきだ。開ききったゲートから見える彼女はこちらを見ているのだから。

ふわり、と機体を浮かせ——そのまま高度を少し落とす。彼女が上を位置取り、俺が下。気持ち的なことだが、挑戦者^{チャレンジャー}としてはこれいい。

「出路さん、おひとつ確認してよろしいでしょうか？」

「あ？ ああ、どうぞ」

「ここに立つということは、それ相応に努力したと受け取ってもよろしくて？ そうでないなら、わたくしは貴方を唾棄すべき障害として排除します——棄権なさりますか？」

こんつの、言ってくる——！ たしかにセシリアさんは上かもしんねえけどな……こちとら、なんもせずここに立てるほど肝は太くねえ！ 出来るだけの準備をしてきた今でも緊張でガツチガチだつての！

けど吠える、飲まれるな、実力差なんて目を覆いたくなるほど開いてんだ。空気にまで飲まれれば一瞬で終わっちゃう。今は虚勢でいい、身の丈以上のカッケ俺を魅せてやれ。

「ハッ！ 笑えねえ、準備は十二分！ あとは全力で戦うだけだろうが！」

「わかりましたわ。でしたら、敵として叩き伏せてさしあげます。

精々戦いになるよう踊りなさい」

「上等……！」

——そして刻まれる開幕のブザー。

それが、開幕のブザーが鳴り終わるか終わらぬか、鳴り終わってからじゃ遅い、それじゃ開幕奇襲の失敗は明白。

故にフライングギリギリのタイミング。開始前から右手に握っていたハンドグレネードを全力投球——！ 開始前から武装を持つことは禁止されてないので問題ない、セシリアさんだってライフル出してたしな。そして、

空中へ投げ出されたグレネードはセーフティレバーを弾き飛ばしその真価を発揮する。

咲き誇る赤黒い爆炎が空を支配し、炸裂し飛散する破片と荒れ狂う暴風は地面を抉り砂埃を巻き上げた。

ISのお陰で熱気なんざこれっぽっちも感じないはずなのに。しかしアリーナを満たす灼熱が己の肌を焼かんと牙を剥くのではないかと錯覚させられる——自身にまで襲いかかってくる爆風には身構え、響き渡る轟音に耳を塞ぎそうになる。

いっとう強いグレネードを先生に頼んだ。そして渡されたのは、火力とロマンにラブしてると噂の「蔵王重工」という企業のもの。

それがこの結果だが、予想を地球一周分くらい通りすぎて成層圏突破した威力に先程までの緊張まで吹き飛ばされた。ISを装着してなかったらと思うとゾツとする。が、お陰で身を持ってISの絶対防御も体感出来た。なら怯える必要もねえ、無様に尻込みだけは絶対にしてやらん。

しっかしグレネードもパネエが、あれを受けて……否、俺の投げるタイミングが下手なせいなのか？ あの一瞬で限界まで距離を取って、極限まで被害を殺したセシリアさんもパネエ。ハイパーセンサーより伝えられる、爆炎の向こうに敵方の健在セシリア。さすが代表候補生。

まあ、たしかに彼女は目を見開き驚いている。しかしそれは俺の不意打ちにではなく、ただグレネードの威力に感心しているだけ。

……ああ、グレネードを避けたと思ったがそうじゃないな。彼女も開幕初撃で俺に一撃入れようとライフルを構えた。その狙いを瞬時にソフトボールサイズのグレネードに変えて撃ち抜いたのだ。

ちゃんと打鉄がそう教えてくれてたのだが見る余裕がなかった、すまん相棒。

ま、ようするに不意打ち失敗。それでもダメージを入れてくれたグレネードに感謝するべきか、セシリアさんの反応速度、精密射撃に舌を巻くべきか……なんにせよ彼女にとっては対応の容易い行動だったということだ。

なら、俺はまだ一撃「かました」とは言えない。

「驚きましたわ」

「グレネードの威力にだろ？」

「ええ、それもですがこれだけの威力のモノを投げつけるとは。わたくしがもう少し早く撃ち抜いて貴方が自爆するとは思われなかったのですか？」

そもそも撃ち抜かれるなんて想定してなかったっての。開幕不意打ちの高火力で大ダメージ、それが駄目でも出鼻挫く予定がただ狂いだ。少しでも機体制御が突っ込む算段だったのに、セシリアさんつたらずつと俺を狙い続けてんだもん。

「それとも舐められてたのでしょうか？ わたくしがあのようなモーションつきの投擲物に反応できないと」

「予想済みに決まってるでしょーが。だからこそ反応されても巻き込める威力なモノを使ったんだ」

チヨウ嘘、撃ち落とされるのは予想外でグレネードの高火力を越えた超火力な威力も予想外。予想の範疇に収まったことなんて何一つなかったぜ。背中冷や汗でびっしょりだ。

「そうですか——ですがここから先、貴方の攻撃は到達させませんわ」
——刃は届かせず銃弾は捉えさせず爆撃は撃ち落とします。貴方はここへ至らせやしません。

なんて宣言してくれんだコンチクショウ。慢心でもなんでもない。ただ己の積み重ねた努力プライドに基づいた、セシリア・オルコットにとって

必然にして当然の台詞だろう。

彼女が構えるスターライトmkⅢの引き金が引かれる。刹那、銃口から放たれたソレは距離を零とし俺を捉えた。スラストを全開に上下左右前後に機体を振り回すも意図も容易く撃ち抜かれる。生身、特に頭や胸に当たりそうなもののみ肩部の打鉄の基本装備たるアンロックユニットのシールドで防ぐもただの悪足掻き。レーザーくっそ速え！

防御力の高い打鉄でなければ即死だったけど即死でないだけ、このままでは死に体になるまでそう時間はかからない。

なっさっつけねー。あつちはまだ機体の名を冠す、第三代型自立機動兵器『ブルー・ティアーズ』、所謂ビットも出してねえのにこの様だ。使うまでもないってんだろうけど、こんまんまじゃあんまりにもあんまり。さてさて、ビットが切り離されてない限り一度に撃ちまれるレーザーは一本のみ。つまり一回にくらうダメージは最高でレーザーを一撃分、それ以上はないってこった。

それ実際に貫いまくってわかったが彼女の撃ち込むテンポは良い。一定とは言わずともなんとなく読める、なんて俺が一撃貫うと半瞬硬直するので、駄賃とばかりにもう一発やられてるだけなのだが。けどそれもわかったなら硬直しないようにすればいい、わざと一撃を貫ったならその硬直もなしに出来る。つまり次、一発貫ってからが勝負だ。

——二度は不可能、しかして一度なら避けられる。そしてこれは断じて勝つための戦法とは言えない。

「もうシールドエネルギーは半分ほどでしょう。このまま大衆の前でなぶられ続けるのが嫌であれば降参されてもよろしくてよ？」

「ハッハー、やっぱりセシリアさんったらギャグセンスねえなあ！

こっからそのたれ目を見開かせてこそだろおが！」

「無様な負け様に目を見開いて差し上げますわ」

「辛ッ、辣ウー！」

——負け犬が噛み跡を残せるか残せないか。その程度の意地を通すため。

どーせ、素人が勝てるわけないっていう諦め。けど、ただ負けるために戦うのは嫌だという意地。我ながらめんどくさい性格だ、実力差を達観してるふりして諦めきれねえ。やっぱり男の子だ、カッコ良くイきてえじゃねえか！

お喋りは終わりだと言わんばかりにセシリアはライフフルを構え——ビットを切り離した。

「おいおいおい嘘だろおい!？」

ここに来てマジモンで、慢心一切なく仕留めにきやがったあの代表候補生！ 勝利を確信した瞬間に気が弛むつつーけどむしろオーバークルしにきたぞ!？」

—— 迷うための時間なんてもうない、元からねえ。

—— 頭は冷静クール、心は燃ホットやして！ カツケエ俺の姿を思い浮かべろ！

一撃、俺に直撃する。本来このあと俺が硬直し追撃、さらにビットを配置するために使うであろう時間。けど今度はこっちが予定を狂わせてやる。

ライフフルからの光に左肩を穿たれ右半身がセシリアさんに向くちようどいい、これなら被弾面積は少ない。いや、それなら頭から突っ込んだ方がいいのかなんて考えながら全スラスト最大噴出。考えてから動いてちや遅すぎるから動いてから考える。今一番優先すべきは突っ込むこと、それ以外の思考は後回しだ。二撃目のレーザーを避け、あつかすった。

「—— ツ!？」

「だ、らあああああつ、シヤアアあああああ!？」

加速加速加速——！ 最適な加速方法なんざ知らねえ、ただただスラストを噴かせ！ アンロックユニットの盾はビットからの被弾を最小限にするため前面と背面に回し、正面からのレーザーは左腕をかざし頭のみ防ぐ。レーザーの豪雨に晒されるが加速は緩めず到達。目前にはブルーティアーズ、シールドエネルギーは残りざつと一割、十二分だ—— 辿り着いた。

ま、急停止なんて出来るわけない。よって取れる選択肢はひとつ。右腕に隠すように展開していた刀型ブレードで辻斬りよろしく、すれ

違い様にぶった斬る！

目が捉えられたのはライフル、銃身をど真ん中から斬り落とさんと身体ごと捻り我武者羅に剣を振るう。交差する一瞬、剣先が何かに力をつた手応え。けど間違いないく銃身は斬れてねえ……！

身体を反転、スラストを逆噴射。無反動旋回ゼロリアクト・ターンのような器用なことは出来ず、PICで殺しきれない衝撃が俺にまで伝わる無様な停止だが、止まれたのでよし。そしてセシリアさんからの反撃に身構えたが何故か豪雨がやんだ、レーザー的な意味でのやつな。

彼女へ目を向けると睨み付けるかのように俺を見ている。その視線に込められた感情は憤怒、ではなさそうだ。なさそうだけで別のナニかは読めんけどな。

「慢心、なのでしようか」

「ワルツでも踊るかのように華麗にヒラリとかわしといて慢心もなんもねえだろっての……こちとらカッチョよくかます予定だったのに、届いたと思えば避けられて届かねえ。よし、もう一回そこまで行ってやるから待っ」

「届いてますわ」

ピシヤリと言葉が遮られる。見せるかのように構えられたライフ。本来、そこに確かに有るはずのスコープが無かった。

はっはぁーん、カスった感覚はスコープだけ貰った証拠か。

「色々言いたいこと、聞きたいことはあります。ですがこの試合まで負けるわけにはいきません。ですので構えなさい」

「言われずともってな」

打鉄のバリアーがなけりや、穴空きチーズにされるくらい撃ち込まれた代償に得られた成果はスコープのみ。

実力の差なんぞわかってたつもりだがここまで遠いか代表候補生つてのは。けどこちとらトローシロー、この程度で心が折れるほど現実が見えてない訳じゃねえし、捨て身なら指先程度なら引っ掛かることもわかった。シールドHエネルギーPバーバは赤ゲージ、鳴り響く警告音は俺の力不足を嘆くかのよう。

てかなんか気持ち的にスースーすると思ったら、前面に配置して特

に集中砲火を受けていた肩部（右）のシールドが無くなってる。確認するまでもなく地に落ちてスクラップだろう。南無三、お前の働きは忘れんよ。

セシリアさんはスコープを失ったライフルを構え動かず、ビットも既に俺を囲っている。ピクリとでも動けば再び、いや今度こそ比喩なく四方八方からの銃撃に晒されて終わりだ。あれ、詰んでね？

「さて、先程もう一度わたくしの元へ辿り着くと仰ってましたが——この死線越えられるのでしたら越えてみなさい」

「イイ性格してんなあ……………一回辿り着かれたつてのに」「なにか？」

ヤツベ、ハイパーセンサーのせいでセシリアさんの額に浮かぶ怒筋が見えるわ。

口と頭の回りも上々、スラスターも奇跡的に無傷、問題は俺の技術力不足だがそこはあれで補おう。勇氣、と気合いと根性……………あと運。

アンロツクユニットのシールドは背部に、正面からの射撃のみに集中して避けるのが現状一番の得策か。ついでにブレードも持ったまま、腹を向け無いよりマシな盾代わりに。

試合開始から覆せていない、ある一つの事実を頭からすっぽ抜けた俺は突撃しくさる瞬間までそう思ってた。

スラスターを再度フルスロットルで特攻を開始。背部のレーザーはシールドが身代わりに、正面からのレーザーは——全弾直撃！

「いつつ、てえええええ！ 痛くねえけど気持ち的に痛い！」

忘れった！ 俺ってば試合開始から今に至るまでただの一撃も避けられてなかったじゃねえか！ 一度なら避けられるとか自信満々だったのもカスったんだった。さすれば当然の帰結として、レーザーのいいカモになる俺。目減りしてくシールドエネルギー、なかなか詰まらない距離。

エネルギー残量……………見るも無惨。こうなりや破れかぶれだ。開幕時に火力は正義と言わんばかりの光景を見せてくれた、夢と火力とロマンを秘めた小さな、でも威力は大きなグレネードを再び呼び出す。

持つ手が震えるのはトラウマか武者震いか……

「させませんわ!」

「させてもらう!」

ビットから放たれるレーザーにより手に持ったまま撃ち抜かれそうになるが、すんでのところでグレネードを持たない腕で庇うことに成功、ブレードで弾くなんて芸当は出来なかった。

で、だ。次にセシリアさんは俺がどう動くと思ったのか、きつと停止して投げつけてると思っただらうな、グレネードを。

けど俺が選んだのは突撃続行——既に栓は抜きセーフティレバーは捨てた、爆発まで秒刻みだ。つまり俺がもっかいセシリアさんに辿り着つくまでにまでに残された時間も秒刻みってこった。

だが予想の外を突く行動にほんの一瞬動きが鈍るブルーティアーズ。投げつけたグレネードを狙うはずだった銃身を戻すその隙。

▽▽▽▽

——普通なら、狙いは完璧なはずでした。

握るグレネードを撃ち抜くことは身を呈し庇われるので不可。

なので今度こそ、その手に握るグレネードを放り投げる瞬間に打鉄もろとも撃ち落とす。そのためにも無様にも碎かれスコープあるべき物を失った、ライフルの銃身を予測地点に向け引き金に指をかける。スコープは碎かれましたがブルー・ティアーズの射撃補助機能のみで問題なく撃ち抜けます……当然、精度は多少落ちますが。

そのように考え狙った予測地点には、グレネードではなく、スラスターを限界まで噴出させこちらへ突撃してくる彼——出路桐也の姿が映っていた。

「えっ……っ?」

あまりにも予想外の行動により、思考が一瞬の空白に塗り潰される。そんな間にも出路桐也はスラスターを唸らせ、本来縮まらないはずの距離を詰めてくる。

先程も彼に一発当てれば硬直があると思惑停止していた、その隙を

突かれて距離を詰められたのに。ティアーズの連撃に曝されれば停止、少なくとも減速すると、勝手に判断した結果がアレだというのに……！ 同じ轍を踏むだなんて、なんて間抜け！ 既に弾道型ミサイルを撃てる距離では――

いえ、そんなことよりも、なによりも！ コックもセーフティレバーも外した、あのグレネードを抱えて特攻だなんて――ッ！

▽▽▽▽

「正気ですの!?!」

「正気でそこに辿り着けるかってのおおお！」

俺の突撃に半瞬遅れ、レーザーがビツトからグレネードに襲いかかるがシールドも使い守り通す。セシリアさん自身が逃げた方が早かろうに撃ち抜こうとする。残り5メートル、いや10メートルをギリギリ切った程度か……これは届いたというには少し遠かっただろうか？ けど俺は彼女の、セシリア・オルコットが驚愕に目を見開いている表情が間近で見れて満足――なわけねえだろおが！ 届かせるつつたんだ！

爆発するまで残り1秒があるかないかのここで彼女に一撃でいい。返せば滅茶苦茶カツコいいじゃねえか！ 剣を持つ腕を伸ばす、これじゃ届かねえ。

加速は最大、どうやっても届かないこの短^{縮まらな}い距離。翼スラスターを全てのスラスターを加速のために全力で噴かせる、いや既に限界まで噴かせてんだこのままじゃ足りねえ！

「とっ、どおつけええええええええええ!!」

――そのとき何をしたのか自覚はなかったが確かに打鉄は加速の限界を越えた。

「イグニツシ――!?!」

「セイッ！」

既に一桁だったシールドエネルギーは蠟燭の火を消すよりも容易く消え去っていく。しかしソレが無くなるよりも早く届かないはず

であった距離は零となり——今度はたしかに捉えた、ブレードの切っ先がセシリア本人を確かに捉える。辿り着い、たア！

スローモーションに映る景色のなか、セシリアさんの見開かれた蒼き瞳と目があった——タイムアップ。

手元のグレネード様が火炎と豪風を吐き出した。

爆発による嵐の如き熱風に巻き込まれセシリアさんもろとも吹き飛ばされた。きりもみ回転しながら地面に叩きつけられ、水切りの石の如く数バウンドし——壁にぶつかりようやく止まる……チビるかと思つた。視界が黒と赤に塗り潰されて、訳のわからないまましつちやかめつちやかに吹き飛ばされて！ 死ぬかと、死んだかと思つた！ 自爆だけどさあ！ 絶対防御様々だぜ！

ブザーが鳴り響き俺の負けを、セシリアさんの勝ちが放送されている。そりやそうだ、彼女は爆発で吹き飛ばされたとはいえまだ空を飛んでいる。対して俺は、たつた今打鉄が強制解除された。お疲れさま打鉄、なんかフルボッコですまん。

「クツソやつぱ負けたか……けど死線を越えたその先で三途の川を越えかけたぞ」

ま、けど。

「かましてやったぜえ！」

空に飛び続けるセシリアさんに拳を向ける。試合には負けたけど俺にとっては十分に勝ちだぜ。

▽▽▽▽

後日談というか今回のオチ。後日というほど時間は経っておらず、今さつき一夏とセシリアさんの試合が終わったところなのだが。

一夏はIS初心者か疑わしい機動力を見せつけたがしかし、やはりISに関しては代表候補生たるセシリアさんに一日の長があったというべきか。

一夏が乗る第三世代IS白式、その単一仕様能力ワンオフ・アビリティである零落白夜が、発動した際には勝機が見えた気したんだがな。

いや、本来単一仕様能力、通称ワンオフはISとのISが
二次移行した後、第二形態から発現するはずなのだが。それでも発
現しない機体のほうが圧倒的に多いため、普遍的に特殊兵装を使用可
能にしたのが第三世代——だったはずなんだがなあ。

なにがなにやら、一夏はファーストシフトの状態が発動させやがっ
た。ギリギリまで追い詰められたところでだ、漫画の主人公かよ。

閑話休題。その発動したワンオフの名は零落白夜、効果は簡単に言
えば一度斬りつければ落とせる一撃必殺。正直、聞いたときにはなん
だそのチートふぎけんなつて思った。

が、世の中そこまで甘くなかったらしい。正に諸刃の剣と言うのが
的確、零落白夜は発動させた瞬間より自身のシールドエネルギーを喰
らい始めるのだ。つまり、発動させ続けるなら早急な勝利か自滅かし
かない。

そして今回に至っては自滅した。

『今度は俺の番だ、これからは俺が皆を、千冬姉を守ってみせる！』
『そうですか、ですがその願い叶えさせやしません。今度こそ確実に、
その刃を辿り着かせることなく撃ち抜いてさしあげます——オル
コットの名に懸けて！』

こう二人揃って最後の一重を交える直前のシーンの、カツケエこ
と言つてただけだな。本当にカツコ良かったんだけどな。

このときの俺にはなんで隣の織斑先生が天を仰いで溜め息を吐い
てるのかわからなかった。次の瞬間わかった。

直後にセシリアに斬りかかりに行こうとした一夏は——残りシー
ルドエネルギーの把握を怠ったことと、零落白夜の性質を理解せず使
用したことにより——負けた。

なぜ負けたのか把握しきれてない一夏は、肩を落としてピットに
戻ってきた。余談だがセシリアさんも珍しく予想外のオチに肩を落
としていた。ドンマイ。

さて、ここからが今回のオチ。しまらない話だ。

「よし、次は桐也とか。お互い全力でやろうぜ！」

「あー、悪い。それなんだが無理になった」

「は……？　なんでだよ!？」

「えーと、出路くんの打鉄がですね……ダメージレベルCを越えてしまってます」

「量産機で素人にしてはよく喰らいついた——だが無茶を、打鉄に負担をかけすぎだ馬鹿者」

「申し開きもごいません」

この通りである。セシリアさんのレーザーを余すことなく貰い続けアンロックシールドは地へと落ち、装甲は耐久値の限界まで負荷をかけた。そこへトドメのグレネード特攻だ。本物のトドメだったらしい。あれでダメージレベルBから一気にC目一杯、下手すればギリギリダメージレベルDへと逝ってしまった。ホントすまん、打鉄。

「なので次の試合は許可できません！」

「喜べー夏、不戦勝だぞ？」

「嬉しくねえ……桐也と戦ってみたんだけどなあ」

「ま、これから機会はいくらでもあるだろ。むしろ嫌でも戦えそうだぜ？」

「それもそうか」

なにはともあれ、今回は初戦闘にして過激な仕事をこなしてくれた、打鉄相棒に休んでもらうことが最優先だ。

——これからもよろしく。

05. 不完全停止二人

シャワーノズルから吹き出される熱い湯を頭から被り、セシリア・オルコットは己を振り返る。己の価値観を見直してみる。

——今のご時世、女が男を見下すことは珍しくない。しかしセシリアの男性に向ける嫌悪^{ツレ}は異彩を放っていた。

セシリア・オルコットの価値観の根底には、今は亡くしてしまった両親の存在が確かにあった。

彼女が憧れたのは母、数多の成功を納めてきた強いヒト。

彼女が認められなかったのは父、幼き頃のセシリアから見ても小さく、弱かったヒト。

そんな父親のことがセシリアは好きではなかった。そんな男性のことがセシリアは嫌いだった。

「結局最後まで母がどうしてもあの人を選んだのか、それもわかりませんでしたわね……」

自身が幼かったからなのか、理解する努力を放棄したからなのかはもうわからない。

ただつまるところ、セシリア・オルコットが男性を拒絶し毛嫌いの理由はこんなものである。世の中がそうだから見下し嫌う、というのではない。ただ、強いていえば父が男性だったから、男性が嫌いなのだ。

セシリア自身もこの感情が理不尽なものとは自覚してはいる。なのでクラスメイトとなった二人には感情を抑え、自分なりの親切を掛けようとした。それが一般的な態度で振る舞う親切であったかは別問題とする、と注釈をいれることにはなるが。

だが今日、彼女のなかで男が弱いという価値観が崩れた。崩された。

——他人に笑われるほどの実力差を自分で笑い飛ばし、二度までも自身に辿り着いた出路桐也。

『ハッハー、やっぱりセシリアさんったらギャグセンスねえなあ！』

こっからそのたれ目を見開かせてこそだろおが！』

思い返すと少し腹立たしいのがキズだが。

——初心者とは思えぬ機動力を見せ、世界最強の姉がいながら、これからは彼女すら守ってみせると大衆の前で宣言してみせた織斑一夏。

『今度は俺の番だ、これからは俺が皆を、千冬姉を守ってみせる！』
直後に何故か白式のシールドエネルギーが底を尽き、しまらぬ終わりとなったが。

「……笑えてきますわ」

どう転がしても、今までの自分の価値観に当てはまらない男性が一気に二人も現れてしまった。

そんな実感を目の当たりにして、それでも男性が弱いと言い張るほどセシリア・オルコットは未熟ではなかった。

「はああ、もうなんだかめんどくさいですわー」

普段の彼女からは想像もできないため息を吐き、ふにやりと肩の力を抜く。オルコット家を背負った日から一番と言いつれるほどの脱力である。

我ながら、だらしないとも思う。しかし、一人でいるときくらい良いではないか。

そんな風に見えない誰かに言い訳をしながら唇をツンと尖らせる彼女は、年相応の少女らしい顔をしていた。

ペタンと床に座り込んだ彼女は、艶かしくもスラリとした足を伸ばしシャワーの湯を止める——間違っても人目があるところでは自身が看過できない、とても行儀の悪い仕草。昨日までの自分に見られたら怒られそうだとセシリアは思う。

だけど、今まで考えもしなかったことを考えるには丁度良い。

——認めよう。セシリア・オルコットは少なくとも出路桐也と織斑一夏という、二人の男は弱くないと知った、いや体感させられた。

それに今までは常に男性はイコールで弱い者、という偏見を持ったまま接していた。ソレが完全に間違っていると言うつもりもない。でも、その偏見がたしかにセシリア・オルコットから見る世界を狭めていたことも紛れない事実。それがわかった。だったらセシリアは

その偏見を外し、世界を広げる。

「国に命じられ代表候補生として学園へ来ましたが、存外学びは多
そうですわ」

まずは二つ、さっそくやるべきことができた。

▽▽▽▽

IS学園寮内1025号室でベッドにうつ伏せになって、枕を顔に
押し付け身体を震わせている男子が二人いた。言うまでもなく俺と
一夏だった。

「身体中が痛え……！ エネルギー切れ直前にアホみたいな自爆した
自覚はあったけど、節々の筋繊維が悲鳴をあげて止まんぞ」

「めちやくちや恥ずかしい……！ あれだけ言い切つといてあんな負
け方したとか、千冬姉にも笑われたし……穴があったら入りてえ！」
一人は身体の痛みにも、もう一人は心の痛みにうち震えていた。この
痛みが引いたときには、どつかの戦闘民族みたいにパワーアップして
ねえかな。しねえか。

「桐也はいいよなあ、勝てはしなかったけど試合に負けて勝負に勝つ
た感じだったし」

「フハハ、お前と違って試合の勝ちを捨ててたからな。そういう点で
は、むしろ代表候補生に勝ちにいくお前の方が十分にカッケェよ」

「そ、そうか……？」

「終わり方を除けばな！」

「ぐううぬうううおああ！」

赤くなつた顔を両手で押さえ、滅茶苦茶な捻れ方をしている一夏を
見て爆笑するも、全身の痛みにも俺も顔を青くし似た凶になる。なんだ
この地獄絵図？ 取り敢えず医務室で渡された湿布を全身に貼るも、
なんとも言えん臭いに包まれる。さっきまでは爽快な気分だったつ
てのに、なんだこの気持ち的な急下降。上がるだけ上がって落ちると
かジェットコースターかよ。

「でも、どつちにせよ負けたんだよな俺たち……」

「ああ、その事実を目を向けちまう？　そうだよ、完敗だったよ。俺は二度攻撃が当たったつっても当てただけで最後は爆破オチ、一夏はビットを数個破壊して勝てそうな条件を揃えるところまでいったとはいえ、本人には一度も攻撃当てられず自滅っていう惨状だぞ？」

「うぐ……代表候補生ってやっぱ強いんだな」

「遠いなあ、代表候補生って遠いわー」

実際戦うとそれがよおくわかった。随分と派手な試合をしたつもりだったが、冷静に思い返せば穴だらけ。次に戦えばもう同じ手は通じねえんだろ。また新しい奇襲のための策、奇策でも考えておかないと……いや、まずは基礎的なレベルアップをしろって話だよな。そのためには、まずはISについての学をつけねえと。

「あつ、しまった。忘れてた」

セシリアさんに借りた参考書返さねえと。つい先日サラピンのを一夏と仲良くもらったんだった。

軋む身体に鞭打ってベッドから起き上がり、机の上に置かれる参考書を持ち上げるも痛みに顔が引きつる。そうか、結構重かったもんなコイツ。もうなんか色々めんどくさくなってきたし、明日でもいいかな。どうせ教室で会うじゃん——とかなんとか思い始めているとノック音。

「一夏、出てくれ」

「立ってるんだから桐也が出るよ」

「今晚、俺はベッドの相手するのに忙しいんだよ」

「それ世間一般じゃ暇っていうんだぞ？」

再度コンコンツ、コンコンツと四回のノック音。どうでもいいことなのだがノック二回は便所用のノックでマナー的にNGらしい。つまり、扉の前にいるのはそういうことを知ってる人間——学園に入るほどの才女なら皆知ってそうだな。

一夏もなかなか動きそうにないし仕方ねえな、どっこらせ。

筋肉痛によりストライキを訴える全身の気だるさを不起訴に抑え、扉を開けるまでの動作を成し遂げる。セシリアさんが視界に飛び込んできた、風呂上がりか？　仄かに漂ってくるシャンプーか香水の香

りがグッド、しかし俺の湿布臭とのコントラストはバッドだった。そうじゃない、何の用だ？

「少しお話し、よろしいでしょうか？」

「俺と一夏、どっち？」

「お二人にですわ」

「そ、なら中へどうぞ」

「お邪魔しますわ」

セシリアさんからの話された内容、要点を掻い摘めば謝罪みたいなもんだった。男性というだけで見くびっていたこと、日本を軽くdisったことについて。

それを聞いた一夏も少し気まずそうに、セシリアさんに謝る。なんの件かと思えばイギリスメシマズって言ったことか。

いやはや、勝負のあとに和解とは少年漫画らしくいいな。

「あともうひとつ。クラス代表についてですが、お二人のどちらかにお譲りしますわ。わたくしの不満はお二人が男性、つまり弱いと思いつ込んでいたことでしたし、それは貴殿方の手で解消されましたので」「ヒュー、だってよ一夏。日本男児の意地を見せつけたな、あとは任せた」

「待て待て待て！　なんでサラッと俺に押し付けようとしてるんだよ！？」

「いや、冷静に考えてみるよ。俺と一夏どっちが強いよ？」

第二世代量産型に乗るレーザー全弾被弾の直線バカと、第三世代ワソフ付きに乗り見事な回避を見せた一夏。

「しかも打鉄はダメージレベルCだ。クラス対抗戦にも代表候補生の専用機持ちが出てきてみる……俺、死ぬぞ」

「声がガチトーンすぎて怖いぞ」

「ガチでそう思ってたんだよ……セシリアさんからの見たところ、正直どっちが強いよ？」

噂があきそうにないので、この話を持ち出した張本人に話題を振る。

「先に現状、とつけておきますわ」

「あいよ、お心遣いありがとうございます」

「そんなものではないですわ、先のごことはわたくしにもわかりませんので。それでも今を見て言うならば、一夏さんの方にかなりの分がありますわね。理由は桐也さんが述べられた通りですわ」

「つてなわけだ一夏。大変そうなら手伝い……いや、普段のノート代だけでも思っただ頑張れや」

「うぐっ……はあ、わかった。千冬姉がそれで納得するなら引き受け」

「もう話は通してますわ」

「早いな!？」

「さすが優等生」

こうして一年一組クラス代表は一夏と相成ったのでした、めでたしめでたしと。

いいじゃねえか、世界最強の姉を守るってんだ。手始めにクラスに勝利を持って帰ってきてくれよ。

だいたい俺には向いてねえだろうかな、そういうのは。今回だって、ただ自分のために戦っただけで初めから勝ちを捨ててた。クラス対抗戦でもこんな心構えじゃいけねえだろ。それじゃあ、あんまりにもクラスメイトたちに顔向けが出来ないしな。

めんどくさがってるだけとか全然ないから。でっちージコチューとか聞こえねえー。

なーんて、くるくる考えているうちに机の上の参考書が目についてた。一夏とセシリアさんが話している間にモソモソと動き回収し、返すタイミングを測る……別に借りたときに嫌いと言われたことを引きずってなんてない、ねえつつつてんだろ。正面からビシツと返してやんよ。

「セシリアさん、参考書ありがとうございます」

「あら、新しいものが発行されたのですね……どうして腰が引けてるんですの?？」

全くもってビシツと決まっていなかった、だっせえー。小首を傾げて疑問に思われるも、筋肉痛のせいだと誤魔化しておく。むしろこの体勢の方が負担が大きいことはこの際無視しておけ。

——翌日のHRにて一夏がクラス代表ということが正式に決定した。あとセシリアさんが、改めてクラス内で先日のことを謝ったのち、ISについて聞きたいことがあればいつでも聞いてくれればよいと言っていた。

まあ、入学からゴタゴタしていたが丸く収まったのではないだろうか。

余談ながらセシリアさんは休み時間に割りと人気者のようだ。

▽▽▽▽

四月下旬、俺の筋肉痛も無事回復し、打鉄の使用許可もようやく出た。

学園内の整備科の人たちに直してもらったのだが、

『入学早々ここまで大破させたのは君が初めてだよ。さすが今年の一年生遅刻第一号はやるのが違うねえ』

とのお言葉をいただいた。うっせー、好きで壊した訳じゃねえよ。つてかなんだ、俺が遅刻第一号つてのは全校に知れ渡ってんのか？ 枕濡らすぞ。

何はともあれ、直った。そして今日、この授業では専用機持ちが基本的な飛行操縦を実践することとなっている。てか、織斑先生がたつた今そう説明した。つまり、俺も飛ばないといけない。セシリアさんとの試合以来練習ゼロだったのに、いやまあこの授業自体が練習みたいなものと思えばいいか。昨日に急上昇、急下降は習ったわけだし知識なしで訳でもない。

周囲を確認後、意識を待機状態の打鉄に向ける。一夏はガントレットに左手を掴み集中してるが、個人的にはイメージを固めるのにポーズは要らないタイプなので棒立ちだ。

光に包まれあつという間に打鉄が展開される。これが魔法少女ものだったのなら、一度全裸にひんむかれるというのに……この学園は美人が多いだけに非常に残念だ。口が裂けても言えねえけどな？

展開が終わると、半月前には見るも無惨に損傷していた打鉄は綺麗

に直っていた。アンロックユニットのシールドもバッチリである。今度は大事に使ってやりたいもんだ。

「展開したな、なら飛べ」

そう織斑先生から言われてからの行動はセシリアさんが一番早かった。流れるような動作で急上昇し、きつと綺麗に制止したのだから。

一夏は少し遅れて上昇、機体のスペックの割りには少々速度は物足りなかったらしいな。

——きつと、らしい。

俺は、うん。やらかした。いやだつて急上昇だろ？ つてことは最高速度を出せてことかと思うじゃねえか。俺にとつての最高速度となれば、最後にセシリアさんに届いたアレだ。あのときのイメージ、なんでもいいから加速に使えるものは使う、やったことは一度噴かしたエネルギーを取り込み再度排出か……？

これは加速方法として正式名称があつたらしい。 イグニッションブースト 瞬時加速、難易度そこそこのもんらしいが——生憎一発成功だ。成功してしまつたともいう。

「おい、出路待てー！」

「うえい？ ——ぬうううおおおおおおお!?」

異変に気づいた織斑先生の制止も時すでに遅し。最後発であつたはずの俺は一夏もセシリアさんも抜き去り、空へ空へ空へ。音も何もかも置き去りにして最っ高に気持ちよかつた。そんな高速のなかで、思考に挟み込まれた疑問。

……どう止まりやいいんだこれ？

一瞬冷や汗をかいたが案外簡単に止まれた。いや、正確には止まられたのではなく、止まつた。何せ、学園のセキュリティとして張られているシールドに直撃してな。

バチイッ！ と鳴り弾き返される、踏んだり蹴つたりだ。

ぐわんぐわんと揺れる頭をなんとかクリーンにしつつ、一夏たちがいるところまでゆっくり下降。

『馬鹿者が、急上昇に瞬時加速を使うやつがあるか』

「すみません」

瞬時加速が何かはハッキリとはわからないが謝っておく。確かに使うもんじゃねえや。

習った通りに『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』でやればよかったか。

「そういうけど俺には、いまいちピンと来ないんだよなあ」

「そりゃあ、あれだろ。新幹線みたいなもんじゃねえか？ もしくは弾丸だ。先端尖らして空気抵抗を減らすイメージって勝手に解釈しちゃえ」

「そんな雑でいいのか……？」

「ある程度は良いと思いますわ。イメージは所詮どこまでいってもイメージでしかないですし、自身のやり易いと思う方法に勝るものはなくてよ？ まあ、その方法を掴むために模範的なやり方からやるのもひとつですが」

そうだな、どっかの誰かみたいに学園のシールドに突撃しないためにも、初めのうちは教科書通りやることも必要だよな。

しかし、一夏はまだ納得がいかないようで首を捻ったままだ。

「そもそも空を飛ぶって感覚自体がなあ、なんで浮いてるんだ？」

「飛ぶから飛んでんだろ」

「半重力力翼と流動波干渉を用いた説明になりますけど、お聞きしたのであればお話ししますわよ？ 半日は覚悟してもらいますが」

「飛ぶから飛ぶんだな！ 納得した、だから説明はしてくれなくていいぞー」

そう焦った様子の一夏を見て、あらあら残念ですわフフフと笑うセシリアさんの横顔は楽しそうだった。ただし、S的な意味で。止めろよ、俺たちアホを知識で翻弄して遊ぶなよ。見事に撃沈されんぞ。

「あら、一夏さんは参考書を一週間で覚えられたのでは？」

「結局無理で千冬ね……織斑先生に説教くらったよ」

『そろそろ降りてこい。急下降と完全停止をやってみる、目標は地面より10cm。出路は今度瞬時加速をやってみる、PICを切ったままグラウンド十周させるぞ』

「イエッスマム！ しねえです、しませんのでご勘弁を」

「では、お先に失礼します」

織斑先生より指示を承り、先ずはセシリアさんが手本とばかりに先行。ものの数秒で地表に到達し、綺麗に停止した。代表候補生にとってはお手の物って感じだなこりや。隣の一夏も感嘆の声を漏らしている。よし、なんとなくイメージは出来た。

ようするにチャリとかとブレーキのかけ方は似たようなもんだろ。止まる位置を決めて、止まりたい位置でキツカリ止まれるようにブレーキをかけ始める。そのかけ始めるタイミングと、元から出している速度の調整が問題なんだろうが……そこはほれ、経験重ねるしかねえだろ。

「じゃ、次いくわ一夏！」

翼スラスターより気前よく噴出、加速のイメージは既に色々体験済み故に容易なので難なく急下降開始。流れる景色に近づく地面、今までの俺のブレーキをイメージ——力業上等逆噴射、シールドに激突——なんだこの二択。ええい、取り敢えずチャリと変わんねえんだ、一にブレーキ、そんで止まんなきや逆噴射！ それでも無理なら激突だ！

地上から10cmよりほど遠い地点でブレーキをかけ始めるも、加速の勢いはなかなか衰えず。10mを切った時点で綺麗な着地を諦め、地面に着弾しないためにスラスターを噴射。打鉄諦めんな諦めんなよ止まれえええ！

そんな思いがナニかに通じたのか、地面より僅か1cm。そこで完全停止を成功、とは言い難い不完全停止を成功させた。クラスメイトの微妙な視線が痛い、誰か穴掘ってくれ入るから。

「狙ってその地点なら上等だが普通に止まり損ねたな？」

「……うつつ」

「もう少しPICも応用して止まるようにしろ、スラスターの逆噴射を毎度停止に使っていれば負担が大きすぎる」

そんなアドバイスに返事をしようとした。いや、したんだが、その返事は轟音と突風にかき消された。振り返れば砂ぼこりが舞い上が

り、出来上がったクレーターの中心には一夏がいた。完全停止をミスって豪快に地面に突っ込んだか……本当に穴が掘られるたあ思わなかったぜ。たぶん俺は悪くない。

箒さんが『なにをやってるんだ』と言わんばかりにため息を吐きつつも一夏に駆け寄る。

「大丈夫か一夏」

「……心が、痛いな」

「そうか、無事なら良かった……大丈夫なら早く出てこい」

「はあ、誰がグラウンドに風穴を開けると言った。大方加速のことに気を取られ過ぎたんだろうが……とにかく穴から出てこい」

指摘を受けて一夏の目が泳いでら。本当に加速の方に集中しすぎたのか。他人事のように笑いたいところだが、瞬時加速で空のシールドに激突した俺も五十歩百歩だな。ブレーキ大事。

「次、武装展開をしろ。織斑からだ」

そう言われ、一夏は白式を展開するときと同じ格好をする。手のひらより光がまばらまばらに放出され——刀の形を成した。近接特化ブレード・雪片式型というらしいが、ブレードなのだからそりや近接特化だよな、と言うのが一夏の弁。

「遅い、0.5秒は切れるようになっておけ」

織斑先生つたら形成された刀よりもバツサリと言いつ切るな。俺も続いて展開するように言われ、近接ブレードを展開するもやはり遅い。同じことを言い渡された。

「オルコット、ライフルからだ」

「はい」

……ちよつとよくわかんねえ。ふと瞬きをしたら狙撃銃《スターライトmkIII》が握られていた。比べるのも馬鹿馬鹿しくなるほどに速い、本人は誇るでもなく出来て当然って顔だけだな。

「よし、なら次は近接用の武装を出せ」

「……ふう、わかりましたわ」

ライフルを収納し、入れ替わるかのようにナイフ型の近接用武装《インターセプター》が光の爆発と共に展開された。

「ふつ、及第点といったところだな。近接用の方は特にもう少し早く出せるようにしておけ」

ニヒルに笑いつつセシリアさんにそう告げる織斑先生と、対照的に少し安堵したように肩を下ろすセシリアさん。っと目が合った。

『どうしました？』

プライベート・チャネル
個人間秘匿通信で声をかけられる。名前のまんま個人間での秘匿の通信だなこれ。わかりやすくとても良いと思う。

『いんや、なんかライフルのときは余裕綽々だったのに今は安堵してのように見えて、なんでかなーって思っただけだ』

『ああ、当たってますわよ。少しばかり安堵してますもの……実は、わたくし近接用武装の展開は苦手でしたの。入学前は名前をコールしないと出すのすら手間取るほどでしたわ』

『はあん、それにしても速かったけどな』

それこそ織斑先生から及第点をもらうほどに。あの人、半端なところじゃ絶対に妥協せずに、さらに要求を重ねてくるタイプだぞ？

『ふふ、それはクラス代表決定戦のあとから練習したからですわ。わたくし結構人に懐に入られない自信がありましたのに、素人の桐也さんと一夏さんに距離を詰められたので。慢心を無くせたと同時に、ちよつとつぴりプライドに罅が入りました。翌日から猛特訓、最も苦手な分野の一角でしたけど成せば成るものですわね』

チロツと小さく舌を出すセシリアさんがとてもキュート。いや、そうじゃねえ。そもそも武装名を呼ばないと出せなかったってことは、近接用の武装の展開については初心者も同然だったってことだ。それを半月足らずで代表候補生白分レベルに昇華するのか。恐ろしく努力家、もとい負けず嫌いなようだ。ぜってえ、ちよつとつぴりなんかじゃない。

『次、万が一、いえ兆が一あなたに距離を詰められたときには逆にぎつくりと斬り裂いて差し上げますわ』

『なんで億を飛ばしたかツツコミてえが、こちとら伸び代は未知数。いつか勝ってみせらあよ』

ホントこの口は困るわー。挑発されりやホイホイと答えちゃう。そりゃあ、本心では勝ちたいとも思ってるけど実力差とか考える前に口が動く。この癖直んねえかなあ。

「おい、そこ。雑談は授業のあとにしておけ」

注意されちまった……ん？ 個人間秘匿通信なのに、ISすら身につけていない織斑先生は何故わかる。世界最強の野生の勘か。

「そろそろ時間か。今日の授業はここまでだ、次の授業に遅れるなよ……ああ、そうだ。織斑は放課後にそこの穴を埋めておけ」

「……はい」

グラウンドにポツカリと出来た、軽くISを埋葬出来そうなクレター。まあ、あそこに埋葬されるのは一夏の体力つてのは明白だな。

そう考えていると箒さんが一夏の肩を叩き、どこか織斑先生を彷彿とさせるイイ笑顔を残し去っていった。手伝わねえのかよ。

それに続くかのように、セシリアさんも続いて肩をポンツと叩く。

『いい基礎体力作りになって羨ましいですわー』

的なニュアンスの台詞を残していった、完全に棒読みだった。その後もクラスメイトたちが似たような激励や野次を一夏に残していく。

最後に残ったのは俺と一夏。これまでのクラスメイト同様に肩に手を当てる。

「唐突にな、今日の日替わりデザート食いたいなあって、ふと思ったわけよ。それで穴を埋める運動とかしたあとなら美味しく食べるだろうな、なんて考えたりもしたわけよ……しかし残念なことに金欠でな。デザートも食えないし、運動も出来そうにない。いや、一夏には全くもって関係ないことなんだけどな？ 非常に、残念だ」

「手伝うから奢れってことだよな!？」

「ザツツライト」

「くっ……わかった、それで手伝ってくれ」

放課後の穴埋めはそれなりにしんどかったが、夕食のデザートは美味かった。

06. キブンリンリン

「うっふっふー……着いたわー!」

深夜、と呼ぶには少々早い時刻のIS学園正門前。

小柄な少女が、艶やかな黒髪を頭部の両サイドで括った髪型——俗に言うツイルテールを夜風でいい感じに靡かせ仁王立ちしていた。まだ夜になると多少ながらも肌寒い季節なのだが、軽装な少女は気にすることなく顔をほころばせている。

手荷物はその小さな身体に見合った手提げ鞆のみ。その手提げ鞆は、彼女の内心のテンションを表すかのようにブンブン振り回されている。遠心力と中身の重量で手持ち部分が悲鳴を上げるも少女に届くことはない。

この落ち着きのない少女、実は転校生である。手荷物が少ない理由は単純に既に郵送済みであるからだ。

諸事情により入学式には間に合わなかったのだが、明日からIS学園一年生になる。

そうして意気揚々と正門、正面ゲートをくぐ——ガシャンッ! れなかった。当たり前である、門はまだ閉められていたのだから。当然の結果として顔を柵にぶつけた少女の鼻は、トナカイもかくやというほど赤くなつたが本人は気にも止めない。

「あいちちち……アハハー、気がはやりすぎちゃったわ」

今度こそIS学園の生徒手帳をゲート横のスキヤナーにかざすことで、門がゆつくりとスライドし始めた。

そんな門を前に、何故か少女は不意に手提げ鞆を上空に放り投げ、軽くステップを一回、二回、三回——バクテン。

小柄な身体に秘められたバネと有り余るエネルギーを爆発させるかのような、しかし華麗にツイルテールとその身体は弧を宙に描き、正面ゲートの門を飛び越えた。

「はいっー」

両足を揃え着地、そこに落下してきた手提げ鞆をキャッチ。十点、十点、十点。ほぼ同時に門が虚しく開ききる。だが、そこを通るはず

であった人物は既に学園敷地内にいる。少女のはやる気持ちに対し
て門はあまりにもスロウリイだった。

そんな門のことなんて思考の片隅に欠片すら残さず、少女は綺麗に
決まった自身のバクテンに満面の笑みである。

そして目指すべき場所、『本校舎一階総合事務受付』という名称が書
かれた紙を取り出し……

「ちえいつやー」

手刀で裂いた。場所の名前は書いてあるが地図が描かれていない
のだ。切れ切れ細々粉々になったメモ帳を夜風が拐っていく。

——やー、あたしの本国適当すぎないかなあ？

そんな風に考える少女は実は日本人ではない。顔立ちはほとんど
日本のそれだが、よく見ればどこことなく鋭角的であり中国人を彷彿と
させる。

それは当たりであり生まれは中国、育ちは日本なこの少女はわけ
あって生まれの故郷に一年ほど戻っていた。そして今、久しぶりに育
ちの故郷に帰国した彼女、やけにテンションの高い理由はこれであっ
た。

しかし、そんなテンションも強制的にクールダウン。明後日の方
向、気持ち的に本国の方向を眺めなつつ、本国の適当さに何とも言え
ない気持ちになってる少女。

「ま、こんなところで呆けててもなにも変わらないわよね。うん、取り敢
えず学園中歩き回ればいつかは着くわよ」

タツタツラツタラ〜、と鼻唄混じりにスキップしつつ校舎に入つて
いく彼女は知らなかった……校舎入り口、玄関横に学園内全体図が貼
られていたことを。

だが、幸か不幸か中国生まれの日本育ちなスーパーフィジカル少
女。土地勘が良かったのかもの15分ほどで、目的地である本校舎
一階総合事務受付に到着したのであった。決して身体能力が高いか
らスキップが速くて、学園を巡りめぐって辿り着いたわけではないの
だ。ないのだ。



二組に転校生が来る。そんな噂が一組を駆け巡っていたのだが、始業式より一ヶ月。どうしようもなく半端な時期の転校生、漫画なら主人公ポジションにでもなれそうなタイミングじゃないか。

いやあ、ワクワクするな。きつと転校初日にヒロインの全裸を見て決闘になるんだろ？ でっちー知ってんだぜ、そういうのが流行ってるって。

ま、IS学園でそれやると九割九分九厘レズカップルが完成してしまいうわけなんだがな。俺は百合が咲き乱れるカップルが、きつと学園内には存在すると信じてる。百合の園、いい響きじゃねえか。

「桐也、話聞いているか？」

「ああ、百合がどうした」

「全く聞いてなかったな？ いや、転校生が二組に来るらしいぜ」

「その子が中国人ってどこまでなら誰に聞くまでもなく耳に入ってきた」

本当にその話題で持ちきりだからな。クラス代表が変わるのだのなんだのも聞こえるが、噂話なあたりどこまでが真実かは怪しげなところだけだな。人伝に回ってくる話なんざ数人跨げば既に細部は変わってくるもんだ。意図に至っては他人を一人挟みやそれだけで崩れる。

「一夏、噂を聞いたか？」

「おお、箒。転校生のことか。もうクラス中で広まってるぞ？」

「転校生……？ そんなものはどうでもいい、私には関係ないからな。そんなことよりもクラス代表対抗戦の賞品だ」

「賞品？」

「そう、賞品だ。なんと学食デザート半年フリーパスらしい……転校生がどうした、こちらの方がよほど大切だ。勝て、勝つのだ一夏！」

グワシツ、と聞こえる力強さで一夏の肩を握る箒さん。目の奥が輝いているが、転校生の話題で持ちきりのなか自分を貫き過ぎだろ。のほほんとした見た目の布仏さんよか自分のペースを保つてるように

思えてならねえ。

「そういや、先日のクラス代表が決定した祝いに開かれたパーティーでもこんな感じだったか……」



就任パーティー、一夏が一年一組のクラス代表に決まったことで誰が発案したか、今しがたパンパカパーンとクラッカーが鳴らされ開催された。たぶん、クラスメイトたちなりのお祝い、とただ騒ぎたいだけの年相応の気持ち半々に開かれた集まり。

寮の食堂に一組全員と見覚えのない顔ぶれが集まっている、明らかに他クラスの人間もいるが固いことは言いつこなしか。

まあ、そんなわけで皆は笑顔で楽しそうなのだが、ただ一人ゲンナリしてる奴がいた。一夏だ。

「……なんかな、クラスの代表に改めてなっちまったと自覚すると気が重い」

「心中は察するがそう萎びた茄子みたいな顔すんじゃねえよ」

「ほうだぞいひか……ンツ、こんなにクラスが祝ってくれているんだ。楽しそうな顔をしないか………私ならごめんだが」

「箒、ボソツとなんか言い足したな!! というより何気に満喫してるだろ!」

「まあ、食事が美味なのでな。存外洋食も悪くない、茶を取ってくる」
「ここ一ヶ月で知ったのだが箒さんは結構自由だ。いや、規則とかは

キツカリ守る性格なのだが、それでもブレないマイペースさがあるというべきか。マイペースっていう軸を中心に規則に対する厳格さを貼り付けたような、そんな感じだ。

「一夏はそのへんどう思うよ?」

「前に聞いたらシノノだから仕方ないとか、よくわからない返答された……」

「血筋とか遺伝って意味じゃねえか?」

「んー、箒の両親は割りと……あ、たば



たば、になんと続けられたのか。あのとき一夏の様子からして心当たりには行き着いたようだが、あいにく新聞部副部長に乱入されたせいで話はそこで途切れた。

途切れた、のだがどうやら箒さんの我が道を行くってスタイルは家系のものらしい。てか、食い物に食いつきすぎじやなかるうか。食うのが好きだと言った俺の自己紹介が食われちまつてる。

「鍛練ならいくらでも付き合おう、だから是非もなく優勝しろ」

「是と答えられるように頑張けどよ……やれるだけやるさ」

「訓練でしたら専用機持ちのよしみで、わたくしも手伝いましてよ？
クラスのためでしたら尚のこと。今度はビットに触れさせやしません、ええ」

「訓練だよな……？ 再戦と間違つてないよな？」

「似たようなものでしよう、身体で覚えなさいな」

「千冬姉みたいなこと言うなよ……」

そんなことを話しているとクラスメイトの一人、谷本さんが話題に入ってきた。下の名前は恐らく、ゆっこ。周りがそう呼んでるからきつとそうだろう、覚えてないだけでも言う。

「そんなこといってデザートパスが欲しかったりするんじゃないのー？」

「いえ、わたくしはパスがなくても欲しければ節度をもって自分で買いますわよっ」

「おお、セツシーブルジョワだろ！」

「くっそう、お金持ちめ！ 織斑くん、優勝してね！」

「せつ、しー……？」

いつの間にかトントン拍子で人が集まっている。わいわいガヤガヤと賑わい始めるも、箒さん離脱早過ぎんだろ。もう席について素知らぬ顔してるぞ。

「あ、でも二組の転校生って中国の代表候補生らしいよ」

「それに二組のクラス代表に交代でなったとか！」

「その通おおおりッ！ あたし、見ッ参！」

正直、そこまでいくと眉睡な噂だと話し半分に聞き始めたそのとき。一組のドアが砕けんばかりの勢いで開けられ、背丈の小さな生徒が現れた。

突然の登場にクラスメイトが全員動きを止め、ポカンと彼女を見つめる。

「……あによ、なにか反応してくれないと恥ずかしいじゃない。ティク2やっつていいかしら？」

返答を待たずに顔を赤らめ教室を出ていく。

「えっ、今の鈴か……？」

「知り合いか？」

「あ、ああ。小五の」

一夏の言葉を遮るように、自己紹介は自分でするのだと主張せんばかりに再び扉が開かれた。気持ち先ほどより控えめな勢いで。

「その通りよ！ 二組代表は中国代表候補生のこのあたし、凰鈴ニイツ……噛んだ」

「ティク3いるか？」

「……うん」

トボトボと教室を再び出ていく少女の小さな背中には哀愁を背負っていた。心なしかツインテールに髪飾りも気落ちして下向いて見える。

隣にいる一夏が『鈴だ……どう見ても鈴だ、転校生って鈴だったのか……!?!』とか呟いてるが、何でもいから知り合いなら助けてやられて。大勢の前でリアクションを起こして反応がなかったら死にたくなるんだぜ？

そして三度目、静かにスツと扉を開けて入室。

「二組の転校生、ファンリンイン凰鈴音よ。よろしく！」

パチパチとクラスが拍手で満たされる。温かい雰囲気これ以上なく転校生を受け入れるには適した状態になったと言えそうだ。ここは一組で凰さんが二組ということを除けばな。

「一夏、ひさしぶり！」

「鈴だよな、やっぱり鈴だよな！ 元気にしてたか？ それに中国の代表候補生って」

「ふっふっふー、見ての通りよ！ 代表候補生については後々色々話したげる。先輩も教官も上司もなき倒してのしあがった、超^大編鈴ちゃんスペクタクルストーリーを聞かせたげるわ！」

「上司までなき倒しちやったのか……」

「えへへ、勢い余っちゃって」

どう見ても一夏の知り合いなんだし、照れり照れりと可愛くはにかんでるが上司薙ぎ倒したって内容のためギャップがすげえ。断じて萌えない。

おっと、セシリアさんが出てきた。軽く一礼し挨拶。

「こんにちわ、鳳鈴音さん。わたくしセシリア・オルコットですわ。あなたと同じく、代表候補生です」

「セシリア、オルコット……？ いやあ、ごめんね。あたしってばここ一年の間は、自分の実力伸ばすために内を見すぎて外に裂くほど意識が無かったのよね！ だからこれから知っていくことにするわ！ よろしくセシリアー！」

「一年……？ いえ違う国とは言え、同じ代表候補生の立場。時に協力し、時にしのぎを削り合いましよう」

「ふふん、いつでも受けてたつわ！ どうする？ 右手じゃなくて左手で握手しとく？」

「いえ、あくまでも学園にいる間は学友ですので右手にしましょう」

「よねー、あたしもそっちの方がいいわ」

鳳さんが差し出した両手から右手を取り、手短に握手。右手は友好、左手は敵対ってか。ま、右手の握手ってのは利き手に武器を持ってませんよ、なので仲良くなりたいですよって意思表示とも聞くんは。

予鈴が鳴る。セシリアは席に帰ろうとし、足を止め振り返らずに一言忠告をした。

「ええ、ですので学友として早速ひとつアドバイスを。そろそろ教室

に帰った方がよろしくてよ?」

「なんでよお、次は一夏との積年のつもり積もった話があんのよー。積年っても一年だけど」

「予鈴が聞こえんかったか風? 久しい再会は喜ばしいが教室に戻れ」

「お久し振りです千冬さん! って、転校生初日から遅刻の危機……

!?! 戻ります、迅速に!」

「織斑先生と呼、ベ……相変わらずそそっかしい奴だ。そら、お前たちもさっさと席につけ。SHRを始めるぞ」

入り口に立った織斑先生の小脇をスルリと駆け抜け出ていった。そんなすばしっこい彼女の背中を見送りながら、クラスメイトたちは席につき今日も授業が始まる。

完全に余談ながらも多少は授業に追従できるようにはなった。応用に関してはパーだが、単純なことだけならそれなりだ。

▽▽▽▽

昼休み、一夏から風さんを紹介されるついでに説明された。箒さんと入れ違いで転校してきたセカンド幼馴染みだとかなんとかつつてた。セカンドってなんだ、サードでもいるのかって思っても口にはしなかった。

まあ、一年前に親の事情で一旦中国に帰ってたらしいが、晴れてまた日本に来たとか。

軽く自己紹介をして、まあ鈴って呼んでくれりゃ良いと言われたのでそう呼ぶことにした、てかさん付けが気持ち悪いと言われた。スマイル100%で。

ついでに、そこでテーブルを離脱することとした。

一夏、鈴に箒さんは同じ卓を囲い飯を食っていた。当然そんな集まりとなれば人もさきの休み時間の如くワラワラ集まってきたし、一夏と鈴の関係が気になるのか今回は箒さんは離脱せずに座ったまま。

逆に俺が抜け出した。ほら、幼馴染みにセカンド幼馴染みのような

関係のなかに俺だけ居たらアウエーじゃねえか。空気を読んだのだ、居たたまれなくなつて抜けたのでは断じてない。

「それ確実に逃げてきただけですよね？」

「いや、ちげえよ。なんか懐かしの昔話とかするなか俺がいたら俺がめつちや浮いて半端なく寂しいじゃん？ うん、逃げてきてたわ」

「まあ、気持ちはわからなくもないですが……わたくしも凰さんとは少しお話してみたかったです。後日にしますわ。久々の再会に水を指すのも無粋でしょう」

そうだな、と同意したかったのだが無粋も糞もないくらいに一夏たちのいるテーブルには人がたかっていた。それを気にせず話してる一夏や鈴も大概だが。

「それにしても鈴と話したいって、やっぱり同じ代表候補生同士だからか？」

「ええ、もちろんそれもあります。けれど彼女は、わたくしを知らない理由として一年の間、内を見るのに集中していたからと仰いました。その言葉が少し引つ掛かりまして……」

ふうん、たしかに一年見る余裕がないにしてもそのあとに見れば……待て待て待て、一年だと？

「……鈴が中国に帰国したのが一年前って聞いたんだが」

「ああ、そういうことですの」

「待てって、それまで何をするでもなく普通に学生してた女子中学生が一年で、たった一年でなつたつてののか？」

「事実現実を見ればそういうことでしょう。彼女は一年前に帰国し——それから今日という日までの間に代表候補生まで登り詰めた。外を見てる余裕がなかったと言うのも納得ですわ」

本当に鈴は中学二年の終わりに中国に帰国し、高校一年になるまでの間に代表候補生になつたつてののか。なんのためには知らない、ただ手を抜いてなれるものでもないソレに。並大抵どころではない、それこそ文字通り桁違いの努力の研鑽を重ねないとなれねえはずなのに。

「おつそろしいな、化物染みた努力の賜物つっーべきか……見た目か

「想像できねえけど」

「あら、才能の塊とおっしゃるかと思いましたが予想外な発言ですわね」

「才能の塊ならセシリアを知る余裕もあつたらうよ」

「ふっ、その通りですわ」

たしかに才能もあんのかも知れねえけど、その一言で片付けられるものでもないだろ。そもそも俺が語れることでもねえ。

……いやあ、この学園に入ると、なあなあでやってきた自分の耳には痛いことばかりで辛いねえ。

「中国代表候補生、凰鈴音ですか。わたくしも気が抜けませんわね」

「気なんてそうそう抜かねえくせによく言うぜ……」

「オルコット家の当主として当然ですわ、日本でもいうではありませんか。勝つて兜の緒を締めよ、と」

「じゃあ負けた俺は鎧具の緩みを締めるところからかねえ」

「まず着るところからではありませんか？」

「ぐっ……ほっほう、ならその鎧を着てないやつにセシリアさんは距離を詰められたと」

ヒクリとセシリアさんの眉と口角が動く。我ながらISは負けるが口喧嘩だけなら達者なもんだ。

「ええ、ええ、そうですとも。認めます、あのときは慢心なんて捨てたつもりでしたが明らかに無意識の慢心がありましたわ。そのせいで一度ならず二度までも、あなたの突拍子のない行動に虚を突かれました……！」

「おーい、セシリアさん？ 目が怖いんだが、垂れ目がつり上がってんだけど？」

「ですが、ですが！ あれからわたくしも何も学ばないほど愚かでないことを次戦う際には見せつけて、魅せますわ」

机をバンツと叩き顔を寄せてくる、怖い。ふう、と一息つき椅子に座るセシリアさんは、仕切り直しと言わんばかりに紅茶を飲んで落ちていた雰囲気に戻る。

「お、おう……」

「らしくなく熱くなりすぎましたわ。桐也さん、口はよく回りますわね、主に挑発面で」

「自覚はある、精々実力も追いつけるよう努力するわ」

「そうしなさいな」

口だけつてのは直したいところだが、この頃これも俺の個性なんじゃないかって思い始めた。これのせいで今までの友達もなんか個性的なやつ多かつたがな。

「それは、わたくしも変な奴と遠回しに言ってるのかしら……？」

「いやいやそんなことねえつて。てかセシリアさんにとって俺って友達以前に嫌いなクラスメイトだろ？」

「……………これはわたくしが悪いのかしら？ たしかにはつきりと言葉にして撤回はしてませんが、いえそんな」

「セシリアさん？ 何ぶつぶつ言ってるんだ？ おーい、セツシー」

「誰がセツシーですか……んんっ。いえ、そうじゃありませんわ。桐也さん一つ申し上げておきますわ。わたくしは男性が嫌いでした、なので桐也さんのことも嫌いと言いつつ切ったこともあります」

「安心しろ、バッチリ覚えてらあな」

学園入学以来ぶつちぎりで心に来たエピソードだからな。

まあ心に射す影を無視しつつ、サムズアップしつつ答えたらガツクシと頭を落とされた。なんだ、なにが不満だというのか。前にも言つたがそういう察しは悪いんだ、ストレートに言ってくれ。

「はあ、そうですか。そうですわよね、これはわたくしが悪いんですね」

「なんだ、珍しくやけに情緒不安定だな」

「ある意味安定してますわ、えー先程の続きです。嫌いと言ったこともあります、今はそうではありません。貴方たちと戦ってから男性がみな弱いモノという価値観を改めさせられまして……ええ、うまく言えませんがかくもう嫌いではありません。友人のつもりですわ」

「そうか、そうか……」

良かった。それはとても良かった。基本的にいい性格な人から嫌

われてるって案外辛かったんだ、主に胃的なのところがな。赤の他人ならどうでもいいが、そうでない人間から嫌悪されるってクるからな。ウハハ、飯が旨い。

「あら……そうコロコロ価値観が変わるとは尻軽だな、くらいは言われるかと思いましたが淡白な反応ですわね」

「おい、セシリアさんのなかで俺のイメージどうなってんだ」

「ふふっ、冗談ですわ」

これが一夏が放課後訓練に鈴も来ていいか聞きに来て、俺たちが人波に飲まれる5秒前の会話であった、マル。

07. 才能と過去と

才能や天賦の才ってのは実際に存在する。俺はそんな言葉ひとつで済ますのはどつちかってと好きでないし、認めたくない人間もきつというだろうな。しかし事実としてソレは確かに存在する。

だって個人の才能ってもんがないなら同じ練習量、同じ学習量で過ごせば全く統一されたレベルの人間が出来上がるだろうよ。だけどそんなことは起こり得ないし、現実的にほぼ同量の努力をしたとしても明確な差が生まれることは日常茶飯事だ。

そう考えると……おんなじクローン人間を産もうとしても無理だろうな。

それにジャンルが変われば優劣が入れ換わることも少なくねえし、才能ってのは個性って言い換えてもいいかもしれん。

「へえ、一夏も訓練か」

「桐也もこつちに来いよ、一緒にやろうぜ？」

「肩から手を離せこの野郎、目が据わってんぞ」

まあ、その個性も無個性が努力すれば追いつけることも少なくな。所詮、才能ってのも基本的に向いているというだけで手を抜けば、全力で取り組む奴にいつか迫られるのはわかりきっている。

ただそれは個性才能の持ち主が才能におんぶ抱っこの怠け者の場合に限った話だ。

才能の持ち主をスポーツカー、凡人を乗用車にでも例えりやわかりやすいかね。スポーツカーのアクセルを浅く踏んでる状態なら乗用車でいくらでも追いつける。

けどスポーツカーがアクセルペダルを踏み込んだら？ 答えは明瞭、簡単にちぎられる。同じ踏み込みでも元々の向き方向不向き方向に大きな差があるのだから当たり前だ。

だから同量同質の努力をしたときには、まあ才能のあるやつが勝つだろ。

実際は自分がどのジャンルに対して才能を持っているか知らずに過ごすことも多いんだけどな。けど、それに気づけて努力した奴の伸

びは尋常じゃねえ。

「そこを……その、ズバンツ！　って感じだ」

「十三時の方向に60°傾けつつそこで一零停止ですわ」

「両極端過ぎんだろ!？」

「あ、目が死んでた理由がわかったわ」

——そう、ならば一年で代表候補生になった凰鈴音とは一体どれだけのなのか。

何があつたか知らんし何を思って代表候補生になったのかも知るわけない。ただ中国っていう世界最大人口を有する国の13億分の1たる国家代表、その金の卵にまでたつた一年で登り詰めた。いやはや、その才能も努力も測り知れん——や、人の人生なんて他人が測れるもんじゃないんだけどな—。

「もつと具体的に教えてくれよ!？」

「この上なく具体的かと思うのですけど」

「セシリアの方じゃない、そっちはもつとほどいた感じに教えてくれ……」

「ならば私の説明でよくないか？」

「いやいや、だから箒の方は……桐也ヘルプ。自分から二人に頼んどいてなんなんだがサツパリだ……」

で、だ。そんなこと考えて現実から目を逸らすのもそろそろ限界というか引き戻された。完全に擬音で説明する箒さん、本当に擬音オンリーだ。数学の解き方を教えず公式だけ見せているかのような説明のセシリアさん、理論でカツチンコツチン。確かに分かりにくい、いやわからん。

けど、だからって明らかに知識不足な俺に頼るのもどうかと思うんだ。

「箒さんとセシリアさんをフュージョンだかフォーチュンだかして二で割れば程よくなるんじゃないやねえかな—」

「投げやりだな!？」

「どーしても応用的なことができなくてブルーな俺になに求めるんだよ、コンチクショウ……」

なんで円状制御飛翔サークル・ロンドをしてから緊急回避の特殊無反動旋回アフソリユート・ターンが出来ねえんだろうか。瞬時加速より難易度はかなり下ってセシリアさん言ってたのにおかしい、なんだこれ全身筋肉痛になりそうだ。

ぶつちやけ特殊無反動旋回ならぬ超激動旋回になってる。ハツキリ言ってる俺に操縦の才能はない気がする。

「一夏さん、ひとつ良いことを教えて差し上げます」

「なんだ……？」

「〃名選手、名監督にあらず〃ですわ。正直わたくし人に教えるのは得意ではないです」

「……まあ、私も得意ではないな。だが一夏からの頼みだ。こう、幼馴染みとして付き合おうと思ってだな。近距離格闘戦のため、と……実践経験を積んだ方が早いと思ってるな」

「あ、いや……なんかすまん」

「じゃ、そういうことで実践経験を積むといい。俺はここ三日かけてただの一度も成功しない初歩的応用技術を、ただひたすら施行回数を重ねることで成功へと辿り着くから」

「辿り着けますの？」

「正直やめたい」

いや、だって円軌道を描きながら射撃を行って、不定期な加速をする円状制御飛翔……いや、回避行動がないから擬きモドか？ まあそれは不格好ながらもそこそこ出来るようになるまでかからなかった。

特殊無反動旋回に至っては10分くらいで出来るようになったんだぞ？ なんて足しても一時間もかかないのにふたつ合わせた、というか繋げるだけで三日も時間かかるんだよ。そろそろ坊主になんぞ。

「なら気分転換に一緒に模擬戦やろうぜ！」

「ハハハ、お前みたいな一撃必殺仕事人な機体ならともかく俺みたいな量産型はほら、基礎が大切だからナア」

「ですが行き詰まってるのでしょうか？ でしたら模擬戦を試みるのもひとつの手かと。各々にあった訓練方法はやってみるまではどれかはわかりませんもの」

「うわーい、正論で逃げ道潰してくださいやりましたな」

「それにさっきのは円状制御飛翔ですか？ あれは複数の機体で回避行動を交えて行わない」と

「ウィースッ！ やっりまーす！」

セシリアさんの正論ででっちーのハートはボロボロだぜ。なんとなく出来ていたつもりの、なんとなくの部分を見透かされた感じがしてすごく恥ずかしいったりやありやしねえ。

あれだなー、なんとなくをなんとなくで流しちゃうから駄目なんだろうなあ。

まあ同じところグルグルグルグル回っててもしやーねえか。昔の偉いかはわからない人は言いました。押しして駄目なら引いてみる、駄目な方法を延々と繰り返すより他の方法を試すべきってな。

「よし……こいよ一夏！ 雪片式型なんて捨ててかかってこい！」

「死亡フラグに乗った上に唯一の武器捨てられるか！」
「チッ」

まあ結果は散々だった。一夏とは素人同士そこそこやりあえたものの零落白夜を使われてから及び腰になっちゃまって、怯んだところをズパッシ。

セシリアさんはなんかもう、避けれど避けれど当たる当たる……こんなドのつく素人に警戒心バリバリで不意も突けねえんですもん。

では同じ量産型の打鉄を駆る箒さんはどうだったか。

アレはやバイ、以上。

「一夏さんは追い詰められたときに単調になりすぎですわ。零落白夜からの加速し突撃ばかりでした」

「そうだ、一を極めれば確かに千冬恐ろしいものさんのようになり得るがこのままではただのワンパターンだぞ」

「あー、どうも焦るとなあ……てか二人とも普通に指摘できてないか？」

一を極めれば、ウチの世界最強な担任かね？ 奇しくも姉弟揃って同系統の単一仕様能力を持ったわけだし、一夏も極めれば或いは、つてことかね。

なんだろうなこの敵IS絶対ブッコロス姉弟は。

それとこの二人が普通に指摘できてるのはあれだろ。反復のための見直しであって指摘じゃないからってどこじゃないかね。

「ですわ、これはただの振り返りですから。練習をしそれを振り返り分析し、そしてまた練習。基本ですわ」

「私も同じだ。素振りをして悪いところを自分なりに見直して鍛練を積む。そしてズバンツ！ という形まで仕上げるのだ」

「そっか、最後以外はわかったぜ」

「では桐也さんですけど、ひとつひとつの技術は平均的なライン、もしくは少し上回っている程です。ですが、何故でしょう……改めて戦ってみるとわかったのですが、なんと**いうべきでしょう**」

「ふむ、ぎこちないと言いつ表すべきか。とても綺麗な上段を振り下ろしているのに踏み込む足は左右逆になっているとでもいうべきか……」

言われてることは果てしなく抽象的なんだが自覚はある。ひとつの動作から次に繋げるときにどうしても切り換えのための半拍をくってしまつてる。結果、一・二・三と繋がった動きができず一・一・一といった独立した動きの連続になっているんだよな。

稀に上手くいくときもあるんだが基本的に下手なことは自覚している。友人に綺麗なちぐはぐだと言われ、よく笑われたしな。

「ま、繰り返し返してトライ&エラー。あとは慣れるまでひたすらやるしかないわけだ」

「ええ、なによりひとつひとつの技術が出来ている分アドバイスしにくく……お力になれず申し訳ないですわ」

「いんや、謝らんでくれ。間違いなく俺の性質のせいだから、これ」
「おう、それに練習なら俺がいくらでも付き合うしな！」

「素人と素人の練習……あつれー、泥沼な未来しか見えねえぞ？」
「お互いを高めあう好敵手というより足を引つ張り合いそうだな」

「もつともで。」

このあと更衣室に戻ると鈴がいた。具体的に言えば俺たちが向かったわけだから男子用の更衣室に鈴(女子)がいた。ちよつとよくわからなかったんで一夏を残して着替えずに部屋に戻ることにした。

鈴とのすれ違い様に男前に投げつけられた缶ジュースをチビチビ飲みながら……ISスーツを来たまま部屋へと帰、れなかった。おい誰だ、織斑先生にチクった奴！

▽▽▽▽

長椅子に並んで座る一夏と鈴。二人が離れてから一年、懐かしいやらなんやらで積もる話を語り合う。何故、凰鈴音という少女が男子更衣室にいたかなどという疑問は頭の片隅に押しやっていた。そんななかケタケタと笑っていた鈴の表情が少し陰った。具体的には一夏が凰鈴音の両親について聞いたその時に。

「あー、お父さんとお母さんね、別れちゃった。離婚しちゃったの。あたしが国に帰ったのもそれが理由だったんだ」

「そうだったのか……すま」

「謝らないでいいわ、でもちよつと聞いてくれる？」

見たこともないような、力ない触ると壊れてしまうのではないか、そう思わせる表情をした鈴を見て一夏は黙って頷く。だがそのとき織斑一夏は見逃していた。弱ったかのように見えるその顔の瞳、その奥には何かを決意した力強さがあることに。

ため息をひとつ吐き、艶やかなながらも引き締まった脚をプラプラと揺らし、天井を見上げた鈴の表情は一夏には伺えない。

「やー、あたしはずつと変わらないけど一緒にいると心地よい家族つてのが続くって思ってたんだけどね。でもずつとなんて、永遠なんてないって知ったわ」

「……」

「ううん、少なくとも私が努力しない限り存在しないことを知ったの。だから、だからね一夏」

ダンッ！ と揺らしていた両足を叩きつけるかのように音を鳴らし、長椅子から立ち上がった鈴は向き直り一夏を見下ろす。

その爛々と輝く瞳と表情には先程までの陰りは微塵も見られない。チャームポイントの犬歯を剥き出しにしニヤリと笑みを見せた。

「私は私の幸せのために頑張ったの、ここに帰ってくるために。そしてそれは叶ったわ！あとは鈍チンなあんたを振り向かせるの！」

「ん？振り向くもなにも今は真っ直ぐ鈴を見てるんだが……」

「あーあー！キコエナイー！その反応が返ってくるのは期待の範囲外だけど予想の範囲内よ！だからこれは私のためのこれからあたしが頑張るための宣言よ！」

「お、おう」

「じゃ、あたしは部屋に戻るわ！」

そう捲し立てた鈴はピューツ！と一夏が止める暇なく出ていった。そんな姿を呆けた顔のまま見送り、理解できないこともあったが鈴はとつても頑張つてこれからも頑張るといふ、特に後半部分に関してはフワツとした理解をした一夏。そして着替えようと脱ごうとした瞬間、鈴が戻ってきた。

「あ、言い忘れてたわ。空気読んで着替えもせず出ていった桐也にお礼言つといて！じゃー！」

出ていった。

「お、おー……相変わらずせわしないなあ」

呆けたままであった表情を崩しつつ着替えた一夏は色々あったであろうに、なのに、いやだからこそか。どこか強くなっている幼馴染みに笑みをこぼすのであった。

——翌日、一夏と桐也が噛み殺しきれない欠伸あくびを口から漏らしつつ、玄関前廊下に集まる人だから、その先に貼り出された紙を見つけた。

内容は、まあクラス代表対抗戦日程表であった——一回戦一組対二組。つまり、織斑一夏と凰鈴音。

そのとき横にいた桐也が見た織斑一夏は、とてもやる気に満ちた表情をしていたという。



「というわけで桐也、付き合ってくれ」

「主語入れろや」

「あ、すまんすまん。放課後練習に付き合ってくれないか？ あれ、なんで周りが舌打ちしてるんだ？」

「なんでだろうね、俺にはわっかんねーわー」

こんな女ばつかの学園で百合の花が咲き乱れる反面、一部は腐り落ちてるとかそんな事実いらねえんだよ。是非とも腐葉土として百合の養分にでもなっていてほしい。

「で、どうだ？」

「えー、クラス代表対抗戦のアリーナの席取れたから転売しようと思ってるんだけど」

「それ一昨日に同じことした二年生が千冬姉に制裁下されてたの見たぞ」

「一夏、俺アリーナで応援してるからな！」

「清々しいほどの手のひら返しだな」

あと少して観戦チケットが地獄への片道切符になるとこだった。正直、女子に囲まれてアリーナにいるより校内のモニターで悠々と見たかったんで売却する予定だったんだがなあ。

予定がお釈迦だが、まあ俺がお釈迦に迎えられるかの二択なら余裕で前者の方がいいとも。

だけど練習に付き合うっても、俺よかセシリアさんや箒さんが絶対レベルアップには繋がるんじゃないのか云々かんぬん。と聞けば二人とも今日は用事が入ってるとのこと。

「じゃあ、せっかくだ……一回ガチンコでやってみるか？」

「おお、いいな。結局クラス代表を決めるときには戦えなかったしな。手加減なし、負けないぞ桐也！」

「はっ、零落白夜の攻略法を見つけた俺に死角はねえよ」

「えっ？」

超嘘だけど。一撃貰ったらほぼ負け確定の技なんて、スゲエ怖いんでできたら使わないでくんないかね。いやはや、口だけはホントによく回って困るぜ。

取り合えずハツタリとして意味深に笑みを浮かべておく。焦った顔の一夏を見ているのは楽しいが残念だったな。内心は俺の方が焦ってるぜ！

そんな俺の焦りを知ったこつちやないとばかりに互いにISを装着した俺と一夏。もうなるようになれよ、決して俺は嘘をついたんじゃない、間違っただけだからな。人は嘘をつくんじゃない、ただ間違っただけなんだぜ？

「そんじゃあ、やりますかア！」

「おう！」

一夏の癖は開幕直後の突撃。ただし今までそこで零落白夜は使ったことはないので今回も使ってこない、はずだ。使ってくれるな、むしろ終わりまで使うな！

振るわれたのは硬質な、エネルギー体でない物理の刃。大雑把な予測にもならない予想は的中、胸部を横一閃しようと肉薄する刃を左側非固定浮遊盾アンロックシールドを割り込ませることで強引に火花を散らせながら弾く。唯一の武装が弾かれた一夏の胴体が無防備となった。

展開したのは大口径ショットガン、ただし吐き出す弾丸は散弾ではなく——スラッグ弾。その銃口を白式に押し当て。

「ブツ飛べ一夏ア！」

引き金に掛けた指を引く。撃ち出されたバレーボール大のそれは本来のように散弾として散ることはなく、ひとつの弾丸として白式の胸部装甲を捉える。一夏に伝わった衝撃は如何ほどか、衝撃性による破壊力を重視したソレは胸部装甲に波紋状に罅を広げ一夏を大きく仰け反らせた。

ただこちらにも一息つく暇などなく、続けて二発目を撃つが一夏の反応の良さ、スラッグ弾の初速の遅さのせいかこの近距離で避けられる。決して俺の標準が甘かったわけではないと信じたい。

「へっ、先制は取られちゃったな！」

「撃つべし撃つべし撃つべし！」

「ぬお!? 会話のゆとりを持とうぜ!？」

「うっせー! こちとら雪片さんちの零落白夜ちゃんがいつ出てくる

か気が気じゃねえんだよ！ さつさと落ちろや！」

「なんだよそれ!？」

言葉のドッジボールをしながら盲撃ちめくらちするが白式は余裕で躲し、再び距離を縮めてくる。

正直、俺の射撃テクじゃマシンガンに切り換えたところで弾幕も上手く張れずに毎度一夏に距離を詰められるのがオチだ。散弾銃を投げつけ——普通に斬り払われた、南無三——刀型ブレードを展開。一夏の熱くなりすぎる性格を利用した一回コツキリの作戦擬き、決して開き直りではないぞ。

非固定浮遊盾も織り混ぜたナンチャッテチャンバラで一夏の猛攻を辛うじて凌ぐ。わかってたけど凄いだけで防戦一方だよチクショウ！ あつ、雪片式型の刃が青白いエネルギー体に——零落白夜ちゃんが出てきやがった！

「桐也、見せてもらうぜ！ 零落白夜の攻略法を！」

「あー、そんなこと言ってたなあ！ 忘れた！」

「あ、もしかしてハツタリか!？」

「アツハツハ！」

笑って誤魔化しつつブレードを投げつけ——やつぱり弾かれた——反転、一夏の間合いからギリギリ外れた距離を維持し全開ではないものの全力の逃走を始める。ただし大切なのは逃げることでなく、一夏と俺の間隔。届くと、当てる事が出来ると思える距離だ。

「なっ、待てー！」

「古今東西その台詞を言われて待った奴はいねえよ！」

当然、一夏は追ってくる。一太刀浴びせれば落とせる一撃必殺をおっ下げて、それを展開したままな。初めのスラッグ弾、俺を追い初めてからの経過時間。そろそろかね。

打鉄のスラスターからエネルギーを放出してえ……！！

「一夏あ！ 零落白夜を展開したままどれだけ経ったよ?」

「えっ、あつ……!？」

再吸収からの瞬時加速オ！ ただし用途は逃走でなく飛び蹴り、つまり向かう方向は一夏きゅん。ゴシヤア！ と巨大な金属同士が衝

突する轟音、俺にとつては快音とともに白式はアリーナ中央に落ちていった。我ながら呆けたところにいいカウンターを決められた。しかし打鉄のシールドエネルギーがこつそり半減してるのは、あれだな。

万が一にでもカウンターにカウンター被せられないように、瞬時加速使ったのにどういう反射神経してやがりますかねえ。蹴り飛ばされる瞬間に雪片式型を意識的にか無意識にか、振り上げやがった一太刀が左胸部を掠めていった。最後まで目え離さずにあの一瞬で切り返してくるし、もう目が一瞬輝いたとすら錯覚した。

別にビビったわけでも怖かったわけでもない、断じてない。

「ガー！ くつそー、負けたあー！」

「まあ、ぶつちやけ奇策で奇をてらったというか、一夏の癖みたいなの利用しただけだから次からはまた負けそうなんだがなー」

「え、俺の癖？」

更衣室、模擬戦を終えた頃にはアリーナ閉鎖時間もほどほどに近づいてきていたので今日は少し早めに引き上げることにした。着替えながら今日の振り返りを少々。

「ああ、熱くなると深追いするとか、引くってことをしねえからな。零落白夜を当てれば終わるってのはそりやあ大きな利点だが、消費エネルギーが頭からすつぽ抜けたらただの自爆技だ」

「あ、ああ!? 桐也がスラスター全開にして逃げてなかったのって」「イエス、当てれそうな距離を保ったら意地になって零落白夜当てるかと思したらビンゴってわけだ。一夏がワンオフを使用したままなら逃げ続けられ」

「白式のエネルギーが尽きてさっきみたいに自爆か」

失敗した瞬間に俺が負けるから冷や汗もんだったがな！ 実際、最後の一瞬であれだけ持っていかれてるわけで、正直二度とやりたくねえ。二度もするまでもなく通用しねええんだらうけど。

「してやられたってわけかあ」

「最後にカウンター被せられたのは俺も焦ったけどなー」

「え、俺が？」

「お前以外誰がやるんだよ」

「そうなんだけど。いや、必死だったから最後の瞬間の記憶がなくて」「ナニソレ怖い。まあそういうこともあるか。とりあえず一夏は突進癖と熱くなりすぎるのを直した方がいい気がしたぞ」

「突進癖に関しては雪片式型しか武装がないんだが……」

あつ。微妙な沈黙が更衣室を満たす。

「しよ、所詮は素人目線だからな、うん……ガンバ!」

「他人事か!」

「うつせー! こちとら一世代前の機体で頑張ってた! どうせ武装の数があつてもほとんど使いこなせないんだから、そっちの方がいいじゃねえか!」

「やめろよな、言つていい嘘と悪い事実があるんだぞ!」

「多科目一気に勉強しようとして小テストボロボロだった一夏くんが何か言つてらあー!」

「やめてくれ桐也、その言葉は俺に効く……! あと今日のIS改修基礎のノート見せてください!」

「またかよ!」

クラス代表対抗戦二週間前——こんなんで大丈夫か心配になる今日この頃であった。

08. 代表対抗戦と襲来と。

クラス代表対抗戦の前日。一夏に唯一白星を拾ったあの日から相変わらずの訓練を過ごしていた。具体的には一夏と一緒にセシリアさんに撃ち抜かれたり箒さんに斬り刻まれたり。自主練として加速して一零停止、からの三次元踊動旋回クロス・ゲリッド・ターンを繰り返してたりもした。へっへっへ、この二週間でアリーナに誰よりも穴を開けたのは誰を隠そうこのでっちーだぜ。

「まだまだ課題点は多くありますが成長しましたわね。鈴さん相手にどこまでやれるかは保証できませんが、取り合えずの及第点ですわ」
「おう、色々助かった。箒もありがとな」

「気にするな。私は好きだからやっている」

「へへっ、それでもだよ」

「む……そうか。礼は今日の日替りデザートで構わんどぞ?」

「構わんどぞ? って……いや、まあそれくらいなら気持ちとして奢ってやるけど。セシリアもどうだ?」

「いえ、わたくしはお構い無く……それよりもその隅っこで項垂れる桐也さんらしき彼、どうしましたの?」

ふっふっふー、聞いてくれたか聞いてしまったかセツシー! 箒さんは興味なさげに一夏に早くデザートを買ってくれと裾引つ張ってるけど、それはそれで悲しい。

「まだ一零停止からの三次元踊動旋回が成功しません!」

「一週間以上かかってますわよ!」

「知ってらあ! でも上手くいかねえ!」

まだ、まだ動ドゥから動へと繋げるならわかる。出来るかは置いておいてわかるんだ。けど一零停止っていう完全な停止から動へと繋げるってなに? 一旦止まってんじゃん、止まってるのにどうやって一連の動きにするの? 完全に一拍止まるに決まってんじゃん、連続して動けるかバーカ!

「ってな具合っすわ」

「……考えすぎてドツボに嵌まるタイプですわね」

「正直、頭よくないのに考えすぎてる感はあるんだよなあ。バカはバカらしく考えずにすればええのにつて……アンにやろう……!」

「誰に怒り馳せてるのか知らないけど取り合えず食券買いに行こうぜ？ 箒の引つ張る力がそろそろ制服を千切りそうだ」

「失礼な、ギリギリで破れないよう加減はキチンとしているぞ」

「え、箒さん怒るところそこでいいの？」

破れるわけないだろとかそうじゃねえの？ 乙女としての怒りじゃなかったのかよ。

しかし、本当に一夏の裾が悲鳴をあげそうなので話を一旦中断しそれぞれ夕食を持ってテーブルへと着く。いやはや、いつもながら本当にここの飯は旨い。

「箒、夜に食い過ぎると太るぞ？」

「一夏さん、女性にそういう話題を振るのは失礼ですよ？」

「そうか、すまん箒」

「ほうだぞいひか、わたしはほうほうふとはん」

「食べながら喋るのもマナー違反ですよ……？」

「んっ、その通りだな。話しかけられたのでついな、謝れ一夏」

「そうか、すまんセシリ……えっ、これも俺が悪いのか？」

「知らね、こっち見んな」

ぶつちやけIS学園の体育とか結構ハードだしそれに加えて部活やって、ISの自主練もしれりや晩飯多いくらいじゃ太らんだろ。普段の箒さんの食欲と摂取量には目を瞑る、きつと過剰分はおっぱいでも行つてんでしょ。キャー、このセクハラ思考おっさん臭えー。

もっさもっさと食つてると揺れるツインテールが、いやいやツインテールを揺らして鈴がやって来た。

「やつほー、一夏！ 明日よ明日、ワクワクで胸がドキドキで今晚寝れるか心配なくらいよ！」

「ははっ、遠足前の小学生みたいだな」

「アハッ！ まさにそれよ、もう今からやりたくて仕方ないわ……じゃないわ、そうじゃなくて一夏。宣戦布告に来たんだった」

背中にゾクツと来た。無邪気に笑みを浮かべる鈴から発せられた

のは敵意でも悪意でもない、こう、飯食うのを箒さんが中断して鈴さんの方に反応するレベルのなにか。あつれ、なんか表現が適してない気がするぞこれ。凄いのが鈴さんの気迫なのか箒さんの食への執着なのかわからなくなってきた。

「改めてなんだよ」

「ふふんっ、改めて宣言するからこそ意味があんのよ。あんたを倒してあたしが勝たさせてもらおうわ!」

「俺だって負けないぜ」

しかし一夏は物怖じすることなくニヤリと応じた。勝敗ねえ……あ、優勝したときの景品って。

「そうだ負けるな、私の半年デザートフリーパスは一夏にかかっているのだぞ」

「やったれ一夏、フリーパスは俺たちのものだー」

「あんたたちがせっかくキメてるってのに……ま、いつか伝えたかったのはそれだけよ」

「そうか、じゃあ今晚はよく寝ろよ」

「甘いわね、あたしが一晚寝なかったぐらいで不調になるとも?」

「いや寝ろよ」

「イシシッ」

その晩、鈴が眠れたか否かは同室者のみぞ知るのであった。

▽▽▽▽

翌日、アリーナは聞いた通りに人で溢れかえっていた。男子一名、残り女子……桐也は凄く肩身が狭い思いをしていた。周りに知り合いないいどころか上級生が多い状況、もう不貞腐れるしかねえと頬杖をついている。箒やセシリアはピットのリアルタイムモニターで見ているのだが、観戦チケットがあつたせいでアリーナへと来てしまった桐也……後に本当にピットに居ればよかったと思うのだがそれはもう少しあとの話だ。

もう、なんていうか360。女子に囲まれたこの何をするにも気を

使うこの空間が苦痛となり始めた頃。

一夏と鈴がピットより出てきた。一年生の専用機持ち同士の、それも片方は世界に二人しかいない男性IS操縦者とだけありアーリーナの盛り上がりは最高潮へと向かう。

そんななか二人は一言二言交えると互いに獲物を構える。

試合開始のブザーが鳴り渡った。

「うおおおおおー！」

始めに動こうとしたのは一夏。馬鹿の一つ覚えと言われようとも、武装が近接用のビームも斬撃も翔ばせない刀しかないのだ。つまり一夏と白式の選択肢には近づいて斬るしかない。様子見という考えは一片も持ち合わせておらず、相手の術中に嵌まる前に斬り伏せる勢いだ。

そして一撃必殺となりうる単一仕様能力《零落白夜》があるからこそ白式と戦う際、銃器を使う相手であれば必ず距離をとろうとしてきた。少なくとも今まではそうであったのだ。

だが、風鈴音甲龍は自ら肉薄してきた、自分より一撃必殺の間合いへと踏み込んできた。二振りの翼状の青竜刀を振りかぶった状態で。

「やんっ、お互いに迫り合うなんて以心伝心ねッ！」

「ぐおー！」

乙女らしく少々の恥じらいが感じられる言葉と、それに見合ぬ凶悪さで振るわれた双天牙月は雪片式型で受けた白式を勢いのままに押し飛ばす。

白式が近接戦闘専用型ならば甲龍は近接格闘特化型。機動力では劣るものの瞬間的な出力でパワーあれば白式を越える機体だ。

「自分が必殺の武器を持つてるからってあたしが、この私が怖じ気づくとも思ったら大間違いよ一夏！ 当たらないと必殺でないならそれだけじゃ、あたしにとつては脅威足り得ない！」

「言うじゃないか鈴」

「言ったでしょ、私は頑張ってきたって。そしてそれはこれからも続けるって。それをいくら一夏だからって簡単に越えさせてやるもんか、ううん——大好きなあんた夏だからこそね！」

「そうか……でも俺にだって越えるべき目標千冬姉はいるんだ。だから——
まずはお前を越えさせてもらおうぜ！」

再び互いに迫り合い、己が武器を越えるべき相手へ叩きつけあう。
だが今度は一夏が力負けすることはない。機動力の源たるスラスタ―を噴き上げ、甲龍の出力に拮抗する。

たった一度、ただ一合ぶつだけであっただけなのに、すぐにきつと無意識に対応してくる一夏に鈴は堪らず口角が引き攣る。ただしそれは悲壮や焦燥からではなく、嬉しき故に楽しくてたまらないとばかりに無邪気に獰猛な笑みを浮かべる。

中国に帰ってからの一年間は厳しく辛くしんどかった。でもそれだけじゃなかった。実力をつけていく過程で戦った強者たち、それを打ち倒し喰い干切つてのし上がってきたのだ。

強者を倒したとき、努力が実ったと実感できるあの瞬間が鈴は堪らなく好きだ。勝てないと思っていた相手を倒したときに得る実感が好きだ。それは再び日本に帰るためという一番の目標に劣らずとも並ぶほどに。

凰鈴音が中国でたった一年間で代表候補生に上り詰めた理由は努力と才能——そしてその獰猛なほどの貪欲さであった。

「だからア！ 会ったばかりのあのとき、あたしを守ってくれたあんたを！」

鏢迫り合いが散らす火花を映す一夏の視界の隅で空間が歪に捻れた。

「今度はあたしが守る側になってやるん、だからアツ！」

——鈴が小学五年生とき、日本に引越してきてすぐのあの頃。日本語は覚えていたが訛りが酷く、周りも幼いからこそからかわれて、いや鈴にとつては苛められていた。そんなときに助けて守ってくれたのが一夏だった。それは独りぼっちと思っていた鈴にとつては鮮明で鮮烈な記憶。

空気が弾けた、それが現在進行形で吹き飛ばされている一夏に認識できた事実はそれだけであった。即座に体勢を立て直し追撃に備えるが、何も来ない。鈴はというと二振りあった青竜刀を連結させ構え

直しているだけだ。

一体なにで攻撃されたのかわからないもどかしさを隠しながら一夏は言葉を返す。

「守ってた、ってつもりはないんだけどな」

「んー、ま、そね。中学とか行き始めてからはむしろ引きずり回ってたかも」

「おい」

「いやいや、でもあたしにとってはあんたは強者で、でもだからこそ越える壁なの、よっ!」

言い切ると同時、双天牙月をまるでブーメランのように投げつけた鈴。だが、ただ投げられただけの獲物など軽く当然のように躲した一夏の目前に迫っていたのは赤い脚だった。投擲直後に同じく距離を詰めてきた鈴の、甲龍の脚だ。

「ラッアアアアアアアアア!」

「舐めっ、るなあああ!」

雪片式型で渾身の蹴りを弾かれた鈴は僅かに体勢を崩す。そこで鈴の瞳に映ったのは青白い、当たれば致命的な刃。一夏が展開した零落白夜。崩れた体勢のまま振り上げられたそれを見上げる。触れた全てのエネルギーを消し去るギロチンの刃が甲龍の首を刈るよりも先——甲龍が見えざる牙を剥く。

「ブチ抜け龍咆オ!」

「ッ!?!」

不可視の弾丸が一発二発三発と連続して白式を穿った。反射的に、零落白夜を発動した雪片式型で受けようとするが、消えない。四発目の不可視に撃たれ、ようやく一夏は零落白夜を切ると同時に回避行動に移る。二発の不可視が白式の装甲を掠めながら辛くも回避に成功。追撃は、またもない。鈴が一夏を甘く見ているのではなく、その逆である。初手の一合、あれだけで次の一合で拮抗まで持っていた一夏の対応力を警戒し手札を見せない。それが切ったところで見えないう手札であつても、だ。

「ハッ、ハッ! 実弾じゃないのに零落白夜で消えなかった……!?!」

「さすが一夏いい気づきどころ！ けどなんも教えないわ！」

「言われなくても半分当たりはついてるから問題ねえよ」

「……本ツ当に油断できないわー。鈍チンなくせして見^{ケン}が尋常じゃな
いっていうか……」

初めに不可視に吹き飛ばされる直前に一夏は確かに空間が捻れたのを目撃していた。恐らく空気砲的なものだろうと予想する一夏だが当たらずも遠からずであった。

——第三代型 空間圧作用兵器・衝撃砲《龍咆》。

甲龍の両肩に存在する非固定浮遊部位^{アンロック・ユニット}。キュートな棘付き装甲を

持つそれは空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃自体を砲弾と化して撃ち出す。砲身も砲弾も視認できず、砲身斜角がほぼ制限なしで撃つことができる。今頃ピットで同じような説明がされているだろう。

一夏が視認できたのはハイパーセンサーによる僅かな大気の歪みのみ、そして鈴が体勢を崩しながらも撃ち込めたのは射角制限がないから。なによりも零落白夜で打ち消せないのはエネルギー体ではない、純粹な衝撃だからであった。

「ま、バレたらバレたでいいか！ 逆に考えれば出し惜しみしなくてよくなるだけだし」

「言わなきゃよかったか……」

両拳を叩き合わせ構え直す鈴。双天牙月を拾い直すつもりもないらしい。

相對する一夏も甲龍の両肩に注意を向けながらも雪片式型を構え直す。シールドエネルギー残量は既に半分近い。零落白夜の使用、ついで龍咆の連撃を浴びたのが痛かった。それに衝撃砲に対する攻略の糸口は未だに見えず、大まかなカラクリがわかっただけにすぎない。

だが、まだ手札は残っていた。瞬時^{イグニッション・ブースト}加速、この試合までの間に姉に習い、友と幾度となく壁に当たりながらも練習したその技術。

——ただ近づき斬る。それを行う一夏には最適であろうそれは、今の一夏の実力では燃費のよいものではない。零落白夜と併用すれば、

底の抜けたバケツから水が抜けるよりも容易くエネルギーは尽きるだろう。

だからチャンスは一度、よくても二度。ならば一度で決めればいい。

「鈴、行くぞ」

「いつでもかかってきなさい」

一夏は前傾姿勢となりスラスタが点火、鈴が左半身を前へ向けた腰だめとなり拳を熊手を構えたそのとき。ナニかが碎ける音が響いた、ハイパーセンサーで捉えた頭上に光源。直後二人の間に灼熱の光の柱が割り込んだ。それが地面へと突き刺さり炸裂、アリーナに響く大きな衝撃、噴煙がアリーナを満たす。

白式と甲龍より伝えられる緊急事態。撃ち込まれたレーザーの軌道をなぞるように降り立った全身装甲の敵性IS。両腕、肘より先が砲身となっており、頭部には剥き出しのセンサーが無数に配置された極めて異形の姿。コアナンバー及び所属は——不明。ただわかるのはアリーナの遮断シールドを貫通するだけのビームを撃ち込んだのがそのISということと、試合を完膚なきまでに邪魔されたことだ。「あー、もう、テストース。その気持ち悪いISのあんた、所属と目的と殴られて捕まるか大人しく捕まって殴られるか選びなさい」

一気にやる気のなくなっている鈴の選択肢のない言葉に返答はない。代わりに割り込んできたのは山田先生からの通信であった。

『鳳さん！ 織斑くん！ 急いで避難してください！』

「でもそもそも一般生徒が避難できてなさそうなのよねえ……出口がふたつしか開いてないのだけど？」

『えっ、あ……遮断シールドがレベル4になって……それに開いている出口の奥の扉も閉鎖されてるなんて!？』

「つてことは実質避難は無理ね」

「なら俺たちで押さえるしかないか」

『ダメですよ！ 二人とも避難してください——』

「んっんー、変ねえ。さっきのビームで通信機系統狂っちゃったかしら。なにも聞こえないわー。だから現場判断として全生徒の退避ま

ではアレを殴り続けるけど一夏はどうする?」

いつの間に収納、再展開したのか連結させた双天牙月を担いだ鈴が問いかけるが一夏の答えも決まっていた。

「アイツをブツ飛ばして皆を守る!」

「上等よ!」

——守る側にたった二人の全力に攻撃力のみが特化した無人機が勝つ術は、ない。

▽▽▽▽

見たこともないISが侵入してきてからアリーナは出口へと向かう混乱した生徒の渦中にいた。

なーんか現実味がなかったが、そうか、アリーナを守るバリアが破られりやそら焦るわな。ならば俺も早急に避難しよう流れに逆らわず、人の波に流されるようにアリーナ出口をくぐった。しかし、不意にピタリと動きが止まった。周りの視線は全て前方へと注がれており、人だかりを掻き分け先頭へと出る。奥の扉が閉じているが問題はそこではない。

そこでは空間が揺らいでいた。

それは陽炎のようで、しかし視認できなかったのは視界へと入れた直後まで。揺らめく空間は徐々に収まっていき、そこに現れた——いや、既にそこに有ったものが姿を見せる。

アイツは、ISなのか?

全体的に黒に染められ、赤いラインが走る全身装甲のボディ。フルフェイスの頭部には紅く輝くモノアイ。腕は二本だが、脚が四本ある異形であり、足の先は球体がホイールとして兼ね備えられている。

緊急時ということセンサー部分展開——打鉄からは所属不明機unknowと情報が入ってくる。ほーん……わからないことだけわかった。通信は、通じない。

「そうだよな、学園にはこんな変なやつ置いてねえよなあ……はあ、ピットで見学するときやよかった」

なにより問題なのはソイツの腰、両サイドに二門ずつ備えられたガトリング砲が、こつちを向いていることだ。

おいおい、そんなもん人様に向けてんじゃねえぞ。母ちゃんに他人に銃口向けちゃイケませんって習わなかったのかよ。まあ、習わねえよな、うん……下手に動けず睨めっこ状態のまま膠着。

互いに微動だにしないまま、きつと数秒——ヒイツ、と短い悲鳴。そう漏らしてしまったのは誰か、誰であっても攻められないしこの状態では仕方ないことだろう。ただ、それが引き金になっただけで。

向けられた四門のガトリング砲に束ねられた六本の銃身がゆつくりと、しかし確実に速度を上げ回り始めヤベえッ!?

「出ろ、打鉄ええええ!!」

間一髪といえるのか、反射的に打鉄を展開。考える暇もなく、後方の生徒を庇うように二枚の非固定浮遊盾と自身の機体を配置。

次の瞬間、盾を展開し壁のように構えられた三枚のシールドに迫るのは同じく壁——本来は点であるはずの銃弾で構成されたソレが回避不可能となり、面制圧すべく凶弾として差し迫る。着弾までは一瞬、音速を越えたソレらはコンマ一秒以下の間に距離を零とした。

「重てえ……!!」

壁なんてものじゃなかった、これは波だ。シールドを拡張領域より前方に展開したが、銃撃乱射の勢いは収まることなく弾丸の波はシールドごと俺を飲み込む。盾なんてお構い無く、削り潰そうと弾丸が盾を抉る。鉄を削る甲高い音は連続などというものではなく、絶え間ない不快音を響かせる。

「全員アリーナに戻れえ! 他の出口から逃げろ!」

硬直していた生徒たちが動き始める。混乱してモタつくかと思っただが、ごめん。上級生が上手くまとめて誘導してくれてるお陰で、銃弾に満たされた地獄直行便の用意されたこの通路から迅速に脱出してきている。

……にしてもさあ! 打鉄の非固定浮遊盾を酷使してばっかだなオイ!

しかし、今回ばかりは負けていい戦いではない。試合に負けて、

死んじやったけど

勝負に勝つじや笑い話にもならねえ。

それに引くことも出来ねえ、ここで引くと後ろ全員仲良くハンバーグだかメンチカツだかになっちまう。

相手は見るからに人が入れない形をしたIS、あれはどう見ても中身空っぽじゃねえのか。現状作れんとか言われてっけど、女性しか乗れねえって言われてたのに俺や一夏が乗れてんだぞ？俺らみたいなイレギュラーがいる時点で、無人機程度どうしたって話だ。

そもそも小難しいことはわからん、無人機？ラジコンと何が違うのかさっぱりだ。バカだからな！

だから今はそのラジコン野郎が俺にお熱なことだけを問題とする。強烈な銃弾の波は未だに止まず。

なにより腰に装備されたガトリング砲より吐き出される火線は、すっぼりと俺と打鉄を覆いきっている。シールドから身を出せば蜂の巣になるのは火を見るより明らか。そして今はシールドを少しでも動かせば、後方へ流れ弾が行く。それは、致命的だろ。

ならどうするか……ま、耐えるしかないわな。さつきからバカみたいに撃ち続けられているが、弾だつて無限なわけはなく当然切れ間があるはず。あつてくれ頼む。

そう考えてる間にも一般生徒たちの脱出は完了し——アリーナ出入り口の非常扉が閉まった。そりやもう待つてましたと言わんばかりに、バツタンと閉ざされた。

同時、ガトリング砲を唸らせていた無人機が突如に乱射を打ち止め、四脚のホイールを回転させ突っ込んできた。

「ああ、クソツタレ！」

重装甲なくせしてアホみたいに速え！そんなための多脚にホイールが知らねえが、豪快に火花を撒き散らし切迫してくる。この狭い通路で突っ込まれるとそれだけで圧迫感がある。後退したくなるも逃げ道はないんだよなア！謀ったように非常扉を閉じたアホはどこのだいつだ！

何よりマズいのは右腕、本来なら五本指のニギニギするお手手の代わりに、杭のようなものを付けてやがることだ。それをこちらに突き

出して——頭で鳴り響く警鐘に従い避け、れねえ!

アンロックシールド二枚にシールドを三重に前方に構え身を落とす。

直後、衝撃轟音、鉄が弾ける音なんぞ初めて聞いた……ただの杭ではなかった、言うなれば杭打ち機か。爆薬が炸裂し、杭を打ち出す。仕組みは単純、しかして威力は絶大。

それはIS専用武装のシールドを三枚重ねたつてのに、貫きやがった。三枚全てが上部よりひび割れ、やつこさんのモノアイセンサーが覗く。瓦割りじゃねえんだぞクソがッ! 今度は大事に使うつもりだったアンロックシールドまでバツカリ逝っちゃまったじゃねえか!

しかしシールドは役目を果たしてくれた。ギリギリ打鉄俺には届かず、流石にシールドを三枚ぶち抜いた代償か。杭打ち機は先端が潰れひしやげ再使用は不可能だろう。次はどうする、割れた盾は捨てるか、いやまだ使用は可——

「ゴフッ!」

なんて、そんなことを一々確認している暇は無かった。

ひび割れた隙間から強引に割り込んで来た左腕は俺の首根っこを掴む。シールドバリアが首を捻りきらられる前に、操縦者を守るという役目のため発動する。

呆けてる隙なんざ見せてる余裕はないつてのに何やってんだマヌケ……!

だが、既に無人機(推定)の片腕杭打ち機はひしやげている。新しい武装も握れねえ、ならあれで数発殴られることは諦め、なんとかこの状況を脱しよう。シールドエネルギーが尽きたら俺の首なんて枯れ木を、枯れ葉を踏み砕くより容易く折られちまう、その前に。

そんな風に考え、信じられないものを目にした、目の当たりにした。今まで不気味に光っていたモノアイの輝きが徐々に、しかし確実に増幅していき——

「カハッ……おま、嘘だろ……!?!」

放たれたのは真っ赤に染まったビーム。首根っこを捕まれ、既にシールドを失った俺に防ぐ手立てはなく直撃。目前が光に飲まれ、目

を背けたくなるほどの赤に占領される。

セシリアさんのBT兵器とは比にならない威力で、打鉄のシールドエネルギーは目減りしていく。顔からビームとかふざけてるとしか思えない攻撃方法に見合わない、ふざけた威力してやがる！

打鉄のバリアは悲鳴を上げるかのように紫電を撒き散らしながらも俺を守るがジリ貧。俺を消し飛ばさんとすビームの勢いは未だ衰えず、無人機（確定）の左腕が弛むこともなく。湯水のごとくシールドエネルギーは減っていく。

このままでは、死ぬ。

「っんの……！ 全く、笑えツ、ねええええ！」

首根っこを掴んで離さない左腕を両腕両足で掴み返し、いや抱き抱えスラスターを一度噴かせ、再度取り込み圧縮し、爆発させるかのよう放出——！ 身体が捻りきれられる可能性もなにかも、後のことは考えず独楽のように回転する。

——そのとき、後頭部にチクリと痛みが走ったような気がした。

実行した加速法の名はお馴染み瞬時加速。クラス代表決定戦のとき、最後の最後に限界を越えた加速をもたらしただあれだ。本来は直線的加速を行うために使うべきそれを、回転に使う。全スラスターを真横に向け、ままよ！

「フンスツおおおおおおおお!?」

結果、機体の制御を失い壁壁床天井壁、ついで床壁天井床天井と、ピンボールだかスパーボールだかのように通路に弾け跳ね返りバウンド。

しかし、その成果は大きかった。無人機の左腕は肩より雑巾のように絞られ、辛うじて垂れ下がっているだけ。俺はビームより難を逃れた。シールドエネルギー残量30%、一気に50%を削られたのは痛いはまだ生きている。

なら、セーフだし残り20%は何で減ったって瞬時加速だよ馬鹿野郎。まだ調節が上手く出来ねえしアホみたいに跳ねた代償だよ。

「ぶった斬ってやらあ！」

ここからこいつを倒せば——最高にカッコエだろうが！

近接用ブレードを展開し、深く腰を落とし突きの構え擬きをする。やることは単純、通路が狭くて避けられないのは相手も同じ。やっこさんと同じように突撃をかます……！

そのために、踏み込む一步目は床、ではなく壁、続いて二歩目を出し三步目と同時に二度目の瞬時加速。ただし俺の見える景色は天地逆転、PICの恩恵をあやかり天井を、俺の最速で駆る。

まずはその今にも落ちそうな左腕斬り落としてやろうと流れる景色のなか狙いを定め、外した。いや、正しくは斬れたのだが正確に言えば斬れなかった。

無人機が左腕を庇い、入れ替わるように刃の通り道へやってきた——やっこさんの頭部を斬り裂くこととなったのだ。

ガコンツガラガラ、と無人機の頭部が落ちて転がる音が通路に虚しく響く。

「バカなの？ ド阿呆なのか？」

しかし、頭部を失ったにも関わらず首はこちらを振り向きガトリング砲もそれに追従する。あの弾丸の波にシールド無しで飲み込まれれば、さすがに残りのシールドエネルギー的にも宜しくねえ。

次はその砲身ぶつ潰してやろうとスラストターを灯そうとした、そのとき。無人機のカトリング砲が四門すべてが唐突に上を向き——頭上へ乱射が開始された。

人間、余りにも予想外の事態に見舞われると思考が停止するというのは事実だったらしい。薬莢と瓦礫がシャワーのように無人機に降りかかるも、当の本人（not人間）はお構いなしに撃ち続ける。なののために、そう考える暇もなく、天井に綺麗な風穴が出来た。

そして俺が固まってしまっている間に、無人機はお役目ご苦労と言わんばかりにガトリング砲をパージし——飛翔。端的に、わかりやすく、一言で言おう。

逃げやがった。

「……………んあ？ ハア!？」

あの四脚無人機、文字通りデスウェイトを切り捨てて逃亡しやがっ

た……！ おまけにひん曲がった左腕は落ちないように抱えて、無人機ならそれも千切り捨ててけよ！ 頭は斬られたくせして色々半端な野郎だな！

「てか、そうか……天井破ればこんな狭いところで戦わずに済んだのか」
いやしかし、修繕費とか払えって言われても困るしそもそも空中戦も得意な訳じゃないし、正直狭い通路で助かったのは無人機だけでなく俺もだった。だからどっちが最善だったかと問われると答えれんのだがな。

そんな風にまとまらない思考を回しつつ呆けていると声が聞こえた。今までジャミングされていたのか通じていなかった通信が生き返ったのか、織斑先生の呼び声が耳に反響する。なに言ってるのか中々聞き取れねえや。

「あー、通信死んでたっけか……ははっ！」

そこでようやく自分が生き残れたことを実感が湧いてきて、裏を返せば下手をすりや死んでたかもしれないってことにも実感が湧いてしまつて。情けねえことに立ってられずにへたりこんだ。それに、なんだかな笑いが止まんねえ。

「イツヒツヒ、アツハツハツハツハツハ！」

『おい、出路！ 無事か!? 出路！』

「ハツハ、ヒツツ！ アツ、あー無事です無事です。すみません所属不明のISを一機逃がしました、けど無事ツスー」

『そうか、無事ならば、いい』

「いいですか、ええつと一夏たちは？」

『無事だ』

「そですか、よかったよかった。あーあ、心臓がバクバクいってますよ」

『ああ、よくやった』

ふんふん、初めて素直に褒められたような、そうでもないか？ どうだっけな。まー、しかしあれだな。

——あー！ 怖かった！

09. 一時沈着

衝撃が乱入者の胸部を貫く。甲龍の脚が地面を砕くほどの踏み込みから速度を伝達。捻った腰を回転させ、己が重量や遠心力を上乗せして打ち込まれた拳。

それが正確に敵性ISの正中線上を抉った。同時にバシユツという、何かが排気されたかのような音が甲龍の拳から吹き出される。

零落白夜という必殺を持つ一夏に突撃のフェイントを掛けさせた上での奇襲が成功した瞬間であった。それをモニターで見えていたセシリアは奇策にすらなっていない奇襲に呆れる。ただそれは二人をまだよく知らぬセシリア・オルコットから見た感想であり、少なくとも片方の織斑一夏をよく知る筈からすると少し違った感想を抱いていた。

「無茶苦茶ですわ……同じ必殺の威力を持つ相手にあんな大雑把な」

「まあ、その通りだが一夏の場合は大雑把なくらいで程よかったでするぞ？ 考えすぎるより動いた方が大方何とかなるタイプだ」

「ハア、そうですね……？ 今後彼と組むことがあれば参考にさせていただきますわ」

「ふつ、恐らくその性格だとてつもなく苦労することになるだろうな。あいつはなかなか型に嵌まらない」

「殿方は皆そうなのでしょうか」

「男に限った話ではないだろう」

「まあ、そうですね……それにしても凰さんのあれはなんでしょう、ただ殴ったにしては威力がおかしいように見えるのですが」

セシリアの言う通り、鈴の打撃はいくら甲龍がパワータイプとはいえ、武装なしで殴っているにしては些か重いように見える。事実としてただ拳を当てた先程の一撃は乱入者のISに絶対防御が発動していた。

その疑問に答えたのは千冬。山田真耶先生、全力でセキュリティ復旧作業協力なう。

「凰のあれは甲龍の特殊兵装《龍咆》のおまけのようなものだ。装甲内

部機構に仕込まれた《震》、圧縮した空気を拳のインパクト時に炸裂させて衝撃を増幅させるものだ……あとオルコット、同じ必殺ではない」

「え、あ、はい……？」

甲龍の特殊兵装《龍咆》のおまけのような兵装。装甲内部機構に仕込まれたその名は《震》。圧縮した空気を拳のインパクト時に炸裂させ衝撃を増幅させる。言ってしまうえば、ただそれだけのもの。

龍咆に比べれば威力も格段に下がり射程は零に等しくなるソレであつたが元々パワータイプの甲龍。その拳の威力は双天牙月を上回る。

『これがあたしと甲龍の隠し玉ア！』

拳を振り抜いた勢いそのままに反転。後ろ回し蹴りが乱入者の胸部に直撃し、再び衝撃が炸裂した。乱入者は地を踏みしめるようにも虚しく後方へ弾かれる。

「蹴りでも、同じですね」

「ああ、《震》は四肢に搭載されている。オルコット、お前のブルー・ティアーズが中距離特化型であるように甲龍は近接格闘特化型だ」

そう千冬が説明するところに真耶が割り込む。それはもう焦り焦って。密かに焦っていた千冬が人知れず製作した塩コーヒー、塩分過多なそれを裾にかけ床に撒き散らしながらやって来た。

「織斑先生！ で、出路くんと通信が繋がりません！」

「何!？」

とここまですごちーが閉じ込められた頃のピットの様子であつた。

▽▽▽▽

奇襲により間髪入れず強烈な連撃を受けた乱入者はたたらを踏み後退。

しかし奇襲への戸惑いを見せることはなくその右腕を鈴へと向け直す。アリーナの、ISの絶対防御と同質のバリアを破った文字通り

の必殺のエネルギー量を秘めた砲身を鈴の眼前へ突きつける。肌に刺さる熱は当たったときにどうなるか示唆しているかのようだ。

「こんのっ……い！」

その光が焼き尽くさんと放たれる直前、アツパーのように振り上げられた鈴の掌底が砲身を真上へと弾きあげる。僅かに遅れ、撃ち抜く獲物を見失ったビームは上空へと放たれ雲を貫いた。

そして崩れた体勢から強襲を仕掛けた乱入者は今度こそバランスを崩す。

「必殺持つてる程度であたしは退かないってえの！」

身体をズラした鈴の後ろから一夏が現れる。振り掲げた刃は青き輝きを放つそれはオリムラのお株。一撃必殺の零落白夜、既に必中の間合いであった。

囃が本命へと切り換えられる。

刃を振るうそのとき、一夏の首筋にジリツと嫌な予感が走った。それにわずかに遅れ鈴の叫び声。

「一夏ア！」

しかし退くことができない段階ではない、ならば逸早く刀を振るい——爆音と同時に雪片式型が斬り裂いたのは隆起した土壁であった。

「なっ、ん!?!」

零落白夜は試合用に制限下に置かれた状態であつてもエネルギー系統に準ずるものはその悉くを斬り裂く。全てを無力化する。

だからこそ物理的な障害物でその身を防ぐという選択肢を取った乱入者の対応は正しい。ただその方法がイカれていたただけだ。爆風で吹き飛ばされた一夏たちは信じがたいものを目にする。

「あいつ、なにをしたんだ!?!」

「左腕の砲身から地面にあれを撃ち込んだのよ」

「零落白夜を防ぐためか……」

「ええ。そりゃ、あの威力なら地面だって多少隆起するでしょうけど頭がおかしいとしか思えないわ。危うく巻き込まれかけたっての！」

そう、ISのバリアを撃ち抜く威力の砲撃。それを自爆に等しい使い方もすれば自身が無事で済むはずもなく——その左腕は肘より先

が失われ、胴体の装甲も見ても無惨に熔解していた。鈴も反射的に跳び退かなければ巻き込まれていたかもしれない威力であった。

だが何よりも異質なのは血が一滴も流れず熔解した下より覗くのは人の肉、ではなくどこまでも機械であること。

「……鈴」

「わかってるわよ。どんなトリックだか知んないけどアレには人が乗ってない、乱入者が現れたってことよりとんだスクープよ」

「ああ。だから、加減する必要がなくなった。俺の、白式の零落白夜は全力で振るえば全部を斬っちまう。だからいつもは調整してるんだが」

「相手が無人ならその必要もないってわけ。ふうん」

「ただひとつ問題ある……：シールドエネルギーが底を突きそうだし！ 零落白夜使ったらたぶん10秒も持たねえ！」

「底を突きそうっていうか底が抜けたような燃費の悪さよね」

ジト目を向けると気まずそうな一夏だが、ちよつと鈴が喜んでるのはナイショだ。

先程の一振りの零落白夜を除けば白式は無人機の乱入からそうエネルギーを消費していない。要するにそこまで試合で鈴と甲龍が善戦していたということであり、そんな事実が少しばかり嬉しかったのだ。

ま、こんなときに不謹慎だけどねーウツフツ。なんて鈴の心情。

「まあアイツはアイツでもう瀕死だし？ ならあたしがいるこっちは勝つわよ。無理に全開の零落^そ白夜は使わなくていいわ」

「え？ 一撃で仕留めた方が安全じゃないか？」

「もしそれを外したらあんた丸焼きのローストヒューマンよ」

「ようし！ 安全第一が基本だよな！」

「出力考えていきなさいよ」

そんな作戦とも言えない相談が一段落ついたことを見計らったかのように無人機は動く。文字通り半壊しながらも砲身に熱量を集束させ再び光線を放つ。それを余裕をもって躲す甲龍。燃料的に余裕がないとはいえテレフォンパンチとも言える見えきった攻撃に当た

るほど間抜けでもない。

上体を逸らし余裕をもって躲すと一連の動作で双天牙月を握る腕に力を込め、パワーアシストを全開とする。

「とは言ったものの、のっ！」

体をしならせ双天牙月を振りかぶった鈴は槍投げの要領で投げつける。もはや機動力がないに等しい無人機は残された右腕で弾き飛ばす——そしてその右腕も虚空を舞った。

無論、無人機も見えていた。織斑一夏が駆る白式が僅かに双天牙月に遅れ向かってきていたことなど百も承知であった。ただ優先度の問題、狙われたのかそれとも偶然か、鈴の放った一撃は正確にコアを穿ちに来ていた。ならば後続の織斑一夏を無視して防がざるを得ず、その代償として残った片腕も失った。

「両腕を無くしたら一撃必殺は俺だけの十八番だよな！」

零落白夜を発動した一夏が雪片式型を振りかぶる。それは全開のものではなく、もしもの余力を残した通常の必殺。ただし、そうであろうとそれは致命的であり無人機は片足で後ろへと跳び去ろうとする。もはや勝つことは絶望的であっても1秒でも長くそこに居ようとするかのように。

だがナニかが無人機の足掻きを、身体を押し潰す。稼働停止寸前まで追い込まれた駆体は悲鳴をあげ下がることは許されない。真上に来ていた甲龍による龍咆を撃ち込まれた——辛うじてそのことを認識したそのとき、無人機は両断されていた。

「やった、よな？」

「バカそれはフラグよ！」

一夏の確認に鈴がそう返すも既に無人機はピクリとも動く様子はない。腕が残っていれば最期の一撃と洒落込めたかもしれないが、生憎すでに左右ともに無くなっている。

そんな無人機の残骸をたっぷり1分は見続けたふたりは息を吐く。

無言で手のひらをあげた鈴に一夏が自身の手のひらを叩きつけ、お互いを無言で労ったのであった。

これがもう一機、でつちーと戦っていた無人機が天井を突き破り逃

走する3秒前のことである。

▽▽▽▽

放課後の保健室、俺のベッド。ここに保健教諭(若い臨時医)でもいればなかなか淫靡なシチュエーションだが、残念ながら背徳的なことはなにもしておらず肋骨にヒビが入っただけだ。うん、深呼吸しようものなら刺すような痛みが全身に走って最悪だ。

そしてここにいるのは保健医ではなく織斑先生だ。いつも一夏と俺を興味深そうに診てくれるセンセはいずこ。

「まったく……瞬時加速で回転をする奴があるか。普通なら身体が捻れ切れていたぞ。肋のヒビで済んだだけ運が良かったと思え」

パコンツと軽く出席簿で頭を叩かれる。いつもみたいな出力じゃないのは怪我ゆえの真心か。

「ウツハツハ」

「笑い事か」

「事なく終われば全部笑い事ですよ。まあ、ここ最近踏んだり蹴ったりツスけど。一家離散にイギリス令嬢にボコられえの無人機にこんがりされそうになりいの……あれ、華の高校生活がなんかおつかしいぞ」

「IS学園の生徒ですら歩むことのないレベルの凄惨さだな。世界で二人の男性IS操縦者、これからの道も険しいぞ」

「なだらかにしてえなあ……」

「そしてこれは、入学時にも言われたかもしれんがハニートラップには気をつけるよ思春期」

「……」

「おい、目を逸らすな」

だってここの学園ってば学力に比例してるのか美人しかいないじゃん。隠し選考基準に顔面偏差値が絶対にあるとでっちは睨んでるわけなんだが。美少女ばかりで至福と気遣いのストレスに板挟みな日々プライスレス。

ハニートラップと言えば一夏も注意のはずなのに、何故だろうか。アイツがハニートラップに引つ掛かる様が思い浮かばない。むしろ同じ男性操縦者が来た方が懐柔されそうだ。

俺は、引つ掛かりそう。思春期の性への関心を嘗めんな。

あと一夏といえば、目の前の人は動かぬ事実として織斑一夏の姉なんだが弟の現状にどんな心境なのか。二度と家族に会えない身としては不躰な好奇心か似合わねえセンチメンタルな里心からか、そんなものが湧いてき——ストップストップ。

考えるまでもなく織斑先生は一夏のことを気に掛けている。そうでなければ誰が入学した当日にイギリスの代表候補生との試合を立てあげるものか。

俺たちはドのつく素人でありながら周りとの実力差を自身の身の丈を正確に掴めていなかった。今までISが縁遠きモノだったから仕方ねえっちゃそれまでなんだが。

でもISっていう力を持つに当たって、力をどれだけ使いこなせるかを理解させるために代表候補生との試合をさせたんだろう。

男性IS操縦者VS代表候補生という話題性に埋もれてるけど、素人と代表候補生を戦わせてクラス代表決めるって結構むちゃくちゃだしな。

一度は世界の頂点に立ったこの人が、ISを駆る者の世界頂点たるブリュンヒルデがそのことを理解してないはずがねえ。

……織斑先生が顔を逸らして無言でパソコンパソコン叩いてくるのは何でだ？ 微妙に視界がブレて効くんですが。

「怪我をしていたことに感謝しておけ」

「怖い怖いコワイ！ 目え据わってますよー！」

それでも、弟だけでなく俺まで代表候補生と戦わせてくれたのは、ありがたいことだと思う。教師だからという理由でもとてもありがたいと今なら思える。

「ふんっ、それだけ騒げるなら問題ないだろう。あとは精々療養することだ。授業に遅れると後が大変だぞ？」

「学園内の事故による保証って単位で払ってもらえませんか？」

「寝言は寝ていえ、学生らしく考查前に焦るといい」

ニヒルに笑いながら、恐ろしい捨て台詞を残して織斑先生は保健室をあとにした。何気に授業に遅れることが一番笑えないのだが一夏にノート……あ、無理だ。

山田ティーチャーに放課後の補習を頼むつきやねえ。でも、あの人のことだから『放課後に二人きりで……そ、そんないけませんよ！私と出路君は先生と生徒なんですからっ！』とか顔を赤らめて言いそう。何がイケないのか今度聞いてみよう、全くもって確信犯とかじゃないから。いやあ、ISについてよく知らないでっちはワツカンナイナー。

因みに、クラス代表対抗戦の景品たるデザート半年フリーパス。無人機乱入によりノーコンテストとなり、つまりフリーパスも無くなったことで出路と箒さんが絶望するのはあと少し先のお話だったりする。無人機、ゼツタイ、ツブス。

▽▽▽▽

機械の部品や破片が積もって結果的にできた山。そのてっぺんに座り機嫌良さげに鼻歌を口ずさむ女性がひとり。

歳は20代といった見た目に不思議の国のアリスを彷彿とさせるドレス。さらに頭につけられた機械のウサ耳を着けているその姿は歪であった。見た目から推定される年齢、その美貌、服装、周囲の環境があまりにもちぐはぐなのだ。それが一層歪さを醸し出している。そんな彼女は腕を弄んでいた。自前のものではなく、肘より先しかない腕を。ただよく見ればわかるが人の腕ではなく、機械で作られた腕だとわかるだろう。

根本は振り切ったかのような断面。その指は髪を摘まむように数本持っていた。それは出路桐也の毛髪であり、つまるところそれは先程学園を襲撃した無人機のうちの一機の腕ということだろう。

「予想より深傷スクラツプになつて帰ってきたねー、適当に昏倒させてから髪を

取るつもりだったのに……閉鎖空間で得た恩恵は向こうに分があったのかな？」

出路桐也は、どうやらその女性の予定よりも健闘したらしい。まあそんなこともあるかな、といった風体だが。

「思ってたより親和性が高かったのかな。あとは一を行う技量は並み以上と……ほいっと」

髪を回収するとドレスの女性——束は興味を失ったかのように腕を投げ捨てる。抜き取った髪の毛は小型の筒のような機械へ放り込む。瞬く間に筒の内部は藍色の液体に満たされた。筒から這い出るケーブルをコンピュータへ繋げれば、虚空に数えきれない画面が現れる。

「さてさて、私は何を見逃したのかな。なんであれはISに認められたのかな？」

それを見つめる束は鼻歌もやめキーボードを叩き、画面に映る螺旋は解かれ情報が更新され不一致を吐き出し続ける。束の指は絶え間なく動き続け、それにルーチンとして呼応するかのようにエラーを表示しては画面が消えていく。ただ彼女にとってはそれも想定内、想定外を探すための作業なのだから。

延々と単純作業のようにキーボードを叩き想定内を出し続けること太陽が二周。飽きが現れ始めたそのとき、ついに一件の想定外が吐き出された。

束はキーボードを足元に叩き捨て屑鉄山の一部に屠り去る。勢いそのままに一致を出した画面をつかもうとし——

「ふぎやあああああ!」

気持ちよいほどに、虚空の画面を通りすぎた。勢いそのまま躓いて、決して低くはない屑鉄の山を転げ落ち落ちビッターンと顔を床に打ちつける。空間投影の画面を掴めるわけはなく、この結果は誰にでもわかる自明の理だった。

そのことは束自身もわかっているが何か悔しくて無言で床を何度か叩く。凹んだ、精神ではなく床が。

「ってこんなことやってる時間が惜しいよ……あー、うんうん。コア

ネットワークがネットワークだったからこそアレはISに乗れるようになったわけだ。最強のセキュリティはスタンダードアローンとはよく言ったもんだよ、全くもってその通りだ」

今度こそ画面を覗きその情報を得る。ひとり頷きナンバー表記のないISコアを筒型の機械と一緒にお手玉のように回しながらぼやき続ける。

「束さんにだってコアは解析しきれていないんだ。その自己進化のなか、初めに束さんが設定した檻が綻ぶのも無理はないけど……」

白騎士事件。ISが現行兵器全ての無力を世界に認めさせるために束が起こしたとされている事件。攻撃可能な各国のミサイル2341発全てを、当時中学生であった束の作品はそれを凌駕した。

目撃した人間がした反応は驚愕、賞賛。その後にはキツチリ予想通り戦略兵器への転用、そして世界の変貌。

それは世界に変革をもたらした。ISという兵器さえ保有すれば一個人が国を落とせるという事実、そしてそれを扱うことが出来るのは女性だけ。女性の社会進出、男女均等雇用法、男女平等参画社会——そんな言葉は容易く全て失われた。

女尊男卑。かつての男尊女卑をそのまま裏返したかのような社会体制へと変わった。力あるものが上にたつという極めて解りやすい構図を、求める求めないに関わらず世界が再認識する引き金となったあの事件。

まあ、だがそんな些末で些細なルールに沿った世界の顛末は束の予想通りでありどうでもよかった。男女のどちらが社会的に強いかなどというちっぽけな問題がどうなろうと——篠ノ之束が立つ舞台には程遠い。遙か天上の最上の座に存在する事実を揺らいでくれない。

ただひとつの目的のために行ったことだから、今の世界は当然であり目的のための過程に感じることはなにもない。

「……はあ、でも流石にへこみそうだよ」

用済みとなった筒型の機械を容易く握り潰した束は呟く。出路桐也という少年が束の予定の外、イレギュラーとしてISに乗れるようになったこと。それは今の世界が認めずともISにとっては出路桐

也という一パーソナリティーがISを駆ることが当然の既決となつてしまったということ。

そしてなによりも——自分タバネのうっかりによる簡単なケアレスミスが原因ということが彼女の精神にミリ単位のダメージを与えていた。晩御飯はハンバーグと想っていたのに焼き魚であつたときくらいのダメージを与えていた。

電灯にコアをかざしながら大きなため息を吐く。

「あーあーあああ、もうこんなこと予測は出来なくても予想すべきだつた。成長つてもものを甘く見積もつてた、人間を基準にしたら駄目だね」

ちえーと軽く舌打ちをしながら狂つた予定を迷わず破棄ポイして新たに組み立てていく。また鼻歌を口ずさみながら笑みを浮かべ、自らの手のひらから溢れ落ちた要素すらも再び掬い上げる。

「けど篝ちゃんも中々どうしてお姉ちゃんの予想を外れてくるし……うふふ、さすが篠ノ之の血筋。私のラブリーキュウト妹だねえ」

ぐっふっふっふ、明かりの差し込まない薄暗い部屋のなか残念な笑い声が反響するのであつた。

10. 真夜中の訪問者

日本人が外国人と一番コミュニケーションを取りやすい場所ってもしかしたらIS学園かもしれん。なにしろ海外から来た皆が日本語で話してくれるからな。

それもこれもIS開発者の篠ノ之束が日本語でしか意思の疎通を行わない、ISに関して発表した文書もすべて日本語であつたからだ。お陰様でIS関係者については英語を抜き去り日本語が共通言語となっている。これに関してのみはありがたいことこの上ない。ビバ日本。

「日本語って難しいよね、一つの意味に対して数えきれないほどの言葉が存在するんだもん」

「明日やる、やれば出来る、本気出してないだけ、たまたま調子が悪かった」

「ん……なにそれ?」

「全部バカつて意味だ」

そんなわけで日常英会話すら覚束ない俺もIS学園に来れば、入学一日でイギリスのお嬢様と決闘が決まったりするほど日本人に優しいグローバルさがここにはある。ただ生活を共にする、シェアハウスやホームステイ的なものほど濃厚な関わりを持つことは俺たち男には縁遠い話だった。だって一夏と俺を除けば女しかないからな、IS学園。

別にわざわざ外国人と同居したかつたわけでもない。文化の違いによる同室者との争いなんて起きてみる、面倒以外の言葉が見つからねえよ。なので互いに日本人であり男であり、女心以外への察しは鋭い一夏との同室はなんだかんだ気軽にあり楽だった。

「あつ、そうだ! ベッドはどうしよつか?」

「お前が手前の方を使えばいいと思うよ。同じ男の一夏の香りの染み付いたベッドを、うん。てか真夜中の3時、そろそろ寝るわ」

「……………ここは痛み分けということだ僕が奥の君のベッド、君が手前の元一夏のベッドでお互いに男の香りに苦しまない?」

「そもそも痛みがない俺にとって分けられたら圧倒的に得がないんです。がデユノっち、おやすみ」

「うっ、うーん……」

とツラツラと考えても目の前の今の同居人は一夏ではないわけで、全ては過去系なわけだな。

フレンドリーな一夏とは何か違う親しみやすさ、というよりは上手く不快感なく距離を埋めてくる男。おつかしいな、軽く1時間前はまだ初対面で少なくとも俺はぎこちなかったはずなんだがいつの間にかやらトモダチに近い幅になってる。なんかドンドン合わせられてるような気が、気のせいかな？

まあ、思い返せば一夏ともこんな感じだったか。違いと言えば日本人か外国人かってことで、そこに違和感が引っ掛かってるだけだろ。ただ、やっぱその差はデカいと思うんだが、なんか日本語を流暢に話すせいか想像していた程の壁がない。むしろ話し易すぎて驚くほどだ。

「あ、そうだ。仲良しな織斑君の臭いを存分に嗅げるよ！」

「表出ろ」

「ちよっ、待って!?! 冗談だから引っ張らないで!?! 丑三つ時だよ、外で暴れたら怒られるって!」

なので、なので。現在目の前にいるフランス製の中性美少年シャルル・デュノアが新たな同室者という現実はそろそろ受け入れよう。くっそ、なんで美少年がISに乗れるようになんだ肩身狭い、急募フツ面! けど、取り敢えずデユノアっちの面をフツ面以下にしてくれるわ。二度とサムズアップ出来ねえようにしてやる。



なんか俺の肋骨がパッキポッキしてから無事治った頃。

お引っ越しです。山田先生は満面の笑みでそう言った。ワンフレーズ、七文字から最大限に想像力を働かせた結果山田先生が引っ越しということがわかった。しかし俺たちに引っ越し報告されても困

るんだけどな。いやせつかく挨拶しに来てくれたんだ、丁重に見送ろう。

「山田先生お引越し、いや転勤ですか。達者でやってください、俺たちの補習の引き継ぎはなるべく優しい先生にお願いします」

「……え、あ、そういうことか！ えつと、今までお世話になりました！」

山田先生へと綺麗なお辞儀を揃って行う。ぶっちゃけ今の時間はAM1時前で消灯時間ぶちぎってるとか色々思わないでもない。けど補習常連の俺たちにわざわざ挨拶しに来てくれたんだ。消灯前だと周りの目もきつとあったんだろう、うん。

なんか私は転勤なんてしませんよ!? とかワタワタしてる山田ティーチャーは見ないことにする。

「ち、ちち違うんです！ 引越しするのは織斑君なんです！」

「そうか、一夏。じゃあな」

「ドライな反応だな!」

「そんな一夏は転校にトライ」

「いやいや、俺も引越しなんてしないからな？」

このあとテンパった山田先生が落ち着き説明を行うまで10分を要した。明日が土曜じゃなければ扉閉めて寝てた。

山田先生曰く、

「その、ですから……転校生が来るんです。他の学生さんたちには来週の月曜日にお知らせする予定なんですけど、お二人にはやむを得ず伝えないといけなくなりました。その転校生が、男の子なんです」

——らしい。直後、一夏が真夜中なのに喜びの奇声をあげかけた。それを山田先生が止めようとして胸部アタック一夏に決めたり色々あった。割りと羨ましかった、くっそ俺も叫べばよかった！

まあ、つまるところは男が転校してくるし、ここに住まわせるため一夏は別室に移れということらしい。

「ええ、なんで俺なんだ……」

「織斑君でしたら織斑先生と同室になっても問題ないのでこういう割り振りになってしまいました。さすがに新しい一人部屋を準備する

ことや三人同室は難しくて、既にしよ、書類が山のように……」

「えっ、俺は千冬姉と同室になるんですか？」

「やったな一夏、実家と変わらんぞ」

なんか絶望的な表情してるけどいいじゃん、家族と同室。気も休まるしなんだかんだ他人の俺よりいいはず、掃除が掃除が……なんてうわ言のように呟いてるのは気にしない方向でいこう。

「……ううん、まあでも桐也が千冬姉と同じ部屋になるわけにもいかないか」

「そういうこつたな、転校生も然り。胃に穴開くわ」

「よし、じゃあまた絶対遊びに来るからな！ ハブってみろ、泣くからな？」

「んなことするかっての、あとノート写しには来んなよ」

「えっ？」

「えっ？」

「あ、アハハハ……じゃあ織斑君は織斑先生の部屋、寮長室に行ってもらってもいいでしょうか？ 荷物は明日運べば大丈夫ですし！」

なんで、こう山田先生というかIS学園は対応が遅いんだろうか。昼間に事前に伝えておいてくれてもよかったと思う。別にいつかの無人機のことのこと揶揄ってるわけじゃないけど、全然そんなことないけど。

そいで、さっきからずっと俺らを観察するように見てるのは誰か。暗がりに紛れてギリツギリこつちから顔が見えないところに居やがる、話の流れ的に転校生なんだろう。もう説明とかなくてもどうせ日中に来たら学園大騒動になるから今来たってことはわかる。

けど問題点はそんなところにはない。一番にして唯一の問題点は、既に山田先生が一夏を連れて寮長室に向かってしまったことだ。

山田先生が、転校生を忘れて、帰っちゃった！

「……笑うしかねえ、ハハッ」

空笑いしか出てこねえよ。あの人ってば普段から補習のときに課題の答えポロッと溢したりおちちよこちよいだけど、だけどさあ！

俺のコミュニケーション力嘗めんなよ、せめて橋渡ししてくれホント

お願いします。

そもそもこんな深夜に来て一夏に部屋移動してもらおうとか、転校生が今からここに住む以外に理由ないじゃん。昼間にんなことしたらたちまち学園内に広まるだろうし、だからこの時間帯に来たはずなんだが……暗がりの転校生（仮）からも困惑した様子が伝わってくる。うっわ、近寄ってきた。

「笑って、いいのかなあ……」

そんなため息にも似た息を吐いて寄ってきたソイツは——美男子だった。ヨーロッパ系の金髪に白い肌、儂さと華麗さとかが同居して少女漫画だか童話だからおいでなすったタイプの奴。一夏はイケメン、こっちは美男子。なんか辛い。

しかし外国人か、そりやそうか男性IS操縦者が皆日本人とかあり得ねえかハツハツハ。やつベコイツ廊下に放置して引きこもりてえ。セシリアさん除いたら片手程度しか未だに外国人さんと話したことねえんだぞ。意思疎通に不安しかねえよ。

「ええーと、はじめまして。僕はシャルル・デュノア。シャルルって呼んでくれると嬉しいかな」

「……ああ、俺は出路桐也。桐也でもでっちーでも好きに呼んでくれ。なんというか、細かい自己紹介は置いて、まあ入れよ」

放置、するわけにはいかないだけどき。生憎、これからのルームメイトにそんなことする度胸も人の悪さも持ち合わせてない。人の良さそうな雰囲気もある、てか苦笑してるけど山田先生にキレるか泣くかくらいいいと思う。

「怒ってはないけど、話しかけるタイミングを伺ってたら忘れられるとは思わなかったよ……」

「やったな、なかなか先生に存在を忘れられるなんて体験できねえぜ？」

「そうだろうね、頻繁にあったら怖いよ……えっと、こういうの不幸中の幸いっていうんだっけ？」

「なんか、ちげえ。踏んだり蹴ったりじゃねえの？」

——ここから冒頭へと繋がる。

「その、僕もベッドは奥がいいなあつて」

「素直に初めからそう言おうか、俺を特殊性癖扱いすんなや」

「ご、ごめん」

シャルルを引きずり出そうとしたものの掴んだ腕は巧みに引き抜かれた。ここに来てからそれなりに鍛えてるけど、力で負けたってやり技って負けたって感じた。身体はやけに軽い感じがあったし、筋量では勝ってそうなんだが。拳を握って開いて感覚を確かめる、が別に意味はないしなんとなく。正直眠くて欠伸が止まらない。

「それでベッドは取り敢えずデユッチーが奥な、しゃあねえ譲ってやらあ」

「ありがとう、でも僕の呼び方がどんどん短縮されてない？」

「知らん、デッチーは眠くないのか？ 時差ボケ？」

「んー、時差ボケかも。確かに眠くな……いやでッチーは君の渾名でしよ」

「桐也、シャルルあわせてデッチーコンビ結成か」

「わあお、初代でッチーの瞼が落ちそうだ……こんな時間にごめんね、寝よつか」

「そうしてもらえると助かる」

これから同じ部屋で過ごすに当たっての認識の差のすり合わせとかは早めに済ませたい。けど駄目だわ、夢の国から似非ラット野郎が俺の意識を微睡みに引っ張って行くんだ。ああ、こりや我ながら支離滅裂だ。あ、尻が滅裂とかなんか燃えね？

明日からよろしくの挨拶も置き去りに俺はベッドへ身投げした。

因みに一夏の布団はお日様と洗剤の香りしかしなかった。そういやアイツ掃除洗濯とか小まめにやってたし今日も干してたか……ふっ、シャルル・デユノアの一人負けザマア。

▽▽▽▽

翌朝、シャルルはキッチンと朝には起きてたらしい。起きてても月曜日

まで外に出ることは出来んし部屋のなかで暇を潰すくらいしか出来ないが、なにはともあれ起きてたらしい。

らしいらしいと言うのも俺は昼前まで寝てたから実際のところを見てない。俺はたった今起きて、空腹に苛まれているシャルルとおはようしたばかり。昨日も転校でドタバタしてて夕食も満足に食べてなかったとか。

「勝手に冷蔵庫でも漁るときやよかったのに」

「礼儀知らず、と思われたくないから我慢したよ！」

「ちよつとは漁ることも考えたのな」

お腹を押さえつつサムズアップする姿はなかなか愉快だ。というか早朝前に寝たくせによく朝に起きれるもんだ……あ、時差ボケの影響か。さて、飯は別に冷蔵庫のもんで済ましてもいいが普通に学食で食いたい気分。リーズナブルで上手いんだよ。

「じゃ、飯に行くか」

「僕、月曜日まで外に出れないんだけど」

「知ってた、適当な定食でいいか？　IS学園の食堂の飯は美味いと保証するが」

「え、食堂から二人分も運んでたらさすがに変じゃないかな……？」

「別に高校生男児が二人前食ったってよく食べる程度にしか思われねえよ」

「……あ、そっか。じゃあお願いしようかな」

「任された」

そんな会話を終え、学食に行くがさすが休日。昼前と言うことも相まって人が少ないのなんの。

ちらほらと見える他の学生も他人ばっかだな。上級生に顔も知らぬ外クラスの生徒たち。まばらに送られる好奇の視線にはそろそろ慣れてきたもので適当に和食定食Bを二人前食券購入。洋食のハンバーグも気になるものの寝起きにはちと重い、てか何故か昼までつくってくれるモーニングセットでもよかったか。チラチラ寄せられる視線に意識が逸れて……全く女子の視線に慣れてねえじゃん。

やっぱり美人に見られると多少はキンチョーするわ。なので肩を

トントンと叩くのはやめてほしい。ニンマリ笑って……なんでこの学園には社交力高い奴が多いのか、才女の集まりだからか？ やけに距離感を詰めてくる感じは数歩引きそうになる。

「君ってば二人前も食べるの？」

「そーなんすよ、いやー食べ盛りだからなあ、俺が二人前食べてもおかしいことも怪しいこともないツスよー」

「へえ、じゃあ食堂で食べればいいのにどうして部屋に向かっているのかしら？」

「やー、男一人で女のなか一人とかキンチョーしますんで。それはもう野生のゴリラに囲まれて飯食う並みに」

「例えもうちよつと他になかったの……？ うん、まあいいわ。引き留めてごめんさいね」

なんて一回見知らぬ先輩に話し掛けられた以外にはアクシデントも特になく部屋に戻れた。ちよつと見透かしたような顔にこいつ適当しか言っていないなーと表情で語ってくる人だったがどうでもいいわ。とにかく俺はミツシヨンコンプリートしたんだ。

なので俺は悪くない、例え対面にいるシャルルが昼食に不満を持って俺を睨んでいても俺は悪くない。別に味が悪いわけでもシャルルが食えないものがあつたわけでもない。

「なんでお昼のチョイスがご飯とお味噌汁、ひじき、焼き魚に納豆、おひたしなのさ……」

「正直すまん、納豆って苦手だったか？」

「そこじゃないよ！ 全部ハシで食べるものな上に食べにくさのハドルが高いものばかりなことだよ！ ……うう、ハシから溢れて食べにくいよ」

日本語は完璧でも箸使いはまだまだだったようだ。焼き魚を見るも無惨な姿に変身させ、未だにひじきを口に運べず悪戦苦闘してる様は何気に微笑ましい。ショートカットほどの男にしてはやや長い髪の毛に納豆がついて叫んでる様子は笑うしかない。決して美少年ザマアとか思っていない。あれ、これショートカットだったっけ？

「ブハッハッハ！」

「ギャー!? わ、笑い事じゃないよ!」

「納豆は臭くて食べないと思ってたのに食うのなあ、そのわりには箸使いは下手つぴで髪の毛が、クツ……笑い止まんねえ」

「笑ってないで助けてよっ!」

「助けるもなにも、飯食ってからシャワー浴びろよ」

「あー、そつか入っていいんだ。それしかないかあ……うわあ、見てよ。鼻先に髪の毛が来て納豆の臭いが」

「ブフッ!」

すげえ絵面だ。貴公子って言葉がお似合いのシャルルが箸に負けて、髪の毛が揺れる度に鼻を掠める納豆の臭いに顔をしかめてる。それでも納豆を普通に食ってるあたり日本の食事への順応性は高そうよな。箸もそのうち慣れるだろ。

ただ俺はシャルルの完食なんて待たず、既に和食定食は食いきってる。物足りなくて冷蔵庫から取ってきたデザートを食べってるけど。プリンいと美味なり。プッチンのやつは正直あんまりなんだが学園で売ってるやつ滅茶苦茶好みなんだよな。その分、クラス対抗戦のデザートフリーパスが惜しまれる。

「なんだ、ジツと見てもプリンはこれしかねえぞ。デザート欲しけりや杏仁豆腐と寒天ならあるから好きな方を食え」

「いや、桐也さ。手に持つてるものが何か言ってみてよ」

「プリン」

「そっちじゃない」

「スプーン」

「……………スプーンあるなら貸してよッ!」

「おお!」

手間取ってる姿が面白くてスプーン貸すとか思いつかなかったわ。机から身を乗り出してフカーッ! と怒りを露にしているシャルルを適当に取ってきたスプーンと共に押し返した納豆くつき。

山田先生に放置された件は怒らなかつたくせにスプーンの存在を忘れてたことで怒られるのは些か理不尽さを感じるが同年代だからこそか。

その後スプーンでただ一品を残し完食したシャルル。さて、スプーンでどうやって焼き魚を食べるのかとても気になるところだ。

「えっと、へ、Hey! でっちー! ナイフとフォークをおくれよ!」

「H A H A H A、急にアメリカンになられてもナイフはさすがにねえよ。ここはジャパンだ」

「だよね……どうやら僕はISについて学ぶ前にハシの使い方をマスターしないといけないようだね」

「おま、織斑センセに殺られんぞ」「イントネーションがなんか怖い」

その後、なんかもう辛うじて魚と呼べるそれを骨と身に俺が分けてシャルルがスプーンで食べた。そうか、小さい子供を持つ母親は、こうやって子供が魚を形容しがたい十二かにしないように事前に身と骨を分けていてくれたのか。母親なあ、もう会えないんだっけか。んー、気合い出せばなんとかなんねえかな……なんねえか、場所も知らねえし怒られて終わりだわ。

「……どうかした?」

「ん、ああ、なんでもねえよ。夕食のメニューに思い馳せてた。うどんでもいいか?」

「またそんな掴みにくそうな……ふう、ごちそうさま」

「あいよ、じゃあ食堂に返してくるわ。その間に納豆の臭い取っとけ」「そうするよ……タオルタオルっと」

お膳を返しにいつてる間にシャワーを浴びたシャルルはどこか満足げだった。納豆の臭いが取れたことにそこまで喜ぶかと思っただがそうじゃないよとのこと。

なんでもフランスにいた頃はこんな気紛れがてらに風呂に入るってことは滅多になかったらしい。

「フランスは水道代が高いせいでお風呂は手短に済ませるようによく言われてたんだ。その点、日本はお風呂が文化になるくらいだから新鮮だよ」

「あー、そういうことな。ほい、じゃあ風呂というかシャワー上がりの

牛乳。残念ながら瓶はないがな」

「ありがとう！」

シャルルは両手でパックの牛乳を持ち、あ、片手に持ち直して牛乳をぐびぐびと飲む。ふむ、そういうえば文化の違いか。何気にここに来る前とかも思春期らしい話題の一環としてフランスも話に上がったことがあったな。せつかくなんで現地人に聞いてみつか。

「あ、そういうや文化の違いって点では是非フランス人のデュノアっちにこれは聞いてみたかったんだ」

「え、なにかな。なんでも聞いてよ」

「自動販売機でコンドーム売ってるってマジ？」

「ブッフウ!？」

「きったねえ!？」

牛乳シャワー from シャルルを浴びた。普通に汚いし何すんだこの野郎という心境、むしろ口から出る寸でのところまでいったが喉元で止まった。

だってまだ噎せているシャルルは片手を当てた口から未だにボタボタと牛乳溢してるし、そんな惨状ながらも片方の手で謝罪のジェスチャー送ってるんだもん。

いや、もうそこまでの大惨事なら謝る前にそれなんとかしろよ。汚いというかいつそ可哀想なくらいだぞ。適当にクローゼットからタオルを取り出し、適当に自分を拭いてからシャルルに投げつける。

「ゲツホゲツホゴツフウ……はあはあ、文化の違いって言うから真面目な話題だと思ったのに、まさかコンドームの話だなんて」

「いやいやいや、男子高校生がそんな真面目な話するわけねえだろ。むしろお土産にコンドームねえの?」

「ないよ！　なんでお土産にそんなもの買ってこなくちやいけないのさ!？」

牛乳を拭ききったタオルを投げ返された、牛乳くっせ。シャルルはあんましこういう話題に耐性ないのかそうなのか、一夏はそもそもあんまし興味なさそうだしつまんねえな！。思春期男子もつと性について語ろうぜ、下世話に行こうぜ。

「……まあ、あるんだけどさ」

「え、お土産？」

「自動販売機だよっ！ でも日本の自動販売機も凄いよね、オデンやラーメンも売ってるんでしょ？」

「んー、地域によるが確かにあるな」

「日本人は食に関しては譲らないよねえ」

「因みに上手く話をそらしたつもりなら俺はいつでもゴムの話題に戻るぜ？」

「戻らなくていいから」

そして翌々日の月曜日、シャルルは正式に転校生として1組に来るわけだが。その日まで一夏が俺たちの部屋に来ることはなかった。

月曜に会った一夏は真っ白だった。

『へへっ桐也、俺はやりきったぜ……？ あの散らかった……混沌の、樹海を、平地、に……』

なに言ってるのかさっぱりだった。

11. 初めましてのドロップキック

学年別個人トーナメントが近づいてきた。読んで字の如しのこの大会、7日間掛けて行われるこのトーナメントは全員が強制参加となる。各企業や国のお偉いさんが見に来るようだが、ぶっちゃけ俺の所属ってIS委員会に保留されているわけで。つまるところ自由国籍って建前の無国籍だしなあ、日本国籍返せえ。

学年毎に評価基準は異なるもののだいたい1年生は元から持っている才能という点を見られる。逆に2年生になればどれだけ成長したか、3年生が集大成を見せんじゃねえのかな詳細は忘れた。

みたいな感じで評価されるがどう考えても専用機持ちが有利になる。

「とはいえ、俺は打鉄なんだけど」

不満があるわけでもない。安定安心のスタンダード万々歳だ。それに専用機持ちっただけで好きなときにISの訓練ができるだけで、才女溢れるなかの平凡な自分には身に不相応なほど恵まれてる。今の女っただけで優遇されがちな世間で、男っただけで優遇されるとは夢にも思わなかった。

ただ、元から代表候補生という頭ひとつ抜きん出ている奴らに、環境から負けている一般生徒はどこから勝ちの目を拾えばいいのか。努力をすれば才能の差を埋めれることもあるが、その努力すら本人の意図に構わず行うことが困難なら残される手段は——やめだ止め。俺が悩むことでもないし、結論なんて俺が出せるわけねえや。別に負い目とか感じたわけではない、決してない。

「打鉄がどうかしたのか？」

ちやうど近くに来ていた一夏に独り言が拾われてた……口から出てたのか、普通に恥ずい。

「や、なんでもねえよ……というか今日は輪をかけて教室が賑やかじゃないか？」

「あー、今日からISスーツの予約が始まるらしいぞ」

あのエロスーツ、いや違った、スケベスー、違う。なんか金曜の終

わりに織斑先生がISスーツの説明してたっけか。ISは乗り手に合わせて使用を変化させていくから各々で早い段階からスタイルを確立しろとかなんとか。クラスメイトたちが開く雑誌は色とりどり、なかにはスタイル抜群の方たちがポーズング取って写ってるが……グラビア雑誌さながらだな。

俺も欲しいです、誰か譲ってくんないかね。

「ああ、あれか。俺らは買わなくていいやつな」

「もう支給されてるしな……まあ皆の反応からしてファッションみたいいに見えるけど」

「そんなもんじゃね？ 中学のときのダチが女子はオシャレと空気ですべて生きてるとか言ってたし」

「……それって食事が抜けてないか？」

「オシャレのためならば、スタイル維持のためならば切り捨てるだよ」

「女子ってわからないな」

「全くだ」

まあ、この学園に入るような才女だと身体を作ることとスタイル維持を両立してるんだろうな。ここで不健康な体型を見かけたことねえし。

周りを見て視界に女子を収めない方が難しい学園で女子が理解できないと駄弁っていれば、いつものようにHRが始まる。織斑先生が現れただけで空気が入れ替わる様はまるでパブプロフの犬、もちろん俺含む。

「諸君、おはよう」

「「おはようございませー」「」」

「よし、全員揃っているな——」

連絡事項は今日から本格的な実践訓練を始めるため、ISスーツを忘れた者は水着でやれと。それすらないような奴は下着でやれって中々男の子としてはテンションが密かに上がってしまう話題だった。是非とも誰か忘れてねえかな、いざそうなったら気まずいだけなんだろうけど男の子ならそう願っちゃおうね。

……一夏とかシャルルは想像しそうにねえな。なんだあの爽やかイケメンに清らかな美少年、あの二人と自分を比較すると俺がおかしく感じてしまう。集えよ煩惱まみれの思春期男子、性格&顔面コンプレックスで俺が溺死する前に早急にISの操縦くらい気合いでしてくれ。

青い空を眺めつつそんなくだらない願いを空の彼方へピピピと電波送信していると、ドツと黄色い歓声が教室の空気を震わせた。

視線を前に向けなくてもわかる、シャルルの紹介が始まったんだろう。美少年のウケはいいな、薔薇的な受けでなく男女のそれとしてのウケ。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「あの一、他には」

「以上だ。なにか気になるなら個人的に聞いてくれればいい……それよりも」

「えっ？ ボーデヴィツヒさんどこに——」

さて、シャルルの紹介も終わったようなので視線を戻——タンツ、と跳躍したかのような小気味良い音が耳に届く、と僅かに一拍置き打撃音、蛙を潰したかのような低い呻き声、ついで椅子と人が倒れるけたたましい音が響いた。

「……なんぞ？」

何故か静まり返っている教室内のせいでやけに俺の声が目立った。一通りの音の連続が終わった頃に正面に戻った視界が捉えたのは仁王立ちしている銀髪のちみっこ。黒板にシャルル以外の名前があるしたぶん転校生か。そのまま下へズラせば仰向けに椅子と倒れた一夏が視界に収まった。

目を白黒させてるであろう一夏は置いておき、もう一度視線を上げて推定転校生を確認。うん、バツチリ知らねえ顔だ。

なんか転校生多くないかここ。いやな、俺と一夏ってイレギュラーのせいだろうと予想はつくがせめてまとめて来いよ、あと鈴は二組に来たんだからウチのクラスにまとめて来るなよ。

しかしドロップキッカーもとい転校生は一瞬、ヤツテシマツタみた

いな表情がチラついたがそれも瞬く間もなく引つ込んだ。ええい、このまま行ってしまうと言わんばかりの雰囲気がある彼女は高らかに一夏に吼えた。

——なんでそんな読めるって話だが俺もよくやるから、お口のチャックが壊れちまつてる。

「私はお前をあの人の弟だと私は認めない！　それが気に入くわない！」

「は、ハア!?　いきなりなんなんだ!?　というかそれを言うのにドロップキック必要あったか!？」

「……………知らん」

一夏は転校生に挨拶代わりのドロップキックされた様子。そりや普段温厚な一夏でも混乱するし怒るだろう。

しかし、入学初日に篠ノ之さんにも蹴られてるし何かと一夏は蹴られやすそうだ。主に馬とか馬とか馬とか、無自覚にモテる奴は馬に蹴られてしまえばいい。ほら、俺がスカツとするから、やっちなまえテンコーサーもう一発ダ！

ただ、クラスメイトもフリーズしたなかでの二人きりの喧騒はすぐ終わる。

いや、ほら先生いるし。山田先生は皆と同じく停止状態だけど、もう一人のお方は振りかぶって投げた。

——空気を切る音が確かに耳に届いた。

放たれたのは出席簿、始めに着弾したのは転校生の頭。通常ならばそこで適度な痛みと引き換えに出席簿が弾かれるのだろう。がしかし、世界最強織斑センセの膂力によって放たれたソレは転校生を弾いた。弾かれた転校生は勢いよく地面に叩きつけられる。対して出席簿は止まらない、そして僅かに軌道が変化したものの速度は衰えることなく一夏の鳩尾へと突き刺さった。転けて立ち上がった一夏は再び床に沈む。ワザマエ。

「イギツ!？」

「ゲツブ!？」

「HR中だ、静かにしろ」

喧嘩両成敗、鎮圧っていう言葉が当てはまりそうなこの惨事。静かにさせるどころか鎮めてるじゃねえかってツツコミは喉で止めた。止めたんだよ、恐怖で出なかつたとかそんなことないからな。

まあ、数少ない男同士このまま放置も忍びない。そそくさと地に伏す一夏と椅子を直しに行く。意識がトんでるけど、まあ直ぐに帰ってくるだろ。シャルルも倒れた机を直してくれる。

転校生の方は織斑センセが猫を持つかのように襟首を掴んで椅子まで運んでいる、扱いはそれでいいのだろうか。

「ようこそシャルル、弱き者から淘汰される……これがIS学園だぜ」「違うよね、喧しい者が制圧されただけだよね」

「ちい、バレたか。まあ、HR中にお喋りは命知らずのバカがやることだな」

「そうだ、そして出路。お前も命知らずの仲間入りをするか？」

「……声帯が振るえて発せられた音がたまたま織斑先生の鼓膜には、所謂言葉として伝わったかもしれないが俺は一夏を座った状態に戻しに来ただけですヨ？ はい、もう座ります」

「そうかそうか、それを一般的にはお喋りというのだが……まあいい。デュノア、お前の席は名簿順でその口達者な奴の後ろだ。早急に座れ」

「はっ、はい！」

「ではHRを終わる。各人は着替えて第二グラウンドに集合、本日は二組と合同でISの模擬戦闘を行う。言うまでもないが遅れるなよ、解散！」

シャルルの案内兼ねてさつきと更衣室に移動すつかね……一夏起こさねえと自動遅刻になるな。転校生は、もう起きてる。復帰はや……いや微妙にふらついてんな。



高まる胸の鼓動は恋の予感、この苦しさは恋煩い……なんて可能性は微塵も見出せない。普通に酸欠だコレ。

酸素を求める呼吸音とついでに不足してきた低酸素が引き起こす頭痛とのデュエットで超煩わしい。全力疾走ナウ、しかし後ろから追ってくる数えるのが億劫なほどの女子生徒は全く引き離せない。さながらゾンビが美少女に変わったバイオハザード、迫力だけは保証する。

ターゲットはもちろん今話題の彼、3人目の男性IS操縦者シャルル・デュノア。ゾンビの低い呻き声の替わりに高音の黄色い歓声が絶え間なく追ってくる。そして時間経過で人数の増えるギミック。とんだクソゲーだ、更衣室への移動というよりも既に逃走がメインになっている。気持ちはわかるけどな、ただでさえ男子が珍しい環境にこの美少年。

「許さねえからな！ 絶対に！」

「俺か、俺が悪いのか!？」

「一夏を起こしてたからこんだけの人数に追われてんだろ！ だから悪くねえけど悪い！ くっそ、シャルル置いてけぼいのか?」

「やめて!? さすがにあの人数は捌ききれないよ！」

一夏は多少発汗が見えるもののまだ余裕、線の細いシャルルも見た目かなり余裕。残り一名、言わずもながな俺、ハイ全力で息切れが激しくて死にそう！ おつきく開いた口を閉じることなく血中のヘモちゃんに愛しの酸素さんを求めてやまない。

「ハッ、ハッハッ……シャルル、贄になってくんね?」

「限界の近そうな桐也には悪いけど、さすがに織斑先生の授業に遅刻は嫌だからね……!」

「だよなあ！」

「……いや、でも桐也。よくよく考えたらこれって追われているのシャルルだけで俺たちは関係なくないか? 俺たちは別に走らなくても」

「……お」

「ちよつと!?! ここで見捨てるとかなしだからね!?! 僕、更衣室の場所知らないんだから!」

シャルルが既にHPがレッドゾーンの俺に肘打ちしつつ、見捨ててほしいのか見捨ててほしくないのか判別しにくい主張をしてくる。

呼吸の邪魔をされて何気に響くので止めてほしい。繰り返す言うが酸素が足りねえんだよ。筋肉にや乳酸がたまって今にも挫けそう、心と膝がな!

「お昼一品奢るから頑張つて!」

「よっしゃ! 着いてこい!」

「うわ、マジで走る速度上がったぞ。見事な手のひら返しだなあ」

「手首のスナップは効く方だからな、二転三転は余裕だ」

「うっわあ……」

食欲にまみれた友情の欠片も感じさせない頑張りによって切り抜けた。ふくらはぎが攣りそうなことに加え大腿がピクピクと痙攣してるのはきつと気のせいではない。けど昼飯トモダチのためなら仕方ないよな、俺頑張つた。

だが、こうして全力で走ると持久力のなさが浮き彫りになるなあ。ガタイのいい一夏はともかく、線の細いシャルルですら息切れもしていない。基礎トレの有無の差が如実に現れた……こんなことで、こんなことで自覚したくなかった。

「桐也、いつまでもへばつてると遅れるぞ?」

「僕はもう着替え終わつたよ! ほら、立って……わあ、生まれたての小鹿みたいに足震えてる」

「授業前に既にギブアップ寸前じゃないか」

「うっせえ……」

「えっと、トレーニングしよ?」

「授業だけじゃ足りねえか……」

いや、まあ以前に罰として走つたときに自覚してたけどな? 何回も追い抜かれたし、やらないといけないとは思ってたけど実際にやるかは別問題だったんだ。つまり特になにもやってない。

未だに余裕でだいたいのクラスメイトに体育では体力が劣ってる。そのときは頑張ろうと思うがそのときだけで終わってしまう、最低限以外の努力をするって行動までに一番エネルギー使う。

やるべきことはともかく、やった方がいいことは基本的にやらないうっつー習慣づいた悪癖、怠け癖は早々抜けないことが判明した。

「僕が適当にメニュー組んであげよっか？」

「三日で終わらせてやるよ」

「それ三日坊主ってやつじゃん……」

「ハハッ、桐也は授業以外あんまり運動しないしな……っと。相変わらずISスーツって着にくいな、引つ掛かる」

基本的にスーツにはある程度の露出があつて動きやすさを考慮されてるらしいんだけどな。俺の場合はデータの収集も含めてフルスキン、出ているのは首から上と手足程度だ。一夏のISスーツと違って全身覆うダイビングスーツ型で、ちと関節部に突っかかりがあつて動きにくさは確かにある。

あと割りと一夏はスーツを着るとき頻繁にチ○コが引つ掛かるといふ。○ンコが引つ掛かると言う、チン○が。

あと関係ないけど疲れてるとなんかブレーキ効かねえよな、言い訳終わり。

「毎度毎度チンコ引つ掛かる言いやがって！ そんなに俺のはマグナムだぜ！ って言いたいのか！」

「チンコとは明言してないしマグナムじゃなくても普通に引つ掛かるだろー！」

「えー……えっと、普通に着にくいんじゃないかな？ 元々女性用に設計されたスーツだし、一応男用に作られたっていつても着方までは考慮されてなかったのかも」

「おお、そういうことか」

「いいや一夏のチンコが悪」

「桐也はちよつと黙ろうか」

「なんだ、シャルルも引つ掛か」

「黙ろうか」

「ウィッス」

笑顔って怖いな。

しかし、そう言われりやスーツの設計も今までは男が着ることなんて考えてるはずねえか。

まあ学園指定のスーツはスク水やレオタードと見た目は変わらん

し、完全に女性にししか使えなかったISに伴ったスーツも女性のための仕様なのは当たり前だよな。一夏が毎回チンコ引つ掛かるのは着るのが下手だけな気がするが、チャックがあれば引つ掛かったとき面白かったのにな。

シャルルは一夏と同じ型のISスーツと同じで上下に別れている臍出しルック。動きやすそうなんだが冬は腹が冷えそうだ、あと太ったときに誤魔化しが効かないシビア設計。

「シャルルと一夏のスーツはオーダーメイドか？」

「俺のはイングリッド社のストレートアームモデル」

「僕のはオリジナルだよ、ベースはあるんだけど殆ど僕に合わせてられたフルオーダー品」

「ほーん、ベースの会社は？」

「えつと……あ、時間がギリギリだよ！」

「うおつ、遅刻したら千冬姉にしばかれる！ 桐也、シャルル急ぐぞ！」

そこまで気になるわけでもないが社名くらいちやちやつと言えはよからうに、つていう小さい疑問は一夏の声に掻き消され腕を引かれる。シャルルと俺の腕を引いたようで割りと力強かった、俺の足は限界が来てきた。つまり引かれた勢いに対応できなかった。

結果、見事に足がもつれて盛大に転けた——許さねえからな！

授業には間に合った。あまりにもギリギリ過ぎたせいで織斑センセに目線で注意されたがタマヒョンしたこと以外は問題なし。

並んだ列の隣には鈴がいて一夏とコソコソ話してる。俺はシャルルと空を眺めていた。視線を下ろせば当実習担当教師、織斑センセが目に入っちゃうからな……ふたつの快音が響く。空が澄んでるナー。

「では、本日から格闘および射撃に関する実践訓練を始める！」



「ラファール・リヴァイヴは第二世代開発の最後期に生産され始めた機体です。スペックのみでみれば初期第三世代にも勝らずとも劣らず、日本の打鉄と並び高い安定性を誇り、操縦の簡易性から操縦者を選ばないことも特筆する点です。また打鉄が防御に重点を置かれているのに対してラファールは高い汎用性、それを裏付ける豊富な後付武装が特徴です。そのことにより多様性役割切り替えを可能としており装備にあつた戦術をとることが可能とされています」

「そこまででいいぞ、終わった」

織斑センセの抜擢によりシャルルがラファールの説明していたのも束の間。

実戦訓練の見学のため駆り出されていたブルー・ティアーズと甲龍が、山田先生が駆るラファールによつて撃墜されたことによりキリよく終わりとなった。

ああ、山田先生が現役の代表候補生二名を軽々と落とした。それも訓練機のラファールで専用機を、ちよつと意味がわかんねえ。

ふたりのコンビネーションは即席にしては可もなく不可もなく、セオリー通りというかなんというか鈴が前衛でセシリアさんが後衛。そう戦おうと《していた》。していた、出来てなかった。

距離を詰めようとする甲龍には手堅く弾幕を張り、時たま距離を詰めさせたかと思えば、ただ誘い込んだだけ。ゼロ距離ショットガンなどなかなかエゲつなかった。

ならばセシリアさんは距離を保ったまま自身の間合いで十全に戦えたかと問われればそんなこともなかった。山田先生が空いた手でセシリアさんを正確に撃つことによりビット操作に集中させず。

最後にはもの見事に回避を誘導された二人まとめて、グレネードによつて火の花を空に咲かせた。それはもう汚ねえ花火だと思わず眩きたくなるほど見事に爆発していた。

元代表候補生という山田先生の巧みな戦闘技術に機体操作。生徒から親しみを込め渾名をつけられ、普段のおつちよこちよいな姿を見せるほのぼの系揺れる山田おっぱ間違つた、先生からは想像のつかない一面を見せられた。

「……あ、だから敢えて実力の高さが周知されてるセシリアさんと鈴を山田先生と戦わせたのか」

「ん、どういうこと?」

「いや、山田先生って普段はちと抜けてるところあるからな。シャルル転校初日に忘れたみたいにな」

「あー、そういうことかあ」

「そういうことだ」

織斑先生の意図としては、山田先生へ生徒の距離感が近すぎるとうか敬うべきところは敬わせるために見せた面もあるんだろう。

だからこそ専用機持ち、そのなかでも代表候補生として、実力が周知のものとなってるセシリアさんたちに白羽の矢をブツ刺した……ってあたりじゃねえのかな。実際クラスの大半は目を見開いてるし山田先生の評価も何かしら変化があつたに違いない。

「桐也ってそういうところは察しいんだね」

「確認もない想像だけだな、てか客観的に見たらなんとなく察しがつくだろう」

「俺はわからなかったぞ!」

「一夏は、うん……そうだな、お前は人への気遣いの方で察しいしいいんじやねえかな」

「おい、その生温かい視線をやめろ」

抗議の言葉と視線を無視しつつ一夏を生温かい目で見てみると授業指示が飛ばされる。

「次は専用機持ちをグループリーダーとして訓練を行う。適宜、キチンと分かれて訓練を行え」

「機体は打鉄とラファール、早い者勝ちですよー」

見学も終わり本格的に始まった実習なのだが主にグループの比率がおかしい。男三人にほとんど生徒が集まり他が閑古鳥が鳴きそうな状態だ。具体的には一夏とシャルルのところは飽和状態だ。間違はなく授業が回らねえよ、別れるよ。

「シャルル、助けてくれ!」

「僕も大変だよ!? 桐也、助けて!」

「じゃあ始めつか、今日は歩行からだつたか。一番戸惑うのはISが手足のように動くこと、それに反して元の自分の手足より当然四肢はISの装甲分長い。だから感覚的に齟齬が生じる」

「ほっほー、それをどうにかするコツとは」

「慣れてください」

「丸投げ!？」

いや、だって知らんし。ブーイングされても困る、正直歩行とか何を教えろと言うのか。

んな風に悩んでると声を掛けられた。振り向けば見覚えの新しい顔。

「歩くことから始めるのならそう意識することはない、むしろ歩行でその感覚の齟齬を把握するくらいのもつもりでやればいい。実際に慣れが一番だ」

「あ、テンコーサーじゃん」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「これはどうも、俺は出路桐也だ」

「知っている、有名人だからな」

ラウラ・ボー、ボーデ……ドイツっぽいな。

意識しないままに打鉄が彼女の搭乗する機体情報をネットワークから拾い上げてくる。

シュヴァルツエア・レーゲン、和名「黒い雨」。ドイツ製の近接格闘から遠距離射撃をこなす万能型の第三世代。

第三世代の代名詞とも言える特殊兵装はAIC、Active・Inertial・Cancellation。PICの応用による慣性停止を利用し物理攻撃に対しては絶対的な防御を誇るがエネルギー系統の攻撃には弱い。また多数対一などの集中しにくい状況では十全に働かないのが欠点。

……情報過多じゃなからうか? いくらISは基本的にスペック公開されてるとは言え丸裸過ぎるだろ。相棒よ、どこで情報拾ってきた、というかISが何で調べたか調べるにはどうすればいいんだこれ。

「なんだ、ジロジロと見て」

「いや、かっけえ専用機だなど思っ」

「出路くんのエツチィ！」

「ジロジロ舐め回すように見るなんて変態！」

「スケベー！」

「でっちー改めえっちーだあ！」

「思って……思って、見てたんだ」

クツソ、後ろのクラスメイトがうるせえ！　なにより今朝にIS
スーツってエロいとか考えてたから変に弁明できねえ！

完全に自分で自分の首絞めた。思わず直視出来なくなっただけ目を逸
らしてしまう。

「そ、そうか。い、いや、我らがドイツの誇る機体だ。そう言われて悪
い気はしないぞ？」

「でっちー、転校生にフォローされるの巻」

「お願い、主に精神的に死なないで出路くん！」

「あんたが今ここで有罪になったら、転校生のフォローはどうなっ
ちやうの？」

「弁明の機会ははまだ残ってる！　ここを凌げば、司法書士にもって
けるんだから！」

「二次回、でっちー死す！」

心が、折れそうだ。

「なんでこっちに？」

「教官からの指示だ。これ以上グループを別けるのも手間だ、お前は
出路のところで一緒に教えてこいと言われてな」

「はーん」

彼女が指差す方を見れば織斑先生が男子残り二名のところへ集
まった女子を、他の専用機持ちのところへ再分配している。

後ろのグループメンバーが苦笑してるあたりこの展開を予想して
たんだらうな。

「うん、あと織斑くんやデユノアくんの話聞けるかなって、ね？」

賢いと言うか小賢しいというか。取り敢えず『ね？』で小首傾げる

のはあざといと思うんだが。狙ってるってわかってても男の子はそう言うのに弱いんだよチクショウ。

転校生が持つてきたラファールにも適当な子に乗ってもらい、ようやくではあるが実習を開始する。初めてに近い搭乗のせいでふらつく子もいるが大方自由に動いている。

あとは疑問点や動きにくい点を質問してもらい、俺が一日の長程度のレベルで適度にアドバイス。そして隣の転校生、もといらウラさんがわかりやすく補足。もしかしなくても俺いらないよな？

「降りるときにはしやがんで降りろ、次の者が乗れなくなるぞ……あっちのようにな」

ラウラさんが顎で指すのは再び一夏のグループ。

「あー!? 篠ノ之さんが織斑くんにお姫様抱っこされてる!? ズルい！」

「なんて羨ましいイベント! もういつそ出路くんがいいや! お問い合わせー!」

「おいコラ言い方には気を付けろ、俺が泣くぞ」

「ケチい! ならボーデヴィツヒさんお願い!」

「私か!？」

織斑先生によって鎮圧されたのは割愛。

「てかこれボーデビツヒさんが全部指示出せるじゃん、俺の必要性なくね?」

「私よりお前の方が気兼ねなく皆が尋ねられるだろう……あと、ひとつ訂正だが私はボーデヴィツヒだ」

「ボーデビツヒ」

「ボーデヴィツヒ」

「ボーデビツヒ」

「……ラウラと呼べ」

「諦めんなよ! お米食べる!」

「ならヴィの発音を練習してこい」

「いきいきと輝け! ヴィヴ・ラ・フランス!」

「言えるではないか!」

このまま特にイベントもなにもなく実習は終わった。

一夏が箒さんお姫様抱っこしてる青春イベントなんぞ目の端に映ったりなんてしてねえわ。転んだ子を起こすのに片膝ついたシャルルが王子様オーラ出してたのとか知らねえわ。知らねえったら知らねえんだ。

ただ、結論からいうとラウラ・ボーデヴィツヒさんは結構楽しい性格をしていた。素面はかなりクールだが感情の発露が割りと素直らしい、突けば何かしら反応が返ってきた。ハハハ、面白れえ。

12. 面倒積もり

昼飯、シャルルに奢ってもらった一品を満喫しながら完食。この生徒、つまり女子から見ればそこそこ多い量、ただし男子高校生的には許容範囲内である量を食べきり一息つく。

一夏は箒さんに誘われ屋上で昼食を取っている。例によって一夏と一緒にどうだと誘われたが断った。馬に蹴られる気もなければ、折角の奢りを購買で済ませる気もなかった。

一緒に誘われた鈴は目線を一夏に向けたまま、貸し一つとナニかサインを箒さんに飛ばしていた。いやー、命短し恋せよ乙女って感じだな。短命なのは青春なのだが。

「桐也ー！ 外の景色見てないで助けてよ！」

「シャルル君って髪の毛伸ばしても似合いそうだよね！」

「え、えっ……そ、そうかな？」

「王子さまって感じで！」

「……あー、そっちかあ。つていやいや！ 男の子は髪の毛伸ばして似合いそうって言われてもそんなに嬉しくないから！」

クツソ、美少年爆ぜねえかなあ。別に冷静に考えれば女子に囲まれて質問攻めされるってそこまで羨ましくもないんだがそれはそれだ。なんか腹立つのでもげてほしい、チンコとか。打鉄で気づかれないように出来ねえかな……チツ、無理か。

「桐也さん、デユノアさんが助けを求めていますわよ？」

「ん……う？ ああ、セシリアさんに鈴じやん。ヨッス、また二人してどうしたんだ？」

専用機持ち同士で集まることは珍しくもないがこの二人だけっていうのはあんまり見ない組み合わせだ。

「やつほ、いやあ山田先生に盛大に負けちゃったから反省会してたのよ」

「……出した結論が山田先生より強くなってブツ飛ばすというのは反省したことになるのでしょうか？」

「桐也たーすーけーてー！」

なーんも聞こえないナア。

「なるなる！ やー、千冬さんはともかく学園の教師ちよつと舐めてたわー。でもそれがいい！ 高い壁が多い方が燃える！」

「といった感じでして、まあ反省会というかお互いの感想を交換した程度でしたわ……桐也さんは見てて何か感想は？」

「軽い意見交換って感じか。そうだなあ」

次こそ勝つとガッツポーズ掲げてテンションも鰻登りで目に見えて燃えている鈴はともかく、セシリアさんの方も自身の間合いで十全に戦えなかったことはプライドの琴線にポロロンと触れたらしい。言葉のニュアンスは落ち着いてるが垂れ目がつり目気味な角度に上がってることから容易にわかる。そうでないといと偶々出会った俺にまで見てた感想など聞かないだろう。

「山田先生が上手いんだろうが二人に自分の戦い方まで持っていかせてなかった。そのことに焦れてきたあたりで隙を作って誘い込む、動きを誘導する戦法にカッチリ嵌まったことが素人目でもわかったな」

「それに見事に引つ掛かってあたしはショットガンの餌食にいいい」「ビット操作に集中できたと思ったら弾幕を浴びましたわ……やはりそうですか。わたくしも思い返せば心当たりしかないのですが、見事に術中に嵌まりました」

奇っ怪なオブジェクトのように身体をねじって捻る鈴と珍しく落ち込む様子のセシリアさんは見てて楽しいが、代表候補生的には新しい課題というか浮き彫りになった課題って感じが。

けど織斑センセ曰く、まだまだ全員ヒヨコ未満らしいので裏を返せばそれだけ伸び代があるってことだ。山田先生を舐めるわけでもないがこの二人のバイタリティからして勝てる日は近からずも遠からずなんじやねえかな。

去っていく二人に手を振り再び外を眺める。別に隣に男らしくドカッと座って猫みたいに息を荒げてるシャルルと眼を合わせたくないわけではない。

なんか机をバンバン叩いて何か主張してるが俺にはきつと関係な

い。誰かの指が顔に食い込んで首の向きを窓から反転させようとしてる気がするが、首の筋肉を総動員し何処か自分のちっぽけさを感じさせる壮大な青空を視界から外さない。

「こっち向けーッ！」

いい加減、首も疲れてきたので諦めて振り向くとシャルルがいた。知ってた。

散々弄られたのか髪の毛はボブの三つ編みにされている。なまじ綺麗な顔してやがるからモデル雑誌に載っていても違和感ないレベルだ。

「……あ、シャルルじゃん。奇遇ダナ？」

「奇遇も偶然もないよ！ 何回も助け呼んだのに無視して！」

「髪型似合ってるぞ！」

「話逸らしたね」

「空が青いな」

「逸らし方が雑すぎるよー！」

未だに顔に添えられている手を振りほどこうにも指先がミチミチと食い込んでる。細腕のどこにそんな力が秘められているのか、一向に握力が落ちることなく顔をロックされる。

「離せばわかる、離せ」

「それ言った人の末路は知ってるよね？」

「獅子奮闘、撃たれる弾丸を爪先で弾きあげた教壇を盾に不意討ちに対応。鉄砲の弾は躲し時には叩き落とし、最後には九五式重戦車の凶弾に無念にもだったか」

「待って、僕の知ってる人間と歴史とかかけ離れてるだけじゃないか！」
話題に集中したシャルルの腹をつつく。咄嗟に手を離し立ち上がるシャルルの奇声に思わず、にへらつと嗤ってしまふ。

「……なにさ」

「いんやあー、なんでもないですよー？」

拘束から抜けるもジトツとした視線からは抜け出せない。如何にも怒ってますと分かりやすいくらいに分かりやすいサインが飛ばされている。だが、面倒くさいのでそのサインは着信拒否。既に面倒事

は谷より深い穴窪みに山より高く積もってるんだってのにこれ以上増やしてたまるかっての。

「日本人って場の空気を読むのが上手いって聞いてたけど桐也は意に介さずって感じだよね」

「親譲り親譲り、おっと親の顔が見てみたい？ 残念、保護プログラムで写真すら残ってねえ！」

「……………」

「なんか言えよ、悲しくなるだろ」

小粋なジョークを飛ばすと何故かシャルルが沈痛な面持ちで顔を覆った。そういや前にクラスの様子勉強マスター岸里ちゃんに言ったときにも似た反応されたな。話題が話題なもんでブラックジョークというか自虐ネタ過ぎるかと思っただったが。

同じ境遇であろうシャルルならセーフかと思っただがこのネタはアウトか、むしろ境遇の同じ者として気遣いが足りなかったか。

「反応に困るよ…………」

「男性IS操縦者同士のネタとして通るかと思っただが配慮が足りなかったみたいだ、すまん」

「ううん、僕の方こそごめんね」

「……………なにがだ？ シャルルが謝ることあったか？」

「あつ、いやほら、変に拗ねちゃって！ さすがにあの人数だと桐也が仲裁に来てもどうしようもなかったよね！」

「ああ、そりや気にしてない。気にしてないからスルーしてたし」

「おかしいな、謝罪を撤回したくなっちゃったよ」

ふむ、極めてどうでもいいけどシャルルと出会って数日。何気に会話でかなり細かいながらも齟齬が出たのは今回が初めてだ。俺の性格はこんなんだし日本人とかいうよく分からないアドバンテージを埋めるほど、シャルルが空気や意図を読み取ってたからということに他ならない。親友とか心の友とかそういう間柄なら無意識に出来るんだがシャルルとは——所詮数日の付き合いだしな。お互い知らないことだらけな訳で。だからこそ、普通なら流す食い違いが引っかけた。

何なんだろうか、ここに来るまでは言葉の弾丸を好き勝手に撃ち合ってるような環境だったからか噛み合いすぎるシャルルとの会話は大人小なり気を使われてるように感じる。

なのでもっと素で話してくれていいんだけどな。

そう言うときシャルルが僅かに気まずそうに固まった。一瞬、躊躇った顔を見せ直ぐに引込めて、また気まずそうな表情に戻して頬を掻く。

「あ、アハハ、結構素のつもりなんだけど……なんとなくで合わせるのが癖になっちゃってて」

「お前の方がよっぽど良くも悪くも日本人らしいじゃねえか。全くもって社会を上手く渡れそうな性格しやがって、箸使えないくせに」「そうならよかつたなあ……って箸使えないのは関係ないでしょ!？」

アツハツハ、なんかめんどくせえー。

▽▽▽▽

「ですが!」

「断る、二度も理由は言わんぞ」

「……はい」

木陰に潜むは、今の会話を聞かれても問題のない者だった。だからこそ存在に気づいても無視をしていたし、むしろ聞く権利という点であれば十二分にある人物であった。

ただ、このまま気づかれていないと勘違いさせたまま帰らせるのも何処か面白くない。そう考えた彼女はシニカルな笑みを顔に浮かべソイツに声を掛ける。

「一夏、盗み聞きとはいい趣味だな」

「うっげ……千冬ね、先生気づいてたのかよ。てか苗字で呼ばなくていいのか?」

「ふん、既に放課後だ。それにしても弟が盗み聞きを趣味にしているとは悲しいぞ」

「いやいや、千冬姉とラウラが話をしてて去るに去れなかったんだっ

て……アイツ、千冬姉がドイツ軍に教鞭しにいった際の生徒だったな」

ISの世界大会、第二回モンド・グロッツ。その第一回の大会で優勝した織斑千冬は決勝戦で原因不明の棄権をした。公式的には、原因不明とされている。

がしかし、その真相は唯一の家族。弟の織斑一夏が略取されたからであった。千冬の判断は反射とも言えるほどに即決であり、迷いはなかった。弟を救うために使えるものはすべて使い倒し、その際に一番巻き込まれたのがドイツ軍。軍の衛星により一夏の現在地を割り出し織斑千冬へと提供した。

そのときの借りを返すために千冬は一年間ドイツ軍のIS部隊の教官として働いていた。ラウラ・ボーデヴィツヒはそこで千冬の教鞭を受けた一人であった。

「ああ、そうだぞ。なかなか真正直で可愛い奴だ……何故かお前には跳び蹴りしたが」

「千冬姉にも何で跳び蹴りしたのかわからないのかよ」

「日本では人様の弟にいきなり蹴りを入れろと教えた覚えはないのだがな」

そして一夏が聞こえた内容は再びドイツ軍に戻ってもらえないかというお願いであった。

『日本食の方が旨いので嫌だ』という一言で一刀両断切り捨て御免とバツサリ断られていたわけなのだが。飼い犬が捨てられたかのようにならうとしたラウラの背中に蹴られた一夏が哀愁を禁じ得なかったほどだ。一方、千冬は変わらぬラウラに笑いを堪えるのに必死であった。

「いやなんだ、阿呆過ぎるほどに素直な奴だからな。私関係でお前に我慢しきれない思いがあったのかもしれない」

「とうとうとやっぱり、あの大会のことか……」

「さあな、だが言っておくがああのお事に関してはお前が責任を感じることは許さん」

自分が弱かったから、守られる立場だったから千冬に迷惑をかけ

た、かけてしまった。そう口に出そうと反論しようとした言葉は喉にまでも上がることはなかった。

視線が交差し姉の瞳がどうしようもなく怒っていると一夏に伝えてきた。そんなことを言わないでくれと言うかのように悲しげな顔をさせてしまった。

ということもなかつたが、なにより顔にめり込んだ万力の如き握力が言語としての声をあげることを強制的に中断させていた。

「イダダダデデデデ!？」

「そんな悲しいことは言うな一夏」

「わかった！ わかったから離してくれ！」

「ああ、話せばわかる。話し合おうか」

「そつちじゃないからな!? てか千冬姉わかっててやってるだろ!? ちよつと笑ってるし！」

「愚弟が余りにも愚にもつかないことを言おうとするのでな、つい」

パツと締め付けから解放された一夏はペタペタと顔面が変形していないか確認し無事であることに一息つく。

「いってえ……取り敢えず、今度向こうから来たら何が気に入らないのか聞いてみるよ」

「ふつ、お前も大概素直な奴だな。普通蹴ってきた奴なんぞ無条件に避けるものだ」

「そうかな、だとしたら千冬姉の育て方が良かったんだな。ラウラも素直みたいだし」

「……平然と小っ恥ずかしいことを言うな、馬鹿者」

「千冬姉は夕食どうするんだ？ 早いなら作つとくけど」

「はあ、構わん。どうせ遅くなるだろうからお前は友人と食堂でも食べておけ。仕事ができた」

「えっ……あー、わかった」

姉弟は並んで歩く。家族水入らずというに相応しいその光景は、ひとつのレンズに収められていた。日夜影に日向に潜む新聞部がその決定的瞬間を捉え、号外記事のために隠密に部室へと帰り——その日のその後の彼女の記憶はない。ただ、僅かに覚えているのは出席簿。

この怪奇な事件は迷宮入りし、IS学園の七不思議となるのだがこれはまた別のお話。

一夏はどうせなので桐也やシャルルを誘おうと夕食の予定をたてた。

▽▽▽▽

出路桐也はアリーナにしこたま出来たクレーターを埋めるための土を運ぶ。打鉄の盾に乗せられるだけ土を乗せ輝割れた地面の修復を行う。一零停止や瞬時加速の応用、他諸々の飛行方法を片っ端から実践してみた結果がこれだ。

普段アリーナに穴のひとつやふたつ出来た程度なら誰も気にも止めないところなのだが、局地的に何処が元の平地かわからぬほどに荒れている。その実行犯としてはこのままにしておくのも忍びない。さすがの惨状に無意識に漏れそうになった溜め息を噛み殺し、人もまばらになった場でヘラヘラしつつ凸凹を平らに直す。

「最高加速からの軌道変更はほぼほぼ難あり、というか難しかなしと……」

ちよつとこのまま打鉄で空の向こう、遙か彼方まで飛んでいきたくない。などという思春期特有の現実逃避が出来ないとわかっていても考えてしまう。いい加減に単純な飛行技術の組合せくらいはまとも出来るようになりたいと出路は考える。

——ただ、実際のところ出路桐也の技術が底辺かと言えばそういうわけでもない。確かに単純な操縦では既に少なくない生徒に劣るところもある。だが現状で専用機持ちを除いた一年生のなかに瞬時加速が行える者など数えるほどもいないだろう。出来る出来ないが極端すぎるだけなのだ。

そのことには気づいている、けど周りがどうにも優秀すぎる。周囲がどんどん出来なかったことを出来るにしていくなかで停滞しているような感覚に陥ってしまう。

非固定浮遊盾をびったんびったん叩きつけ地面をならしつつ頭を

かく。そもそもこんな考え自体が贅沢とは自覚している。

なにしろ出路は専用機を持ちいくらでも練習が出来る。座学はともかくISの実習については一般生徒の比にならないほどの練習時間を費やせる。

「……めんどくせえ」

だが出路桐也が毎日練習を行うことはない。座学が追い付けないので補習を受けるから、だけの理由ではない。単に努力といった行為に慣れてない、ただサボり癖のついたどこまでも普通の学生だった。面倒なことは極力避け、厄介事は眺めるだけで首は突っ込まない。あとは友人とバカをして生きてきた。

つまるところ、この才女溢れる学園に放り込まれてから今まで何とか頑張っていたものの、そろそろ気力も尽きかけているわけであった。

しかし、さすがにこの学園で必要最低限の努力を怠ればどうなるかもわかっている。そうならないためにも頑張らないといけないという気持ちと何かもういいやって思いがかるうじて拮抗している出路の内心。

地面の整備も程々にアリーナを後にする。こんなときは食って発散するに限るというデブに成りかねない思考を巡らせつつ寮へ向かう。振り切れない思考を重々しく感じつつも学食に思い馳せさせて——道端で三角座りしている銀髪が視界の端に引っ掛かった。件のオモシロ転校生ラウラ・ボーデヴィツヒだ。

「食事、食事……確かにジャガイモやウインナーくらいしかありませんが」

出路には何を言っているのかサツパリな訳だが。

「そんなところでどーしたよ、ラウラさん？」

「誰だ……出路か。いや、ドイツの科学は世界一だが、食事は日本がナンバーワンだと痛感していたところだ」

「え、そんなことないぞ」

「なに!? ドイツの食事も負けていないか!？」

「うんにゃ? 日本の科学が負けてないだろって。ISの開発者は日

本人だし」

「なん、だと……？ いや、しかしそこを譲ってしまえばクラリツサから聞いたドイツの美点がなくなってしまおうぞ……！」

いやドイツ頑張れよ、クラリなんとかさんも頑張れよ。

「てか質問戻すけど何してんだ？」

「……教官にドイツ軍で再び教鞭を取っていただけないか打診したところフラれてな」

教官とは誰かと束の間思考を巡らせると直ぐに思い当たった。授業中などにラウラからそう呼ばれていた人物は織斑千冬のみであり、まあ軍で教鞭を取っていても不思議でないカリスマ性というかオーラを放っていることも直ぐに思い至った一因となった。

学園に就く前は一時期ドイツ軍でISの操縦などを教えてたことに想像を交えたおおよその推測を出路は立てる。

それでラウラ・ボーデヴィツヒがドイツ軍所属とは、人は見かけによらんというか眼帯以外そういらしきがないように見える。例えばここで出路と戦えば10秒とかからず制圧できるとしても見かけは少女でしかなく、出路のなかでは今一ピンと来なかった。

それはさて置き、出路が同じお願いされても織斑千冬の立場なら断るだろう。

「そりや弟をいきなり蹴った奴に言われてもな」

「ぐふっ」

「しかも、唯一の家族。もう教師と生徒の立場でなけりや叩きおされ、いや一夏もろともやられてたか」

「う、うあああ……！」

「やっべえ、ラウラが面白いほど震えてる」

三角座りしているまま、直下地震にでも見舞われたかの如く縦揺れするラウラ。一時はドイツの冷や水とも言われていた彼女は何処へやら。

誰よりも強く気高い織斑千冬に憧れたからこそ表出する感情は常にフラットだった。しかしその後織斑千冬をよく見ていくうちに想像より遥かに感情に富んでいたことを知り、彼女本来の感情の豊か

さを意図して止めることもなく発露していくようになった。

そしてドイツ軍のオアシス（本人非公認）となった彼女。

閑話休題。そんな経緯など欠片ほども知らず知る必要も別段ない
出路はいい機会だと気になっていたことを尋ねる。

震えていたラウラがピタリと止まり露骨に目を逸らされた。

「なんで一夏蹴ったんだ、ってオイ。滅茶苦茶目え逸らすな」

「別になんだったっていいだろう、お前に言う必要もない」

「織斑一夏の友人として、アイツが蹴られた理由くらいは知っておきたい」

「……教か」

「という建前を置いておいて俺の好奇心が止まらねえ！」

「絶対に言わんからな!？」

感情論と正論を合わせたかのような台詞に一瞬ほだされそうになったラウラだったが直ぐに続く言葉を飲み込んだ。かくいう出路は出路で内心軽く冷や汗をかいていた。なんか面倒そうな事情に踏み込みかけたけどセーフ、ナイス俺！ といった様子。声音や表情から何となく感じたただだが全力で避けた、平時の彼は割りと人間性としては低め克つチキンであった。

「まあ、どうせ一夏がブラジャー掴んじやったとかそこらへんだろ」

「待て、そんな理由があつて堪る……真顔、だど？」

木枯らしが、二人の間を虚しく吹き抜けた。

13. 僕は私

俺は阿呆みたいにお金を買う、周りの女子生徒が目を見張る量で、同じ男子高校生の一夏とシャルルにも引かれる量。夜に食い過ぎると太るとか一夏に言われたがオカンじゃあるまいし聞く耳持たず食券の束を食堂のおばちゃんに渡して等価交換。夕食に錬金、多すぎて持てねえでござる。

「どれだけ食べますの」

「飯と一緒にストレスを飲み込むんだよ」

「まあ、たまにでしたら問題ないでしょうけど……一膳貸しなさい、持って差し上げますわ」

「あ、俺も持つぞ?」

「助かる」

一夏とセシリアさんの協力を得て無事にテーブルへと運ぶ。箒さんや鈴もいたのだが箒さんは自分の分で両手が塞がっていた、相変わらず食うなあ。栄養は胸にいつてるんじゃないや人を殺す視線を向けられた、鋭すぎんだろ。

鈴は両手が空いて——なんで空いてんだ? いや、頭の上に乗せられた膳が理由を物語ってつけど色々おかしいだろ。ファック、空いた手で一品拐われた。

「鈴、なんで頭に乗せてるんだ……?」

「ふふん、一夏は知らないかも知れないけど代表候補生はここも使うのよ」

「物理でか!?!」

トントンと頭を人差し指で小突く鈴、口からは俺のエビフライの尻尾が覗いてる。あり得ねえ、真偽を問うためセシリアさんに視線を向けると頷かれた……え、マジで?

「もちろん冗談ですわ」

「なんだ、イギリスでは頭にTポッド乗せて優雅にお茶会してるのかと思っただぜ」

「とんだ茶番ですわね」

「お茶だけにつてか……ん？」

肩を叩かれたので振り返れば、箸で豆を掴んでドヤツてるシャルルがいた。うん、箸使えるようになったのな、なんかコイツ習得早くないか……てか学園に来てから一番イイ笑顔してやがる。

なんとなく気に入らないので腹をつつこうとしたらヒラリと躲された、シャルルが「にへらつ」と言うに相応しい表情になった。言葉で表すなら正にしてやったりだ。たぶん俺の額には青筋が浮かんだ。

「大勝利！ ぶい！」

「そのブイサイン鼻の穴に突っ込むぞこの野郎」

「発想が小学生のソレだよ」

「ごど」

「子供心忘れないとか捨れないことをでつちーは言わないよね！」

どうしてくれようか、シャルルが的確に煽ってくるようになってきた。転校当初の綺麗なシャルルが嘘のようだ。主に生活を共にしている同室者の影響な気がしないでもないけど、つまり元凶は俺か。

拝啓、マイファザー。うちの煽り癖が同室の美少年に移ったかもしれません。煽られると貴方のことを思い出して仄かな腹立たしさと共にさほど昔でもないのに懐かしさを感じます。でも腹立たしいのは事実なので早々にやり返そうかと思えます。親父元気にしてるんかね。

「ハハッ、珍しく桐也もぐうの音も出ないって感じだな」

「腹の虫ならぐうぐう鳴くんだけだな、口の回りが悪いとか俺のアイデンティティ崩壊の危機だ」

「とか言いつつなんでイヤらしく笑ってるの？ ちよつと怖いんだけど、ねえってば」

「学食は美味いなあ」

「ねえってば」

ゆさゆさ揺するシャルルは相変わらず一夏や俺に比べ細い。力強さが無いわけでもないのだが、細い分やはり男としては弱い。昼に腹つついた感じでは筋肉はあんだけど必要最低限というか堅さより柔軟性がありそうなソレだった。なんというかさ、なんというべきか

……それだけ筋肉も脂肪もあるわけでもないのに見えないうんだよなあ。なんで見えないのか超気になる。ま、学園でそんなことあないだろうけどどうすつか。

取り敢えず——食いながら揺すられると気持ち悪くなるから止めてもらいたい。

「おえつぶ」

「えっ、ちよ、吐かないでよ!?!」

「シャルル! まず揺するのを止めろ!」

「桐也さんは桐也さんで揺すられたときくらい食べるのを一旦止めてくださいまし!」

「一品もーらい!」

「鈴、人のものを盗るのはよくないぞ……モグモグ」

「鏡見てみて言いなさいよ……」

「やんやんやと騒がしくなってきたなかで仕返しついでに手を伸ばす。力はそんなに込めなくていい、むしろ入れすぎるとマズい。軽くじゃれる程度に——シャルルの首に手をかけた。

「ちよっ、うっぐ」

「桐也——! 首はさすがに駄目だぞ!」

「あ、悪い。手元狂った」

「うう……軽くだったからいいけど首は危ないから止めてよね? 僕が揺すってたのも悪いんだけどさ」

「ホントにすまん」

「パツとシャルルの首から手を離して普通に平謝りする。まあ、噎せるほどまでマジでやったわけでもなかったのでシャルルも注意する程度で許してくれた。

「本当はもうちよっと上を狙って頭を揺するつもりだった、ほら素早く揺すれば脳震盪ワンチャンねえかなって」

「ないよ!?!」

「桐也……それ絶対に漫画とかだろ、千冬姉ならともかく普通はできないぞ」

「ハツハツハ……織斑先生なら出来るのか」

「出来るな」

割りと横からオカズがかつ浚われながらもご馳走さましたお膳を重ねて下膳する。一夏が後でノートを見せてくれと言ってきたり、オカンシャルルがちゃんと自分で取っておかないと駄目だよと注意したりしつつ寮へと向かう。相変わらず一夏はノートを取るのが下手なことについて笑いが零れた。

自室に戻ったあとはベッドにダイブ。シャルルにシャワーを先にどうぞと伝えるだけ伝え、自宅で使用していたものより遥かに高級そうなベッドに腹這いで身を沈める。

……しかし、なかったなあ。

いや筋肉とか脂肪で隠れることはあんだから見えなくても不思議じゃねえ。ただ大抵指当てて喋れば出てくるもののはずなんだが、触れば直ぐわかるはずなんだが、なかった。男特有のそれが。

——シャルルに喉仏、なかったなあ。

えー、でもない場合とかもあるっけか。けどシャルルの着替えとか一回も見たことない気がしてきたぞ。

いやIS学園がそもそもとして男装した女の入学を易々と通すのか？

………あゝあゝあああああッ！ 考えるのめんどくせえええ！ チンコあれば男だろ！

「突ッ！ 撃ッ！ 自室のシャワールーム！」

「えっ、桐、なんっ……でッ!？」

結果、シャルルがシャワールームに入って間もなくヤンキーキックで脱衣所のドア蹴り開けるに落ち着いた。

女だった、落ち着きが家出した。

家に帰りたい……あ、家ないんだったわ。イツデ!? シャルルが投

擲したコルセットが顔面を直撃して強制退室させられた。

いやはや、下着姿だったけど超眼福もうちよつと遅めに開けてれば全、じゃねえか。これ、どうすつかな。仰向けになった俺の顔に乗ったコルセットからは仄かに良い香りもするけどどうすつかな。美少年が美女になったけどどうすつかな。容量キャパオーバーも甚だしいんだよ。水ぶっかけたら男にならねえかなー、シャルル1/2みたいなの……桐也、出てもいいかな？」

扉一枚向こうから心なしいつもより女っぽい声が聞こえた、女だった。絶賛混乱が脳内の回線を全て占拠してやがる、思考がまとまらねえ。

「水浴びて男に戻ったか？」

「えっ……？」

「戯言だ、気にすんな」

ホントまとまらねえな。

▽▽▽▽

出てきたシャルルが語りだしたのは身の上話。

デュノア社の社長とその愛人の娘で、母と片田舎で慎ましくも幸せに暮らしていたが母が病気で亡くなった。

その後、間もなくしてデュノア社からの迎えがやって来て唐突にシャルルを本社へと呼び寄せた。

それでIS適性が高くてデュノア社のパイロットとして迎えられて、けど会社の経営は傾き出して……あー、なんで傾いたんだっけか？

「第三世代の開発が遅々として進まなかったんだよ、お陰で欧州連合の統合防衛計画《イグニッション・プラン》からも弾かれちゃってね」「世知辛いな、そっぴやラファールは第二世代最後発か」

ああ、そうだ。量産型の世界シェア三位を誇る会社だがそれはあくまで第二世代。

第三世代の開発がままならずこのままじゃ国からの助成金だけ

じやなくて、ついでにIS開発のライセンスも剥奪されるって話だ。一国のコア保有数は決まってるからいつまでも開発が進まない企業にコアを持たせ続ける意義がないんだろう。

それで、なんだ……迎え入れられたデユノア家の正妻からは『泥棒猫の娘が！』って言葉と共にビンタ貰って、今度は男性IS操縦者が出てきたから男装して潜入して情報を盗んでこいと言われてっつか。「今まで騙しててごめん、たぶん僕はこのあと本国に送還されてるから……今のうちに謝っておくね。本当にごめんなさい」

「……………」

なんだコイツ、なんなんだこの境遇。少女漫画の主人公でもやっつてろよ。

てか真実でも嘘でもこんなこと暴露されてどうしろってんだ。シャルルは騙してたって言うがそれでも俺はいい奴だと思ってた。多少気遣いが過ぎるが憎めない奴と感じてた。

でも、こんななんどうにも出来ねえっての。

世界に2人の男性IS操縦者、自由国籍、専用機持ち他諸々。大層な肩書きはあっても名ばかり、力もなけりや何もねえ。ただ救うために手を伸ばすくらいは出来るんだらうけど、俺と一緒に落ちるのが怖い。救えなかったときにどんな目で見られるか考えるだけで怖い。俺の境遇がどう変わるかが考えたくもないほどに怖い。考えれば考えるほどに怖いと思う。

余計なことしなけりやよかったという後悔しかねえ。

不意に、脈絡なくシャルルが柔らかに笑った。

「顔が真っ青だよ？ そんなに桐也が動揺することないのに……っつて騙してた僕が言えることじゃないかな」

「う、うっせー……てかどうなんだ、本国に帰ったら、またテストパイロットとしてやっていくのか？」

意味のない空っぽで道化な質問。誰が元通りになるなんて思うのか。IS学園に身分を偽っての転入から、未遂とはいえ男性IS操縦者から情報を盗もうとした事実。その罪は誰が背負わされるのか、考えるまでもねえだろ。経営が傾いたからと娘をスパイとして送り込

むような企業が認めるわけねえ、全部目の前のコイツが背負う羽目になるのは火を見るよりも明らか。

「……んー、それはちよつと難しいかなあ」

眉尻を下げながらも笑顔は崩さないシャルルは、笑ってられる境遇ではないはずだったのに。ここにいるのは二人でシャルルはどうしようもなく気遣いが上手い奴で、なら笑ってるのは俺のためで。

ああ、コイツが男装バレた時点で保身に走ったりハニトラ仕掛けてくるくらいの糞アマなら良かったのにふざけんな。なーんで騙してたのがバレても気遣ってくんだよ。

それに比べてずつと自分のことしか考えてねえ、誰に向けでもない不細工な言い訳ばかり探して。少しでも自分の心を楽にするための質問してる奴のだけさせえこと、みみっちいこと、ちつせえことこの上ない。なっさけねえな、おい。

堂々巡りの糞みたいな思考、余計な情報源を捨てるため視界を手のひらで覆ってシャットアウト。今のシャルルを見てると冷静に考えらんねえ。

——さて、どうするか。

▽▽▽▽

全部、洗いざらい話した。なんで男装がバレたのかっていう疑問はある。人に合わせるのは得意だったし、着替えや見られたら致命的なところは全部意識がいかないようにしてたんだけど……あー、さつきかな。身体は弄られてないからそこからボロが出ちゃったのかな。

向き合ってる彼は言葉を発しない。顔を両手で覆って天井を仰いで、時折口元が動いて見えるのは無意識なんだろうなあ。今何を考えられているかは真っ直ぐ顔を見て声の調子を聞かないとハッキリとはわからないけど、きつと先生に伝えるってのが順当で濃厚。

出路桐也っていう男の子はどれだけ突き詰めてもただの一般人だった。

織斑一夏が世界最強と謳われる織斑千冬の弟であり、幼馴染みにI

S 開発者篠ノ之東の妹がいて、現在の中国代表候補生とも幼馴染み。両親がおらず第二回モンドグロツソの際には拐われた、ザツと調べただけでこの経歴。

それに対して桐也はただ普通の一般家庭で生まれ育ち、ISと何か深く関わりがあったわけでもない。血縁や友人のなかに誰か特別な人物が紛れていたなんてこともなく、実際に会ってみても性格に少し癖があるだけの男の子。

私の話を聞いて何を考えたかは何となくわかる。たぶん、僕をどうすればいいのか。僕の今後をなんとか出来ないかっていう、短い期間にうっすら芽生えたであろう友情や極々ありふれた良心から生えた思い。それと私を庇った場合の自分の立場とかだと思う。

でもそのふたつは両立できるわけもなく、天秤に乗せるしかなくて。後ろ盾もなにもない彼がどっちに傾くかは言うまでもないし、その選択を逆恨みするつもりもない。あとは良心の呵責とかそういうのに踏ん切りをつけて僕への言葉を探してくらい、かな？

「色々考えたんだけどな……お前が女ってわかって、ちつとばかり後悔した」

「うん」

ポツリと漏れた言葉にただ僕は相槌をうつ。顔を隠した手の隙間から出てくる声音は今まで聞いたことがないほどに低い。

「お前をどうすればいいのかとかさ、どうすれば俺は安全な立ち位置を確保できるとかさあ」

「うん」

「でも友人をこのまま見捨てることを選ぶこともしたくなくて、けど俺は自分の身が可愛くて答えが出せなくなってるな」

「うん」

「けどよくよく考えたら俺って複雑なこと考えるには向いてないバカだった」

「うん……うん？」

「そもそも俺の立場って現状で既にフワツフワじゃねえか！ 国籍すらねえんだぞ!？」

何故か、全く予想してなかった方向で桐也がキレ始めた。思考にどんな過程があったか全然わからなくて、戸惑うことしかできない。

「……脱線した。それで単純に考えてみた。まずお前をこのまま本国に送還させる、後悔まみれだった、どうにかできたかもしれないIFを想像しては自分への言い訳とで板挟みで面倒すぎた」

「そんなに、桐也が気にするようなことじゃ」

「黙って聞けや男装趣味、本国に送還すつぞ」

「言ってることが滅茶苦茶なだけど……」

「俺が黙っておくパターンは考えてもどうなるかは不透明だった。つまり後悔するかはわからねえつてことだ。というわけでもうちよつと男装ライフを満喫して本国に送還されないようにどうにか立ち回れ、出来る出来ないじゃねえ、やれ」

顔から手を外した桐也は笑つてた。まるで、試験当日にテスト勉強してないことに気づいた学生が浮かべるような笑顔だった。ひ、開き直ってる……!?!

▽▽▽▽

もう開き直った。どう足掻こうがベストが見つからねえなら俺知いーらね!

「たつ、立ち回れつて」

「学園生活はこれから三年間もあるんだ頑張れ頑張れ! お前ならきつと出来らあ!」

「でも本社に情報を送らないと——」

「んなもん放っておけボケ。学園にはあらゆる国家法律企業エトセトラが介入することは出来ねえつて何かに書いてただろうが」

「よく、覚えてるね」

単純な暗記は得意科目だからな、代わりに数学とか吐きそう。ただクソ分厚い諸注意読んでて自分に都合の良さそうなものをピックアップした結果がこれで、それがたまたま今使えそうだっただけの話。

裏で色々あるのかもしれないが表向きには何も出来ねえだろ、デユノア社なんぞ特に知名度のある企業みてえだし余計にないはずだ。いや、ないよな？

「ああ、だから学園で酒飲もうとしたら織斑センセに殺されかけた。生徒手帳に載ってない新しい校則に男子生徒禁酒令があるのは俺のせいだ」

「うわあ……いや、待って違う。そんなことどうでもいいよ。桐也のその判断はちゃんと考えた？ 負わなくていいリスクを桐也は」
「うっせえ、考えた結果だ」

めんどくせえほど考えたつての。考えて考えて考えて、俺の判断で他人の人生が変わっちゃう重っ苦しさを嫌ってくらいに感じた。思ってた以上の我が身の可愛さも自分の卑屈さも含めてまるっと考えた。この15年つて短い人生のなかで一番考えた。

ので、もう考えるのはいいかなつて思つて止めた。いや、ほらバカがいくら思考錯誤したところで答えとか出ねえし、むしろこの問題に正解とかなさそうだったし。むしろ時間の無駄だろ。そもそも根本的に俺には小難しく複雑なことを考えること自体向いてないんだ、単純に物事を見る方がよっぽど合っている。だからフィーリングで後悔しなさそうな答えを出した。俺が納得できる答えが出せるなら、たぶんそれでいいだろ。

これが俺の——考え（るのを諦め）た結果だ。

「……桐也は、バカだよ」

「なんで事実の再確認してんだ？」

「今、真面目に話してるんだけどなあ」

「真面目にディスられたのか」

「素直になれない複雑な心境なの、こういうときには察してよね」

「無理」

「ええー……」

まあ皆を救うヒーローにやなんんでも、一人の友人のためにちよつと頑張るくらいはいいだろ。あとは親に会えないもの同士のよしみだ、口に出すとシャルルがまた微妙な顔しそうだから言わねえけど。

はい、俺空気読んだ。

「正直に言おうと僕は、私は桐也が学園に報告するかと思ってた。桐也は一夏みたいに特別な人間関係もないし」

「一夏なら特別なナニかがなくても即決してそうで怖いけどな、アイツこれと決めたら一直線で頑固だし。あと勘違いがないようにハッキリ言っとく、俺は初め見捨てる気満々だったからな」

「ならなんで？」

「誰に誇れなくても自分だけは納得できるように生きろつてな。そう言ってくれる人に育てられた。だからそうしようと思った」

世間体を気にして好きなことをやれない窮屈な人生なんてつまらんだろつて、いい大人がアホみたいに笑って言ってた。お陰さまでこんな性格になっちまったけど少なくとも友達見捨てるような人間にはならなかった。

親としてどうだったかなんて知らねえけど俺は大好きだ。

「てかそもそも話いいか？」

「なに？」

「IS学園が胸を押し込めただけの男装を普通に転入時にスルーするか？」

シャルルの高校一年生にしてはとても発育のよい胸を指差して問う。さつきから真面目な話してて見ないようにするのに必死だったんだよ、考え事してるのに真ん前に恐らくノーブラが居やがるから顔を覆って視界をシャットアウトするしかなかったんだよ。

ババツと腕でシャルルが胸を隠す。よく見なくても顔が紅潮してる。俺は極めて真面目な表情を保つことに専念してる。なんか睨まれているけど違う、確かに半端ない興味はあるけど本題は胸じゃねえ、学園の検査がそんなに弛いはずあるかって話だ。ほら話題がシリアスだろ、おっぱいの話題に移行したいならいくらでも乗るけど。

「……桐也のエッチ」

「そうかそうかエッチな話題に移行したいか、なら仕方ないな。この真面目な話のなか大変不本意だがシャルルがそう言うなら仕方ない、ほら語ろうぜ語ろうぜ」

「ちよつ待つ、ごめんごめんごめんささい！ 謝るからぐいぐい寄つてこないで!」

「えー、いいじゃんエッチな話題にいかうぜ。もう真面目な話疲れたわ、シモい話しようぜ猥談しようぜエロい話しようぜ」

「目がマジだー!? 助けてお母さん!」

ドタツンボタンと這うように部屋の隅へ逃げるシャルル。それを追うことなく眺めつつ、おっぱいじゃなくて何の話題をしようとしてたか記憶を掘り起こす。

そうだ、学園の検査だ。いくら胸部を押し込めて男性のような振る舞いをしても駄目だろ通らんだろ。なんなら俺は下着一枚にまでなって検査されたぞ。胸隠せねえじゃん。

つまり学園の一部はシャルルが女って知ってる……もしくは検査で金を握らせて事実を隠してるって線もあるかもしれんが、バレた際のリスクとメリットが明らかに釣り合わない。俺でもわかるほどに釣り合ってたねえ。

だから学園の一部はシャルルが女ってわかった上で転入させたとしておく。んで問題はそうすることの意味がわかんねえ。部屋の隅から息を少し荒げてこちらを見て、ちよつと睨んでるアイツを態々なんだ。学園としても男装させた女子生徒を易々と転入させたってことはどう考えても得がねえ。むしろ叩かれる話題が増えるくらい。学園の責任者がドMならワンチャンだが普通にノーチャンスだろ。

そもそも一夏や俺の情報を盗んだところでデユノア社はどうするつもりだったんだ?

他国が開発し始めている第三世代すらままならないなかで、世界が解明できてない男性IS操縦者のデータなんぞ盗ってどうするってんだ。ぶつちやけ糞ほどの役にも立てられんだろ。売却も出来なくはないだろうが大っぴらに売れるわけもない。下手したらそれが脅迫される材料にすらなり得る。

なんだこれ? 単純に考えたら何処にもメリットがないぞ。

「って考えたわけだがどう思う?」

「情報の売却、って線なら信頼関係も必要だからそう簡単に脅迫材料にはしないと思う。でも学園に受け入れるメリツトは確かにないよね」

「ないよな、あと男装のさせ方が雑だよな」

「……うん、中身は頑張ったつもりなんだけど」

「せめてもうちよつと胸ない奴選べよ、上半身裸で一発だぞ」

「ちよくちよく桐也つてデリカシーないよね!？」

「母さんの腹に置いてきた。因みに母さんも礼儀正しく世話焼きなだけでデリカシーないからな、既に母の胃で溶かされてたつてのが濃厚だ」

息子のR18なエロ本見つけては捨てて、〃これくらいにしときなさい〃つてメモとともにR15くらいのグラビア本に差し替える母親が何処にいる。恐ろしいことにうちにいたんだよ。父さんはエロ本捨てられて夜誘われたとか泣いてた、息子にそんなこと言うな気持ちわりい。あ、これ一家揃ってデリカシーなかったわ。

「ま、悪いなシャルル。シャルルも女つてわかったしなるべく気をつけるように前向きに善処するわ」

「善処しなさそうだよお……あとシャルルじゃないよ」

「ん?」

「シャルロット、私の名前はシャルロット・デユノア。お母さんが私に付けてくれた大好きな私の名前」

「シャルロットね、覚えた。なら改めてよろしくマイフレンド」

「アハハ、よろしくねマイフレンド?」

時計の針が21時を指すその時、たぶん正しくシャルロット・デユノアと友人となれた。

「因みにな」

「なに?」

「そろそろ一夏がノート写しに来る時間だぞ」

サツと顔から血の気が引いたシャル……ロットが躓きつつもコルセットを拾ってシャワー室に駆け込んだ直後にノックがされ扉が開く。

「桐也ー、ノート写させてくれー。あれ、シャルルはどこだ？」

「毎度思うけど返事の前にドア開けたらノックの意味ねえよな。ちよ
うどシャワー浴びてる」

「あ、すまんすまん」

「気いつけるよ、そのうち女子の部屋とかで着替えシーンに出くわす
ぞ」

「……………」

「おい待て、なんで目え逸らす」

既にやらかしてやがったこの野郎！

14. 彼の認識

「わかってる、パパッとやってやるよ」

「はい、じゃあどうぞ」

銃器は単純に驚異だった。使用する手軽さに反比例した絶大な威力。いくら距離があらうと、距離があるほど見切ることが難しい速度。攻撃を行ったと知らせる炸裂した火薬の音が耳に届いてる頃には致命的を負っている。

それを理解すれば終わりだ。どれだけ間合いがあらうと、どれだけ警戒しようと炸裂音が鳴ればやられる。そしてそれは少なからず相手に恐怖を学ばせる。ベルがなればエサが出てくると犬が学ぶように、火薬の炸裂音が鳴れば誰かが死ぬと人は学ぶ。

銃器つてのは単純な威力で物理的に制圧することは当然。それに合わせて学ばせた驚異で人の精神を制圧するにも長けている。

そもそも知覚できないうちに致命傷を与える、人間の動体視力ではどうしようもない攻撃つてのが普通にヤバイ。漫画やラノベなら目線や銃口の向きで見切つて刀で斬り伏せる、なんてこともしたりするが現実的に考えて無理。

それが可能なら戦争の体系は刀主体から銃器主体に変わることはなかっただろう——今ではぶつちぎりでISが頂点に君臨しているわけだが。

で銃器の驚異がそうあることならISに乗った場合にどうなるか？

確かに見えない、確かに速い、確かに威力は高い。

「けど致命傷になることはないよな」

「いや、うん。そうなんだけど、そうじゃないから」

致命傷にならないなら問題ない。シールドは削れる、けど精神は折れない。それなら生身で鉄砲持った南蛮渡来人と相對した刀一本のサムライさんよか、今の方がよっぽど勝機はある。

「ならISでの銃器の利点つてなんだって考えると答えが出なくなつた。ないんじゃないね？」

「桐也つて考えるわりに答えが出せないタイプだよな」
「うっせー」

「単純に遠距離からの速い攻撃ってだけでも利点だと思うよ？ 白式っていう例外を除けば刀一本で戦うなんて、普通は生身でもISでもあり得ないし」

白式はマジもんの刀一本、拡張領域バスのスロット空きなしの後付武装イコライザなし。一撃必殺の単一仕様能力に全振りしたような機体だからな。本当にワンオフなしで刀一本で戦うやつがいたら本当の馬鹿か本当の強者だろう。

「だってよ一夏」

「せめて拡張領域がひとつでも空いてたらなあ……」

ガツクリと肩を落とす一夏にシャルルが苦笑いしつつ慰める様を傍目に再度的を狙って撃つ。ど真ん中を撃ち抜き新たな的が現れる。即座に撃つが端を掠めるに終わる。

ふむ、アリーナで銃に相對する際に完封されかねない俺と一夏にシャルルが教鞭を取ってくれているが俺は大した伸びもないな。銃を持った相手との戦い方の心得だけは男二人感覚で理解したが扱いはてんで駄目だ。

「桐也は、新しく現れた的に当てられないよね。元からあつたのなら十中八九中心を撃ち抜くのにな」

「的の場所の把握と銃を向ける動作に姿勢の変更諸々、ついで自分の機動を合わせると普通にキャパオーバー。俺の一回で済ませれる動作を越えてる」

「……頑張つて慣れて！」

「丸投げのようでも割りとそれしかないって現実に撃たれるまでもなく心が折れそうだけ」

一拍二拍ほど間を置けば当てられるんだが、そもそも普通の試合なら相手はそんなにジツとしていない。よつて即座に撃つべきなんだが当たたらねー。単発でチマチマやつてるのも合わん。

的の種類を点数式でなくただ当てるためのものに変更。手持ちのマシンガンフルオートに切り替え火線を喰らせ、的を横一線するか

のように弾丸が穿っていく。

「おー、撃ち続けてたら結構当たるんだな」

「本当だね……なんでだろう？」

大して狙わなくていいからだろう、大まかに狙いをつけたら後は引き金を引いたまま横一閃するだけ。初弾から当てなくていいし、撃ち続けてたら前の当たった弾の位置からの修正も楽だ。少なくとも俺はそういう感覚でやってる。

「代わりに馬鹿みたいに弾薬消費が激しいけどね」

「やっぱりグレネードが一番か」

「おい、またセシリアと戦ったときみたいな自爆するのか？」

「しねえよ、したくねえよ」

「自爆……？」

あれだけの高火力の爆風に揉まれながら吹き飛んでる最中に、生命線のシールドエネルギーが尽きたときには死んだかと思った。てかあれはそもそも勝ちを掴むことを捨てた戦い方だし却下。そんなもんやってられつかつての。

自分に合った武装ってなんなんだろうな。両肩の非固定浮遊部位アンロックユニットである盾を自分の周りをクルクルさせる。初期武装的なあれなお陰かこれが一番動かしやすいんだよな。一切攻撃力ないんだが、気合い出して殴打に使えるかどうかってレベルか。

そもそも打鉄も第三世代に比べると出力は劣るし、近接格闘ともなれば一撃の重さで中々勝つことが出来ねえ……なんかないもんかね。遠心力とか加えたり、他のなにか利用してだな。

「桐也の機体は、未改造の打鉄だよな？」

「ああ、新品のまっさらだ」

「そういえばシャルルのはラファールみたいだけど、どこか違うよな？」

「うん、カスタム機。特に拡張領域を広げてるんだけど他にも細々と……それはどうでもいいんだろ。ねえ、桐也？」

「なんぞ？」

「えっと、なんで打鉄の浮遊盾をそんなに動かしてるの？」

ラファールの鋼が指差すのはパラソルもかくやというほど回転してる打鉄の浮遊盾。遠心力の発想から回し始めてた。ついでに二つ合わせてベイゴマ出来んじゃないとか思考停止してたり、練習してた射撃って分野を投げ捨てて遊んでたとかそんなことはない。

てかこれって普通動かせないもんなのか？ 普通に動かしてんだけど。

「動かしてる人は見たことないかなー、ちよつと稼働データ見てみていい？」

「あいよ」

「あ、えっ……あ、ありがとう」

「まあ訓練機と違ってコアの進化が制限とかされてねえし、そこらで差があるかもしれん」

ちよいと打鉄を操作して心電図に似てる画面やら棒グラフがウインウイン動いてる画面やらを呼び出す。俺は見ても殆どわからん、一夏も顔に疑問符が浮かんでる。微妙に戸惑った様子のシャルルはジト目で俺を見たあと画面を確認した、なんだよ。

「別にー？ うーん、僕じゃ特に変なところはわからないかな」

「じゃあ今までの搭乗者が頭堅くて動かすって発想なかったんだろ」

「サラツと不特定多数をデイスるなよ」

「えっ？」

「あ、これ無意識だね」

「まあ桐也だしな」

「デイスったな？」

「くっ、自分のことには敏感か」

人間、自分の嫌なことには敏感なんだよ。

兎に角、もう少しでも当たるようにしたい。なら練習をするしかないわけでの点数式に戻し、再び的に狙いをつけ——的が弾け飛んだ。ハイパーセンサーが捉えたのはピット上に佇む見覚えのある機体。

「シュヴァツ、シュバ……黒い雨！」

「貴様ツ！ まだ言えんのか!?!」

「うつせー！　なんでそんな噛みそうなネーミングなんだよ！」

「普通のドイツ語だ！　いや、それはどうでもいい。織斑一夏！」
「なんだよ」

シユヴァルツエア・レーゲンという噛みまくる機体を駆るはドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィツヒ。ピットから飛び降りアリーナの地面を踏みしめた。

そうか、俺には用はないんだな。一夏に用事があるなら俺的を狙うなよ。粉々になった的が点数を標示できずエラーを吐き出している。あつ、くつそ今までのスコアも消えてる。

ふたりはなんか真面目な面構えで向き合ってこつちには一切意識裂いてねえし、なんだトバツチリか。

「私と戦え」

「断る、理由がない」

「貴様に理由がなくとも私にはあるんだ」

レーゲンの肩に備えられたレールガンが射角を僅かに上げ白式へと向ける。断るなんて言つた一夏も唯一無二の武装、雪片式型は既にその手に握られており、平和の使者はなんとやらは休暇中らしい。

一触即発の空気にアリーナで訓練していた他の生徒たちもこちらへと視線を向け動きを止める。

俺は気にせず的を再表示させ狙つて撃つ。ピピッ、ばあんばあん。

「——ッ！」

「ハアッ！」

織斑一夏、ラウラ・ボーデヴィツヒの俺には全く関係ない戦いの火蓋が俺によつて切られた。

ちっ、やっぱ当たるっちゃ当たるものの精々3〜4点だな。真ん中からはほど遠い、まあ元々は半分も当たらなかつたことを考えりや進歩はないわけでもない。大した進歩がないだけで進歩がないわけでもない。焦らずに一歩ずつつてのが身の丈だな。

気を取り直してもう一度構えようとすれば大きく左右上下と規則性もなく標準がぶれる。慌ただしいシャルルが揺すつてきやがる。どうでもいいけど一旦撃ちきるの待ってから揺するあたりは変に律

儀だよな。

「なんだよ、邪魔すんなよ」

「桐也ア!?　なんで今撃つたの!?!」

「あ?　いや、俺が練習止める必要あったか?」

「ないけど本当に場の空気読まないよね!」

「ハッハッハ、どうせやり合うなら誰が何が火蓋を切ることになっても遅いか早いかの差だろ。ならちやっちやとやれよ焦れたいわ」

近接戦闘専門であり一撃必殺の刃を持つ白式に臆することなくレーゲンはプラズマ手刀^{ブレイド}で凌ぐ。インターセプターより僅かに長い程度の刀身で、しかも片手でよく刀を捌ききれるもんだ。一夏だってブランクがあり箒さんにや及ばないものの中々の剣技を持つてるはずなんだが、どう見てもラウラの方が旨い。間に器用に差し込まれるワイヤーブレイドが一夏の動きを制限し、見るからに術中に嵌まり込んでる。

「一夏が押されてるね。得意な間合い^{レンジ}ははずなんだけど」

「だなー、まあ忘れそうになるけど一夏もまだ乗り始めて半年も経ってねえしな」

ラウラは振るわれた刀身を真っ向から受けることなく、斜に構えたプラズマブレイドで込められた力をいなす。ワイヤーブレイドが意識の外から足を縛り体勢を崩させ剣筋を狂わせる。

プラズマブレイドってエネルギー系統の武装だし零落白夜で斬り裂けば早い気がすんだけどな。その暇もないのか、単に思い付いてないかはあとで一夏に聞いてみつかね。

「それに、こりや単純にラウラが強いな」

「そうだね……あれ、桐也ってボーデヴィツヒさんと親しい?」

「んなことないが、なんでだ?」

「名前で、呼び捨てで、呼んでたから」

「いや、名字噛みまくったら名前でいいって言われて流れでこうなった。ああ、鈴もそうだな。アイツの場合はさん付けキモいって言われたからだが」

果てしなく失礼だと思う、實際人の名前をさん付けで呼ぶことなん

て慣れてないから如何せん反論できねえけど。

「あとは基本的に外国語嫌いだ、噛む」

「凄く理不尽な理由だ……」

さて、一夏とラウラは早くもいよいよ佳境といった感じか。他の生徒たちも端へ避難してていいことに機動で掻き乱そうとする一夏。それに対し追うこともなく視線だけで追従するラウラ。

焦れた一夏が少しでも隙が出来たところへ零落白夜で斬りかかろうとしている。なんてことはここまで付き合いが長くなくとも共に生活していたからこそ分かる。割りと堪え性のない奴だし、白式の一撃必殺という長所がそれに拍車を掛けることが間々ある。

——友人として教えるべきかもしれないが俺の勝ちの目が更に薄くなるのが嫌で教えてない。流石にそろそろ教えるべきだろうか、ちよつとでつちーの良心が痛まなくもない。

アリーナの地面を時おり削り砂埃を巻き上げながら機を伺う一夏に、変わらず足を動かすことなく視線だけで一夏の姿を追うラウラ。視界から外れることもあるのだろうが、ハイパーセンサーで捉えているから問題ないんだろうな。

出せるギリギリの速度に気持ち僅かながらも変則的な機動で一夏が隙を狙い、これで恐らくどうあれ勝負が決まると誰もが確信したその時。

『その専用機持ちふたりイ！ フリーズフリーズフレイイズ！ 模擬戦を今すぐやめなさい、するなら決まったスペースですることー！ ハッスルし過ぎよオ！』

スピーカーより教員殿のお叱りの放送が割り込んできた。

妙に明るい、語尾の跳ね上がる感じの声。そっから察するに今年赴任したっていう語学担当のパツキン、ミスト先生かね。山田先生に及ばないながらもアメリカンらしいボン・キュツ・ボン。若々しい人でノリは学生に近く女子生徒にはたまに挨拶がハグ、滅茶苦茶に羨ましい。

「なあ、あ——おベツ!？」

「……ふんっ」

そんなミスト先生の注意より集中力の途切れた一夏は、ものの見事に軌道の制御を手放し見当違いな方向へとスツ飛んでいき壁に衝突。その様を眺めたラウラは興味をなくしたかのように平然と去つていった。

まあ、他の生徒が端に寄らないといけないほどに盛大にアリーナ使つてたら止められるわな。

しかし、ラウラ・ボーデヴィツヒが織斑一夏にあれほどまでに敵意を掲げる理由はなんなのか。猫を殺す好奇心が、野次馬根性が湧いて仕方ない。パツと話した感じじゃあいつもの女難関連ではなさそうなんだが。

「いてて、あー……俺、結構迷惑掛けてたか？」

「第三世代同士の戦いつてのは見てて面白かったが、それなりにアリーナ使つてたからな」

「あー、すまん。皆にも謝ってくる」

こういうところつて一夏の美点だよな。絶対口にはしねえけど謝るべきところで素直に謝ろうとすることは結構難しい。少なくとも俺は口で謝れど内心で大なり小なり責任転嫁する。それでそれが意識しないうちに不平不満として態度に滲み出る——それで何回叱られたか。

手のひら合わせて謝り回つてる一夏を見つつ、母さんに叱られつつ親父と俺と責任転嫁し合つてたとても醜い風景が脳裏を掠めた。

うん、まあ一夏を育てたの千冬さんらしいしな、そりや真つ直ぐな奴になるか。シャルル、いやシャルロットも気遣い上手いし優しい奴だし、父親は横に除けておいて育て親の母親がいい人だったんだろうなあ。

「子は親の背中を見て育つねえ……」

「急に遠い目をしてどうしたのさ、ちよつとコケシみたいな表情しないでっつてば」

拝啓、両親へ。貴方たちの背中へ——まあ、立派でなくとも好きでした。

▽▽▽▽

「はあ……」

口から漏れた溜め息はわざとが無意識か。放課後の教室及びアリーナの使用時間が過ぎ、ようやく教員が一息つける時間。そこに届けられた知らせは『一年一組』の生徒二名がアリーナを盛大に使って模擬戦をしていたとのことであった。幸い注意一言で直ぐに止めたとのことではあったが。

しかし、ただでさえ頭の痛い問題を抱えている千冬にとっては頭痛の種が更に芽吹いたように感じてならない。

「織斑先生どうしたんですか?」

「真耶か……うちのクラスのバカどもがアリーナで問題を起こしたようだな」

机の上に乗せられたメモをトントンと叩く。定時で帰る周りからの風当たりが厳しくなりそうなの、しかしやることは何故か全てキチンとやりきって帰っている新任教師ミスト。そんな彼女の残したメモに書かれた内容を読んだ真耶も思わず苦笑いを浮かべる。

女子ばかりの学園、今までだって生徒同士の不和なんて数えきれないほどあったわけで。むしろ今年の一組が仲が良すぎるほどだ。

ただ、今回の不和などと濁さず全力でわかり易い喧嘩はとても珍しい。

「普段はもっと、その、なんていうか……目に見えにくい形で」

「陰湿で陰険なものが多いな。愚直なバカ同士の喧嘩は滅多に見られん」

濁された言葉を切り捨てる千冬、ただし少し楽しそう。喧嘩の処理自体は面倒なのだが、ぶつちやけ喧嘩自体を見るのはちよつと楽しくなってきたいる千冬だった。

わかりやすい喧嘩だけに解決法もわかりやすい。

互いに満足するまで言葉でも拳でも交える舞台だけ提供してやればいいのだ。

「邪魔を入れずに本気で殴り合わせればいい……ふむ、程よく学年別トーナメントがあつたな。まあ、タッグ戦に変更されるが大した問題ではなからう」

「そんなものですか……って、先輩もしかして対戦の組合わせに細工しようとしてませんか？」

「見逃せ真耶」

「ええー」

目尻を下げて困り顔の真耶。そして目尻を反比例させるように上げ、眉間にシワを寄せる千冬。その様子に気づいたお人好し真耶は再びまだ悩みごとがあるのか尋ねる。

「これだ、こっちの方がよっぽど厄介だ。チツ」

「あの、如何にも面倒だつて舌打ちはどうかと。あ、これは確かに厄介ですね……」

真耶の目前に突き出された書類に記された名はシャルロット・デュノア。正真正銘おフランス生まれの女の子、シャルルでなくシャルロット。

「IS委員会からの指令ですよ。織斑くん、出路くんという二人しかいない男性IS操縦者の……その、危機感を確認するつて言う名目で」

「男装させたデュノアを送り込んで気づくかどうか。何よりもデュノア自身にその目的を偽って行わせていることが悪趣味極まる」

シャルル改め、シャルロット・デュノアの転校。その目的。

簡単に言えばIS委員会が二人の男性操縦者に危機感を自覚させる、また現状の警戒度を確認するためのものである。

シャルロットにはその事は伏せられている。万が一にも両名に目的が漏れないようにだ。また協力したデュノア社は偽りの目的である男性操縦者の情報が手に入ったときには、委員会への報告義務は課せられるものの他国には渡すことなく独占する権利が報酬とされていた。

ただ同室にされたりと、明らかに出路桐也にその矛先が向いているのは気のせいではなからう。もしも警戒度が余りにも低かったとき、

もしも何処かに直ぐ拐われるような危険性が高いなら——先に開いてしまった方が有益なのでは？

その場合、織斑千冬と言う姉を持つ人物よりバックボーンのない出路桐也の方が——なんて話があったかは不明。まあ、確かにバックボーンのない出路桐也の方が危機感が高くないといけないので間違った配分でもないのだ。

「恐らく、気づいたときに一夏の奴なら態度に出てわかる」

「ふふふー、さすがお姉さんで茶化したわけじゃないです！ その開いた手をどうか机に戻してください！」

「ふんっ。しかし、出路の場合はなんとというか困るな。例えば正体を暴き、偽りの目的を聞いたとする。そのあとどう動くか、アイツは入学してから特に変化が激しくて読めん」

「そうですね、織斑くんを含めても一番環境が変わった子ですし……」
「それを受け入れたかと思えば不満を口にする、かと思えば変なところで物分かりがよくなる。天の邪鬼どころではない、何枚舌だアイツは」

主体性がないわけではない。何処かに譲れないものも持っている。それは千冬にも察することができる。できるが時おり意見の姿勢の諸々の転じ方が酷い。第三世代の専用機羨ましいな、などと呟いたかと思えば量産機最高と高らかに叫んでいた。掴み所がないわけではなく、掴んだと思っただけの間にすり抜けているといったところか。

「全くもって手のかかる奴だ」

「立場が立場ですし、それをしっかりフォローしてあげないとですね！ 私たちは先生ですから！」

「そうだな、真耶任せだ」

「はいっ！ えっ、全部私ですか!？」

「ふっ、冗談だ」

クツクツと笑いながら千冬は出路の奴に適当に鎌かけでもしてみるかと思案する。



時計の針が一日の終わりを示す頃。ようやく復習が終わったと伸びをする。背骨がボキボキと凝っていたことを主張してきた。あとは少し前から後ろよりシャルルが視線で何かを主張してきてい——あー、今は男装してないしシャルロットか。勉強の邪魔をしないようにしてたであろうソイツが一段落ついた俺に話しかけてきた。

「桐也、話いいかな？」

「あー、いいけど」

「じゃあ、今日のアリーナでのことについて。私が打鉄のデータ見せてって言ったときに、桐也はあっさりを見せてくれたけどちよつと警戒心が無さすぎないかなって」

「……ん？ ああ、シャルルに言われて見せたな。いや、一夏ともたまに頭抱えつつ見せあつてるし友達に見せるくらい良いだろ」

一夏も俺もISについては極めてバカの部類から脱せてないしな。なんなら詳しいシャルルに見てもらった方がなにかと助言も貰えて万々歳だ。

「そうじゃなくて！ 私はスパイとして来てたんだよ？ 明かしたことが本当だって証明するものもないし……迷わずに接してくれるのは嬉しいんだけど」

言葉を探すように俯くシャルロット、大方何が言いたいかはわかった。たぶん、俺が無防備過ぎたのが逆に怖いってのがあるんだろう。けど俺は別にシャルロットを警戒してないわけでもないんだが、考え直せば割りと上手すぎる話でもあるし部屋ではそれなりに——

……………あ、ヤツベ。

「そうか、シャルルとシャルロットって同一人物じゃん」

「……えっ？」

「そうだそうだ、不味ったわ。なんか頭のなかでスパイとして自白したのはシャルロットで、シャルルは潔白の友人のままだった」

「えっ？ はあ!?! ちよつと待ってよ、私と僕のときで別人として認識してたってこと!?! ここに一人しかいないのに!」

桐也にはシャルルは女の子で私だって明かしたのにー！ と部屋に心の雄叫びが響いた。雄叫びつても生物学的には雌だけど。

それにしても我ながら何してんだ。シャルルのときの方が違和感なく接してたせいで今までと差異なく過ごしてしまってた。

ほら、部屋でのシャルロットは普通に可愛い女の子でおっぱいとかもあるし？ 日本男児としては下の息子の自制と共に疑念も湧いてたわけですよ。

これ、沸いてたのは俺の頭だったわ。

「やー、だってお前つてば一人称も所作とかも細かいところスパツと切り替えるじゃん？ それで俺のなかでもなんか、感覚狂ってボケてたわ」

「嘘でしょ!?! 信じられないよー!」

「よし、任せろ。明日からはシャルルも疑つてやる」

「あつ、えー……う、嬉しくない。むしろスパイとして来てたのはシャルルの方なのにあべこべだよ……」

「……………あつ」

「それも考えてなかったの!?!」

このあと小一時間、ほっぺぷっくり激おこなシャルロットちゃんに問い詰められることとなった。なんで俺が攻められる立場になった、解せぬ。

15. 賽は投げられた

それは唐突に発表された。次の学年別個人トーナメントをペアトーナメントとするという報せ。今日も今日とて新たな知識に忙殺されかけの桐也は、放課後ひとりで学園内をふらついていた。そのときに掲示板で見かけたのが学年別トーナメント形式の変更、及び追加情報についての記載。

より実戦的な模擬戦闘を行うため二人組で出場とする。なお、ペアをつくらなかった場合には抽選で決定するものとする。

といった内容のもの。

本当に突然貼り出されたこともあり桐也からすれば「同じ男の一夏かシャルルと組むか……あ、シャルルは女だった」くらいにしか考えていなかった、のだが。

末尾の一文を読み、一夏と組むという選択肢は破棄された。

「素人同士で組んでられッか！」

彼はそう叫ぶや否や少しでも勝率の上がるであろう相手を探すため駆け出した。

最後の一文に書かれていた内容は以下の通りであった。

『尚、一年生トーナメント戦上位4組にはクラス対抗戦で支給されなかった。半年学食デザートフリーパスを進呈するものとする』

物欲に支配されたでっちー、放課後の廊下を疾走する。

同時刻、この発表により一番の被害を受けたのは間違いなくシャルロットであった。たまたま、一夏と近くにいた。偶然、ペア戦について発表された近くにいた。巧まずして周囲に多くの女子生徒がいた。どれかひとつ揃ってなければこうはならなかった、そんな状況が図らずして出来上がっていた。

結果的にイケメンな一夏と美少年（偽）なシャルルには波のようなペア申し込みが押し寄せてきた。丁寧一人ずつ断ろうものなら次々に何故が増える女子生徒たちの処理がパンクする。シャルルがどうしようかと苦笑する横で、ひとりの友人を見捨てる覚悟をした一

夏が口を開いた。

「すまん！ 実はもうシャルルと組むことにしたんだ！」
「ちよっ」

こうなると必然的に一夏からすれば桐也が男と組めなくなるのが苦渋の決断。あとで謝れば何だかんだ許してもらえらるだろうとある意味開き直ってる。

だがシャルルはそうもいかない。

「えー！ ……いや、でも他の娘と組まれるよりは」

「織斑くんには、デユノアくんペア。イケるわ」

「ご飯三杯は軽いわね」

「今年の夏は熱く、いえ厚くなるわ！」

「盛り上がって参りましたあー！」

「なんのことがよくわからないけど、まあそういうことだ！ だから他にペアを探してもらえるか？」

「仕方ないねーぐっふっふ」

「だよねーふへっへ」

主の後半好き勝手な台詞を残して捌けていく生徒を横目にシャルルは平時の顔のまま固まっていた。内心のシャルロットは大いに震えていた。彼女のなかでは組むとしたら正体がバレてしまっている桐也が一番楽。

だからこの騒ぎからなんとか抜け出して、一夏が桐也と組む前になんとかペアとなろうとしていた。事実後ろ手に持った端末には既にメールの下書きが終わり、送信を虚しく待つ状態、あと一歩足りなかった。

——奇しくも男子三名(内一名女子)、全員が全員ある意味誰かを裏切ろうとしていた瞬間だった。違いと言えば決断と行動の速さか。

「えっ、一夏。僕と？ 桐也とじゃなくて僕と？」

「ああ、桐也には悪いが今回は早い者勝ち。言うなれば桐也には速さが足りなかった……あとあの場を切り抜けるにはこれしか思いつかなかった」

そもそもシャルロットは負い目から忘れがちだが、一夏にとっても

シャルルは既にかけてがえのない友達になっている。一夏にとってペアを組もうと言うこともなんらおかしくなく、だからこそシャルルは断る口実を無くしていた。

ペアを組むとなれば共有する時間は多くなり、一緒に着替える機会も自然と増えてしまう。基本的にシャルロットは自室以外ISスーツを着ているが、何故か一夏がたまに不満げだったりする。裸の付き合いとは比喩であって本気で全裸で何かを分かち合おうとしないほしい。

一夏的には不満げというか汗とかもかいてるだろうし着替えればいいのに、という意図しかないのだがシャルロットとしてはどちらにせよ着替えるわけにはいかない。

「こ、困ったぞー……」

「ん、どうかしたか？」

「何でもないヨー、頑張ろうネー！」

「ああー！」

取り敢えずISスーツでも喉仏を隠せるようにすることから取りかかるうと諦めたシャルロットだった。

また別所で困り顔な生徒も多々いた。

ある生徒は作成途中のISの試運転をするつもりだったが、ペアへの迷惑を考え悩む。というかペアを探さないといけない時点で彼女にとっては何とてつもない労力であった、別にボッチではないが性格的に疲れるだけだ。

「どう、しょう……」

銀髪眼帯で隊長な生徒は単純にペアを申し込むほどの仲の生徒がおらず、屋上で夕日を眺め黄昏れ現実逃避。別に人と話すことが苦なわけではない、割りと避けられがちなだけだ。

「日本の夕陽も存外悪くない……はあ」

さらにサムライガールは前日に織斑一夏に自身が優勝した際に買いた物に付き合え、と遠回しにデートを約束したもののペア探しに面倒だと溜め息を漏らす。恐らくペアは篠ノ之のネームから申し込んで

くる人がいるだろう、ただ人付き合いが性に合わないマイペースなだけだ。

「二夏は、駄目だな……次に会ったクラスメイトに頼んでみるよとするか」

ついでに陰ではこんな噂も——トーナメント優勝者は男子と付き合える。おりむー、デュツチーが大人気。他は極めて不明。噂の出所の詳細は不明なものの語尾が間延びする系女子が出所だとかそうではないとか。

▽▽▽▽

廊下を駆ける。織斑先生に見つかったときのリスクは高いが、勝率の高いペアを探すため多少のリスクは目を逸らす。

目ぼしい相手は代表候補生たるセシリアさんに鈴、あとラウラあたりか。全員揃って拒否られる可能性があるものの聞くだけならタダ。まずは教室から当たってみるか、最悪フリーパスのためなら自室へお邪魔することも厭わないぞ。

走る速度に合わせ流れる視界にチラリと見覚えのあるポニーテールが映った。いや、映っただけなら気にしないんだが、映ると同時に腕を掴まれて一指たりとも動かなくなるっておかしいだろ。

「桐也、少し話に付き合え」

「……あの、ホウキさん？ ペアを探し求めて微妙に急いでるんだが、てかピクリとも動けないんだけどナニコレ怖い」

「む、すまない。昔やんちゃする姉さんを止めていた名残でつい技を、まあそれより話だ。そのペアについてだ。私と組まないか？」

「え、マジ？ 何で俺？」

「真剣だ、次に見かけたクラスメイトと組むと決めた。そしてお前を見かけた」

なんかド真剣な顔してるのに理由が控えめにいつて酷いぞ。俺も大概だが箒さんは比にならんほど自分のペースを軸に過ごしてるよ

な。

てか抽選に身を任せそうとか失礼ながら思ったが、方法はともかく相手を探していたなら少なくとも勝ち狙いか。早めに組む相手を選んでおいて、連携を取れるようにするとか、練習に時間をとるためとかそんな理由だろう。

「箒さんも半年フリーパス狙いか？」

「それもある、が私は優勝狙いだ」

「それなら一応の専用機持ちな俺よか、第三世代持ちとかの代表候補生のがいいんじゃないの？」

「組んだ相手を勝った理由にも負けた言い訳にもするつもりはない。専用機持ちであるだけでも十二分だ」

なにこの人カッコいい、俺が女なら惚れてたね。専用機持ちと世代差と諸々のアドバンテージを全く考慮してねえ、一見アホだし正直根柢なさすぎてなんなのって気持ちもある。優勝したいのに専用機持ちのなかでは最低ランクな俺を選ぶとか論理性もないもあつたもんじゃねえ。

けどそれがどうしたと跳ね退ける。そんな確固たる意思が、自信が、姿勢が——凜としててかけえなあ！ おい！

「剣の腕は随一だと自負している。言いたくないが篠ノ之束の妹だ。それに私は強いぞ」

「言いたくないのか」

「そこは私じゃないからな、姉さんは姉さんだ。まあ売り込める要素は口下手な私にはこの程度だ」

どうだ？ とは言葉にせずに視線で問うてくる。なんかもう滅茶苦茶なようで芯通ってて一直線で、ああ一夏と織斑先生とちよつとダブった。さすが幼馴染みとその保護者、きつと束って箒のお姉さんも……いや、ないな。世の中ひっくり返したらそのまま放置して姿眩ませてたな、世界規模の逃亡者だったわ。

まあ、そんなことはどうでもいいか。こんな素敵なお誘いに返す言葉は迷うまでもない択一だ。

「是非とも、こつちから頼みたいくらいだ」

「ふむ、では決定だな。優勝とフリーパスを目指すぞ」

ペア決定にふうと一息吐きつつ安堵した様子の箒さん。ただ、これ絶対に俺と組めたことへの安堵じゃねえ。また別の人にペア申し込む面倒だったから一発で決まってよかったーって方だ。

ちよつち複雑な気持ちがないでもないが、気にするだけ無駄なことなので蓋をしておく。箒さんがそういうタイプってのはなんとなく把握してるしな。

「てか、やけに優勝を強調すんのな。箒さんってそういうので目立ちたい系、では絶対ないな。取り組むには真面目にやろうって感じか？」

一夏から中学では剣道の全国大会優勝経験ありとか聞いたし、そこらへんか。

「いや、そうだな。確かに自分でやると決めれば手を抜いたことはないが……」

「逆接からの、なにか別の理由ありまでは察せた」

「ううむ……その、なんだ。思い返せば約束というより賭けのようで、学園の公式の大会にこのような私欲や私情からの案件を挟むこと自体が不料簡ふりょうけんなのかもしれんのだが」

「いつになく箒さんがのべつまくなし話すけど、逆にいつになく着地点が見えねえ」

「……むう」

視線がこちらこちらへと言葉を探すかのように泳ぐも見つからなかったみたいだ。視界を動かして見つかったものと言え、向かいの校舎にたなびく銀髪がちらついたりくらくらいか。

珍しく表情に変化を見せた箒さんは少し口を尖らせつつ諦めたように話す。ただし視線はお空へフライアウェイ、頬が朱色に染まるのは夕焼けだけのせいではなからう。

「一夏と約束をしてな、私が優勝したら一日外出に付き合え、とな」

「つまりデート」

「ぶっ！……そ、そうだ」

ふむふむ、なるほどなるほど。無性に俺の拳が一夏の頬を恋しがっ

てる、これが恋か違うか嫉妬か知ってた！ くっそ、なんか一夏が不幸な目にあえばいいのに。ケツ、禿げろ。

なんか恋せよ乙女、青春街道爆走中って感じだなあ。

こういう友人に惚れている子のサポートみたいなの、ギャルゲの主人公親友ポジになるとは予想外だ。サポートとか別段してないけどな。

「酢と梅干しを食べたかのように顔が歪んでるが大丈夫か？」

「問題ねえよ、うん……ま、一夏とのデートのために頑張るか！」

「お、大声で言うな阿呆!？」

俺の奥歯がギチギチ鳴ってら。購買に五寸釘と藁人形あつたっけか、ないか。

▽▽▽▽

セシリア・オルコットは少しばかり思考に耽っていた。今回の学年別トーナメントは自身にとって学園入学後初の公式戦。多くの企業や組織が見学に来るなかどうすればオルコットとして栄えるか。もちろん負けるつもりは毛頭ない、そしてクラス代表決定戦のときのよくな隙を見せるつもりもない。

しかし問題は組む相手だ。

一般生徒と組んだ場合、専用機持ちのペアが相手となったときの負担が比ではない。多くが一般生徒同士で組むなか贅沢な悩みとも言えるが、セシリア自身も自分一人で専用機持ちふたりの相手は少々難易度が高いと感じている。

そのため専用機持ちと組めば勝利はより堅実さを増す。だが、得て当然の勝利になど意味はない。代表候補生同士で組んでしまえば、観た者の頭に残る印象は代表候補生が勝ったという事実。

オルコットが余りにも観衆の心に残せないのではないかと、それならば一般生徒と組んで優勝でなく上位を狙うのも手段としては存在する。

「一夏さんや特に出路さんと組むというのもひとつですが、あのふたりは特に今回しっかり勝ちたい相手ですし……ふたりして自滅と自

爆で負けるんですもの」

悩ましい、そう思いつつ屋上のベンチから立ち上がり秘かに小さく伸びをする。

常に気を張ることを止め要所要所で息抜きをするようになったのは、学園に入ってから彼女の彼女の変化のひとつだ。小さいようで、彼女自身にとっては大きな変化であった。

「……あら、あの方はボーデヴィツヒさん？」

セシリアが見た彼女はなんといかもう夕焼けでなく、明後日とか見えないものを見てるレベルで遠い目をしていた。ふと、織斑一夏にドロップキックを囓ましたときから特に関わりを持つ機会がなかったとセシリアは思い返す。

稀に桐也やクラスメイトが話し掛けていたときには、クラス外で出回っている噂の彼女のイメージとは似ても似つかないかった。平時の無愛想というよりもただ冷たい雰囲気へ反し、とても人間味に溢れていた。

——実際のところ冷たい雰囲気は転校初日にやらかしたことへの後悔で動くに動けないだけだったのだが。ラウラは内心で祖国の部隊への副隊長へのヘルプコールを送り続けていただけだった。副隊長たるクラリツサにヘルプコールを送れたとしてもサブカルチャーまみれな助言が来ることは、ラウラ自身知り得ないのだがこれはまた別のお話。

当然そんなことはまるっと全て知るよしもなかったセシリアだが、これもいい機会だと声をかける。

「こんにちは、ボーデヴィツヒさん」

「セシリア・オルコットだったか、なにか用か？」

先程まで焦点を何処に合わせているのかといった様子だったラウラ。だが声に反応するところにはスイッチを切り替えたかのようにいつも通りの飾り気のない返答をしていた。

——ああ、冷たいというより必要以上の感情を反応に乗せないのですか。

というのが初めてラウラ・ボーデヴィツヒと自分で軽く接したセシ

リアが抱いた感想。簡素な反応は事前に調べた彼女が軍人という職業からくる気質なのか。それともセシリアでは調べること叶わなかった軍所属以前の経歴によるものか。

なら、時おり見かけける感情豊かに見えるあちらが彼女の素なのだろう。

「そうですわね、明確な用というものはなかったのですがたった今出来ましたわ」

「なんなんだ？ 私も暇では、なくもなかった……いや、だがこう見えて割りと切羽詰まってるんだ」

「それは申し訳ありません。では手短に済ませましょう——次のトナメント、わたくしと組みませんか？」

「へ？」

いつもは癖からか出さないようにしている表情が、一気に意識せずに出てしまう素の反応となった。

彼女自身の自覚の有無はさておき。癖として目に見えた感情の起伏が少ないのは、彼女にとつての憧れチフユの影響なのだろう。だからこそ素ではないその癖は、不意の事態には顔を引っ込めることもある。

ラウラの頭のなかでグルグルと言葉が回るものの、どう考えても目の前のイギリス代表候補生からペアを申し込まれたらしい。その事実しか理解できず、実際それ以外の意図はなかった。

頭のなかを占める戸惑いと疑問と他色々を一度押し込め、感情の表出も平時のものへと直し問い掛ける。

「何故、私なのだ？ 戦力としては確かにトップだろうが他の十分に連携の取れる者でも良いだろう」

「サラッとご自身がトップと言ったことは聞き流して差し上げますわ、戦力として十二分なことも事実ですし。ただ、少し貴女に興味が湧きました」

それに強者と組んだから自分が観衆の心に残らない？

冗談じゃない、セシリア・オルコットがその程度で霞む存在と認められているようなものではないか。そんな卑下を過小評価をしてはやってられない。

相手が誰であろうと自分という存在を観衆の心に刻む。それでこそオルコット家の当主だとセシリアは自分に言い聞かせ、先ほどの弱気な迷いを消し去る。

のだが、少しばかりラウラの反応がおかしかった。じりじりと摺り足で後ろに下がり。

「女が、女に興味を……貴様まさかクラリツサのいう百合というやつか!? 止まれ近づくな、私にそういう趣味はない!」

「違いますわよッ! そのクラリツサという方は何を教え込んでますの!?!」

「く、来るなあああ!?!」

どったんばったん、反射的に物騒な格闘技システムを披露しそうになるものの流石に気合いで耐えるラウラ。

だが、距離を詰めさせないために下がろうとするも、自身が柵を背にしていたことを思い出す。そんな間にもセシリアは詰め寄って「うっ、ああああ!?!」「きやああああ!?!」——以下割愛。

「……せえせえ。つ、つまり私が転校初日から今に至るまで、私という人物像を把握できないからいい機会と思っただんな?」

「はあはあ……ふうー、そうですね。攻撃的なのか、人に興味がないのか、それともまだわたくしに見えていない側面があるのか」

——あとは同じく初日にやらかした身としての嬉しくない少しの親近感。は口に出さず心に押し込める。これは好んで教えることでもないだろう、いつかバレそうという現実は少し置いておくとする。

「そうか……私はやっぱり避けられがちか」

「あの、露骨に落ち込まないでくださいまし。そもそも人と接しようとするなら、普段から受け入れる雰囲気がないと始まりませんわ」

「それがよくわからないのだが……いや、だが正直に言うとなアの申し込みは助かる。なにぶんまともに話す者が未だにほとんどいないからな」

右手のひらを制服でパンパンと払い、いや拭いてセシリアへ差し出す。咄嗟に反応できなかったセシリアに小首を傾げたラウラはズいっと手を出す。

「よろしく頼む、というとき日本ではこうするのではなかったのか？」

「いえ、はい、そうですね。よろしく願いますわ」

「ああ、そのついでに私の人物像でもなんでも見てくれたらいいさ。好き嫌いなんでも聞いてくれ、答えられることは答えよう」

「ええ……もう現在進行形で上書きされてますわ」

「ん、そうか？」

クラス代表決定戦のときに実感したが改めてセシリアは思った。

——やはり思い込みや噂だけからは人って判断できませんわね……人を見る目、自信なくしますわ。

16. 気持ちの余裕

IS学園はトップクラスの教育機関であり、当然教育の主体となるISに関連した施設も多く存在している。

そのなかには実践的な訓練を行うアリーナも含まれ、またそのIS本体の整備を生徒が行えるよう整備室も用意されている。

「おっ邪魔、しまーすー!」

そんな今は人気も活気ひとけのない放課後のIS整備室に、ひとりの二組代表鈴ちゃんがやって来た。もう人気も活気もひとりで補うようなテンションで扉をズツパアン! と開けてやって来た。

部屋の隅で工具が地面に落ちた音に人が動く気配。室内電灯を適当に平手を叩きつけて点けた鈴は、その気配の方へとズカズカ向かっていく。

「さらさら簪ってアンタ?」

「えっ、誰……? な、なにか私に用?」

「もち! アンタ探して校内駆け回ったんだから」

「なんで……会ったことないよね?」

「ないわね!」

サラサラ簪、ではなく正しくは更識簪。トーナメントに向けアリーナを使用する生徒が多いなか、黙々とISの整備をしていた彼女。驚きから少しズレた眼鏡を直しつつ風鈴音に向き直る、が視線は合わせないまま。

そんな様子も鈴は気にせず前置きも取っ払い本題に移る。

「次のトーナメント、あたしと組みましょ!」

「えっと、ごめんなさい」

「考慮の余地なく振られたア!?! あー、まあ嫌なら仕方ないわね」
「その、そうじゃない。風さんが嫌とかじゃなくて、私の専用機はまだ出来てすらいないから」

「ああ、一夏と同じ倉持が担当だっけ。アイツの機体に人手を裂きすぎたーって話だっけ? それなら知ってるわよ」

鈴の言葉を受け、俯きがちに逸らされていた視線は更に下を向く。

彼女は日本の代表候補生であり、本来であればISが完成していないという事態は異常である。が、それを凌ぐイレギュラーによって彼女のISは未完成のままとなっている。

倉持技研、それが彼女の専用機開発元であり——白式の表向きの開発元。世界にふたりという男性操縦者の専用機、そちらに人手を回したことで簪の専用機が後回しにされた。

というのも事実だが、それだけなら今も未完成なのはおかしい。既に4月の時点で一夏は白式に乗っており、なら簪の機体に急ピッチで取りかかっているはずなのだ。だが実際はそうなっておらずらつまり原因はそこだけではない。

「そうだけど、それだけじゃないの。私が、自分で造り上げるって言ったから……それで未完成のまま無理を言っつて貰ってきたの」

「ふーん、なんで？」

「ねえさ……ううん、貴女に言う理由がない」

ふいっと顔を横に向ける簪。

今まで気弱そうに下に向けられていた視線と声には明らかに険が入った。その話題は簪にとつて触れられたくないところであり、その反応からは明確に拒絶が発され——鈴は読み取る気もなかった。

「えー、教えなさいよおー。ねえさつて、なにさなによなんなのよー！ 言いかけたなら吐いちゃいなさい！ ゲロと愚痴は吐いた方が楽よ！ 笑わないとは言わないけど絶対バカにはしないわよ！」

「ここで笑う可能性を否定しないの……？」

「しないわー！」

「……やっぱり、嫌」

「ちえー、ならそれは言わなくていいわ。だからアタシと組みましょー！」

簪の頭に疑問符が浮かんだ。専用機も完成してないから組めないと断ったはずだ。なのに何故未完成なのかという話題から一周回って元の話題に戻ってきた。

ツーツと嫌な汗が簪のほほを伝った。この目の前の少女はたぶんきつと、簪の苦手なタイプだ。あの万能な姉と底無しに明るさに底抜

けの話の聞かなさがダブって仕方ない。

「だ、だから！ 私の専用機は！」

「知ってるわよ。でもほら、パツと見たところ大枠は出来てるし稼働試験がてらとかどう？」

「し、試験がてらって……こんな組みたて途中みたいな機体で出たら、途中で止まるかもしれない」

「まあ、そうよね」

「それで、凰の足を引っ張るだけになる、から他の人と」

「仲間が窮地に立たされたからって、それを足手まとい扱いするほど腐っちゃいけないわよ。あたしが聞きたいのはあたしと組むのが嫌かそうでないか！」

ピシャツと話を止め、ただ鈴が聞きたいことを簡潔に伝える。

未完成とか足引っ張るとか他全部は鈴にとつてどうでもよかった。簪がオーケーしてくれるなら一緒に頑張るし、嫌だと断られたら気持ちツインテールがしよげながら去るだけなのだ。

簪からすればその質問への返答が難しいわけだが。元々稼働試験がてら出るか考慮はしてた。けどペア戦となれば相手に迷惑もかかる、自分のデータ収集のためにそうなるのは気が重いのだ。けど目前に迫る鈴はそれを知った上で申し込んできて、でもやっぱりなんか釈然としなくて。

「うっ、うう……そっ、そもそもなんで私なの？」

「え、代表候補生で会ったことないのアンタだけだし、ちょうど良い機会かなーって。話してみたかったってのもあるし」

「そんな理由で……」

そんな理由と言われども、鈴からすれば大真面目だ。目的のための手段として代表候補生となり、さらに優秀な成績を叩き出したからこそ専用機を手に入れるに至った。

そして日本に帰ってきて、一夏と再会できた。鈴としてはそこで満足で、もうなにもしなくていいやってなものである。

だが、そこで仕事をしない人間が代表候補生の座にいられるほど甘いものでもない。国もそんな人間に第三世代の専用機を貸し与え続

けるわけもない。伊達に世界最大数の人口を有しているわけではなく、鈴が駄目なら実力が多少劣ろうとも次がいるわけである。その“多少”を詰めさせないのが鈴でもあったわけだが。

とそんな諸事情も含めたこれらが、鈴が全く知らなかった日本代表候補生である更識簪にペアを申し込んでみた理由だった。

ただ、簪にとつては“そんな理由”であつたが故に想像したくない可能性が脳裏をよぎつた。鈴が面倒がり説明をはしよつた適当な理由を口にしたが故に考えてしまった。

自分が更識楯無の妹だからではないかと。

姉は、同じ学園の会長である。学生という身でありながら既に国家代表となつており、更識家の当主でもある。

簪にとつては万能な姉であり、最も苦手とする人。端的に言えばコンプレックスが大きく、またひとつ姉に言われた言葉がずっと心に刺さつていた。

だから、つい口から溢れてしまう。

「……………私が、あの人の妹だから？」

「え、あんたつて兄か姉いたの？」

「えっ？」

「えっ？」

まあ、しかし鈴はそんなこと微塵も知らなかつた。そもそも簪のことを知つたのも最近だ。同級生の代表候補生くらい、同じ代表候補生として把握しとくかしらねーつて軽さだった。

中国に帰ることとなり、一夏との再会のためにISの代表候補生となつた鈴。そんな彼女からしたら他国のIS操縦者とかどうでもよかつた。

未だにクラスメイトに一組の専用機持ちと等、あと新しく知つた簪以外は代表候補生どころか国家代表すらまともに記憶してなかつた。織斑千冬のみは例外的に昔から知っているが、他は本国の国家代表くらいしか把握してない。

仕事しろ代表候補生と本国の連絡係によくせつつかれている。

「うちの学園の会長なんだけど……………」

「あ、あーシッテルワヨ？　さらさらチワさんだっけ？」

「名字すら違う、私の名字は更識」

「ごめんだけどそんな人微塵も知らないわ！　まだ同学年の代表候補生を把握してる途中なのよねー」

誤魔化す気もほとんどなかったのか直ぐに開き直って快活に笑う鈴、そんな反応に思わず小さな笑いが漏れる。

彼女の様子からすると本当に姉のことは知らないようだ。そう考え、安堵してしまった自分に少し自己嫌悪しつつ、簪は改めて鈴のペア申し込みをどうするか思案する。もしも、自分の目の前の少女が迷惑と思うことなく組んでくれるのであれば、簪にとっても悪くない提案ではある。

だからこそ、鈴の誘いへYesかNoで答えるために、簪にも聞きたいことがあった。

「……貴女の質問に答えるための質問、いい？」

「それならいいわよ、スリーサイズ以外まるっと答えたげるわ！」

「そんな情報は私も知らない」

「ならよし！」

「改めて言うけど、専用機は未完成。動力系も不安定だし、特殊兵装なんて未完成もいいところ。たぶん、現状なら訓練機で出場した方がまともに動けると思う——でも私はこの子で出る」

ここで、初めて真っ直ぐにふたりの視線が交わった。絶対に譲らないという、意地っ張りな意思がヒシヒシと伝わってきた。

鈴は楽しくなってくる。こうと決めたら意地でも通そうとするタイプは鈴のストライク。というか同じタイプ、たぶん喧嘩や口論になると譲り合わなくて長引く、でもそれもまたいい。一夏ともそうだった。

ふたりの性格はだいぶん差があれど、根本は似通った部分があるよ。うだった。

「いいー！　凄くいいわねー！」

「……未完成がいいわけない」

「そこじゃないわよ！　その意地っ張りな感じが、なんか意思弱そう

な雰囲気なのに芯は固いじゃない！」

「貶してるのか褒めてるのか」

「どっちでもないわ！ ただのアタシの感想！ 褒め言葉か貶されてるかなんて勝手に判断しときなさい！」

「……そう」

「そうよー、だから、うん。それでいいから組みましょう」

差し伸べられた手は、簪の好きなヒーローとは違ったが、つい手を取りたくなってしまうような。

対等に真っ直ぐ自分を見てくれている、仲間の手だった。そして、手と手は重ねられる。

「よろしく嵐さん」

「鈴で良いわ！ あたしも簪って呼ぶし……いいかしら？」

「うん、というかさつきから何回か既にそう呼んでた……名字覚えてなかったからでしょ」

「バレてたかー。ま、何はともあれ改めてよろしく簪！」

「こちらこそ、鈴」

ムツフー、と名前で呼ばれたことがかペアが決まったことがか、とても満足げな鈴だった。



「桐也すまんー、流れでシャルルと組むことになった」

「ふはは、寛大な俺は許してやろう」

「はっはあー、ありがたき幸せえ……！」

「ってことでちよつと土下座しようか」

「微塵も許さないじゃないか!？」

「冗談だつての」

「まあ、わかってるけど」

夜、一夏がシャルルと男同士で組んでしまったことを謝りに来た。課題やるついでに。

しかし、俺も運よく既にペアは見つかっている。謝られても困ると

いかいいつものバカみたいなのりで流すレベルでどうでもいい。見つかってなかったらちよつとごねてただらうけどな!

というか男同士じゃないんだよな。シャルルはシャルロットで、下半身のバベルは崩壊していて、上半身に双丘が隆起してんだ。なんか机でダレてるけど、課題の上に伏せている。

「桐也はどうするのさー」

「なんだ、垂れシャルル?」

「垂れシャルル……? や、ペアはどうするのさつて」

「もう見つけてるぞ」

「えっ!? 桐也そんなにペア組む友達いたっけ!」

「泣くぞ、泣くぞ。確かにフワツとした友人多いけどそこ決るなや」

枕を投げつけるが余裕で躲される。

事実、クラスで対一でそんな濃い交流持つてるやついないし。専用機持ちがそこそこ、そのなかでも部屋割り上の関係で一夏とシャルルが一番話すくらいだ。

「組んだのって誰だ?」

「箒さん、なんか一番に目に入ってから誘われたから尻馬に乗らせて貰ったぜ」

「あー、箒ならそんなこと言いそうだ」

「き、決め方が雑すぎない……? 勝ち捨ててる?」

「ズバリ優勝狙いだぜ」

シャルロットが呆けた顔をしがる。

「言つちやなんだけど、量産機二機で優勝狙いつて前代未聞だと思うな」

「そう思って過去の記録漁ったが、まー専用機持ちがいた年に訓練機で優勝した奴のいねえこと」

「だろっうねえ……ちよつと理不尽な話だけど基本的に技術があるからこそ専用機は渡されるからね。つまり機体スペックと技術に差がある状態での戦いになるんだ」

そうなんだよな、前に少し考えたけどあまりにも一般生徒の勝ちの目がゼロに近すぎる。きつと、そもそも一年生時には専用機持ちに勝

つ可能性自体を学園も考えてない。圧倒的とも言える差、それをバネにしてより研鑽させるため。いわば目標のひとつを定めさせるためのものじゃないかと当たりをつけている。

そこまでの差を見たら心がポツキリ折れるんじゃないか。なんて懸念もあるかもしれないねえがそこは超難関たるIS学園。上を見て燃えるタイプは多くても、諦めることは滅多にないということだろう。ただし、ここに向上心もなく入学した例外がいるんだけどな。

「で俺と箒さんだと勝ち目はないと?」

「ないとは言わないよ。でもあるものとして見てるならちよつと見込みが甘いかもしれないよ?」

「……そういや桐也の専用機持ちとの戦績ってどんな感じだった?」

「聞くと罪悪感に苛まれるかも知れないけど聞くか?」

「……やっぱいい、なんとなく思い出した」

「一勝他全敗だぜ! この頃は戦ってねえけどな。前は代表候補生相手だと半分も削れてねえよ!」

「いいって言ったのに何で言うんだよ!」

もちろん嫌がらせと八つ当たり。主に優勝が難しい理由が俺に集中していることを自覚しちゃったじゃねえかチクシヨウ。

「戦略とかあるの?」

「箒さんが頑張って、俺が箒さんの足を引っ張り、箒さんが超頑張る」

「あれ、いつから三対一になったの?」

「……箒なら、やれる!」

「嘘でしょ!」

「冗談だ」

シャルルも信じていたわけではないらしく、だよーと軽く流された。

というより、何気なく聞かれたがシャルルと一夏も敵なんだからまともな案があっても言うわけなからう。自然な雰囲気聞いてくるから恐ろしい。スパイより交渉人の方が断然向いてそうだとデユノア社さんよ。

「けど中距離のシャルルに近距離一撃必殺持ちの一夏か」

「バランスいいだろ?」

「ついでに僕は相手の動きに合わせてるのは得意だからね。今すぐでもそんなじよそこらの即興ペアより連携を取る自信はあるよ」

真面目に考えてみれば思っていたより、道のりは険しいなあ。さつき言われた通り見込みが甘かった、というよりはそもそも先を見透してすらいなかったただけだな。

他の専用機持ちペアも調べて箒さんと作戦のひとつやふたつ立てねえと即りタイアになっちまいそうだ、いやなる、むしろ嫌になる。やっべ、変な笑いが止まねえ。

「桐也、なんか笑みが気持ち悪いぞ……」

「へっへっへ、第三世代も専用機持ちも上等だコンチクショウなんか楽しくなってきたぜ」

「あ、駄目だ。これは変な方向にハイになってるな」

逃げる方向にズルズルいきそうな思考をテンションとともに引き上げて気合いの入れ直し。いくら今の実力が底辺どん底低空飛行中でも始めから足引つ張ると諦めてちゃ笑い種だ。なによりカツコがつかねえ。男の子に生まれたからにやっつけえ自分に手を伸ばしてなんぼ。

……まあ、妥協抜きでやるってのは諦め癪治すのにもいい機会だろ。

「そうら、頑張れ俺……!」

「自己暗示まで始めてる。課題先に終わらせた方がよくないか?」

「そっちは終ってる」

「はっ、早過ぎるだろ?! 俺まだ半分だぞ!」

「ハッハッハ、暗記科目の課題は得意分野だからな。もうだいたいパターン化して覚えてらあ」

「クッ、桐也は暗記系に関しては強いからなあ……計算の応用は俺より弱いけど」

「褒めて落とすの止めろや」

「だいたいウン百キロ出したISが停止する際の制動距離を出すのに、PICで打ち消すことが可能な慣性を含めて計算とかもうわけわ

からん。

代わりに基本的な技術とかは割りと覚えきった感あるから相変わらず得意分野と苦手分野がわかりやすい。一夏は総じて苦手というが本気でケツ蹴ってやらせれば並くらいは普通に取る。

シャルルは器用にも全科目優秀と言える点数を取りやが……つていうかシャルロットだった。そうだ、元が女で大手IS企業（絶賛経営困難）のテストパイロットがバカで務まるわけがねえじゃん。

そろそろシャルルとシャルロットの認識どうにかしないと本気で怒りそうだよな。

てか既にシャルルって呼び続けてると拗ねやがった。確かに望まずしてつけられた偽名が嫌なのわかるけどよ。俺のなかでシャルロットの顔はシャルルという名前でインプットされたから直しづらいんだわ。

覚えるのは速いんだが間違って覚えたときに、覚え直す作業が苦手なで仕方ない。くっそ、整形して入学しろとは言わんから化粧で人相変えるくらいして来いよ。

「で桐也はどうするんだ？」

「……なにがだ？」

「聞いてなかったな……十中八九他の専用機持ち同士も組んでくるけど対策くらい一緒に立てないかって」

「せっかく同じ男同士なんだしね」

「つつてもな、実力も戦闘のスタイルも違う奴らが同じ作戦立ててもな」

俺に至っては戦闘スタイルすら確立されてねえし。

「だから作戦じゃなくて簡単な対策、適当に駄弁りながらでもさ」

「わかった、それなら有益な情報になりそうだ」

「桐也も提供しろよ？」

「任せろ、勝ち星なしの俺からの情報楽しみにしてろよな」

「桐也の自虐が止まらないよ……」

ハッハッハ、こう言つときやある程度こつちから有益な情報出せなくても怪しまれんだろ。打算に打算を重ねた取らぬ狸の皮算用だぜ。

ま、どうにか狸捕まえて皮剥ぐ予定だがな。でっちー何気に今回は本気だぜ。

「うっし、俺も終わった」

「おつかれさん、消灯時間ギリギリじゃねえか」

「喋りながらやるとどうしても効率落ちるよなあ」

「でも集まらないと課題に手すらつけない」

「男って」

「ホント馬鹿」

無言で一夏とハイタッチ。

「男関係ないよね」

「遅くなると千冬姉に叱られるな。じゃ、おやすみ」

「だな、おやすみ」

「現実を見ようよー」

「消灯時間ギリギリという現実を見て俺は部屋に戻るぜ！ シャルル

もおやすみなー！」

「一夏が珍しく上手い言い逃れをした……また明日ねー」

一応の消灯時間まであと10分、余裕で帰れるだろう。

シャルロットに先に入っていいと言われたのでシャワーを浴びてベッドに転がる。うつ伏せなので視界には布団しか映らないが聴覚がシャワーの音を逃さない。

うん、これ健全な男児おのこには辛いツスわ。

世辞抜きに美少女な同級生と同室とか死ぬ、今ハニトラかけられたら一時の快楽に今後全ての人生投げ打つわ。

気持ちに余裕ができたらそこに性欲が滑り込んでくるとは。

ほら、親父も言ってた。誰に認められなくても自分が納得出来る選択をしろってな。この生き地獄を抜けるためにはやるしかないだろう。むしろ抜くためにはやるしかないだろう。やべえ、思考が絶賛迷子中だ。

「クツソ辛い……」

通信端末で『性欲解消方法』でググる。なんの検索エンジンかは置いておきググる。

手軽に出来て目星いものは筋トレ、単純だが一石二鳥だ。二鳥のうち一羽が性欲の解消つてのが泣けてくるがむしろそれが本命だ。

ついでにIS学園への入試や転入の際に一般的に行うことを調べてみた。

なにぶん俺はまともな入学じゃねえから興味本意で見てもればペーパーテストはもちろんのこと、ISを入学時点でどれだけ動かせるかのチェックに身体測定と身体検査まであるらしい。

俺もペーパー以外受けたがペーパーテストが一番の難関だろうから、やっぱ割りとズルい立場で恐縮だ。

ま、そんなことは置いておき身体検査の際にはスリーサイズも測るらしく、そのデータは学園のどこかに保管されるとかいないとか。

やつべ、またムラムラが止まらなく。さっさと走ろう。

「思い立ったが吉日というかマジで限界だ、今日の見回りが織斑センセでないことを願ってランニングすつかね」

寝間着はジャージだからそのままでもいいだろ。洗濯物は増えるが些細なことだ。

男子高校生の性欲を前にしたらだいたい些末な問題になってしまうからな。シャルロットの身の上問題より俺にとってには性に関しての問題がストツプ高だ、いやもう天井突き抜けてる。

「うっし、メモ書きでも残して行」

「と、桐也あー」

「なんだ？」

脱衣所からシャルロットの、ふにやつと困惑にまみれた声が聞こえた。シャンプーも石鹸も切れてないぞ、なんだ？

「た、タオル忘れたから取ってくれない……？ 上から二番目の引き出しに入ってると思うから」

——ブツ飛ばすぞ。

引き出しからバスタオルを取り出す、脱衣所の扉に投げつける。

盗んだバイクは無くとも俺は行く当てもなく、暗い夜の帳りの中へ。

性欲に縛られたくないで叫んで、たぶんわざとシャルロットを

入学させ、同室にした学園へと有らん限りの殺意を向けて。

逃げるように走り出した俺の思考は性欲から解放され少し自由になれた気がした。

ホントあの野郎ブツ飛ばすぞ……！ 野郎じゃなくて女^{アママ}だけどな

！

「ぜえー……ぜえー……」

頭がスツキリし身体の重怠さに膝が折れたのは夜中の1時頃。よく見つからなかったと思うし、2〜3時間ぶつ通しでよくもまあ走れたもんだ。もう引き出し開けたときにフワツと鼻孔をくすぐったシャルロットか柔軟剤かの臭いとか忘れた忘れた忘れた、忘れたんだよ。

いや、もう男子高校生と同室より本国に送還された方が安全なんじゃねえの……？

シャルロットの身の安全と俺の社会的地位のために、無茶でもなんでも解決しないといけない問題となってきた。おかしいな、シャルル転入時の外国人との同室への不安は何処にいったのか。今や性欲が不安のピラミッドの頂点だ。

「……しかし俺の頭の回転で腹黒な大人と交渉とか出来るわけねえし」

「口の回転だけでは難しいだろうな」

「そうなんすよねえ、だから現状維持が安定つちや安定なんですけど」

「だが安定は裏を返せば立ち止まっているだけでも取れるな」

「いやいや、止まってる間に進む術を探してるんですって」

「本当に口の達者さだけは上等だな」

なんか、いつの間にか会話が成り立ってるな………よし。

「実力も追いつけばベストなんですけど……それじゃあ、いい時間ですんでオヤスミなさい」

「このまま休めると思っているのか」

「……駄目っすよねえ」

いつから居たんだ織斑^{ヒト}センセ。こんな砂利道で足音もたてずに来んなよチクシヨウ。

「腹黒な大人との交渉、だったか？ 厄介ごとに巻き込まれたなら話してみるといい、力になってやる」

この学園で、いや世界で誰よりも頼もしいであろう織斑センセから助けの手を差し出された俺は——冷や汗が止まらなかった。

17. いい奴

身体は限界まで動かしたが、そのお陰で余計な思考は取っ払えた。頭の回転は幸いそれなり。しっかし、ヤバイ以外の感想が浮かばねえぞ。

「どうした、これでも私は教師だ。生徒が窮地に立たされたなら私はそれを助けよう」

世界最強の女にここまで助けてやると言われる幸運と不運。

シャルロットのことは学園も把握してると考えている。いるんだが万が一で被害を被るのはシャルロットで、所詮はただの高校生の想像の範疇を出ない。裏で色々画策されてるとか言われちまえばわかるはずもない。だから今はなんとか誤魔化したい。

元はと言えばアイツがタオル忘れたせいで、俺はこんな時間まで走ってたんだがそれは置いておけ。

「は、ハハッ、んなことあるわけないじゃないですか。ここはIS学園、そんな俺が困る事態に陥るほどヌルいセキュリティじゃないでしょう?」

「そうだ、だが何事にも完全などない。特にヒューマンエラーによる失敗は後を絶たんな」

「あー、そりゃよく聞く話つすね。バイト先で全裸になったり、虫を調理した写真をSNSにアップロードする人間性ヒューマンエラーの低さから来る失敗」
「……何か違うがそういうことだ」

呆れた視線を向けられるが勘弁してほしい。口は絶好調だが喋つていい、もしくは喋るべき内容と駄目な内容の選別で頭はパンク寸前なのだ。適当に関係ありそうでない戯言吐いてる自覚はある。

あと真つ直ぐ目を見ないでくんないかなあ、何か見透かされているようで落ち着かん。逸らすと何か隠していることがバレるのではないかと視線は合わせたままだが、しくったかも。

明らかに眼球さんが小刻みに震えてるのがわかるし、織斑センセはうつすら目を細め眉間にシワを寄せてる。そしてため息ひとつ、その様子には何故だか教師っぽさの欠片もなかった。面倒だなんて雰囲気

気だけ伝わってきた。

「勘だけ鋭いというのも考えものだな。お前が何か隠していることはわかるが、何かを何故隠しているかサツパリだ。困っていることもわかるが……脅されて隠しているわけでもなさそうだ」

織斑センセは不貞腐れたように地面に座り込み俺と視線の高さを合わせる。なんか、誤魔化しきれるか……？

「困りごとがあるなら相談しろ。私でなくても良い。友人……一夏の奴もそれなりに頼れるはずだ」

「なんか一夏は俺より真剣に考えてくれそうですねえ」

友人としての付き合いは短いながらも、一夏の人の良さはよく知っている。女難体質というかたまに殺意湧くハプニングだかトラブル起こしやがるのが妬ましいがそれはそれ。

それでも簡単に相談できる内容じゃないし、俺一人で決められることでもない。シャルロットは気遣いすぎな質だから、相談しようと言ったら了承しそうだが。

「転校してきたシャルロットも気遣いは人一倍だろう、アイツにでもいい」

「そつすねえ、アイツは気遣いすぎなところも……あ」

「ふむ、やはりデユノアのことだったか」

「汚ねえ!? 鎌掛けやがった!?!」

大人って、大人って汚ねえ!

普段は生徒のこと名字でしか呼ばねえのに一夏を名前で呼んでから、さらつとシャルロットを名前で呼んだあたり本気で汚ねえ! 何が勘だけ鋭いだ! 完ツ全に油断してたわ!

「いつから気づいていた?」

「ああーあー、やらかした……いつからって、いやもうそれ聞くってことは」

「ああ、女だと知っていて転入させた。それでいつから気づいていた」
「転入してから数日の間ですよ。なんか喉仏見えねえし脱衣所乗り込んだら女でした」

「私は数日で気づいたことを褒めるべきか、短慮に脱衣所を覗いたこ

とを注意すべきか……いや、それはいいだろう」

織斑先生は話す。シャルロットがシャルルとして入学させられた理由を、それを学園が通した訳を。

要約すれば、俺や一夏は狙われやすい立場。そして特に出路桐也は後ろ盾もなく狙いやすい立場。

なら出路桐也を中心に現在の男性IS操縦者の危機管理能力を測っておくべきだろう、という方針がIS委員会で出たらしい。

そして、そこで選ばれたのが落ち目のデュノア社。そつなく器用に物事をこなす同年代のテストパイロットがおり、条件次第で簡単に協力を要請できたんだろう。

条件は俺が一夏がそのテストパイロット、つまりシャルロットがスパイ、もしくは女と気づくまでにシャルロットが得られた情報をデュノア社が得るという内容だったらしい。

「ありがた迷惑とか色々言いたいけど、シャルロットが巻き込まれただけの立ち位置で泣けてくるんすけど」

「私もそう思うがな。まあ、シャルロット・デュノアが男装していたわけはそんなところだ」

「そつすか……そりゃいくら考えても学園にメリットがないわけだ」
ただ一夏と、主に俺が試されていたなんて思いつくかつての。

どうせシャルロット本人に理由を話してないのは本気で演じさせるためとかだろ。アイツたぶん裏事情とか知ってたらポロリしそうだし……小器用なくせしてウツカリしてるしな。

「出路、お前は どうしてデュノアの正体に気づいたときに直ぐに知らせなかった？」

「え、あー……友達ですし」

「それはシャルル・デュノアに抱いた感情だろう。シャルロット・デュノアとわかったときに、アイツはスパイでしかなかったはずだ」

ぶつちやけ初めは直ぐに伝えるかとかゴチャゴチャ悩んだ。けど、結局スパイしてたから学園に突き出して終わり、なんて割り切れなかっただけなんだよな。

それから一緒に過ごしても色々といい奴だなんて感想しか出てこ

なかった。

女とバレて、直ぐに色仕掛け^{ハニトラ}を掛けるような奴なら見捨ててたかもしれない。

性格が合わず、気に食わなければ切り捨てていたかもしれない。

不細工なら見て見ぬフリをしていたかもしれない。

けど、シャルロット・デュノアは正直でまっすぐで一緒にいて面白い、この顔面偏差値の高い学園でも引けを取らないくらいには美人な奴だった。

何でって言われてもアイツがシャルロット・デュノアだったから、俺は見て見ぬふりに納得できなかったんだと思う。

とかどう説明しろと。嘘を混ぜない程度に適当に言うか。

「友人をスパイだからって、割り切ってしまいたくなかった……とかそんなんですかね」

「割り切れなかった、か。随分と覚束ない理由だが報告書にどうまとめるか……山田君に任せるか」

「山田先生頑張って」

「安心しておけ、絶対にお前たちが不利になるようなことは書かんさ。山田君はな」

「山田先生超頑張って。あ、シャルロットってどうなるんですかね」
丸く収まった雰囲気あつて忘れかけてたが、そこが心配で誤魔化してたんだった。

学園が治外法権だろうが、学園側がシャルロットを強制送還させようとするなら三年間の猶予はお釈迦^バだ。

「ふむ、デュノアの役割は終わっているからな。アイツがしたいようにすればいいだろう。デュノアは学園の試験自体はしっかりと受けているからな」

「じゃ、そう伝えときます。よっしゃ、面倒な問題がゴソツと無くなつたぜ」

「それはよかったな出路。私も面倒事がひとつ片付いたことは嬉しい……で、お前はこうしてこんな時間に外に出ている？」

「……おっと、これは予想外の攻めだ」

性欲がヤバかったとも言えず明け方まで説教だった。

▽▽▽▽

翌日というより諸事情諸々により徹夜に近い今日。

箒に身体の疲労も抜けてないことが見抜かれたのか、予定していた放課後の訓練が無しになった。桐也は申し訳なきが尋常ではないので情報収集に明け暮れることにしていた。

そんな彼と廊下を歩きつつ寮へと向かうセシリアは質問に足を止める。

「わたくしの組んだ相手ですか」

「イエス、教えてくれ」

「いずれ自ずとわかる情報ですし、まあいいでしょう。ボーデヴィツヒさんですわ」

「……………」

「その、ギャンブルで全財産溶かしたかのような顔はなんなんですよ」
何気に一番厄介なタッグが結成されていた。

このふたりは散ってほしかつたつてのに儘ままならないと桐也は思う。

なにより接点もなかっただろうにと疑問を投げかければ、セシリアは接点がなかったからこそ今回を「接点」にしたと答えた。

「クラスメイトで同じ代表候補生、いつまでも無関係では味気ないでしょう?」

「そんなもんなのか……」

実は代表候補生故に他国の候補生ともパイプを作りつつ、得られる情報モを得る。そんな役目もあるのだが、それを口にするのは無粋だろうとセシリアは思いニュアンスを変えた。

それに情報でなくとも、かけがえのない友人モノは得られるかもしれない。高校の友人は一生の友となる。セシリアが読んだ日本文学に書かれていた言葉だ。

「それに鈴さんに至っては見知らずの四組代表を誘ったらしいですよ?」

「うっげ、そこも代表候補生で組んだか」

「デザートフリーパス狙いの貴方には厳しい状況ですわね。ベスト4ならくじ運次第ではなんとかなるかもしれないですけど」

「いや、優勝狙いなんだわ」

「……………今、なんと？」

口元へと手を当て瞳が揺らいでいる。そんなに動揺することかと嘆息する桐也だがセシリアは本気で驚いている。

彼は敵わないと思えば、自分で決めた達成点で満足するタイプだと今までの付き合いで知っていた。クラス代表決定戦でも思い返せばそうだった。一撃を入れる、確かにそれでも身の丈より大きな目標だった。でも勝ちを明確に諦めてもいた。

一見冷静に戦力差を把握している、だがそれを勝ちを諦める理由にもしている。そんな人物だった。

「…………そのうち叩いてでもその姿勢は直して差し上げようと思ってましたが、必要なかつたようすわね」

「え、何が？ 俺って何か叩かれるようなことしたか？」

「いえ、桐也さんも成長なさってることに驚いただけですわ」

「何気に失礼だな。一夏たちよか見えにくかろうが俺も成長してらあ、主に暗記科目」

セシリアが言ったのは学力のことではないが伝えない。伸び代は期待できないかもしれないが、またひとり本気で研鑽し合える友人が増えることは貴重なのだ。

つまり如何にも慢心しやすそうな目の前の友人を、現状不用意に褒める気はセシリアには更々ない。

「まあ、目指したからといって簡単には獲らせません」

「上等だ、今度こそ勝つ…………勝つから、うん」

「そこで自信なさげにならなければ格好つきましたのに」

ハツタリ効かすにも直視した現実が過酷すぎて語尾が下がる桐也だった。

しかし少し逸らしていた視線を戻し、桐也はついでのように聞きたいことを聞く。

「ああ、ちなみになんだが俺に合いそうな武器ってなんだと思う？」
「対戦相手となるわたくしに聞きますの？」

「いや、会った奴に見境なく聞いている。これと言ってしっくりくるもんが無くてな」

「はあ……そうですわね、使い方を把握しているものはどれだけありますの？」

「使い方だけなら割りと全般」

事も無げに答えられたその言葉に再びセシリアは固まりそうになるも思い直す。この男は単純なこと、暗記だけは人一倍に得意であった。他はなんとも言えないがそれだけは確かに目を見張るものがあった。

それに使い方を覚えていようと使えなければ意味がない。

「言い方が悪かったですわ。使える武器は？」

「ブレード以外は実戦じゃほぼ全滅だ」

この様だ。多少は扱えるようになってきた火器もシャルロットなどど比べれば雀の涙程度のレベル。桐也が棒を振るうように扱うブレードも一夏や箒と比べればまだまだ下の下。

「ってなわけで他人から合いそうと言われたものを片っ端から試そうかと思つてな」

「……あれです、桐也さんって馬鹿ですわ」

「何を今さら。そんでなんかねえか？」

「具体的なものはあげられませんが、そうですね。桐也さんにテクニカルなものは根本的に向いていないかと。そこを短期間でどうこうするよりは単調に単純に使えるモノを伸ばすことを選んだ方が得策だと思いますわ」

例えば、近接戦闘で使う刀。あれも刃筋を立てなければ効果は半減だ。刃の腹で殴るくらいなら元からハンマーでも使っている方が効果的。

そんなことをスラスラと律儀に語ったセシリアは、ハツとしたように言葉を止める。具体的なものは上げられなくとも少々話すぎたと気づく。

友人ではあるが今度は戦う相手でもある桐也。自分の考えを述べるとどうにも口の滑りが良くなりすぎると、セシリアは内心で少しばかり反省する。

「というのとはわたくしの個人的な意見ですわ！」

「いや助かる、サンキュ。今まで聞いたなかで一番参考になった」

「話し過ぎた気もしますが、お役に立ったなら何よりです」

その後は別れの挨拶も程ほどにセシリアはラウラの席へと向かった。

出路はと言えば、一度自室へと戻りシャルロットの不在を確認後、図書室へと足を運んでいた。なるべく早くに夜中のことを伝えたかった桐也だが、シャルロットがいなければどうしようもない。

そして訪れた図書室。一般文学から専門書まで取り揃えられている。なかでも当然ISに関する資料は多く揃えられており、図書室内の備え付けのPCで過去の大会や試合などの映像を見ることが出来る。

桐也の用事は主にその映像を見ることだ。さすがにこの頃、ようやく開発され始めた第三世代の資料は少ないものの、国家代表など実力という点で言えば十二分な資料であった。

「さすがIS学園って感じだな。大会の資料も結構ある」

欲を言えば特殊兵装の資料がもつと豊富であれば、と繰り返し思う桐也だがないものは仕方ない。

基本的にISのスペックや開発技術などは公開するものとされているが、そんな取り決め表向きでしかない。厳守されているならば、デュノア社も第三世代の開発にもたついで経営が傾くこともなかっただろう。

桐也が一番に目をつけたものは第一回モンド・グロッソの映像。織斑千冬と暮桜が零落白夜を駆使し世界を獲った試合だ。

参考にするには壁の高すぎる領域ながらも、世界クラスの打撃を剣撃を射撃を爆撃を見る。眼が追いつかないときにはスロー再生にし動きを覚える。そして動きの複雑さに頭の処理がパンクしたときには理解を諦め俯瞰する。

映像を俯瞰するというよりも寝不足からか意識がフェードアウトし始めた頃、閉館時刻間近を知らせる放送が鳴った。

「くぁ……何度か意識トびかけた」

学園で借りることが可能な武装のカタログや、先程まで見ていた映像を借り自室へと戻る。

今日もシャワーの音が桐也の耳に届く。一夏と訓練でもしたあとなのだらう。

しかし、眠気の波が意識の限界まで押し寄せていた桐也はベッドへと倒れ込むようにダイブする。かなり上等なスプリングで資料ともに軽くバウンドするも直ぐにフカフカ布団に身体が沈む。意識も沈む。

脱衣所から出たシャルロット、今日はバスタオルも忘れなかった。そんな彼女が目にしたものはベッドでうつ伏せに寝ている桐也だった。というよりも寝ているというよりはそこがベッドでなければ、行き倒れていると判断してしまいそうな状態であった。

恐る恐る近づいて見れば背部が呼吸に合わせて上下しているの生きていることは確認できた。

なんとなく息苦しそうで気になるので、出来れば仰向けに直したいシャルロット。軽く肩を押すようにして試すも端に寄っていく。

「や、やっぱり男の子は重いね……もう一回。よいつ、しよつ! あつ」

今度は肩と腰を両手で押したシャルロット。その甲斐かひもあつて桐也の身体はうつ伏せから仰向けに、そしてベッドから床へと止める間もなく、スルツと落ちた。鈍い音とくぐもつたうめき声が室内に響く。

「ぐっつぷ!?! う、ぐぁ……!」

「うわあああ!?! と、桐也ごめん! 大丈夫!?!」

初めに押したとき身体が端に寄っていたのがいけなかったことはわかる。下に落ちて痛いのもわかる。けど床だつて結構フカフカの

カーペットのはずなのに、やけに痛そうな声を出されシャルロットは余計に心配になる。

慌てたシャルロットがその姿を確認すれば、桐也の傍らに分厚いカタログが落ちていた。じたばたする余裕もないのか丸く縮こまっている桐也に当たったんだらう。主に押さええている脇腹あたりに。吐かなかっただけ上等だらう。

「ゴホツ、殺す気か……自宅でも味わったことのねえ強烈な目覚ましだ」

「ごめん……息苦しそうだったから仰向けにしようとしたんだけど」

息苦しいどころか息の根が止まりそうだった、と喉元まで来た言葉を桐也は飲み込む。割りと真面目に反省してる様子で軽口を叩くと本気に受け取られそうだった。

伝えるべき用件もあるため、珍しく空気を読んでお口ミツフィーなでっちー。俯いたシャルロットに気にすんなと声をかけ、取り敢えずシャワーの支度をする。

そして脱衣所に入る手前で振り向く。

「ま、いいや。それとシャルロットがシャルルだった件、なんか解決したわ。よし、シャワー浴びてくる」

「え……えっ!? ちょよ、ちょつと待って桐也! それってどういう、キヤー!?! 普通に脱がないでよ!?!」

「普通に脱衣所に入ってくんよ、信じられねえ」
「桐也がそれ言う!?!」

でもやっぱり軽く仕返しをせずにはいられない高校1年生男児であつた。

▽▽▽▽▽

シャワーを浴びた桐也から事情を説明された。でも、たつぷり20分かけて入らなくてもいいじゃないか、と思うのは私の器が小さいのかな?

今日の明け方まで帰ってこなかった理由はそんなことがあったからだったんだ……あれ、明け方まで帰れなかったのは説教されてたからだったけ？

ただ、私がそういう事情で男装してたことを明かすのは学年別のトーナメントのあと。急遽ペア戦に変更したせいで色々忙しいのと、予想外に桐也が早く気づいてしまったことが原因みたい。

でも、結局全部を桐也に任せちゃったなあ。丸投げするとか言ってたくせに、これじゃ私が丸投げしちやったみたいじゃないか。

「結果論だろ。俺も明確に解決する気があったわけじゃねえよ」
「でも」

「でもじゃねえっての。負け三昧のギャンブルにたまたま勝って帰ってきたクソ亭主に、泣いてお礼言うようなもんだぞ。さつさと飯でも行こうぜ」

「例えが酷い……あ、待ってよー！」

本当に面倒そうに答え部屋を出る桐也。慌ててパッドをつけ直して追ったけど、皆が周りにいる食事中に聞けるわけもない。桐也はいつもみたいに一夏と他愛ない内容を駄弁って楽しそうだし、なんだか連れ出せる雰囲気でもなかった。

結局、言いたいことも聞きたいことも胸中に抱えて、自室に戻るまでモヤモヤしたままだった。話しの続きをしようとしたら桐也が大きな欠伸をする。

「……くあ、今日はもう限界だ。伝えることも伝えきった、今日は一夏も来ねえって言ってたし……寝るわ」

いつもなら復習をしている時間だけど、本当に眠いみたいで桐也は不機嫌そうな顔をしていた。たぶん、眠すぎて目蓋を開けるのに苦労してるだけなんだろうけど。

……桐也のなかで本当にさつきの話しはあそこで終わってたんだ。「シャロットは電気つけといた方がいいか？」

「ううん、私ももう寝るからいいよ。あと惜しいけど私はシャルロットねっ。」

「うす……」

覚束ない足取りで電気を消しにいくものだからハラハラする。夜中まで走って明け方までお説教受けて主に体力がギリギリなのが目に見えてわかる……ベッドから落としたのがなおさら申し訳ないや。暗くなつた部屋で重力任せでベッドに乗る音が聞こえた。ベッド間の仕切りをコツソリ動かして覗くと、モゾモゾ動いてちゃんと布団に入ってるみたいで一安心。

でも、私の目は冴えきっていた。今の今までずっと心のどこかで考え続けていた問題が、知らない間に解決してたんだからそうもなる。ちよつとコンビニでお菓子買ってきたけど食うか？ みたいな軽さで解決された。

「桐也、ちよつといい……？」

「……もう寝てる」

「起きてるじゃん」

あの軽さで解決されると、我が儘とわかっていてもどうしても気になつてしまう。もう少し恩を感じさせるとまでは言わなくても、なんか色々あると思うんだ。

私が女とわかつた日だって、誰に認められなくても自分が納得できるようにって言ってたけど、どうして桐也は納得できなかつたのか。罪悪感以外に私を見捨てて桐也が後悔する理由があつたのか。

「図々しいかもしれないけど、今聞いておかないとずっと私のなかで引っ掛かりそうだから、教えてほしいんだ」

「大袈裟な……シャルロットにとってはそうでもない、のか？」

「うん、私の人生が変わるくらいに」

「……こちらクソ眠いときに、んな質問すんなよ。頭がシャットダウン寸前だぞ」

申し訳ないと思ってる、よ？

「そりゃ、お前がいい奴だつたしなあ」

「まず、それがわからないよ。僕はスパイだつたし」

「そーじゃなくてだな……あー、なんだっけ」

「桐也の脳ミソ頑張つて。もうちよつと、もうちよつとだから」

「……あれだ、性格とか性根とか顔とか、色々含めていい奴だつたつて

思ったから。中も外も不細工なら見捨ててたんじゃね？」

か、顔もつて……普通に褒められると普通に照れるんだけど、凄く男の子として素直すぎる理由がぼろぼろ溢れてるよ。私のお母さんも綺麗だったから、それをちゃんと引き継げてたらそうかもしれないけど！でも眠気に負けて桐也のお口のチャックが大変なことになってるよ！

私としては嬉しいけど申し訳ない。でも、いい機会なのでなにか聞きたい。うーん、いざ聞くことって考えるとなかなか思いつかない。

早くしないと桐也が寝ちゃうと思うていたら桐也から話しかけられた。その声はとても眠たそうでどんな感情が籠められたかわからない声だった。

「シャルロットは、学園にいいことを選んでよかったか？」

「……すつごく良かったよ」

「そりゃ、上々だ」

「うん、これからの学園生活が楽しみ」

それから返事を待っていると寝息が聞こえてきた。ちえ、いろいろ質問し損ねちゃった。

桐也も、私がどう思ってるか気になってたんだ。お人好しというか、本人は絶対に否定するだろうけど普通じゃない。いい意味か、悪い意味かはわからない。でも私にとっては嬉しい普通じゃなさだった。

桐也曰くだけど、迷わずに助けることを選択するって一夏も本当なら普通じゃない。普通じゃないことを当然のようにしてくれるって衝撃的なんだよ？ここに来る前、嫌な意味でそれを味わっていた私からしたら尚更なおさら。

迷っても保身より会ったばかりの人を優先するのはおかしいんだって気づかないんだもんなあ……戸惑っちゃうよね。すごくすごく嬉しかったけどさ。だから桐也の本音が聞けて安心できた。

うん、ぶっちゃけてくれた話でだいぶスッキリした。えへへ、いい奴だって……や、そうじゃなくて！

「いつか桐也が困ったときには、今度は私が力を貸すからね」

あと、口にすると嫌がるだろうけど——ありがと。

18. 苦勞人

「総括して言うならば、下手くそだな」

「すんませーん！」

近接格闘のための武器をあたりに散らかして放つたらかし青く広く大きい空を仰ぐ。

多種多様にわたる武装を試すため、箒さんと手合わせを行うも結果は散々だ。そもそも生身で扱う武器を模して作られているISの武装を、生身で扱えないのに直ぐにまともに扱えるわけがない。っていう言い訳、普通に難しく出て来ねえわ。

「強いて言えば突撃槍ランスや旋棍トンプアーがマシだったかもしれないが、あれなら刀と変わらん」

「だよなあ。全部を棒切れ振るうように使ってたからな」

齒に衣を着せることのない言葉と打鉄のブレードにズバズバと斬られ続けて数時間。

箒さんとの打ち合いを始める前には「小学生が棒切れを構える姿に似ている」と言われ、打ち終えたあとには「その武器を扱う才はないな」と断言されてきた。

自覚はある。扱えないわけじゃない、ただ扱えるだけだった。ナイフは人並みに使えるが、戦争屋のように音もなく人を殺せるほど扱い方が秀でているわけでもない。それと同じ理屈だ。

きつとブルーティアーズのビットも浮かせるだけで撃つことは大抵誰にでも出来る。ただ、セシリア並の戦闘は出来ないし、出来る奴なんていないに等しいはずだ。

一般的な扱いまでほだいたい人並みに出来る。けどそれは武器として使えていることにはならねえ。

「努力すれば秀でるものもあるかもしれないが」

「トーナメントには当然間に合わねえ」

「そうだ」

武器カタログをスライドさせてみるが、どうにもピンとくるものは無さげか。トンファーみたいな際ものがあつたときにはテンション

が謎に上がったんだが、それも棍棒みたいな扱いしかできなかった。トンファークックやってやろうか？

「もうIS用バットとか置いてくれねえかな。あれって殴ればいいし。セシリアさんに言われたみたいになんて簡単なもんの方が、絶対俺に合ってるわ」

「残念ながらそんなものは学園には置いていないな。旋棍よりマイナーな武装が載ったカタログにもない」

「そんなカタログの存在を俺は知らなかったぞ……うっわ、モーニングスターとか誰が使うんだよ」

「ふむ、小太刀まであるのか」

と、そこでひとつの武装が目についた。なんというか無骨で原始的で扱いは単純そうなくせして、殺意だけは犇々ひしひしと伝わってくる。これだ、コイツがいい。

「いいのではないか？ これなら槌ほど振り回されることもない」

「何よりも扱いがわかりやすい」

「では織斑先生か山田先生に武装の貸し出し申請に行くでしょう」

それぞれ打鉄を待機状態に戻し、倉庫へ返して申請用紙の記入のため教室に戻る。この際だ、他の武装も幾らか借りておこうと記憶のなかで印象深いものを書き上げる。箒さんも結構な枚数を書いているが武芸に長けてそうだしな、多種多様なもん使えても不思議じゃねえ。

教務室にいた山田先生に貸し出し申請を出すと、驚くほど簡単に借りることができた。倉庫の奥で埃を被るレベルに使われていなかったらしい。

「男の子ってやっぱりこういう武装が好きなんでしょうかねえ？」

ほわほわしながら山田先生にそんなこと言われるが、他の武装の扱いが下手だからそれにしたとは言えなかった。箒さんの哀愁漂う視線が痛いし、今こそ空気読まずに本当のこと言ってくれよ。変な空気の読み方しなくていいんだよチクショウ。

ついでに他にもいくつかトーナメントに向けて使用申請を出す。一般的なブレードや初期装備的な扱いをされている銃器以外、もしくは

はそれ以上を使いたい場合には必要な書類だ。早めに出さなければ競争率が高いものは無くなりかねない。

笑顔のままペラペラと用紙を捲る先生の顔が最後の用紙で凍りついた。

「これ、これも使えますか……？」

「男の子ってそういうの好きなんですよ」

「……わか、りまし、た」

とても辛そうな顔をされて申し訳ない。シャルロットの件も織斑センセ曰く、山田先生が奮闘する予定らしいし余計に申し訳ない。けどそんなこと微塵も気にしない箒さんが更に書類を出す。

「あの、これは……？」

「武装の貸し出し申請です」

「ブレードは初期武装として登録されてるんですけど……」

「足りません」

捲り捲られる申請用紙に書かれる武装はほとんどがブレード。それも全てが括弧書きでなるべく刀に近いものと書かれている。多様もクソもなかった、とんだサムライガールだ。

笑顔を崩したいけど、他に適した表情も思いつかないので笑顔が張りついたまま、といった風な山田先生。

「その、言いにくいのですがいくらブレードでも、これだけの本数は拡張領域に収まらないかと思えますけど」

「弁慶は生身で1000本の刀を集めようと思いました」

「え、ええー……」

まとめて背負って戦うつもりかよとツツコミを入れたくなった。なんとなくそこから何をする気か想像がつかないでもないが、今の山田先生にそこまでの余裕は無さそうだ。

先生の反応から言葉のキャッチボールに失敗したことに箒さんも気づいたようだ。少し思案し新しく言葉を発した。

「収まらない分は元から持っておきます」

「後付け武装として持っておくということですか。でしたらいけなうもないでしょうけど……はあ、わかりました。申請しておきます。で

も、さすがに本数が減るかもしれないことは覚悟しておいてください
ね！」

「ええ、ありがとうございます」

「なにかとご迷惑お掛けしてます、ありがとうございます」

もういいですよやってやりますよー！ とプンプンしてる山田先生に揃ってお辞儀をして教務室から出ていく。

いや、もう入学したときからお世話になりっぱなしだ。一夏と揃ってIS知識空っぽのおバカふたりの補習に最近ではシャルロットに関することとか。代表候補生ふたりを完封できるほどに強い人なのに、とても接しやすい。シャルロット関連は別に俺悪くないけど。

まさかIS学園に入学して先生へ尊敬の念を覚えるとは人生わからんもんだ。

「……あれ、なんか思考がちよつとばかしジジ臭くなったぞ？」

「一夏に影響されているのではないか？ 一夏は健康面に関してなにかと考えが年寄り臭いからな」

「確かにそう言われりやそうかもしんねえ」

「しかし、あれでいて家事も出来る」

「元女子高で男子高校生らしさを考える」

いや、一緒にバカやつてるあたりは普通に俺と一夏に大差ないけどな。家事が出来て、ときに爺臭い思考をする男子高校生はモテる、わけねえ。文末にただしいケメンに限るって付くの知ってんぞ。

「さて、武具を用意したなら次は策を練らねばな」

「正面から叩つ斬るとか言うかと思ってたわ」

「貴様を袈裟斬りにしてやろうか？」

素直に謝った。表情も声音もフラットで変化ないから、本気か冗談かわからねえ。

箒さんは謝罪に満足げに頷いた。

「そこで桐也よ。お前は単純な暗記なら得意だったな？」

「ん、ああ。ゲームの長ったらしい必殺技コマンドとかも一発で覚えてたぜ」

コマンド覚えようが、指が追いつかなくてボロ負けだったんだけど

な。

「では身体に覚えさせるだけか……ふむ、喜ばしいことに作戦をたてる時間は存外取れそうぞぞ」

「待て、ちよつと待て」

「取り敢えずこの武装についての扱いを一晩で覚えただけ覚えろ。そうすれば、明日から私が身体に覚えさせてやろう」

「待って。いやな、やるけど、けど心の準備」

「安心するといい。戦いは実戦に勝る学習はなく、篠ノ之は実戦向きの流派だ」

安心だなあ、おい。ここに来て箒さんのマイペースが出てきやがった。問題は俺にとつてハイペースなことだ。あと篠ノ之つて流派だったのか、初耳だ。

まあ、あの単純な武装なら使い方の暗記くらいやってやらあと意気込める。しかし、身体に覚えさせるとか一歩間違えれば魅惑的な言葉が、今は恐怖でしかねえよ。

——剣道場で一夏と箒さんが打ち合っているのを眺めていたことがある。竹刀が縦に裂けるって始めて見た。逆胴で風ぎ払われた一夏が、むせる暇なく安らかに意識を落としたのを真横で見っていた。というか一夏が真横まで転がってきた。

「……………遺書つてどう書けばよかつたか知ってるか？」

「血文字で嗜めるか？」

「それ遺書じゃねえ、ダイイングメッセージだ」

「まあ、血ヘッドを吐くくらい覚悟で挑めということだ」

今日はこれ以上することもないかと、別れの挨拶をひとつ残して箒さんは食堂へと向かった。飯には早い気がする。

しかし、明日からの真面目にしんどそうな鍛練を思うだけで気が滅入る。いや、気落ちしているといい方向に考えがいかねえし、IS学園最底辺を走る体力改善の良い機会と考えることにしよう。

シャルロットがなんかメニュー組むとか言ってた気もするが、結局強制力がねえと俺つて中々やらないからな。うん、良い機会だ。

「……………けど血ヘッドは吐きたくねえよなあ」

「あらア、暗い雰囲気まどつてるわね。女の子ならハグしたげたけど、男の子ねザンネン！」

「あー、ミスト先生じゃないですか。なにか御用ですか？ ハグる？」
「出路くんがテンション低いし励まそうとしたんだけどオ……ちよつと台湾に行つて性転換して来きましょ？ そしたらハグで慰めたげるワ！」

すつとんきようなことを言うミスト先生、目が若干マジっぽいのが怖いわ。ハグは男の子じゃ問題になるからこれで解決でしょ？
じゃねえんだよ。むしろ問題が多発してるわ。

「まア、ジョークジョーク、半分ジョークよ」

「それでも半分なんすか……それで結局どうしたんですか？」

「ンーン、実は用事はないのよネー。ドンヨリ空気が読めたから、チヨット換気してみただけ！ 気が晴れたならグツドよ、バイイ！」

ミスト先生は投げキッスを残して素早く去っていく、というか普通に廊下を走っていく。嵐のような人つてのは、ああいう人を指すのか。

けど本当に気は紛れた。あの先生も軽い調子だがやっぱり大人で、知らない間に気をほぐされてる俺は当然ながら子供か。山田先生とはまた違う親しみやすさに気づかいの上手さがあつて、学園に来てから教師つて職への株がぐんぐん上がっている。

だから駆けていったせいで、織斑センセに叱られているミスト先生は見なかったことにした。

▽▽▽▽

トーナメントが近づく休日の夕暮れ時。男子生徒の呻き声がよく聞こえてくるなどの噂が広まるこの頃。

ラウラ・ボーデヴィツヒは悩んでいた。強さとはなんなのか。理不尽なまでの混じりけのない純粋な暴力テロル、かつてはそう考えていたが違った。

——けど弟を語るあの人はそんな単純なものじゃなかった。

手には缶コーヒーをもてあまし、プラプラと揺すりながら考える。憧れとも言える人を真似て買った方がいいが苦すぎて飲めない。せめて微糖、いや背伸びせずにカフェオレにすればよかった。

そもそも、そんなことを真似たとてあの人になれるわけでもないし、なりたいわけでもない。ただ、織斑千冬という理想の強さに近づきたいだけだ。

「難しいな……にが」

軍人気質なのか根が真面目すぎるのか、中身が入ったまま捨てる気にもなれない苦い汁を啜る。やはりどうしようもなく苦い。思考まで苦味に染められていくような気がして頭を振った。

本国の黒ウサギ部隊の副隊長を務めるクラリツサが言うには、守るべき者がいる人間は強くなる、らしいがそれならばラウラも当てはまる。軍人であるラウラは国の民を守るべき立場だ。しかし、織斑千冬にはほど遠い。何が違うのか？

「私が守るのは国民とはいえ見知らぬ誰か。教官が守るのは家族……そこか？」

「死ぬ、心が折れるとかいう前に身体が死ぬ……お、ラウラじゃん。ういつす」

「……出路桐也か。なんの用だ？」

「HP回復がてら屋上に空気吸いに来たら、コーヒー片手に黄昏る同級生がシジュールで話しかけざるをえなかった」

どっこちらせー、と適当な距離を保って座った。風船から空気が抜けるかのように息を吐き、桐也は全身の緊張を解く。1mmも動きたくねえという本音とともに、隣に人がいる状態で無言になるなんとも言えぬ落ちつかなきが彼に到来していた。

ラウラにもそんな空気が伝わったのか、行き詰まっていた考え事をやめる。適当に雑談でもして、一度思考をリセットするのも悪くはない選択に思えた。むしろ、本国からは出来れば男性IS操縦者とは適度に交遊関係を持つとも言われている。

私怨が含まれ接したくないもう一人はさておき。

出路桐也についての情報。わかっているのは口の達者さと単純な

ことをさせれば人一倍、IS 操縦は並み程度で身体能力は並み以下。秀でたところがないわけでもなく、劣るところがないわけでもない。ある意味、平凡の一例としていい存在ともいえる。

チラリと桐也の手に持つミルクティーに視線を送る、羨ましい。そんなことを思ってるうちに桐也が先に口を開いた。

「セシリアさんとの練習はどうよ？」

「可もなく不可もなく……情報を引き抜くならもう少し口先の前に頭を使うといい」

「教えてくつださい！」

ノリと惰性で動き、ベンチの上で器用に正座し頭を下げ、情報を引き抜こうとする桐也。

「違う、そうじゃない。頭を下げるという意味じゃないんだ。物理的に使うな」

「ハツハツハ、ワンチャンそれで教えてくれりや儲けもんだと思ってな」

「ふん、普段から見ているくせに何を今さら聞きたいのだ」

「……ばれてらあな」

ラウラとセシリアの練習だけではない。専用機持ちの練習を時おり桐也が覗きに来ていた。そんなことをラウラが気づけないはずもなく、ジト目を向けるが掠れた口笛を吹かれる。

「見ているならわかるだろう。寄れば私が落とす、離ればセシリア・オルコットが撃ち落とす。それだけだ」

「わかりやすいのには厄介だよなあ」

「私たちはこの学年では強者に位置する。ならばどんな手を使っても厄介になるのは必然だろう」

「そりやそうだ」

あつさりと自分ラウラが強いと認める桐也に眉を潜める。セシリア・オルコットが謀たばかったわけでないのなら出路桐也、篠ノ之箒の両名は優勝を目指しているはず。なら他人を強いと認めることは目標の放棄に繋がらないのか。もしくは大変不本意なことにおちよくられているのか。

特に最後の可能性に眉間のシワを濃くしながら、浮かんだ疑問をそのままぶつける。ミルクティーのプルタブに指をかけていた桐也は動きを止め——至極不思議そうな顔をして首を傾げた。

「別に実力が強いからって100%勝てないわけでもないだろ？ 例えば機体が勝つていれば、実力が下でもなんとかなるかもしれないねえし」

「だがお前は機体も量産機だ。なら何が勝っている？ 運とでもいうのか？」

「うんにゃ、そこはこれから考える。ま、箒さんと頭捻って精々良い作戦でも練っておくさ」

道化を装って油断を誘っている。そんなわけでもなく、今の桐也はラウラから見て恐らく素だ。

しかし、実力差を見ずに樂觀視する人間でもなかったはず。入学後すぐのセシリア・オルコットとの試合では一矢報いることを目標に、身の丈に合わせた考えをしていた。

だからラウラにはわからない。どうして勝つつもりでいられるのか、出路桐也にとつての強さとは何なのか。

「出路、お前にとつての強さとはなんだ？」

だから問う。わからないことは素直に聞くに限る。愚直とも言えるラウラには回り道をするつもりはなく、する術も知らない。答えてもらえるならそれで解決、駄目なら吐かせる。

やや物騒寄りなラウラの思考を知るはずもない桐也は考える。強い奴に強さを聞かれるとか遠回しな苛めかよとか、むしろ哲学の域に踏み込みそうな話だとか。

ただ、質問は桐也ジブンにとつての強さ。なら素直にそれを伝えれば良いかと大半の思考を破棄した。

「九死に一生を得るといふ困難を九度乗り越える。一万回に一度といわれる奇跡を、一万回中一万回成し遂げる。それを出来るカッケー自分を肯定する奴」

「自分を肯定する……？」

やろうとすることに出来ない未来ヴァイジョンが見えるなら、それはきつと出

来るって未来を否定する弱さがある。そんな弱さを物ともせずにかツケー自分で在れるつてのが強さだと思う、と桐也は語る。

そんな言葉にラウラは肯定とも否定とも取れない、あいまいな反応しか返せない。

「それなら、考えようによつては誰でも強く在れることにならないか？」

「そうだな。でも逆に絶対的な強さつてのものないんじゃないの？」

織斑千冬をラウラは一番に思い浮かべた。だが、かつて弟である一夏を拐われたときに守れなかったという、後悔が滲む言葉をドイツで聞いたことも同時に思い出した。

ラウラが今まで見ていた強さは他者を押し伏せることの出来るテロル暴力。しかし、桐也が語る強さは誰にも曲げられない確固たる自分を持つこと。

そこがようやくラウラにもわかってきた。桐也はラウラの既知である強さじゃなく、どう在ることがカツコいいか。そこで語っている。

ただし、桐也からすれば話をうやむやにしようとしているわけでもない。かツケー自分であることが強くあることとも考えていた。

だからこそ、出路桐也は自分を奮い立たせるときにはかツケー自分を思い描いてきた。

「てか客観的な強さとか知るかつての。かツケー自分を肯定して肯定して、肯定に肯定を重ねる！俺にとつての強さはそういうもんだ」「ならば、暴力の有無は関係ない？」

「や、普通にあると思うぞ。ただ俺はそれだけある奴を強いと認めたくないだけで」

「……なんというか、お前はもつとリアリストかと思っていた」

「そんなに現実見れる高校生がいてたまるかつての……こちとらちよつと前まで一般人だぞ」

「ふっ、それもそうだ」

実際、現実を見ていたというより初めから諦めていただけだ。リアリストなら実力のなさを鑑みて既に鍛えるなりなんなりしている。

桐也はそんな内心の吐露を飲み下し肩を落とす。

この頃はトーナメントに向け、リアリストでなくとも箒とのトレーニングに励んでいるがしんどさしかなかった。努力するってしんどいなーと他人事のように思う日々である。幸い血ヘドはまだ吐いていない。

「画一的な強さはないということか。憧れが強すぎて盲目になっていたか……これでは教官に呆れられるわけだ」

「何に悩んでたか知らんが、織斑センセが呆れるとしたら一夏を蹴っ飛ばし」

「どれ！　これだけ話したんだ喉も乾いただろう！　このコーヒーをやろうー！」

「いや、これ飲みか」

「面白い話が聞けた、感謝する！　ではまた明日だ！」

押し付けられたコーヒーと未開封のミルクティーを両手に屋上で一人となった桐也。心なしかラウラの足取りが軽かったのは悩みに一区切りついたからか、コーヒーを上手く処理できたか。それはラウラのみぞ知る。

だが桐也もブラックコーヒーは飲めないし、かといって誰かに飲みかけを譲渡するわけにもいかず、なんだか捨てるのも勿体ない。

「これを『IS学園の代表候補生と間接キスができる缶コーヒー』としてオークションに出したら高値つくと思わねえ？」

「駄目だからね!?　　というかなんで飲みさしのコーヒーを貰ってるのさ！　これは捨てとくからね！」

「チツ」

「舌打ちしても駄目だからー！」

そんなわけでオークションに売却案をシャルロットに提案してみたが、あえなく缶コーヒーは投棄されるのであった。

「相変わらず仲いいよなあ」

「間接キスくらいでガミガミうるさいぞ、ムツツリシャルルめ」

「むっつ……!?　ほのぼの見てないで一夏も何か言ってよ！」

「そうだな、相手が気にしてなきや別にいいだろう。ムツツリシャルめ」

「あれ、僕が攻められる側になってる!？」

「やーい、ムツツリすけべー」

「すけべー」

「やーめーてー!」

19. 気持ち転換

ベッドに身を沈め、うつらうつらとした意識を保っていた。トーナメント本番を控えた前日の夜、一夏とシャルロットはシユヴァルツェア・レーゲンへの対策を練っている。トーナメント前夜にまだ考えてる時点で結構切羽詰まってるわけだ。

たしかに停止結界単体でもタイマンであれば、捕まった時点で詰みになりかねないというか普通に詰むので脅威となる。だけどペア戦になればいくらか脅威が和らぐんだよな。ま、ペアを組むのはラウラも同じわけで、その相手がセシリアさんってのが想像以上に厄介だった。

「僕がセシリアさんを押さえてるうちに、一夏は零落白夜でラウラさんを落とす……ってのは理想が過ぎるんだけど、やっぱりこれしかないなあ」

「停止結界もエネルギー運用で張られるわけだから零落白夜で解除できると思うんだが」

反語で終わってるあたり一夏もわかってんだらうけど一応伝える。ラウラは零落白夜を甘く見ることはねえだろ。

「それは無理だろ。ラウラは織斑センセに憧れ持ってるんだぜ？」

「つまり零落白夜は警戒されるし、停止結界でも雪片式型だけは当然外してくるか。なんとか意識から外せればなあ」

「まずは一対一に持って行って、一夏が止められたときにはセシリアさんからの被弾覚悟で僕が援護かあ……わかってたけど厳しい戦いになるね」

なーんて話をしてたせいか。トーナメント戦の相手なんざいくらでも組み合わせがあったらうに。

翌日、第一回戦は一夏とシャルロットのペアと、セシリアさんにラウラとの対戦になった。

対戦相手が発表されたモニター前で一夏が小さく拳を握った。な

んだかんだ初日のドロップキックを根に持っていたのか、別に理由があんのか知らねえけど望んでいた対戦らしい。

俺たちの相手は鈴ともうひとり専用機持ち。上手く当たってるのは作爲的なものか偶然か。結局どっかで当たるからどっちでもいいんだけどな。

「じゃ、応援してるわ」

「軽いなあ。そっちはそっちで鈴と当たってたろ？　勝算はあるのかよ」

「ねえから今から探すわ」

「見つからないまま終わるなよ？」

「ハッ、上等。一夏も精々踏ん張ってけよ」

「おう！」

対策が本気でないわけじゃない。対策という点では鈴よりもうひとりの更識簀さんが問題なのだが、そこは簀さんが任せろというので任せる。他力本願なわけではない、調べものとかはしっかりとやった。信用しているだけだ、断じて他力本願ではないっつらない。

それで専用機持ち同士の対戦はトーナメント表の両端に記されている。つまり初戦の次、再び専用機同士が当たるのは決勝になる。

「箒も、頑張れよ」

「いつだって道は示されているものではないのでな。己の手で切り開くのみだ——一夏、決勝で会おうぞ」

「ああ、約束だ」

少年漫画のライバルとでも言うのが一番しっくり来る会話。握手を交わして話し合う様子がそうとしか見えねえ……つかしいな、箒さん優勝したら一夏と一日デートじゃなかったっけ。もうちよつと甘い感じでもいいんじゃないの？

「あ、シャルおー……噛んだ、シャルル」

あつぶね、間違えかけた。最近ちよつと伸びているシャルロットの髪の毛も逆立ちかけた。めんごい。

「ちよつ、な、なにかな？」

「取り敢えずこのトーナメントが終われば、色々と一段落だろ。優勝

は渡さねえが頑張れよ」

「……うん、そこで素直に頑張れっただけ言わないのが桐也らしいよね」

「うっせ、さっさと一夏と勝ってこい」

「うん！ 行ってくるね！」

いってらっせー、と適当に手を振って見送る。一夏もシャルロットも適度にしか緊張した様子がなくてなにより。

なにせ——こちとらアホみたいに緊張してるからな！ 声震わせないだけで精一杯だったわ！ お陰で名前ミスるとかいう凡ミスしかけた。

「肩の力を抜け、と言ってもなかなか難しいものか」

「ま、生徒を初めとして外からのお偉いさんとかもいるらしいなあ。あとはこんだけの大舞台に立つのはなにぶん初めてでな。箒さんは慣れてんの？」

「剣道の大会で慣れている、というのは建前だな。私はそれほど他人を気にする性格に出来ていないのだ。私にとって知人と他人の別け方は極端でな」

「極端ってなんだ？」

「緊張しないよう人の顔を南瓜かぼちやと思えと言うだろう。他人の視線なぞ私にとつては常にそんなものだ」

「あー、そういう」

人が道端の小石を見て緊張しないのと同じ。箒さんにとっては他人からの視線や歓声はその程度の些事ではないと。だからこそ普段から一応の協調性は持ちながらも、これだけマイペースでいれるのか。

正直、それがいいことかはわからない。だが、今はそれがちつと羨ましい。

「だから私に出来るのはお前の緊張が解けるまでの間、鈴ともう一人、二人揃って相手をするこことぐらいだな」

「ん……んっ？」

「なに、精々ゆっくりと緊張を解すといい。私はいくらでも待とう」

こっんの……！ いつもはフラットな表情してるくせして今に限ってシニカルに「にやつ」と笑ってやがる。

一夏と幼なじみつつーけど箒さんはなんつか織斑センセの方に似てんだよな。軽い煽り方というかハツパの掛け方というか。

しかし、そもそも俺がそう何度も似た煽られ方に乗ると思ってるんだろうか？ 鍛練中も何度か同じようなことがあったんだ。

人間ってのは学ぶもので——まあ、乗るけど。俺、単純だし。わかってても乗っちゃう。単純さと口先なくなったら俺のアイデンティティの大半無くなっちゃうもん。

「ハツ、んなこと言って商品のフリーパス独り占めされちゃたまねえ！ 初っぱなから参戦に決まってるんだろ！ 候補生でもなんでも掛かってこいや！」

「ふっ、そうでなくては困るさ」

控え室の画面に目を向ければ、既に試合が始まっていた。進行状況は——

▽▽▽▽

シャルロットの持つアサルトライフルがレーザーに撃ち抜かれる寸前、切り替わった盾に弾かれた。直後、再び現れたアサルトライフルがセシリアに向けられる。牽制目的で放たれたであろうそれを難なく躲すセシリアだが表情は優れない。

ラビットスイッチ
「高速切替……なかなか厄介ですわね」

「ありがと！ でもセシリアさんに踊らされないようにするので精一杯だよ！」

「口がお上手ですこと」

「桐也のが移ったのかもね」

「それは……御愁傷様ですわ」

「本当に残念そうなものを見る目で見ないでほしいかなあ！」

軽口を叩きながらも高速切替。通常1秒から2秒かかる武装の量子構成をほぼ一瞬で行い、同時に照準を合わせる技術。

桁外れの状況判断能力を有していなければ不可能であり、それを行っているシャルロットにはそれがあるということになる。デュノア社はいいテストパイロットを持つていると素直に感心するセシリアだが、そう感心ばかりもしていられない。

シャルロットに直撃させることが叶わず、彼女にとつての本来の役目である援護がままならない状況なのだから。

「舐めていた訳じゃないけど、本当にキツツイなあ」

「貴方の想像より厳しいなら、わたくしが成長しているのでしよう。誉め言葉として受け取っておきますわ」

シャルロットの表情も優れなかった。セシリアが回避行動とともにビット操作ができないことが不幸中の幸い。機体の性能差をなんとか技術でカバーし互角。本当にギリギリの拮抗。だが、それでは駄目だった。

試合開始から約二十保有する武装、そのうち三つがセシリアに撃ち抜かれていた。

チラリと視線を向ければ一夏とラウラが戦っている。近接での戦闘故に早々ラウラも停止結界に意識を裂けない。それでも彼女が何枚も上手だ。これまでに三回一夏は停められた。

その度にシャルロットは援護射撃を撃つ。結果としてラウラの集中を削ぐ代償に隙ができ、高速切替する間もなくティアーズに撃ち抜かれ武装を失う。その度に軽くとはいえ被弾もしている。四方からの射撃にクリーンヒットを貰わないだけ上等なのだが武装も無限ではなく、シャルロット自身の集中力も無限ではない。

つまるところ、この膠着ともいえる現在。それは両者にとって芳しくない状況であった。

対して、一夏とラウラの戦闘は優劣がハッキリとしていた。一夏はこれまでに三度も停止結界に掛かり、シャルロットの支援がなければ危うい場面が目立っていた。雪片式型を持つ手だけは確実に外し、手首までを綺麗に停止させられた。致命的ともいえる場面を三度、一対一なら何度も落とされているだろう。

だが白式の動きに変化が起きていた。一夏自身に自覚はない。ただ、ラウラがそう感じていた。通じた手が徐々にではあるが通じなくなっている。動きのキレが増してきている。

「チツ、教官の弟と言うことか」

ハイパーセンサーは視界をほぼ360度全てに広げるが元々人間の視界には限界がある。見れば反応は可能だが、元より見えている光景より幾分の遅れが生じる。加えてラウラは眼帯をしていることにより生身の視界が狭かった。

コンマ1秒にも満たない僅かな反応のズレ。なんとなく反応が遅い、一夏には小難しい理屈を抜きにそれだけわかった。そして、それだけわかればよかった。そこを狙い、更に動きにキレが増す。小刻みにスラスターを噴かし、速度と起動を変則的に距離を詰める。

逆にラウラがワイヤーブレードでは反応しきれなくなり始めた。初めは様子見にと二本で捌けていたが、使用しているワイヤーブレードは既に最大数の六本。それでもジリジリと詰められていると解る。

ラウラは迷うことなく即決、眼帯を外し左目を露にする。ナノマシン移植処置に失敗した出来損ないの黄色の瞳、ヴォーダン・オージエ越界の瞳を衆目に晒す。

何に驚いたか一夏の反応が一瞬鈍りを見せた。ラウラはその驚愕の理由を気に止めず好機と判断。地を這わせたワイヤーブレードを白式の脚へと絡ませ、ワイヤーを巻き戻し己に引き付けるように地面に叩きつけた。白式を中心に地に亀裂が走る。

「ぐつ、ガフツ!?!」

「吹き飛ば」

AICのために集中する時間はない。しかし体勢を建て直す暇など与えない。シャルル・デュノアにフォローさせる隙など作らない。

ファイア閃光。

レールカノンから放たれた砲弾が白式の装甲を砕き、破裂した砲弾の衝撃は白式を後方へと弾く。生身の箇所を狙ったが砕けた装甲が散っていた。寸でのところで装甲で庇われたと理解したラウラは小さく舌打ちしそうになる。

本音を言えば、今の砲撃で決めたかったのだ。どんな相手であろうと半端に追い詰めるのは悪手。死に物狂いほど厄介なものはない。

そう悠長に考える暇もなかった。砂煙を斬り裂き白式が真っ直ぐ飛び出す。小刻みな変則さは捨て、比喻なく真っ直ぐ一直線にラウラの方へ。

ラウラにはこの期に及んで愚直に向かつてくる意図が読めなかった。なので順当に処理をしようとする。ワイヤーブレードを四方から、というには二手多く迫らせるも一夏は退かない。

退けば雪片式型一本しか持たない一夏は無防備になる。同様の手で一度A I Cに捕まった。だから虚を突くように、身を捻り肩から胴を見せない姿勢でワイヤーブレードの包囲網へと突っ込んだ。火花を散らし装甲を削られながらも、絡め取られないよう肩の装甲で、刀の柄で、脚で、弾き踏みしめ前進する。刀の間合い^{必殺}まで。

「うおオオオオオオ！」

「遅い！ 近づいても同じだ！」

ラウラは刀を持つ右腕が振るわれるよりも先に手を掲げ停める。そして、雪片式型だけはA I Cから外そうとし——右手に雪片式型が握られていないことにそこで気づいた。

A I C、停止結界は少なくない集中力を要する。タイマンでは反則染みた性能と思われるそれだが、意識が逸れば瞬時に解ける脆さも兼ね備えている。

それを十全に使いこなすラウラは、人並み外れた集中力を持っているのだろう。そしてA I Cを使うとき、その人並外れた集中力の大半はそこに注がれる。

だから一夏はそこに賭けた。月並みだが自分のピンチこそ最大のチャンス。学園に来てできた友人が好みそうな策ならぬ奇策。

肩から突っ込んだのはワイヤーブレードを弾くためだけでなく、本命は一瞬でも意識を雪片式型から外すこと。その隙に間合いに入つたならば、雪片式型を最大に警戒するラウラは、一夏を停めるためにA I Cへと意識を集中させる。

一か八かの賭けが通った。

——左手に握られた雪片式型の刀身から光が噴き出す。

青く輝く刃が停止結界を斬り裂く。停まったと思われた一夏が動き出す。

反射的に割り込ませたワイヤーブレードが斬り裂かれる。止まらない。突き出していた左腕を割り込こませるも縦に斬り裂かれる。止まらない。機体が零落白夜に触れたことで、レーゲンのシールドエネルギーは情け容赦なく目減りする。止まらない、停まらない。

ラウラ・ボーデヴィツヒは間もなく、負ける。憧れの織斑千冬が扱っていた絶対。ポツリと、憧れに負けるならいいかという思いが芽生え——踏み潰した。

ラウラ・ボーデヴィツヒが理想と、憧れと定めたのは零落白夜などというつまらないモノではない、断じてない。織斑千冬という在り方に惹かれ、憧れ、惚れ込んでいた。

織斑一夏という人間はそんなあの人に近い。物理的な距離ではなく、織斑千冬の心に最も近い。負けたくない。羨ましかった。望んでも立つことの出来ない位置に、平然と居ることの出来る弟という立場が妬ましかった。お門違いの羨望とわかっていても羨ましいという気持ちはなくならなかった。逆恨みと知っていても嫉妬せずにはいられなかった。

ラウラ・ボーデヴィツヒは織斑一夏に負けたくなかった。理屈ではない、純粋な気持ち。

「舐めツ——るなアアア！」

「なっ……!?!」

裂かれている左腕をグツと雪片式型へ押し込む。中の腕が無くなる可能性など今は考えられなかった。勝利を掴めない腕などくれてやればいとばかりに押し込む。

——ラウラの耳に幻聴か、力を求めるかという声が聞こえる。そんな問いに答えている暇はない。異変を感じるが構うことなどなかった。

押し込んだレーゲンの左腕は零落白夜に裂かれながらも、光の刃を越えて雪片式型の柄と白式の左腕を裂けたレーゲンの掌が掴む。こ

ここまで減ることのなかったシールドエネルギーは、この僅かな間に残り50足らず。しかし0ではない、シールドエネルギーの減少も止まった。耳鳴りが酷くAICを使う余裕もないが、必殺が寄越す死線は越えた。

目測で標準を合わせられたレールカノンが砲火を吐き出すが、捕まされた腕を軸にわざと体制を崩すことで一夏は超至近距離の砲弾を避ける。

一夏も今までラウラに散々削られた上での零落白夜の使用だ。当然シールドエネルギーはジリ貧でありレールカノンの直撃など喰らうわけにはいかなかった。

「チイツー！」

「腕を裂かれたまま掴むとか無茶苦茶するな……！」

「負けられん、貴様にだけは負けたくない！」

ラウラが思いを叫ぶ度に耳鳴りが酷くなる。純粋な千冬への憧れの反面に存在する、一夏への黒く暗い嫉妬や羨望を糧にするかのように。機体の惨状から修復でない、悪辣な改変を加えようとするような異変を感じる。

そして、押さえることのできない気持ちに呼応するように、裂けた左腕からドロリと黒いナニかが湧き出す。肯定すべき強さから掛け離れた強さをもたらそうとするナニかが噴き出しそうになっていた。

Damage Level——D.

Mind Condition——Uplift.

Certification——ambiguous.

《ValkyrieTraceSystem》——force
drive.

湧き出す黒が勢いを増す。紫電を撒き散らしながらレーゲンを、ラウラを飲み込む。頭のなかに響いた、ヴァルキリートレースシステムという単語からラウラは気づく。

VTシステムは過去のモンド・グロツソの部門受賞者の動きを模倣

するシステムの名称。アラスカ条約で研究、開発、使用全てが禁止されているはずの技術だ。何故そんなものが、とは考えない。今はそんなことを考えても無駄だ。

引き剥がそうにも機体そのものが変質していつているのか、黒に飲まれた左腕から反応はなく、どうしようもなかった。

ふと視界に収まった織斑一夏の目には驚愕が映り、呆けた顔をして動きを停めていた。こんなときに不謹慎かもしれないが、その様を見てラウラは胸が少しスツとする。

だから、一夏を無事な右腕で突き飛ばした。変質は白式にまでは作用していなかったらしく、押した力で簡単に離すことができた。

「退け、邪魔だ」

「なっ……!?!」

ラウラには本国ドイツの不手際に教官チーフユの弟を巻き込むつもりもない。

離れていく一夏は必死に手を伸ばしている。届くはずもなければ、届いたところで何が出来るわけでもないのに。自分を毛嫌いしていた相手でも、咄嗟に手を差し伸ばしてくる。

——あれが、織斑一夏か。

そんな姿がラウラには少し眩しく見えた。

そんな羨望らしき何かを直ぐに押し込め切り替え、半身を飲まれようという状況で思考する。ダメージレベルと自分の気持ちの昂たかぶりから起こったであろうこの変化。

最後には強制稼働とも聞こえた。ラウラには正式な稼働方法など知る由もないし、何が足りなかったのかはわからない。

しかし、無理矢理起動したというのならば、自分も無茶を通せば止まる、はず。脳筋甚だしい方法だがラウラには他に思いつかなかった。耳鳴りは止まらない。というか力を求めるかという問いは繰り返し五月蠅いほど頭に響く。酷く煩わしい。

ラウラは思う。力を求めるかも糞もあるかと。せつかく零落白夜を乗り越え、織斑一夏と決着をつけようとしたあの瞬間に邪魔してお

いてなんだと。

押し売りの如く勝手に強化しようとするVTシステムに、端的にイラツときた。包み隠さず言えば、要るか死ねとすら思った。

肺一杯に空気を吸い込み叫ぶ、咆哮する。

「貴様なんぞから！ 他人から施される力などいるものか！ 停、まれえええ——ッ！」

頭痛を無視するという荒業を成し遂げ、AIC発動。ラウラはどんな原理かも知らないVTシステムだ。だが目に見えて物理的に侵食してくるといふなら、止められない道理はない。目に見える蠢く黒は停止結界に包まれ動きを停めた。

しかし、レーゲンの中でナニかが蠢く感覚が消えていかなかった。速度は落ちたもののジワジワと侵食しているとわかる。ラウラは歯を食い縛る。

これではもうどうしようもない。もう気の持ちようといった話ではなかった。

零落白夜を振りかぶり、自分を助けようとする一夏が見えてしまったから。一方的に嫌ってくる相手を迷わず助けようとする一夏。

それがかつてどうしようもなく落ちこぼれ、ひねくれていた自分に手を差し伸ばしてくれた織斑千冬に重なって見えたから。

——ドイツで教官に言われたことがある。そのときはあの人の言葉なのに、珍しくあり得ないと思っていた。だから、臍気な記憶だが確かこう言っていた。

『ひとつ忠告しておくぞ。一夏アイツに会うことがあれば、心を強く持て。油断すると惚れてしまうぞ？』

——悔しいが、これは駄目だろう。クラリツサ風に言えば、ときめいてしまった。

嫌い、が鮮烈な好きに塗り替えられる。織斑一夏の強さに惚れてしまった。

「頼む、織斑一夏」

「頼まれた！」

青が黒を斬り裂く。へばりつくように同化していたそれは碎け散

り、半分近くが変質していたレーゲンも実体化の限界を迎える。

崩れ落ちそうになるラウラは一夏に受け止められる。小一時間前のラウラなら落ちようが構わず、離せと怒鳴っていただろうが、今はそんな気にはもうなれなかった。

試合終了のブザーが鳴り響いている。勝敗は問うまでもなく、ラウラたちの敗因はレーゲンの不正技術^{VTシステム}。ラウラにはVTシステムの起動からアウンスされるのが、些か遅かったように感じたが今は別のことが気になった。

セシリアには後で謝らねばならないと思いつつも、己の身体を抱き上げる一夏へと問いかける。惚れた男にどうしても聞きたいことがあったのだ。

「お前は、どうしてそう強く在れる……？」

「強くって……そんなに俺は強くなんでないんだけどな」

代表候補生たちと戦えば、まだまだ負けてばかり。そんなことを思い出す。でも、自分が強く見えるとしたら何故か考えた一夏は真っ直ぐラウラを見つめ返し言葉にする。

「強く見えるなら、そうだな。強くなろうとしてるから、強いしさ」

「……哲学だな」

「ははっ、俺は強さなんて心の在り方だと思ってるからな。それも間違っではないじゃないのか」

「そう、だな……これからは私も私の強さを、見つけたい、な……」

薄れいく意識のなか、ようやく目指すべきものを見定められた気がしたラウラ。無意識にだろう、彼女の表情は柔らかな笑みを浮かべていた。

なにせ惚れた男のお姫様抱っこが心地よかったから。ラウラ・ボーデヴィツヒはこの日乙女心を自覚した。

▽▽▽▽

試合中止の放送をいれる直前だった。ラウラがAICでVTシステムの進行を止め、それに驚き動きの止まった者が数人。驚きもあり

ながら唯一動けたのは千冬のみ。

しかし、弟が動いたのを見た。確実性を問われれば、一夏があのと
き失敗する可能性も無くはなかった。それでも千冬は、一夏の姉とし
て、ラウラ・ボーデヴィツヒの元教官として、結末を見届けることに
した。

教師としては0点かもしれない。それでも、教師が介入するより
も、ラウラにとっては何かを得ることが出来た。

そもそも一夏とラウラが初戦で当たるように口笛吹きながら抽選
を弄つてた時点で教師としてはどうなのだ、という話は横に置いてお
く。

そして結果論となるが起こった事態の割りに丸く収まったのも事
実。

観客席に若干のざわめきがあるものの、ほとんど何が起きたか把握
していない様子だ。紙一重ではあったが、なんとかこのまま試合を続
けられるだろうと千冬は判断する。

ただし、こここそと退席しようとしている輩を引つ捕らえ何かと吐
かせる余計な仕事は出来てしまったのだが。安堵と喜びと面倒臭さ
と色々混ざった溜め息を隠すことなく吐き、他教員たちに指示を出
す。

——取り敢えず尋問は他の教員に任せ、自分は試合の観戦を続ける
か。次は……出路か。何故、山田くんは頭を抱えているのか。

▽▽▽▽

試合が終わった。うん、終わったけど最後らへんにラウラの機体か
ら泥みたいなの噴き出してなかったか？　なんかそれが原因でラウ
ラとセシリアさんは負けになったような、なんとも見てる側としては
スッキリしねえ感じだった。

シャルロットとセシリアさんも目を白黒させた。当の本人たち、
一夏とラウラは妙にやりきった感出してたけどな。まあ、一言で言え
ば訳のわからん試合だった。

「ま、一夏たちが勝ってくれてよかったぜ」

「ああ、これで決勝での約束を果たせるのだからな」

「おっと、箒さんいつになく強気だな。慢心してたら足元掬われんぞ？」

「慢心ではない。私には負けるつもりで挑む勝負はないだけだ」

「そりやそうだ」

席を立ち、軽く柔軟。

トーナメント表上では今の試合といちばん掛け離れたところに位置するんだが、まあ男子のいる試合を先に消化してしまいうらしい。防犯的なものか、お外から来る方々に配慮した注目度的なものか、理由は知らん。

ただ、あーんまし無様は晒さない方がいいんだろうな。IS乗って半年未満の俺になにを期待してるんだかって話だがやれるだけやってやる。やらかせるだけやらかしてやらあ。

「気合いは十分なようだな」

「十二分なほどだぜ。分けてやろうか？」

「私の気合いが溢れるので遠慮しておこう。そちらの緊張こそ大丈夫か？」

「してねえと言えば嘘だが、軽口が叩けりや上々」

「ふむ、ならば安心だ」

相手は代表候補生がふたり。片方の機体が未完成とはいえ負けても仕方ない相手だろう、なんて言うかよバーカ！ 実力差なんて承知のうえで勝つつもりだったの。知恵とか小汚ない手とか奇策とか不意をつくとか色々やってやる。綺麗に勝とうなんざ思っちゃいねえ。捨て身アタックでもなんでもしてやる。

「ふっへっへ、やってやるぜ」

「……本当に大丈夫なのだな？」

「イエッス、任せろ！ あ、ひとついいか？」

「なんだ？」

「俺が戦う方で気になることがあっても完全に無視決めてくれ。たぶん、それは相手も意識が逸れることだろうし、箒さんの意識がそこで

逸れなきや絶好の機会になる」

「承知した。お前が窮地に陥ろうと私は気に止めずに全力で戦おう」

「なんかニュアンスが違うんだが……まあ、いいか」

中指につけた待機状態の打鉄を撫でる。この頃は既に付けてることに違和感もなくなつた。時にはマジで死にかけたりしたこともあった。なんか2ヶ月ほどで俺の人生面白いことになってるな……いや、それは一旦置いといてだ。

学園にとってはイベントでも、俺にとっては大舞台。打鉄、いちよ噛ましてやろうぜ。

「うっわあ、この前は爺臭かった思考が今度は青春丸出しになってらハッズいわあ」

「お前は何を言っているのだ」

20. キヲテラエ

ハイパーセンサーが捉えるのは人々、観客席にいる途方もなく人ばかり。偉そうな髭生やしたおっさんや髪の毛の寂しい初老のおっさん。少し大胆に胸元開いたドレスらしき服を着た金髪美人に、何故かスーツを着込んだちっさな女の子までいる。

観客席眺めてるだけで半日は時間が潰せそうだな。拍手されまくってるんで適当に手を振っておく。

アリーナの対角線には対戦相手の鈴と更識簪さんが既に立っている。鈴の甲龍は、たぶんクラス代表対抗戦のときから大きな変化ないだろ。

「問題は更識簪さんの方なんだよなあ」

「不足があるとは言え、十分に情報は集まっていたのではないか？」

「そうなんだが、未完成でも特殊兵装は知ったかかったって高望みがな」

更識簪、日本の代表候補生。諸事情により専用機が未完成って情報はあるし、なら第三世代の目玉ともいえる特殊兵装は出来上がっていないと山を張っている。てか他に情報を集めようとしたわけだが、妙に集めにくさを感じた。

なんだろうな、自室の外で調べ物しようとするれば、のほほんさんもとい布仏さんにお菓子食べようよと誘われた。毎度タイミング良く来るんだ、顔見て判断しようにもフワツとした雰囲気以外読めねえ。あの細い目開いたら隠されて力が解放されるんじゃないやねえかと俺は思ってる、なんてのは戯言として捨て置くとしてだ。

わかったことと言えば、専用機の名前が打鉄式式ということと、武装については薙刀があることくらいしかわかっていない。他は未完成だからか詳細がなかった。

これ全部打鉄がネットワークから拾ってきた情報なんだがレーゲンのときといい、ここまでしてくるって専用機って優秀すぎないだろうか。とシャルロットに伝えたら信じられない目で見られた、なんでだよ。

あと特筆することとしては打鉄が防御性能を重視しているのに対して、打鉄式式は機動性に重きを置いてあるってな具合か。

この点に関しては篤さんと話し合った結果、機動性は考慮しないことにした。少し汚い考えになるが、未完成と言われているということとは、恐らく機動性も半端なままだろう。

実際、今初めて見た打鉄式式は未完成そうであらった。腕部の装甲は元来の打鉄のまま、それに比べ脚部の装甲はカラーリングが水色を主体としたものになっている。しかし、脚部か。

「変わってるのは見かけ倒しか、それとも機動性も変化しているのか」

「そーなんだよなあ……ま、実際に戦い始めりゃわかんだろ」

「ふっ、開き直ったか」

「ここまで来りやな」

会話もそこそこに、適当に手を前に突き出して構える。各々も武装を構え、思い思いの臨戦態勢へと移行。

ザワついていたアリーナに束の間の静寂、ブザーが三つ刻まれ——開始、突っ切る！

ブザーが鳴り終わらぬ間に倒れるように、スラストを点火しながら極度に前傾姿勢。龍咆から放たれた衝撃波が頭上ですれ違った。冷や汗をかいたが瞬時加速による、力業の縮地で既に眼前には鈴。手に呼び出した武装を突撃の勢いそのまま、非固定浮遊部位アンロックユニットに振り下ろす！

ベゴンツ、と金属がひしゃげる音と共に火を噴き出す。もう片方も、とはいかない。無事な龍咆から放たれる、射角無制限の不可視の衝撃波に顔を叩かれ後ろに転がって行くハメになった。くっそ、欲張るもんじゃねえ。

「やつられた……！ 一夏ならともかく、アンタが開幕に突っ込んで来るなんて——ってかそれ！ ISでメイス使う奴とか始めてみたわよ!？」

「ハッハッハ！ 格上相手にまともな戦い方出来るかっての！ あとメイスいいぞ、めっちゃ威力あるし扱いやすい！」

柄に槌頭を別につけた、複合素材で作られたメイス。俺が使ってるのは金属プレートを放射状に並べた柄頭を持つ、金属性のイカしたやつだ。

元々メイスは聖職者が剣とか返り血を浴びちゃうし使えない、なら撲殺するしかないかって発想から生まれたイカれたやつだ。実際に鎧を凹ませ中身も凹ませ殺つちまうレベルにイカれたやつだ。

見た目も歴史も殺意しか感じないこの武装。使用用途に扱い方がシンプルで俺にとつてとても使いやすい。

「トラトラトラア！ 奇襲は成功つてな！」

「軽微とはいえ深追いしたせいでダメージを受けたな」

「サーセンっした！ 欲張つちまった！」

龍咆潰せたのは大きい。けどそれで機体に搭乗者含めた性能差が埋まるわけもない。ま、奇襲なら狙い通り叩ける可能性があるってわかったことは収穫か。

「まさか開幕で龍咆が片方落とされるとか不覚過ぎるわ……」

「無意識の油断、気をつけて」

割りと本気で悔しそうな鈴のターゲットイングが俺になった気がする。いや、なってる。打鉄がロックオンされてますって警告バシバシ飛ばしてくる。大気圧縮を確認、飛び退いて回避しようとした瞬間、箒さんに軽く蹴られよろめく。

「ちよー・なにし」

いきなり何しやがると真意を確かめる間もなく、よろめいた俺の顔面真横を暴風が凧いでいった。鈴の舌打ちが聞こえた。

「正面からの弾丸を後ろに避けてどうする」

「……あつ」

箒さんだけじゃなくてなんか鈴に更識簪さん、ついでに盛り上がり始めてた会場からシラケた視線を感じるのは被害妄想か。被害妄想であつてくれ。

ええい、他人の目なんざ気にしてる余裕なんざねえ！ 笑いたくば笑っておけ、その面いまに驚愕に染めてやらあ！

「箒さん、そつち頼んだ！」

「承知した。落とされるなよ？」

「かつてなく善処してみらあ！」

今度は箒さんが飛び出し、向こうからは鈴が再び向かってくる。すれ違い様にブレードと青竜刀で一合、そのまま突っ切る箒さんを迎え撃つは薙刀構えた更識簪さん。

当然、入れ違いでやってくるのは甲龍まとった鈴。

メイスを片手持ちに、盾を展開し構える。華やかさなど捨ててきたと言わんばかりの無骨で基礎的な構えだが、剣を振るより銃を撃つより合ってるんだからしゃーねえ。

甲龍は向かってきた勢いそのままに飛び上がる。振りかぶられた双天牙月を受けようと盾を掲げるが、見えない衝撃により下に弾かれた。両肩の浮遊盾を割り込ませようとするが、隙間から刃が首に突き立てられる。絶対防御が働きシールドエネルギーが削られちまった。メイスの石突きを半ば牽制のために突き出そうとするが衝撃。

「遅いつてのー！」

震で威力増し増しになった蹴りで顔面を穿たれ、後ろに仰け反る。スラストー噴射、仰け反った身体を戻しながらメイスを振り下ろすが軽々と避けられる。軽やかすぎてなんか腹立つ。

初めに龍咆一個潰せたのは幸いだったが、どうにも不意に龍咆を織り混ぜて殴りにこられると駄目だな。見えないわ、射角制限ないわでどうやって躲してたんだよ一夏。打鉄からの何度目かわからない警告、ロツクオン——顔を盾で守ると同時、盾から鈍い衝撃が伝わってきた。

「おいコラ！ どんだけ顔面狙うんだよ!？」

「アタシの！ 龍咆みたいにひしゃげるまで！ よッ！」

「めっちゃ根に持つてるう！」

一撃、二撃、三撃。重ねられる衝撃でノックバックしそうになるが踏ん張り、不意に間が空く。視界を塞ぐ盾を手放す。影が見えた側面に、斜にメイスを構えたと同時に双天牙月が叩きつけられる。連結され両端に備えられた刃が踊るように振るわれ、遠心力を加算しながら狙うは当然のように顔面コース。

だから、覚えのある型は石突きで弾き、柄とグリップで受け流す。知らない型には両肩の浮遊盾で受けとめようとするが、やっぱり間に合わねえ！ 突っ切られ装甲を、シールドエネルギーを持っていかれる。

メイスだけじゃ足りない。両肩の浮遊盾もめくるめく左右入れ替わり立ち代わり、時にはメイスに重ねて弾く。弾けば身体ごと回転して逆の刃が振るわれる、のは見たことがあったが追いつけない。腕部装甲を犠牲に食い止める。覚えてても追いつけなきや意味がないっての……！

けど半分以上は凌いだ、凌いでやったぞコンチクショウ！

達成感に浸る暇なく上から叩きつけられた双天牙月は受け流せず、上下関係が一目で分かる鏢競り合いに、いや鏢はねえけど。打鉄を越える出力に甲龍の重量を加えられ押し潰されそうになる。重い重い！

「今までの模擬戦は手を抜いてたつての？ 見違えた動きするじゃないの」

「んな器用じゃねえつての……！ 予習復習がキツカリ当てはまったんだよ」

なんのために図書室で、ネットで映像資料漁ったと思ってたんだ。戦い方をパターンとして頭に叩き込んで覚えるために決まってるんだろ。

更識簪はともかくとしてだ、鈴に関しては山ほど見る機会があった。一年で代表候補生にまで成り上がった鈴は試合の映像もそれなりにあった。それ全部見て、だいたい覚えたんだよ。

あとはその記憶と動きが被ったときに捌けるよう、箒さんとひたすら鍛練。何せ格ゲーコマンド覚えても指が追いつかねえ俺だからな、身体を追いつくように可能なかぎり鍛え抜かれ強化された。しんどくて死ぬかと思った。

「俺って単純な記憶だけは得意だからな」

けど、そのお陰で対応できた、出来るようになっていた。半分近く喰らってるが完封されてた頃よか千倍はマシになった！

「ちよつとアンタを見くびってたわ」

「もつと見くびって慢心してくれれば俺が楽で助かる！」

「減らず口は相変わらず、ねッ！」

「文字通り減らねえ口だからなあ！」

お喋りはここまでとばかりに更に更上がる甲龍の出力、嘘だろフルパワーじゃなかったのかよ。打鉄は当然のように既に全力だつてのに――よし、やらかすか。

スラスターを軽く噴かせる。機体の出力だけじゃ押し返せないなら他の力を、スラスターを使えばいいって訳じゃねえ。それで押し返せるなら大歓迎だが合わせるように甲龍もスラスターを噴かし始めた。当然押し負ける。

んー、たまに使う度に一夏とかシャルロットに全力で止められるし怒られるんだが、まあ些細な問題だろ。

身体を少し左に傾ける。受け流そうとしていることが一瞬でバレたか、即座に甲龍のスラスターの出力が調整される。対応がいちいち早いんだよ。

「けど、遅えー！」

いい加減使い慣れてきた瞬時加速、で回転。早さじゃ勝てないんで速さで対抗だ。カッケー自分なら余裕で成功してみせる、骨とか折れない行ける行ける！

柄に双天牙月の刃が走り火花が散る。曲線上に伸びた視界と妙な浮遊感が、鏢競り合いから脱したことを教えてくれる。瞬時加速での全力回転、脱しただけでは止まるはずもない回転、俺も遠心力を破壊力に乗算してメイスを甲龍へと叩きつける。

狙いなんてついちやいねえ。けど元々目と鼻の先にいたわけで、狙わなくても振れば当たる距離。増してや掛けていた力の受け所を失ったとなりや体勢も悪い。一撃もらったア！

金属同士が衝突した形容しがたい感触と音が伝わってくる。鈴の状態を見る余裕なんてあるわけなく、叩きつけた反動で跳ね上がり二転三転し不恰好ながら着地。これ、無人機初めのとき肋骨が逝ったから割りどドキドキするんだよな。

「信じらんないわ……直線移動のための瞬時加速で回るとか、バカ

じゃないの？ あ、馬鹿だったわね」

「うっせー！」

砂埃を払い現れた甲龍は、左腕の装甲が破裂し紫電を撒き散らしながらも、誠に信じられねえことに他は無傷。あの至近距離で瞬時加速の不意打ちに対応するとか化物かよ。正直、俺の不意打ちの底が見え始めてきた気がする。

盾を再展開し、もっかい構え直す。片手で扱われる双天牙月を盾で凌ぎ、不意の衝撃に姿勢を崩す。浮遊盾を使用する暇なく、数撃見舞われメイスを弾き飛ばされながら、不細工ながらもなんとか盾を構え直し、また防ぎ衝撃に崩され叩かれる。

ぶつちやけ問題が発生した。龍咆一機と片腕を使用不可に持ち込めたままでは順調だった。

でも片手で戦ってる資料とか無かったんだよなあ！ 鈴に限らず図書室にあった資料じゃそんな舐めプしてた奴いなかった。震を併用し蹴りも混ぜられ、この至近距離での龍咆乱発も想定外だ。なんでウエイトの重い兵装を近接格闘しながら微調整できんだよ。それが難しいからこそその震じゃねえのか。

龍咆の砲身なし射角の広さも最悪だ。威力を抑えることで速射しやがるせいで、打鉄の大気圧縮感知から発射までの誤差が殆どねえ！併せて、ほぼ真下の俺の脚を狙い撃ちしてくる。もう三回転けたわ。

箒さんに幾度となく地面に転がされてなかったら既に詰んでいた。這おうが転がろうがどれだけ不細工でも、倒れてからの反射的な回避行動がなんとか出来てる。お陰で首の皮一枚繋がって、あつまた脚取られた！

「ちよこまかと転がるなあー！ さっさと沈めえ！」

「お断りだったのー！」

地を砕く甲龍の踏み潰しをゴロゴロと転がり躲す。回る視界には箒さんがチラリズム。優勢は不明だがどつちも落ちてなかった。こっちは片手使えない相手にメイン武装を弾き飛ばされ圧倒的に不利です。

構えようとした盾をすり抜けるように刃や蹴りを顔面に穿たれるので、浮遊盾に通常展開した盾を構えて亀状態になる。二、三度殴り付けるような音が響き、チクシヨウ隙間に刃をブツ刺して無理矢理開いてきやがった！

打鉄から龍砲が発射状態に入ったと警告。盾をこじ開けて撃つとか、なんか無人機を彷彿とさせるから止めろ！

「くっそ、やっぱり代表候補生強いわ……！」

「バーカ、アタシが強いよ。だから」

黙視可能なほどに大気の歪みが生じる龍砲に嫌な安心感を覚える。安全ピン抜く暇ないとか思ってたが、これなら抜いてなくてもイケるだろ。へへっ、出来れば使いたくなかった。けど勝ちの目を拾うにはこれつきやねえ……！

「ブツ飛べえ！」

衝撃が撃ち込まれる直前。鈴に開かれた盾の隙間から左腕を突き出す。その手は光輝いている。武装展開の量子変換による発光——合わせて十^{とお}。

俺と鈴の間に十、《蔵王重工》印のグレネードがまとまって出現した。

思い出すのはクラス代表決定戦に咲いた炎の大輪。あの威力は魅力的だったんだよ。けど俺みたいなのが鈴に当てれる手段が思いつかなくてな？ 零距离以外。

至近距離爆破でセシリアさん落とせなかった、だからあのときの十倍の火力だぜ。一瞬で驚愕に染まる鈴に泣きそうなのを我慢して笑い返す。ハハハッ！ すげえだろ！ 一緒に爆発っていうロマンを感じようぜ？

アリーナにいるスーツ姿の小さい女の子が偶然目についた、というか何故か目があった気がする。『火力こそパワーなのですよー！』とか言っつてそうなのはしやぎっぷり、極めて将来が心配だ。

空中に呼び出したグレネードは自由落下を始めるが落ちるより龍砲が撃たれる方が速い。龍砲の停止など間に合うわけもない。

衝撃砲がグレネードへ撃ち込まれ爆ぜる、誘爆。

十の火種から生まれた十の爆炎がひとつの暴力となりアリーナを蹂躪した。

▽▽▽▽

動きが悪い、というのが打鉄式と打ち合った正直な感想であった。更識簪の動きが悪いのではなく、打鉄式が着いてきていない。更識簪が反応しても機体の動作が一拍から二拍ほどズレていた。それでもなんとか躲し、いなし落とされずに戦い続ける簪を見て素直に簪は思う。

「惜しいな、機体が万全でないことが惜しい」

「半端な状態で出場したことは悪いとは思ってる。でもこの子で出ることは譲れなかったから……！」

例え理解されなくとも謝罪の上で自分の意思をハッキリと告げた簪。簪はブレードを振るいながら本気で怪訝そうな顔をした。

「何故謝る。私は惜しいと思っただけだ。例えお前が裸一貫で向かってしようと私は怒らん。全力で斬り伏せるだけだ」

刃が薙刀の上を滑るように流れ、簪の腕部装甲まで裂く。零落白夜でも使っていれば腕が綺麗に縦に裂かれていただろう。

簪は説明されたからと理解する気などない。そもそも理解の是非の前に簪の行動に疑問すら持っていない。

「譲れぬと言うのであれば、他人を気にせずにやれば良いだろう。他人の言動で何が変わるわけでもなからう。譲れぬとはそういうことだ」

「——ッ!？」

いつもと変わらぬ調子で簪にとっての暴論を常識のように語る簪。

簪は若干の恐怖を覚えながら、またかと思う。姉といい、鈴といい何かと自分が関わる人間は、ベクトルが異なれどマイペースを貫くタイプが多い。まあ、本人に自覚がないだけで類友なのだが。

そして若干の恐怖の原因は簪の性格のことではない。

雑談をするように会話をしながらも休まることのない剣撃。打鉄

式式とのズレを度外視しても、簪自身が段々と追いつけなくなっている。余計な思考をしていると一気に持つていかれそうだ。

「篠ノ之流 “紅葉狩り” から」

怒濤の剣撃が転調する。一閃、また一閃と振るわれる合間、反撃を打てそうな半拍をつくられている。つくられた隙に簪は踏み込みそうになるが辛うじて止まる。

が意識をその隙に裂いた時点で簪の姿が簪の視界から消えた。

「えっ……っ？」

「篠ノ之流 “落葉”」

力業でなく己の技量で縮地を行った簪が、簪の足下で腰を落とし頭上で弧を描くように刀を振るう。腋えきか下に滑り込ませた刃は腕を撫で落とすように、しかし絶対防御がそれを防ぎシールドエネルギーを削るに終わる。

薙刀の石突きを簪の脳天に叩き込もうと振り下ろすが、簪は逆手持ちの柄を合わせる。ブレードは叩くための柄でないため、石突きによりひしゃげるが斬るには問題ない些事と気にも止めない。

互いの刃が至近距離で錯綜する。簪が押しているがやはり簪も遅れる動作を読みでカバーして踏みとどまる。

冷静にそろそろ桐也が追い詰められている頃かと簪は考える。機体の割りに簪が耐える、剣筋がいくらか読まれていた。技量が圧倒的な簪だが技としてではなく、敢えて奇をてらうのは得意ではなく、剣筋が正直なため幾らか読まれる。

「わかっているもなんともし難いな」

「読わかめていても、なんともしがたいのはこつち……！」

簪はこのまま削りきるかと、簪はこのまま何とか耐えきって鈴がこちらへ来るのを待とうかと考えていた。

順当にいけば簪の考え通り、鈴はやって来ただろう。だが、奇をてらうことに関しては人一倍得意な大馬鹿野郎がいた。

——そしてやって来たのは鈴ではなく、爆音だった。

僅かに遅れて爆炎がアリーナ内全てを巻き込むように二人を飲み込んだ。

反射的に簪は顔に腕をかざし防御体勢を取った。その行動はなにも間違っておらず、爆心地に比べればまだ軽いとはいえ視界を埋め尽くす炎。理不尽までな暴力の不意打ちとしてか例えようのない事態、普通は反射的に防ごうとする。

だが簪は歩を進めた。試合前の桐也の言葉を覚えていたから爆炎に見向きもしない。派手に気を引いたなと思ってもすれば、爆発で簪のシールドエネルギーも幾らか削られているがそれでもただ前へ。

ようやく出来た隙目。簪の視界も炎一色となるが正眼に両手で刀を構える。

「纏めて斬り払う——！」

▽▽▽▽

視界がハイパーセンサーが一時的に処理落ちするほどの炎に飲まれた。三枚の盾をもともせず紙切れのように吹き飛ばし、俺も一緒に四枚目の紙切れとして後方にブツ飛んだ。

——このグレネード作ってる企業のISの噂。その防御性能は打鉄に比べても段違いに高く、いつそ笑えるほどに硬いと聞いたことがある。溶解した左腕の装甲を見る。打鉄の浮遊盾も爆発で砕けてどっかにいった。第二世代とはいえISのなかでトップクラスの防御性能を誇る打鉄でこれだ。どんだけだよ蔵王重工。

いや、セシリアさんのときに一発で落とせなかったし十倍ならいけるんじゃないかと思っただが、まあ逝きかけた。

何処が本来の平地だったかわからないアリーナ。盾を挟んでた俺はともかく、なんの防御もしてなかった鈴が死んでないか心配、をしたそのとき地を叩きつけるような音が聞こえた。

「——ラァー！」

煙を振り払って現れたのは殆ど原型を留めていない甲龍。しかし何故かその右腕だけは無傷で、震によりインパクトを増幅された拳が顔面に突き刺さった。

「イツづあ!?!」

「痛かったのはアタシと甲龍の方だったのー！ あのグレネードまとめて使うとか狂気の沙汰よ！」

「正気の沙汰で俺が鈴に敵うと思ってるのかアー！」

生身の人間が戦車に勝てないレベルで開いていた実力差、並みの鍛練で埋めれるわけねえだろ。対戦車榴弾直接殴り付けるくらいのリスク背負わなくてどうしてその差を縮めれるってんだ。

間髪入れず殴り返す。たたらを踏む甲龍の脚部からは破片や紫電が散っている。だが一発殴り返されるたびに震のせいで削られるシールドエネルギーはこっちのがデカい。互いにジリ貧。どつかに飛んでいったメイスを再展開してる暇はねえ、まぐれでもなんでも殴って落とすしかねえ！

振り抜かれた拳に合わせて拳を振るう。

——初めに相手を捉えたのは鈴だった。

殴られ視界が滲む、俺の拳は寸前で届かず空を切る。ミソツカスほどしか残量のなかったシールドエネルギーが瞬間に零になるのがわかる。「涙で視界が滲んだ。」

「クツソ……！」

「そう泣くな、よくやった。あとは私に任せろ」

「ちよ、箒……ッ！」

未だにアリーナをもうもうと埋め尽くす煙をものともせず箒さんが鈴へと斬りかかった。満身創痍にもかかわらず振るわれる刀に反応する鈴、だけど機体が限界だったのか。振り向き様に膝から甲龍が崩れ、一閃。

『——あい終了！ しよ——しゃ、篠ノ之箒、で——桐也！』

ノイズにまみれた放送が勝者を告げた。スピーカーが壊れかけているが誰のせいだろうな？ 戦いに必死で気づけなかったがアリーナの防壁レベルも引き上げられているようだ。原因はさっぱりわからんな、いやホントさっぱり。

「おっしやああああ……勝った、のか」

「ああ、更識簪はお前がつくつてくれた隙のお陰で落とせた。だから

涙を拭くといい」

「な、泣いてねえよ！」

あれだ、涙が出てても爆発の粉塵とかそれらのせいで鈴に負けたのが悔しかったせいじゃない。悔しかったけど涙はそのせいじゃない、ないっつらない。

「しかし、些か派手にやったものだな」

箒さんが周囲を見渡す。つられて見渡す。煙がようやくと晴れたが平地がないな。特にここなんてお椀型にへこんだ中心のよう、いわばクレーターみたいだ。どう考えても防壁レベル上がったのこれのせいだな、知ってた。

「……蔵王重工のグレネードが悪い」

そんな呟きは風に吹かれて何処へやら。

この後の試合はアリーナ整備のため大幅に遅れ、俺は織斑センセに呼び出しを受けた。すんません、今回は割りとマジで反省してるんでグレネード専門のテスターとか勘弁してください。でっちー知ってるぜ、それって死刑宣告だつて……！

21. ヤらかしの代償

ちよつとばかり、おかしい。昨日から割りとキチガイを見る目で見られることが多いし、前まで男なんで気持ち悪いって目で見てきた女子は理解できないものを見る視線に変わった。嬉しくない変化だ。はじめから親しげだったクラスメイトたちはわざとらしく敬語を使っつけてきやがる。

誰かに原因を聞く前に自分の胸に問いかけてみると心当たりが普通に顔を出してきた。こりやトーナメントの初戦だな。

一応シャルロットと一夏に確認したら、一夏には深く頷かれた。

「秋には一般公開されるキャノンボール・ファストって大会があるらしいけどそこでは絶対にやるなって釘刺されたわ」

TVでも中継されるって言ってた。確かにTVで見た覚えがなんとなくだがある。そうか、中継されるんだよな。

「言つとくけど絶対にフリじやないからな？ 千冬姉がそこまで言うってことは、やったら殺られるくらいにマジだぞ」

「学園内で許可されてる武装を使っただけなのにあれだけ叱られるとは納得いかねえー」

「俺には許可された範囲内であれだけやらかすことが信じられないぞ」

消耗品のグレネードを一気に十個使ったことは反省してると言ったら、山田先生が涙目でそこじやないんですって言ってた。一個で十個分の威力なら解決ですよって言ったら織斑センセにしばかれた。そうか威力が問題だったのか……威力を追求してたからそこを問題視されるとどうしようもない。取り敢えずトーナメント終わりまでは控えるか。

それで、だ。さつきから俯いてなんも喋らねえシャルロットちゃんがいるんだけどどうした。腹でも痛いのか、ぼんぼんペインなのか？ 声を潜めて一夏に尋ねてみるとため息吐かれた。

「桐也、一回戦で何を思ったか思い出してみるよ。あ、自爆以外な」

「自爆言うなつての、一応盾は展開してたつーのに……他にとって特

に何もしてねえぞ?」

「しただろ、瞬時加速でまた回ってただろ」

「あー、そういややったな。え、それでシャルルおこなのか?」

「激おこだ」

マジか、些細な問題と切り捨ててたけど激おことか予想外だわ。いや、確かに一回だけふたりの前でやって見せたときには結構怒られた覚えあるけど。

『そんなの使ってたらいつか身体が引きちぎれちゃうよ!?!』

とか言われた。精々肋骨が折れるくらいだと虚勢を張ったらもつと怒られた。あ、結構というか前でも滅茶苦茶怒られてんじゃねえか。

「一夏、あとは任せた。決勝で会おう」

「待てい、行かせるか……!」

おいおい、離せよ。これから急に箒さんと作戦会議の予定が入ったんだ。別にシャルロットが怖いとかじゃねえ。怒られるのが怖くて逃げるとかいう小中学生みたいな理由ではないから。

シャルロットを横目で見ると。表情が見えないんだが妙なプレッシャーというか噴火寸前の火山が幻視できる。

「離せよ一夏、俺は行かなくちゃならないんだ」

「ごめん、やつぱりシャルロットがかなり怖いわ。」

「行かせるかよ、どうしても行きたいなら俺とシャルルを倒してから行くんだな」

「ふぎげんな、その片割れが怖いから通してほしいんだよ」

「誰が、怖いのかな?」

生者らしからぬ、ユラリとした顔の上げかたをするシャルロット怖い怖い怖い。こっちに近づいてきて両手を広げる、俺は両手を掲げ全面降伏の姿勢をとる。

「桐也のバカアアア!」

「ブベツ!?!」

広げられた両手が俺の頬を挟み込むかのように手加減なくビンタしてきた。降伏無視の攻撃はとても痛かった。

「前にあれだけ瞬時加速での曲線的な使用は危ないって説明したのに、桐也はなんで使っちゃうかな!？」

「いや、けどだな……」

「いやもけども何もないよツ！ あれ使ったら死んじやうかもしれないんだよ!？」 実際には、瞬時加速で曲がろうとした人が……!」

亡くなったこともある、そう言いたかったんだろうが言葉になっただけじゃなかった。それでも伝わってきた。でも俺は死んでない、違うそういう問題じゃないことはわかってる。

「そういう織斑センセにも身体が捻り切れるとか言われたっけ、実は今回も叱られた。」

「けど勝ちたかったんだよ、初めてつてくらい全力で勝つつもりで挑んだ。結局ひとりじや勝てなかったけど、俺の持ち札じやあるときはああするしかなかったわけ。言うべきはそういうことじやないのもわかる、どうしろってんだ。」

一夏が微妙に距離を取り始めている、なんでだよ助ける。一夏が目を合わせてくれない。

「反論が口のなかでまごつく。あときは仕方なかった、勝ちたかった、実力差を埋めるにはアレしかなかった。それらしい言葉が思いついては言葉にならずに霧散する。」

「口の回転が悪いどころではない、喋ろうとすれば喉元でナニかにつかえる。おいおいおい、どうしたアイデンティティ崩壊じやねえか。これはシャルロットが頬を押さえてるせいで喋りにくいせいかな、そうに決まってる。」

「負けたくないってのは、わかるよ……」

「口のなかにあつた言い訳がひとつ潰れた。なんとか話そうとするが言葉にならないまま言い訳は潰されていく。」

「トレーニングとか嫌いな桐也が頑張ってたのも知ってる、だからどうしても勝ちたかった気持ちもわかるよ」

「……」

「でも、でも！ 死んじやったら、もう、次はないんだよ……?」

「酷く居たたまれない気分だ。シャルロットの目を見るのが気まず

い、穴があるなら入りたい。素直に反省して謝らずに言い訳を考えていた自分が恥ずかしくて仕方ない。

死んでしまうかもしれないってことをわかったつもりだったんだよ。いくら何度成功していようが失敗すれば死ぬリスクがある。でも出来るからやる、それで問題ないと思ってた。

それが楽観視でしかなかったと今のシャルロットを見たらわかる。もしも、を考えて本気で心配してくれているのがわかる。わかるから恥ずかしい、というかこうして叱られ始めたときになんとなくわかってたのに言い訳ばかり考えてた自分が恥ずかしい。目尻に涙まで溜めてどんだけ友達思いだよコイツ。一夏さりげなくさつきより距離取ってんじやねえよ、助けてくれ頼む。クソ、ようやく目が合ったのに真面目な顔して首振ってノーサイン送られた。わかってるっての、俺が悪かったって。

「すまん、悪かった」

「許さない」

「ええ……いや、心配かけた。前にも言われてたのに使ったのは反省してる。今度からは注意する」

「許さない」

本気で怒っているのがわかる。だから余計に謝っても許してもらえなくて、どうすればいいかわからなくなってきた。真面目なコミュニケーション能力が低い俺にはひたすら謝るしかないのだが――

「え、えつとだな……す、すまん」

「許さない」

つり上がったシャルロットの目尻は下がらず厳しい声音は緩むことがない。割りと辛いが許してもらえないらしい。今回の教訓は友人の好意を、心からの注意を安易に無視すると大切な友人を無くすってことか……うわ、なんかマジで辛い。ほぼ友好関係のなかったセシリアさんに嫌いと言われたときと比較にならないレベルで心が辛い。昨日に戻るリセットボタン欲しい。

「シャルル、シャルル」

「……なに、一夏？」

「桐也つて結構察するつてことが苦手だから、たぶんシャルルにはもう許してもらえないつて結論出しそうになつてゐるぞ」

「え……えっ?」

「ほら」

なんかふたりが話してるが視界がブレてるしよく聞こえねえ。おえっ……ちよつと気持ち悪い。ああ、トーナメント初戦から緩みがちな涙腺がちよつとヤバイ、耐えろ耐えてくれ。この頃なかつたホームシックが出てきた、結構マジで家に帰りたい、実家とか既に存在しないけどあのどうしようもない両親に会いたい。もう会えない友人にも久しぶりに会いたい。いいや、取り敢えず布団にくるまって寝よう、寝て全部忘れちまおう。

「桐也アー!? 僕との縁を諦めるの早いよ! もうちよつと考えようよ!」

シャルロットが急に頬から肩を掴み直し前後にめっちゃ揺すつてきた。吐くつて、今はマジでヤバイつて。

「いや、ほら……なんか今回は全部俺が悪かつたし」

「桐也がかつてなく卑屈だ!? 違う、そうじゃなくて……まず視線を合わせよう! 人の目を見て話そうつて習つたでしょ!」

「父親は気まずいなら取り敢えず落ち着くまで目を逸らしとけつて言つてたから」

「出路家のよくない教訓がここで露になつちやつたよ……はあ」

何故シャルロットは俺を止めるのか。足りない頭で考えるとそういやシャルルがシャルロットだという秘密を俺が知つてるとという結論にたどり着いた。なんだそのことか。

肩を掴み返し、仕方なく目を真っ直ぐ見て話す。ため息吐いてたシャルロットの表情がパアツと明るくなる、そうだ安心しろ。

「桐也……!」

「安心しろ、例え友達じゃなくなつても俺は秘密を明かしたりしねえ」
「そこじゃなあああい!」

さつきまで真剣に怒つてたというのに何故か現在激おこと呼ぶに適切な状態の百面相シャルロット。何が不満なのか全くわからん。

俺の心と涙腺が耐えてるうちに早く言ってくれ。

「シャルル……桐也は勘違いすると恐ろしく察しが悪いからもう直接言った方がいいと思うぞ?」

「ちげえし、察しが悪いから勘違いすんだよ……」

「もつ、もー! 死ぬかもしれないことを平然としたことを怒ってたんだから! 謝るのはそこ!」

「……ん? もうちよい噛み砕いてくれ」

察しの悪さは申し訳ないと思う。言葉にならないなにかを吐き出すように机をバシバシ叩きながらシャルロットが説明してくれる。

「確かに前に言ったのに平然と使ったことも怒ってるけど、それよりも命がかかってるってことを深く考えず楽観視し続けてたことに怒ってるの!」

一旦他の思考をすっぱり切り捨てて思い返す。うん、確かにそこは謝ってなかったな。そして話の争点はそこだったな。

……なんというか、あれだ。俺また早とちりしたのか。

「なんていうか、察しが悪くてすまねえ……あと確かにわかつたつもりで危険性を軽視してた、すまん」

「本当だよ……もう使っちゃダメだよ?」

「あー、んー」

「なんで桐也はここで即答しないのかなー?」

「はへ、ほほひっはふな。ほほはほ?」

「おこだよ!」

「なんでシャルルは今のを聞き取れるんだ……?」

割りと本気の力を込めて頬を引っ張られる。額に努筋が浮かんでる。ピクピクしてるので触ってみたいが、触るとマジギレしそうなので自重。

とは言うものの、嘘を吐かないのであれば絶対に使わないとは言えない。思い出すのは無人機、ああいうことが再び起こったらたぶん使う。使わなくていいくらいに強くなりたいが、追い詰められたら使うかもしれない。

無人機のごとは箝口令を言い渡されている、んだがシャルロットに

ちゃんと伝えるにはどうするか。話すために頬をつまんでいる手を掴んで離させる。

「シャルルが転入してくる前なんだけどな、一回襲撃されたことがあってだな。そのときに初めて使ったわけで、それこそ使わなきゃ死ぬんじやねえかなって場面だった」

「ちよ、桐也。それって他言無用って千冬姉が」

「大丈夫大丈夫、肝心のところはボカす！」

「そういう問題か……？」

今回の無人機については他言無用って言われた、つまり無人機だったことは秘密にすれば襲撃のことは言っても構わないって解釈ができる。いや、日本語って難しくって便利だな。

「そんでたぶん次にそういうことがあつたら、そのときはまた使うかもしれないねえ。ただ普段は絶対に使わないことは誓う」

「そうだったんだ……わかった。でもなにに誓ってくれる？」

「今日の晩飯」

「軽すぎるから、もうちよつと考えて」

「じゃあ俺自身に誓って。俺は誰に誇れなくても自分だけは納得できるように生きる人間だぜ？ 自分だけにや嘘は吐かねえように生きる」

たまに現実から目を逸らすがそこはご愛嬌。人間誰だってそんなときはあるだら、見逃せ。

やっと怒りな表情を引つ込めたシャルロットが肩を竦める。よかった。

「……もー、しかたないなあ。それで納得してあげるよ」

「感謝感激雨あられ」

「あれ、なんかやつぱり軽くない？」

いつもの軽口にジト目を向けられるが顔を逸らして口笛ヒュルリ、今回ばっかは本気で反省はしてるっての。だから出来れば今はそつとしいてくれ。絶対言わないが本気で安心して気が弛んでるんだ。調子が戻るまでこのまま誤魔化すつきやない。

「ハハッ、口では軽いけど桐也は内心絶対安心してるから見逃してや

れよシャルル」

「おい……おいコラ一夏表出ろ」

「じゃあ俺は部屋に戻るわ!」

「待てコラア!」

色んな意味で死ぬほど恥ずかしかった。高笑いしながら全力疾走する一夏には余裕で逃げられた……入学してから一番体力の無さを呪った。

▽▽▽▽

初戦以降、瞬時加速での回転がなくなるとも決勝戦までの専用機持ち以外との戦鬪は楽勝だった、わけもなかった。

箒さんが斬り伏せ、俺が手こずり、箒さんが斬り裂き、俺が手間取り、箒さんが斬り倒し。あれだ、他の生徒の戦鬪スタイルの資料とかねえじゃん。操縦時間では上回っているお陰でなんとかなってるが、策の練り方とか前準備に運動神経とかが負けててだな。特に運動神経抜群の相川さんや箒さんと同じく剣道部の四十院さんを始めとしたクラスメイト、そして準決勝ではダークホースののほほんさんには煮え湯を飲まされた。というか一対一なら下手したら負けてた。

正直、初戦のように一対一の状態となつて戦うことは少なかつた。ふたりで片方を開幕速攻で狙い落としにかかるごり押し、割りと同じてしまつて申し訳ないと思う。ただ、それをさせてくれない相手には手をこまねいた。

「お前はムラが酷いな。準備期間が短かつたから仕方ないといえれば仕方ないのだが」

「自覚はある。専用機がなくても光るもの持つてる子が多いんだ。専用機つてアドバンテージはその差を埋めて無くなつちまう」

あとは互いの鍛練の成果や策を練つてどちらが上にいくかつてとこなんだが、それが常々ギリギリのライン。もうグレネード使つてやろうかと思つたが山田先生に断られた、というか在庫がもうないと言われた。今まで早々使われなかつたので補充してなかつたのに、何処

かの誰かが一気に使いきったらしい。迷惑な奴だな、誰だよ。

「ま、それでも決勝まで来れた。我ながら吃驚仰天だ」

「目当てのフリーパスが手に入るベスト4は確実だな」

「遠回しに煽らなくても決勝で手抜きしたりしねえぜ？ なにしろ箒さんのデートがかかってんだ」

「その口を閉じろ……！」

普段恐ろしくマイペースなくせして、こういうときは普通に乙女な反応が返ってきて面白い。つついっつきたくなるんだが、加減を間違えると口じゃなくて人生の幕が閉じそうなんで話題転換。

「んで、明日はどうする」

「当然ごり押しは通じんだろうな。一対一、にする場合は一夏の相手を頼む」

「……一夏と戦いたいんじゃないの？」

「もちろんそうだが、デユノアを押しえきれるか？」

「すまん、無理だ」

鈴はなんだかんだ近接メインで戦ってくれたお陰で食いつけたが、シャルロットみたいな中距離から撃ってくる奴は苦手だ。加えて高速切替までしてくるような頭の回転が恐ろしく速いやつに俺が敵うわけねえ。零落白夜持った一夏より相性は悪い。

「だが一夏も強い、特にあやつは本番に強い。気を抜けば一瞬だ」

「まー、模擬戦ですら負け続きだ。むしろ油断できる要素が見つからねえよ」

勝ち目は零落白夜を使用されたときの対処。一撃必殺の代償は燃費の悪さ。全力で躲し続ければ向こうのシールドエネルギーが切れる。それでも十二分に脅威だし、躲しきれるかと言われればそこも分が悪い。そもそも零落白夜なしに追い詰められれば意味がない。

「箒さんから客観的に見て俺の勝率ってどんなもんよ？」

「二対八でお前が不利だ。一夏の型をそれなりに覚えているかもしれないが、一夏は戦いのなかでも成長する。奇抜性には富んでいても、その成長への臨機応変さが足りんだろうな……ふむ、一対九かもしれない」

「五回に一回勝てる可能性が半減しちまった」

真面目にそれくらいの勝率なんだろうな。ついで俺がなにか不意打ちをかますことを考慮した上での勝率だろう。もちろん実際がどうかはまだわからねえ。高くなることもあるかもしれん、低くなることもあるかもしれん。箒さんの勝率一割な俺としては後者の可能性は見て見ぬふりを決めたいところだ。

「ああ、そうだ。桐也、ひとつ伝え忘れるところだった」

「ん、なんだ？」

「お前はメイスと盾は同時に扱おうとしない方がいいかもしれん」

曰く、両方を展開しているときに動きに僅かにぎこちなさが出ているらしい。両手に武装を持つことで選択肢が格段に広がることで無自覚に頭の処理が追いつかなくなっているんじゃないかと言われた。

心当たりがないでもない。盾で受けるか、メイスで流すかとか一攻撃を捌くだけでも悩むことはあった。よくよく思い返せば浮遊盾とメイス、浮遊盾と盾を併用することはあってもメイスと盾を併用できたこととかほとんどなかった。初戦とか特に顕著な気がするぞ。

「両方を持つなどは言わん。ただどちらかの武装にだけ意識を向けて無理に両方を使いこなそうとするな」

「それって片方無駄にならねえ？」

「なに、持っているだけでも武装を切り替えたくなくなったときに展開の手間がなくなる。それに次は今までの盾とは違うのであろう？」

「まあなー、今度こそ織斑センセに説教貰わねえ範囲で奇をてらうぜ」

今度はアリーナの地形も変わらねえし、スピーカーも無事なままアリーナ防壁のレベルも上げることなく、ついでに山田先生の仕事を増やさずに済ましてみせる。普通どれも起こさなはずなんだが初戦では総舐めしてしまったんだから仕方がない。あとあれだ、瞬時加速で回転しない、これは絶対だ。

「そんじゃ、勝つか」

「勿論だ」

決勝を目前にしても課題が山積み。ここぞというときの爆発力を持つ一夏、戦況を正確に把握して武装を自在に切り替える器用さを持

つシャルロット。
そんなふたりが相手なんだ、課題が山積さんせきしないわけがねえかと笑い飛ばしておこう。

2.2. 打鉄二機推参

「一夏、ちょっといいかな。一夏から見て桐也ってどんな感じ?」

桐也と箒、ふたりとの決勝戦直前。待機室での最後の作戦会議でシャルルから不意に尋ねられた。

俺から見た桐也……改めて聞かれると答えづらい。桐也の奴って、たまに予想だにしないことを平然とやるから心臓に悪いんだよなあ。でも入学してすぐの時には俺のこと待ったせいで遅刻したのに気にした様子もなくて、ひねくれてるようで良いところもあるんだよなあ。無理矢理一言にするなら親友? あ、真面目にこんなこと考えるとなんか恥ずかしいな。

「あの、凄い悩んでくれてるけど、その……戦力的な意味だよ?」

「あつ、そつちか!」

「うん、でも友人としてどう思ってるか語ってくれてもいいんだよ」
うつぐ、にこやかに嫌なところをシャルルが突いてくるな。

戦力としては、正直強いとは思ってない。決勝までの戦いも見てたけど、桐也は自分の流れを逃すと基本的にかなり追い込まれていた。鈴と打ち合えていたのが嘘のように簡単にメイスが弾かれていたことも結構あった。だから強いとは思っていない。

「けど弱いとも思えないから怖いんだよなあ」

「厄介、っていうのかな。時と場合によっては一般生徒にも負けそうなのに、やるときには代表候補生にも勝てそうなくらいに食らいついてくる」

「今回は何しでかすんだかって感じだな」

あのグレネードだけは是非とも止めて欲しい、切実に。けどグレネード抜きでもノリに乗った桐也は途端に手強くなる。なんとか流れを渡さないようにしたい。

「それで僕たち二人で一気に桐也を落とすってのも考えてみたんだけど」

「あー、そんなことしたら俺かシャルルが箒に斬られるな」

「うん、だから一夏に桐也を任せていいかな? 出来れば開幕速攻の

零落白夜で落としてくれたらベスト」

「わかった。なら箒は任せるぞ……結構キツいと思うけど頑張つてくれ」

「うん、箒さんの強さは今までの試合でなんとなくわかって……あれ、何でそんなに悲痛そうな顔してるの？　ねえってば、おーい一夏ー？」

後ろからついてくるシャルルの言葉を笑って誤魔化しながらアリーナへと向かう。久々の桐也との試合、ちよつとワクワクするな。

▽▽▽▽

開幕のブザーが三つ刻まれるとき、一夏は前傾姿勢。間違いなく突っ込んでくる気満々だろアイツ、少しは隠せよ。零落白夜は一撃直撃でオシマイなクソ仕様、気張れよ俺。

そんな思考をしている間に最後のブザーが鳴り響く——瞬時加速で突っ込んできた一夏を浮遊盾二枚がかりで受け止める。そして、浮遊盾が落ちた……は？

「一夏この野郎！　開幕から瞬時加速と零落白夜併用とかマジでふざけんなよ!？」

胸を薙ぎにきた雪片式型をメイスで紙一重のタイミングで防ぐ。雪片式型は青く輝いていた。一夏のやつ、エコ精神どこいった。

俺も俺でボケ腐ってた。エネルギー系統を根こそぎ零に落とす武装相手になんで浮遊盾に対応してんだよ。そりゃ非固定浮遊部位アンロックユニットのエネルギーなんて一瞬で無くなるわなあ！

二撃目を防がれるやいなや物理的な刀身が変わり、打ち合いが始まるが超怖い。いつ零落白夜が来るか神経メツチャ削れる。

「意表を突いて落とせたらベストだったんだけどな！　桐也の反応が予想より上がってた、箒に相当しごかれただろ！」

「ハハハ！　思い出させんなバーカ！」

盾を展開、メイスは収納。攻撃手段を擲なげうつて盾オンリーになった俺に、一夏は怪訝そうにするがそのまま斬りかかってくる。薙ぐよう

に來れば盾を横に向け弾き、兜割りを噛まされそうになれば上に掲げ受け止める。少しばかり追いつくのが辛くなってきた！ 一夏が完全にギアを上げ始めてやがる！

このまま流れを持っていかせてたまるか。盾の裏に仕込まれたピンに指を掛け引っこ抜く。

盾の前面が炸裂した。防御という役割を一切捨てた盾から弾かれるように、攻撃へと転じた散弾が剣を振り上げていた一夏へ牙を向く。

「喰らつとけ！」

「んな——ッ!？」

刀一本の一夏が防げるはずもなく直撃を受け倒れこむ。用済みになった仕込み盾を投げ捨てメイスを展開。

倒れた一夏に振り下ろすも雪片式型で阻止され火花が散る。なんでメイスが刀で弾かれんだ……いや、武装の重量で勝っていても機体の出力で負けているからか。クツソ、雪片式型折れる。遠心力を乗せてもう一撃、僅かに押すが再び弾かれる。しかし、雪片式型から軋む感覚が伝わってきた。このまま押しきれば——青い光が目前まで迫る。今度は俺が後方に顔を仰げ反らせ倒れ込みながら地面を転がり逆でんぐり返りしながら回避、なんかカツコわりい！

「ふおおおお!？」

「チイツ！ 外したか！」

「カ、かかつ、掠ったわ、ボケえ！」

ガバツと起き上がって打鉄が見せてくるパラメーター見ればエネルギーが四分の一、スパツと持っていていかれていた。直撃なら完全に落ちてたぞ！

不意を突かれた。我ながら不覚、というかお株奪われた気がしてなんか悲しい。箒さんの言ってた、一夏が本番になると強いつて意味がジワジワわかってきた。鬱憤晴らしついでにノーマルグレネード投げつけると一夏は大袈裟に回避している。

「全力で躲さんでもアレはもう今回控えるつつたろ」

「そんなこと言いつつ使うのが桐也だろ！」

「……」

「なんか言えよ!？」

まあ、そもそも在庫切れ起こしてるから無いんだが教える必要もないしな。

回避し続ける一夏にひとつピンを抜かずに投げ込む。メイスを再展開、流れで躲そうとする一夏へスラスター全力噴射で突撃。でっちは知ってる、自爆しなくても俺なら一撃噛ませるって!・

すれ違い様に白い装甲にメイスの槌頭がジャストミート、鉄がひしやげる感覚が伝わってきた。ついでに再び青光した刃が眼前を通りすぎて――スラスターを逆噴射してメイスを振るつた慣性とか諸々力業で打ち消す。内心で冷や汗をかく間もなく一夏が体勢を整え剣撃を重ねてくる。既に物理的な刃へ戻っているが、一夏のギアが更ん上がってやがる。マズいマズいマズい、こちとら一回戦より切れる手持ちの札が減ってたんだ。そろそろ限界だったの。

「いやらしいところで零落白夜使ってくるな!」

「目には目を、歯には歯をって言うだろ。不意打ちで流れを持っていかれないようにしてるんだよ!」

仕込み盾、はもう使えねえだろうな。一夏ならきつと対応してくる。箒さんに太刀筋が似てるお陰でなんとか凌いでるが、間違いなくジリ貧だぜ。ただ、一夏もそれなりにダメージは受けている上で零落白夜を使っている。なら残り使える回数はそう多くねえ、はずだ。そうであってくれ頼む。

メイスで防ぎきれないのでスラスターを再度逆噴射して回避しつつ浮遊盾を、あ、なかったわ。地面に虚しく落ちてるのが視界に入ってた。

袈裟斬りに振るわれた雪片式型を防いで胴に蹴り、所謂喧嘩キックを入れる。たたらを踏む白式。すかさず斜めにスラスター噴射、弧を描くように近づき、途中一回転して遠心力増し増しで槌頭を叩き込もうとするが際いところで躲され返す刃が迫る。スラスターを更に噴かせ地面に突きたったメイスを支点に刃と一夏を飛び越える。我ながら曲芸師みたいだ。

空を切った刃に何度目かわからない冷や汗が垂れてくるが拭う暇もなければ気にもしてられない。着地と同時に爆音、向こうで箒さんが飛び退く姿をハイパーセンサーで捉えつつ、メイスで突く。メイスを振るう動作をしていればその間に対応される。だから石突きで振り向き様の一夏の顔を叩く程度に終わらせる。タイミング的にもここで限界。刃が振るわれ——ハイ、サヨナラ。

「桐也アアア！」

一夏の声がやけに遠く聞こえた。

▽▽▽▽

シャルルが箒の出方を伺うかのように距離を保っていると僅かに桐也に気が逸れた。一夏の零落白夜が猛威を振るった瞬間だったがシャルルはその確認もしなかった。ただ出来た隙に弾丸を振じ込むため、高速切替。展開と同時に引き金は引かれ徹甲弾が箒へと撃ち込まれた。

直撃。撃った当人だけではない、観戦していた者を含めたほぼ全員がそう確信した一撃、その徹甲弾。

——それは刃に阻まれた。

ガギン！ と甲高い異音を響かせたそれは己が刀身と引き換えに致命的な一撃を無駄撃ちへと変えてみせた。宙を舞い地に突き立った刃、箒の手には中程で折れた刀が一本。

「鋼が脆い、わけではないな。今のは私の太刀筋が悪かったようだ」

「篠ノ之、さん。今……何をしたの？」

「ん？ 刀で飛んできた弾を斬り落とした。いや叩き落としたただだ」

自身ですらなく他人を狙った銃弾、それも不意打ちであるはずのそれを刀で弾くという曲芸を魅せた箒は当然のように言う。ただ虫が飛んでいたの叩いた。まるでそんな気軽さで、自分の起こした離れ業を出来て当然の行為にまで貶めるかのように。

今までの試合で見ってきた箒は強かった。だが全力ではなかった。シャルルはそう直感する。

「——ッ！ 悪いけどこのまま落とさせてもらおうよ！」

いくら強くあれど、量産機の箒ならば押さえられる、場合によっては落とすこともできるだろう。そんな算段が決定的なナニか引っくり返される悪寒に曝されたシャルルは、瞬間で手に持つ銃器を軽機関銃に切り替え掃射のためにトリガーを引く。目の前の未知が新たな武装を取り出す前に、その牙を向く前に幕を引こうとする。

だが、確かに折れていたはずの刀身は箒その手の内こに存在し、箒の流れるような斬撃が連ねられる。幾重にも重ねられた斬撃はひとつの動作と錯覚するほどに昇華され無数の弾丸を斬り落とす。切り裂かれた弾丸は慣性に従い打鉄の装甲を掠めるもそれだけだ。いや、正確には防ぎきれていない弾丸もあったがそれは装甲に当たるもののみ。箒自身の身体へと当たるはずであった弾丸は全て斬り伏せられた。

シャルルは動転しつつも冷静にそれを見切った。無くなった刀身が生えてきたわけではない。自身が放った弾丸が届くまでの間に箒は新たな刀を展開したのだ。その証拠に地面には折れた刃と柄が転がっている。今も刃が欠け使い物にならなくなったブレードを投げ捨て新たに展開する。

弾丸が放たれてからの間に武装を展開、そして斬り落とすなんて芸当をこなす人間がいったいどれだけいるというのか。そう考えたシャルルは思わず疑問を口からこぼしてしまう。いや、疑問にも思っていないことを口に出して現実を受け止めるまでの時間を稼ぐ。

「篠ノ之さんも、高速切替を使えたって言うの……？」

「違うとわかりながら何故聞く。私にはそんなものは使えないし必要ないぞ。ただ私は刀以外の武装を持っていないからな。お前のような複雑な思考もいらん」

——ただ刀を振るい、斬り伏せる。戦いにおける思考などその程度で十分だろう。

「め、ちゃっつ、くちや、な！」

己のペースを崩すことなく箒はやはり当たり前のように答えた。適当に話しているのか本音なのかはわからない。

シャルルにとっては返ってきた言葉は理解不能。いやもともと刀

で弾を弾くということがシャルルの尺度で測りきれない事象であり、その根底の答えを同じ尺度で測りきれるはずもなかったか。

だが理解はできずとも距離を詰める筈には対応するしかないわけで、そんな距離くらいは測れるわけで。まともに近接に持ち込まれると不味い、そんな気^{プレッシャー}迫を吐き散らしながら迫る筈にまたも切り替えたショットガンを撃ち込む。

「無茶苦茶と言われても困る。私たちの担任がどんな人か忘れたか？」

「世界最強のあの人は、織斑先生はまた別格でしょ!？」

「……ふむ、そうか。お前^み達^なはそういう認識だったか」

流石に面制圧を主とする散弾全てを斬り伏せることは難しかったか、踏み込んだ足を軸に回るように筈は躲す。躲しながらも足と口は止めることはなく自身のペースを貫く。

そして同じ第二世代とはいえ量産機と専用機、その機動力の差とシャルロットの十八番たる砂漠の呼び水を活かしシャルルは距離を保とうとする。がしかし。

「そうか、確かにあの^人たちは強かろう……けど忘れるな」

その言葉を節にシャルルの首元に刃があてがわれた。瞬時加速、専用機持ちであるシャルルですらまだ使ったことのないそれを筈は極極自然に行い、意表を突き間合いを零とする。

ただ撫でるように引かれた刀はシャルルの首を斬り落とす、ことはなく紫電を撒き散らし絶対防御を発動させた。

「私は、私もシノノノだぞ？ たしかに姉さんは天災だ。そして親友と呼ばれる千冬さんも向かうところ敵なしだ——だがな、私はあの人たちに劣ると思ったことは一度たりともない」

筈は楽しそうに笑う。その言葉は誰に放ったものか。目の前のシャルルか、己自身か。それとも今も世界の何処かを気ままに放浪している姉か。

「姉を越えるのは妹の役目だろう？ 少し賢いからといって臍を曲げている姉さん程度、私が越えられないわけがなからう」

その言葉は——天災を愉しげに嗤わせた。

「……ああ、なんだか今初めて箒があつた籐ノ之博士の妹なんだって実感できたよ」

「なんだと、やめてくれ。あんないい歳して臍を曲げている大人子供と似ているなど恥ずかしいぞ。姉さんのことは天才と思えど大して尊敬はしてないからな」

世界のどこかで天災は悲しげに機材に頭を突っ込ませた。

箒は真面目に嫌そうな顔だった。姉のことは嫌いとは言わないが人間性としてはかなり下に見ているのだ。

「え、えー……まあでも、負けられないのは僕も一緒だよ。きつと籐ノ之さんの強さを承知した上で一夏は僕に任せてくれたんだ。だから、負けられない」

「妬けることを言ってくれ、がそうだな。一夏が私に見合うと見定め寄越した相手だ。本気で落としてやろう」

「籐ノ之さんの本気は、怖いかな！」

量子の光が散り箒の両手に刀が展開される。二刀流、本来片手に持つのは小太刀がメジャーであるそれだが、箒は両手に同じ長さの刀を携える。

正直に明かすと箒としても少々の扱いにくさはある。しかし小太刀では問題があつた。

ラファールカスタムが五五口径アサルトライフル《ヴェント》より吐き出す弾丸の雨を、打鉄が二振りの刀をもって斬り伏せる。切り裂かれた弾丸は慣性に従い打鉄の装甲を掠めながら後方へ、刃の入りが悪かった弾丸は弾かれ上へ下へと不規則に払われる。シャルロットはその光景に、籐ノ之箒の底知れなさに歯噛みし、箒は弾丸を弾く度に欠ける刃を見て目を細める。

ヴェントの残弾が尽きた頃には箒の足元には刀身半ばで折れた三本のブレードが転がっていた。

「ブレードでこれなら小太刀など直ぐに折れる、か……やはり刀二本で我慢するしかないようだ」

「それで我慢してるって、小太刀は出させたくないなあ。この距離を保ってるのは僕なのに籐ノ之さんが遠く思えるよ」

「ならば近づこうか」

——篠ノ之流そらびょうし“空拍子”。

そうシャルロットの耳に届いたときには箒の刀が目前に差し迫っていた。高速切替、なりふり構わず盾に身を隠し間一髪。薙がれた刀と盾が火花を散らす。

「瞬時加速、じゃない……ッ!？」

「空拍子、意識の隙間を縫う歩方とでもいうべきか。姉さんが小難しい説明をしていた覚えがあるが忘れたな」

意識の隙間を縫う、というのは適格でなくとも正しい。人間が物を見て、頭で処理をし行動に移すまで平均して0.5秒。その0.5秒の空白を相手の行動を二手三手より遙かに先まで読んだうえで突く、篠ノ之流“空拍子”。のはずだがこれを箒は半分以上感覚で行っている。

生身であれば必殺に等しい離れ業、しかしシャルロットは当たる前であれば高速切替ラレドスイッチで凌ぐ。反射ともいえる速度でその状況に即した武装を展開できるシャルロットだから対応できた。考えての行動ではなく反射ならば本来の0.5秒を埋められる、だからこそ凌げた。

「しかし今のを防ぐとは、些かショックを受けるな」

「ショックを受けてもらえるってことは、僕にも勝機はあるかな」

身の毛のよだつ一撃だったが顔には出さずに軽口を返すシャルロット。呑まれると一気に畳み掛けられそうだと、軽口でもなんでも叩いて鼓舞しなければ流れを持つていかれる。そうシャルロットの勘に近いなにかが訴えかけてきていた。盾からマシンガンに切り替え。

と箒の姿が再びシャルロットの視界から失せた。今度は正真正銘反射での行動だった。一回戦で見ていたから銃口を下に向かせ、めくらに弾丸をばら蒔いた。舌打ちが聞こえ、そこでシャルルの認識が追いつく。低姿勢に構えた箒が斬りつける代わりに刀身で銃口を逸らしていた。

もう片手の銃口からも撃ち込もうとするが、縦に裂かれ暴発。超至

近距離、既に箒の間合いであった。高速切替^{コル}、ハンドガンは撃つ手前で裂かれる、一刀シャルル自身も貫つてしまう。高速切替、ブレット・スライサーで打ち合おうにも手数に精度が桁違い、直ぐに弾かれ追加で四つラファールに傷が増える。どれも深く、無視できないダメージだった。

「ああ、もうっ！」

高速切替、出された武装を箒は展開と同時に刃を通し、眉がひくついた。箒は手榴弾を斬っていた——爆発。とっさに飛び退く反射神経は並外れているが、爆風には曝され後方へ大きく飛ばされる。シャルルも同様、抗うことなくむしろ飛び退けるだけ後退するつもりで取った手段、大きく距離が開いた。同室の男の子と似た手段を取ってしまい、後々絶対に笑われる気がして、なんとも言えない気持ちにさせるが気にしている暇もなかった。爆炎の向こうへと弾丸を撃ち込むが連続する金属音が斬り防がれていることを伝えてくる。

ラファールカスタムが警告を飛ばす。打鉄が迫り来ると、シャルルは箒へと最大限に警戒を高め、狙いを絞るため銃口を晴れぬ煙へと向けるが、しかし。

「イツヤツハアアアアアアアッ！」

煙を突つ切り現れたのは瞬時加速で最高速度に達した——打鉄を纏う出路桐也だった。

▽▽▽▽

一夏の振るつた刃は空を切っていた。だつて俺と打鉄はとつくに瞬時加速で戦線離脱していたからな！ 追い縋ろうとしてるが箒さんがきつと止めてくれるので無視。一対一であれ以上やってたら精神的に持たず零落白夜で落とされるつての。ペア戦なんだ、それを活用しない手はねえ。

「桐也アアア！」

「イツヤツハアアアアアアッ！」

物理的に距離が開き遠くなる叫び声に見送られ奇声と共に爆炎を

突っ切る。シャルロットのキリツとした顔が一瞬呆けた顔になった。距離が零になると武装が切り替わるのは同時。

シャルロットの展開した盾が弾け、なかから現れたのは灰色の鱗殻グレースケール——六九口径パイルバンカー、通称盾殺シールド・ヒアースし。なんか殺意高いなオイ！

こんだけ奇をてらつてもこれだよ、どんだけ反応早いんだコイツ。高速切替が反射の域に到達してる、俺がどれだけ策を労しても武装は迎撃可能な状況まで対応されてしまう。火薬が炸裂し杭が打ち出される音が鼓膜を震わせ——捻った脇腹を削ぐように打ち込まれたシールド・ピアースと入れ違うようにメイスでシャルロットの胴を薙ぐ。ホームランバスター宜しく、アーリーナの端まで飛ばすつもりで殴り飛ばす。

「かふっ!?!」

いくら反射に近い速度で武装展開しようが、そこから狙いを定めるには別枠で集中力使うに決まってる。だから武装展開されるころまではもう諦めた。武装を展開してからそれを使うときの集中を乱すため最大限に不意を突いた。予想より遥かにギリツギリの危うい賭けになったが通った。打鉄の腰部装甲が杭に挟られて円形の穴が開いてるし、シールド・ピアースえげつねえ。

なんて考えながら箒さんと一夏の刀が交えられるところに参戦。振り降ろしたメイスは難なく避けられた、なんでだよ。

「ホントに、桐也つてやらかすよなあ!」

「ほう、喋っている余裕があるか——篠ノ之流『崩山』から『顎門』あぎと」

「しまッ!?!」
一夏が振り降ろした雪片式型の柄に合わせるように箒さんの肘が当てられ、白式の手から弾かれた。宙を舞う雪片式型は、もういちよホームラン。

「バスタアアア!」

「桐也この野郎!?!」

メイスでブツ飛ばした。別に躲されたことがムカついたとかじゃねえ、状況に即した判断だ。だが一夏はこっちより箒さんに気に向け

ろよな。お前に惚れてる相手が妬いて恐ろしいことになってんぜ？

順手持ちと逆手に持たれた刀が白式を喰らうかのように斬り結ぶ。次いで順手持ちの刀を逆手に持ち直し、交差された腕を元に戻す代わりに返す刀で噛み砕くかのように再び斬りつけ——白式から煙が吹き出し膝をついた。

リミット、一夏が落ちた。そしてシャルロットが目前に、ん？

箒さんが二刀で払い上げ、シールド・ピアースが弾き出した杭が頭上の空気を叩く。

「桐也、気を抜くな！」

「むしろ篠ノ之さんはもつと油断してほしいな！」

「シャルルも瞬時加速使えるとか聞いてねえ！」

「言つてないもん！」

超々近距離くんずほぐれつ三人で刀がメイスが弾丸が入り乱れる。刀をシールド・ピアースで受けた腕の下から俺を狙って徹甲弾が撃ち込まれ、浮遊盾で……あ、なかったな。とつさに身を捻るが肩で炸裂、弾き飛ばされた。シールドエネルギー残量15、パンチ一発で沈みそうなくらい夢くなったぞ。

少し離れた戦線を見れば、箒さんが押している。あと一歩だろうな。シャルロットは俺が落ちてないことを確認できても意識を割く余裕もなさげ。箒さんはさつさと戻ってこいと視線を一度送つてきた、怖い。残量5とか何ができるのか、瞬時加速一回使って途中で尽きるぞ……いや、尽きてもいいか。

ステーンバイ、ゲットセット。本日何度目か、そろそろ客席からはブーイングが送られそうだがこれで終わりなので見逃してもらいたい。スラストターを微かに噴かせ、取り込み——エネルギー残量4——瞬時加速オ！

流れる景色のなか残量0となり、メイスがシャルロットを捉えたのは同タイミング。パワーアシストが切れていくが振り切る。二機分のブザーが鳴り響くのが聞こえながらシャルロットを巻き込み、エネルギーが切れた打鉄とラファールカスタムはくんずほぐれつ地面を転がっていく。ハツハツハ、決勝戦のラスト美味しいとこ取ってやつ

たぜ。

俺と箒さんの優勝を伝える放送に割れんばかりの拍手が耳に心地いい。絡まつてるシャルロットのジト目だけが気になるがな。

「普通あそこは銃とかで援護するんじゃないかなあ。エネルギー切れ起こしながら瞬時加速してくるなんて」

「その発想はなかった」

「なんでさ!?!」

そもそも今回のトーナメントで銃器使った記憶がなかった。まとも当たたらねえから仕方ない。

「もう……まあいつか。優勝おめでとう」

「おう、やってやったぜ」

「で、それはさておき桐也はいつになったら退いてくれるのかな？ さ、さすがにちよつと恥ずかしいというか……」

「それは悪いと思うんだが関節極つてて動けねえ」

「えっ」

「マジマジ」

指先すらピクリとも動かん。シャルロットも今さら動こうとしたみたいだが同様らしい。口を一字に閉じ真顔になり、数秒思案。

「箒さんヘルプ!」

「一夏ほどいて!」

お互い出た結論は助けを呼ぶだった。なんていうか締まらねえ。ちよつとくらいカツコつけて終わりたかった。

23. マイフレンド

トーナメントが決した当日の夜中。諸々の手続きを終えたシャルロットが部屋へと戻ると、桐也がベッドの上で待っていた。具体的にいうと胡座をかいたまま上体をベッドに倒し、寝息をかきながら待っていた、完全に過去形で既に待ててはいなかった。

時刻は既に1時を回っているが、時間よりも疲労から眠りについてしまったのだろう。

日中にはトーナメント決勝、夕方には授賞式、夜にはクラスメイトに他色んな面子を合わせての祝賀会。桐也も年頃の男の子らしく滅茶苦茶ハシャいでいた。それこそ一年一組の面子に負けないテンションでだ。いつもなら一步引いてるところもなんのその、参加できるイベントには全部参加して飲んでないのに酔っぱらいじゃないかという振り切り方だった。

桐也と一夏が並んで千冬に追われる事態にまで発展したと言えば、そのハシャギっぷりもなんとなく伝わるというもの。保健室でベッド安静のラウラ・ボーデヴィツヒを一夏と担いで打ち上げに連れてきたのが主な原因。千冬には十秒で捕まっていたが、まあよく十秒もつたとも言える。その後にお説教もあつたが温情もあつたのか短めに終わり、ラウラも安静を厳守として参加という形になった。

そのラウラもまた会場を盛り上げる。まずはトーナメントのことをセシリアへと謝罪、面倒な話は上に任せここは和解した。次に一夏へと蹴ったことを謝罪、ここもアツサリと許す懐の深さが見られた。そこからが佳境だった。

ラウラは「織斑一夏は私の嫁」発言からのズキーンッ！で一騒動起こし、千冬の再出動。言うまでもなく侍ガールとおてんばチャイナが主に鎮圧対象だった。

最後には千冬も真耶も巻き込んだのバカ騒ぎを見せた。

それからシャルロットを待ち続けて数時間。現在、出路桐也は愉快なオブジェとなっていた。明らかに苦しそうな姿勢なのに、とても気

持ち良さげな寝息がシャルロットの耳に届く。

「起こしにくいなあ」

近づいてベッドに腰掛けるが起きる様子もない。無理に起こさずとも姿勢くらいなんとか直せないか、そう思っ手をかけ、動きが止まる。前に似たようなことをしようとしてベッドから落としたことを思い出した。

少し思案して、そのまま肩にかけていた手を顔へとスライド。手の行き先を頬、唇、額へとちよつと迷わせ——鼻を摘まむに落ち着いた。シャルロット自身も無自覚かもしれないが一瞬“にへらっ”とした表情をした。

徐々に寝苦しそうになる桐也。間違つても窒息だけはしないようにしつつも、ニコニコと楽しそうに鼻をふにふに摘まむシャルロット。

「ふござつ……う、ふが……ブハッ!？」

割りと遅い危機感が仕事をしたのか、息苦しさが限界を迎えたのか。いくらかうなされたあと、酸素を求めてようやく桐也は起きた。睡眠からの目覚めで何故か息切れを起こしていることに疑問を感じつつも、鼻を摘まんでるシャルロットが目についた。無言のままシャルロットの手を掴み鼻から外す。

「……何してやがる?」

「変な体勢で寝てたから起こしてあげようかなって」

「そいつはどうも。他に方法があっただろ……あー、確かに関節がバキバキいうな」

寝起きでいまいちテンションも上がらないのか日中に使い果たしたのか。桐也は大して怒ることもなく、身体を伸ばして凝り固まった関節を解す。そして満足げな顔をしたと思いきや電源を落としたかのようにベッドに倒れ込んだ。

あつ、とシャルロットが声を漏らすも言葉は続かない。疲労困憊で眠たそうな様子、シャルロットは自分のことについての話をするため起こすことに気が引けた。少し伸ばしてしまった手を行き先なく少しさ迷わせ、引つ込めた。伝えるのは明日のお昼でもいいかな、と

シャルロットはベッドから立ち上がろうとし――

「なんか話か？」

不意の桐也の声に動きを止めた。

寝転がったまま非常に面倒そうな顔をしているものの、顔だけは横に座っているシャルロットへ向けている。

「えっと、僕のこと、じゃなくて私の話だし、桐也も眠そうだし……明日でいいよ？」

「……………」

無言の間が出来る。もう寝てしまえよと言いたくなる程に、桐也の眉は不機嫌そうにしわを寄せ目蓋が落ちかけている。しかし、寝るとは即答せず何か思案し、ガバツと起きた。

「待ってる、シャワー浴びてくる」

いつかのように足元が覚束ないながらも適当なタオルをぶん取り脱衣所へと入っていった。取ったタオルが適当すぎて、簡易台所の手拭いだった。なんとも言えない顔で見ているシャルロットは、中からシャワーの音が聞こえてから、こつそりバスタオルと変えておく。

うっかり脱衣所で鉢合わせるといふ誰得ラツキースケベなイベントを起こすこともなく、桐也は脱衣所から出てきた。幾分かは目が覚めたようでバスタオルで髪を拭きながらベッドに胡座で座る。

「ちつとは目え覚めた。そんで話ってなんだ？」

「そんな無理してくれなくてもよかったのに」

「聞いてほしそうなくせして隠されりや気になるっての」

遠慮の言葉に予想だにできなかった返答。目をパチクリさせているシャルロットに構わず桐也は話す。

「さつき、僕つつつたる。今まで阿呆みたいに器用に室内では私、それ以外では僕って分けてたくせに」

「あー、そうだね。うん、そう言っちゃった」

「だからなんか、俺に合わせて誤魔化そうとしてんじゃねえかって思っただけだ。聞いてほしそうってのはただ雰囲気でなんとなく」

他人に自然体に見せながら合わせるように出来ているシャルルになつたから、なにかを隠したと思う。これがもしも他の人間が相手で

あれば、桐也は一夏以外察せることはなかっただろう。少ないとは言えない期間、同じ部屋で過ごしたからこそ普段との差異に気づけたというだけ。他なら確実に聞き流して寝ていたと自分で確信する桐也は、まあ友人にだけはそれなりに義理堅いのもかもしれない。

シャルロットはシャルロットで違和感を感じさせてしまいうくらいには気が緩んでいた、よく言えば気を許していたと改めて自覚した。気を使わせたかとする必要のない反省する反面、友達っていいなあ と頬を緩ませる。母親が亡くなって以来、正しくはデュノア社でテストパイロットになってからは友人と呼べる者はいなかった。同情や憐れみから気を使ってくれる大人はいれどそれだけ、対等な気の許せる関係が出来たことがなかったのだ。だからこそ桐也という友人との出会いが一際良い出来事に感じられた……ただしシャルロットがポツチだったわけじゃない、断じてない。

「いつもは察しが悪いくせに、こういうときに察しが良いのはズルいよ」

「つてことは話したいことがあんだな。ほら、さつさと話せ」

「雰囲気の話す雰囲気から離れたんだけど……ああ、ごめんシャワー浴びても眠いよね話す話す！ 話すから無言で睨まないで！」

コホンッ、と小さく咳払いをしてから姿勢をただして桐也に向かい合うシャルロット。

「えっとね、単刀直入に本題から話すけど、男装を明かすことにしたんだ。トーナメントが終わったことで学園も落ち着いたから、学園としても色々後処理とか出来るようになったみたいで」

「そりやめでたいな。シャルル君にやサヨナラだ」

「うん。だから、私も部屋移動になるんだ。ちよつと寂しいけど思春期の男女がいつまでも同室だと色々問題になるし。急になるけど、早朝には移動することになって」

だろうな、と口には出さないが桐也はそう思った。 齢15〜16歳の男女の同室が公的に認められるわけもない。それに学園には美少女が多く、桐也に女への耐性が出来たとか悟りを開いたとかそんなことは一切ない。実際ムラツとして夜中に駆け出したこともある。な

んか風呂上がりとかいい匂いが部屋に満ちて脳が沸騰しそうになったこともある。そのたび夜道を駆け回り、時おり織斑千冬に見つかり、追われ捕まっていた。ある意味、既に問題は起きていたのだがシャルロットが知る由もない話だ。

トーナメントを制す体力が付いた一因が性欲かもしれないと眠気以外からの理由で桐也は遠い目をした。

それでも慣れたルームメイトではある。思い馳せる記憶と眠気から意識を引き戻し、シャルロットへ向き合う。

「世話になったな」

「私の方こそだよ。なんてお礼を言ったらいいかってくらい」

「また言いやがる。礼を言われるようなことは」

「してないって言うのはわかっているからね。だからこれはただの押し付けの感謝——桐也、ありがとう」

確かにシャルロットはスパイとして送られていたわけではなかった。だから桐也がなにもしなくても結局行き着く先は変わらなかつたかもしれない。けど、シャルロットにとっては桐也が葛藤しながらでも、自分を友人と呼んでくれて手を伸ばしてくれた。シャルロットには、それが嬉しかったのだから礼のひとつくらい仕方ない。

しかし、そんなことを露ほども知らない桐也は、真っ直ぐな感謝など言われ馴れておらず、顔をしかめムズ痒そうにしていた。そんな様子にシャルロットはつい吹き出してしまふ。そして、そのせいで余計に桐也は顔をしかめる。お礼を言ったのにここまで嫌そうにされるのも珍しい。

「ハッ、礼言うくらいならISの理論とか教えてくれ。公式の暗記はともかく応用がさっぱりだ」

「あ、そういえば試験も近づいてきてたね。赤点で夏休みも補習だったけ?」

「やめろ、現実を突きつけるな」

桐也は今日一番深刻そうな顔をする。らしいと言えはらしいが、シャルロットは自分が部屋を移ることよりも衝撃を受けてそうなのとに少し納得いかない。

ぶつぶくぷーと頬を膨らませるも今回は着信拒否、桐也に不機嫌は届かない。こういうわかりやすいサインを出したうえで察しが悪いときには、桐也が意図的に無視している可能性にシャルロットは気づけなかった。

「金輪際の別れでもねえし必要以上にしんみりすることないだろ」

「……はあ、そうだね。また適当に遊びに来るから歓迎してね？」

「好きだけ来ればいい、俺に試験勉強を教えにな」

「遊びに言って言ってるんだけどなあ。ま、教えただけなくもないけどさ」

「サンキュ、マイフレンド」

「どうってことないよ、マイフレンド」

それから二人は夜が更け、朝日が顔を出すまで話し込んだ。なんだからだ言ってどこか名残惜しかったのだろう。出会ったときのこと、なんでもない日常であったこと、つい昨日のトーナメントのこと。話は尽きることなく朝日がちらつき、室内が明るくなった頃ようやく時間がどれだけたっていたのか二人は自覚した。

「あー、もうこんな時間。そろそろ荷物まとめておかないと山田先生が迎えに来ちゃう」

「山田先生に始まり、山田先生で終わるシャルロットの1025号室生活……ってか朝日？　なんか朝日が見えてね？」

「徹夜しちやったねえ」

「やっべ、今日の授業って……あ、一時限目が織斑センセか。死んだな」

元からある程度まとめていたのか、バッグをいくつか肩に掛け、シャルロットは手早く荷物をまとめきった。桐也は徹夜の責任転嫁をするかのように朝日を憎たらしげに見つめている。いくら睨んでも沈むことはなく、諦めたようにため息。

対して、一晩くらい徹夜ならお肌への影響を無視すればそこまで堪えないシャルロット。悪いことしちやっただと思いなながらも、どうにも話すのが楽しかったから仕方ないかと適当に罪悪感をポイする。

ノックの音が室内に響いた。部屋の外にいるのは山田真耶だ。

「じゃあ、また教室で」

「おう、また明日」

「ナチュラルに今日休もうとしないで、今日もちゃんと来てね？」

「おかしい、シャルロットが言葉の綾で誤魔化せなくなってる」

「桐也のせいだよ。それじゃあ、ほらシャキツと目を覚まして！ また今日の教室でね！」

「おっと……うい、今日の教室で」

冷蔵庫から出した缶コーヒーを投げ渡してシャルロットは102号室を出ていった。閉まりそうな扉の隙間から最後に見えたのは笑顔で手を振るシャルロット。ボタンと扉が閉まり、室内に一人となった桐也は手元の缶コーヒーを眺める。

「シャルロット、俺がコーヒー飲めねえの知ってて渡していったな……？ にながっ」

かくして、桐也とシャルロットの共同生活は幕を閉じたのであった。

▽▽▽▽

シャルロットが部屋を移った当日。目蓋が重力に逆らうことを放棄しそうになりながらも、山田先生から重大発表があった。なんとシャルルはシャルロット、男ではなく女だった。うん、知ってた。

当然のように騒がしくなるクラス内。貴公子とも言える美少年が幻想であったことを嘆く声に、やけに綺麗だからおかしいと思っていたと言う奴もいれば、もう女の子でもよくない？ って聞こえ——おい、最後の誰だ。そんな騒ぎの最中、更に燃料が投下された。

「んんん？ でも今までデュツチーってでっちーと同じ部屋じゃなかったけ？」

のほほんさんが放った一言で騒動の矛先が俺に向いたのがわかった。ハッハッハ、やらかしやがった。一夏に助けを求めるも手を合わせて南無南無じゃねえんだよ、助けろって。シャルロットは普通に顔真っ赤にしてバグってる。誰か叩いて直してやれ。

「何かなかったの？ むしろナニしなかったの？」

「アバンチュユったの？ 一線越えちゃったの!？」

「さあ、テキパキ吐きなさい！」

シャルロットが男装してたことに深く触れないのは気遣いか、そういう風に教えられているのか。どちらにせよ、こうしていらぬ所には触れず楽しげに流すいいクラスメイトたちに恵まれたと思う。ただし話題の矛先が俺じゃなきゃな。楽しそうな話題は絶対に流さねえもんなあ！

織斑センセがまだ来てないのをいいことにクラス内の騒動エネルギーが全て俺に向かってきた。タイムセールで主婦に押し寄せられる商品の気持ちかわかる。美少女かオバサンかとか関係ない。普通に怖い。

「うっせー！ なんもしてねえしナニもしねえよ！」

たまにシャルロットの防御が甘かったとか、そのせいでムラツとして夜中に何度も走り出したとか言えるか。こちとら思春期の男の子なんだぞ。下半身とか直ぐに暴走しそうになんだ、どんだけ辛かったと思つてやがる。

「チキンー」

「へたれー」

「むつつりー」

「おいコラ泣くぞ」

「でっちー、安心して〜。そんな事実に関係なく、噂には尾ひれがつくものだからね〜」

「尾ひれ付ける気満々じゃねえか！」

「えへへ、つけなくても勝手にいちゃうんだよー」

この頃わかってきたことがある。このクラスメイトたちは多少雑に接しても微塵も気にするような奴らじゃない。代わりにくせ者揃いだ。曲者じゃなくて癖が強すぎる的な意味で癖者。字面が違うだけで意味は同じだが他に合う言葉が見つかんねえ。

もう騒動を収めるのは諦めた。織斑センセが来るまで待つ。しかし、このままここにいるのは辛いので一夏へ視線を送る。

「いやもう、あれだ。皆の前でキスする一夏と比べりゃへたれだろう

よ」

「おい桐也!？」

「道連れだこの野郎!」

「くっそ、表出ろお!」

「上等だア!」

急に喧嘩腰な俺たちにクラスメイトの波が少し引くが気に止めず、先頭の席の一夏へズカズカと向かっていく。そのまま一夏と胸ぐら掴み合いながら勢いのままに廊下へ転がり出る。上手く足を引っ掻け教室のドアを閉めて、一息つく。

一夏と無言でハイタッチ——脱出完了。

「なんとか出れたか……一夏、助かった」

「気にするな。けど割りと本気で巻き込もうとしてなかったか?」

「上手く逃げられなかったときには死なばもろともってな!」

「この野郎!？」

「逃げられたんだからいいじゃねえか、ハッハッハ!」

「そうだな、ハッハッハ!」

男同士のアホみたいな関係ってやっぱりいいなあ。お互い上手く気遣ってたシャルロットとの生活もよかったが、遠慮なく馬鹿できるのは学園内じゃ一夏くらいだからな。

「けどシャルルが女だったとは……桐也は知ってたのか?」

「知ってた。事情を説明できなかったのは悪かったと思ってる、が俺のせいじゃないから謝らん」

悪いのはデユノア社とIS委員会、俺悪くない。

「それはいいけど、そうかあ、男は結局俺たちふたりかあ。こんなこと言っただけいいのかわからないけど、ちよつと残念だ」

「わかる、めっちゃわかるわ……」

女に囲まれた生活に憧れる奴なんて妄想好きかよっほどの女誑しだろ。こちとらモテたいヤリたい付き合いたい三拍子だけ揃った健全な男の子。周りに特に親しくもない美少女が大量にいる環境はむしろツライ。

それなら同じ馬鹿して騒げる男が増えてほしい。気兼ねなく接することの出来る人間が増えてほしい。

現状、学園内外問わずに俺の男友達は一夏ひとり。重要参考人保護プログラムのせいで憎ったらしい友人^{アイツ}らも連絡がつかねえ。せつかく携帯の番号まで覚えていてやったのに番号も変えられてちやどうしようもない。この頃政府が嫌いになってきた。

「男性IS操縦者増えねえかな」

「増やすために全国で試験した結果見つかったのが桐也だけだったんだけどな……」

「そうだったわ……絶望的じゃねえか」

「でも、俺は桐也だけでも居てくれてよかったよ。この環境でひとりじゃ辛すぎるし」

「だらうな」

美少女のなかに男ひとりとか一見天国、その実地獄だ。まあ、一夏ならラツキースケベ起こしまくってそんな気もする。あれ、なんかイラツとしてきたな。

「なににせよ今日からまた同室だ」

「おう、よろしくな。あと窓側ベッドは再び俺がいただいた」

「予想はしてた。別にいいけどノート見せてくれよな！ この頃は頑張ってるけど未だに追いつけない授業があるんだ！」

「もういつものことだからいいけど、俺もこの頃はまとめ直すのサボってたし、また頑張らねえとな」

「……はあ、めんどいな」

お互いに勉強の怠さにため息を向いてた俺たちは忘れていたんだ。ここが教室の前だってことを、今が朝のホームルーム中だったってことを。

そして織斑センセがそろそろ来る時間だってことをな！

目前に出席簿が突き立ってからそれに気づいた俺たちは圧倒的にスロウリイだったのは間違いない。

「随分と楽しそうだな阿呆ども……ホームルーム中だ、さっさと教室に戻れ！」

「イエツスマム！」

教室に俺たちが転がり込むとクラスメイトらはきちつと座っていた。さっきの騒ぎはどうしたと言いたい。なんかズルいわ。

2.4. 初めてののお買い物

——ISコアとは未知である。

世紀の天才と百人中百人、いや、世界が認める篠ノ之束ですら明かすきれないとされている。ただし自己進化、コア同士の情報の共有が行われるなどのことからコア自身にも意思や人格に近いナニかがあるのではないかとされている。

一部ではいつかISとの意思疎通が出来るようになるのではないかという、オカルトめいたことすら言われているほど。まあ、それらのほとんどは根拠がなく一笑に付されて終わっている空想。

と、アメリカ国家代表のイーリス・コーリングは思っていた。

自己進化や情報の共有ならIS以前にもスペックは大きく劣れど存在し、安いSFになら有りそうな陳腐な作り話に信憑性を持たせた程度のものという認識だった。

しかし、見上げたドーム内では一機のISが飛んでいる。イーリスの友人であるナターシャ・ファイルスがテストパイロットとして駆っているIS。

そのISは二カ国が共同で制作しているものだが、割りところりやっついているという時点で察するべし。

『La……LaLa—La』

だが、そのISが歌っている。まだ途切れ途切れではあるものの、音程を取りマシンボイスが歌っていた。それに合わせてナターシャも鼻唄を歌う。つたないながらも楽しげなデュエットがドームには響いていた。

初めて聞いたときにはナターシャの悪戯かとも考えたがそうじゃないらしく、またあのISにそんな機能は付けていないと技術者にまで否定された。

『人間だつて楽しければ歌うでしょ？ この子だつてきつと同じなのよ……ちよつとなんでため息ついてるの』

何でそのISはそうなのだとなターシャに問えばそう返された。ナターシャも大概変わり者だつたと呆れ半分にため息を吐いたもの

だ。

だが、イーリスもその頃にはISが人格に近いなにかを持っていてもおかしくないと考えようになっていた。

実際に目の前であれだけ歌われればムキになって否定する方が馬鹿らしいと思っただけともいう。それにナターシャ以外が乗ってもISは歌わなかった、どころか稼働率まで落ちる始末。

テストパイロットと試験機という関係ながらも、確かな繋がりがそこにはあるらしい。

「おい、ナタル！ そろそろ降りて晩飯いくぞー！」

「ララ——あつ、わかったわ。あと5分ね！」

「おいっ!？」

ISといい関係を築けても親友との会話がドツチボールなのはナターシャの性格だろうか。それとも親友相手だからこそその気軽さか。

初めて意思を表出させたときされるIS——シルバリオ・ゴスベル銀の福音。この僅

か数週間後に初めて空を飛び、暴走を誘発され重軽傷者を出し、凍結されることとなる。

▽▽▽▽

朝起きると日光が顔に当たって眩しい。一夏と同室に戻ってから幾らかが経った。具体的には期末試験が終わったくらいか。応用が死んだような気がしないでもないが致命傷で済んだからセーフ、まだ生きてる。

習慣としてトーナメント前から休日の朝には走るようにしているというか、誰にとは言わないが走るように叩き込まれたせいで惰性に近いが着替える。

ついでに一夏も起こす、なんか一緒に走るらしい。俺よか体力あるだろうに向上心があるっていうか、付き合いがいいっていうか。就寝用のジャージからランニング用のジャージに着替え……あれ、これ着替えずにそのまま走ればよかつたんじゃね？

無駄な手間をかけた気もするが軽めにストレッチ。まだ寝ていた

いと訴える強張った筋肉をほぐす。気温の上がる前に朝の涼しい間に走り出す。

「臨海学校が近づいてきたなあ」

並走する一夏が適当に雑談しながら走ろうとする。臨海学校って面白いやあつたな。水着とか買わないと持ってきてないというか、そもそも俺って行けるのかね。

「ん、なんでだ?」

「期末試験の点数的にだな、IS理論の応用で赤点ギリギリだったからな」

「それ言ったら俺もIS基礎知識がヤバかつただけだな……千冬姉が何も言っていないってことは大丈夫じゃないか?」

「そう言われりやそうだ」

山田先生にこれからまた一緒に頑張りましょうとは言ってもらったが、織斑センセからは特になかったな。なんか山田先生は天使にしか見えなくなってきた。仕事が多くて墮天しそうとか思ってたが、最近は落ち着いてきたらしい。

親切心からの補習をよく受けている一夏と俺は人知れず安心してた。トーナメント直後とかかなり生気が抜けてたし、心当たりがあまりすぎて心苦しかったが回復してきたみたいでホントよかった。

徐々に走るペースは上がっていく。ひとりならペース配分は出来るんだが、横に友人がいると張り合おうとしてしまうのは何故だろう。明らかにジョギングのペースを越え始めた。ゴツゴツ当たる肩で牽制して競り合いながら気づけば全力ダッシュ。すれ違う他の生徒が目を丸くしているような気がしないでもないが構わん。

「水着ねえ、から! 買いにかねえと、いけねえええ!」

「俺も! ないから! 一緒に、行こうぜえええ!」

走ってる最中にわざわざ区切りにながらでも、話し続けたのは我ながらアホだった。学園端の突き当たりに着いた頃には立つことすらままならなくなっていた。一夏はまだなんとか立ってる。埋まらない体力差プライスレス。

「はっ、はあはあ……今から外出希望って申請して通るかんね?」

「街に出るくらいなら当日でもいけたはず、というか桐也ならそれくらい覚えてないのか？」

「今まで、外出したことがねえんだよ……てか俺だつて覚える気のないことはトコトン覚えねえぞ」

する機会がなかったともいうし、ひとりでも出るのが寂しかっただけでもいう。一夏くらい誘えばよかったんだが、どうにもこの近所に知り合いがいるようで邪魔するのも気が引けた。いいよなあ、近所に旧友がいるって。

「な、なんかすまん」

「気にすんな。さつきと外出届の申請に行つて、昼飯も外で食つちまおうぜ」

「そうだな、千冬姉に言えば直ぐもらえるはずだ」

「教官か、なら先ほど教務室に入られたぞ。移動する前に行くとしよう」

「お、探す手間が省けた。ありがとな」

「じゃあさつきと行くか、一夏」

一夏と俺は教務室へと向かう。久々の外出になんとか気分が高揚してくるのは仕方ないもんだろ。ちよつとした違和感くらい無視してしまえるレベル。

「……桐也、桐也。俺たちつて三人いたっけか？」

「ハッハッハ、どうやったら俺たちが三人になるんだよ。走りすぎで疲れてんじゃねえの？」

「そうだよ一夏、四人いるのに三人だなんて！ 自分のこと数え忘れてない？」

「だよなあ、ハハッ」

一夏と笑いながら四人で並んで歩く。

いや、駄目だわ。やつぱり無視できねえし、ちよつとしたレベル越えてるわ。二人多いんだよ、どこから湧いてきた。

隣でニコニコしてるシャルロットと仏頂面のようで雰囲気は緩くなつたラウラがしれつと会話に交ぎつてる。

いつから二人で話していると思つていた？

「水着買うならレゾナンスかなあ」

「あそこならだいたい揃ってるだろうしな……じゃあレゾナンスに行くか桐也」

「もうそろそろ諦めろって、完全に二人増えてるんだよ。無視しきれねえよ」

「……いつからいた？」

「走ってる途中に見かけてな、追いかけてきたのだ。会話の邪魔にならないよう、こう足音を被せてな」

こいつらデフォルトでステータス高いからもう嫌になる。

どうしたもんかね、別にシャルロットとラウラとの買い物に行くのが嫌なわけじゃない。けど買いにいくのは水着だ。なんか恥ずかしいというかシャイボーイでっちーとしては気恥ずかしい。やっぱり恥ずかしいだけじゃねえか。けど一夏はそこらへん気にしないんだよな。本当に思春期男子かよお前。

「まあ、行き先が同じなら一緒に行くか」

「ですよ、そうなるよな知ってた。一夏だしな」

「どういう意味だよ」

「気にすんなって」

別にいいけど。まあ、美少女と買い物なんざ役得じゃん。いいじゃん、スゲエじゃん。もうなんならシャルロットの下着とか見たことあるし？ 水着買いに行くくらいなんだ。恥ずかしいだけだろ、やっぱり恥ずかしいんじゃないか、ループだよこの思考。

「でもふたりは水着持ってないのか？」

「スクール水着、というものなら」

「ラウラ、アウトー。買いにいくぞ」

「む、クラリツサは嫁がマニアックならイケると」

「一夏お前って奴は……」

「距離取るなよ。俺の趣味じゃないって、だから離れんなって」

前から気にはなってるけどそのクラリツサって人は誰なんだよ。予想ではサブカルまみれのおっさん。大穴でラウラと同じ年くらいのアニメ好きな子。

「私は、日本のデザインののも見てみたいなあつて。それに向こうから持ってきてないし」

「つまりないんじゃないか？…スク水でいくか？ 一夏が喜ぶぞ」

「喜ばねえよ!? やめろ、俺に変な属性つけないでくれ!」

「嫁が喜ぶなら私が着るぞ!」

「喜ばないって言ってるだろ!?!」

シスコンでロリコンなら取り返しつかなくて面白いんだがその線は無さそうだった。もし本当にそうなら惚れてる子は堪ったもんじゃないだろうけど。妹ともなればドストライクかもしれないが、そうなるわけでもないしな。

外出届は無事に出せた、のだが時間を食い過ぎたようで織斑センセが外出してた。たまたま居合わせたミスト先生に渡す。なんだかんだこの先生もよく見かける。

着替えてモノレールに乗って、駅前で待ち合わせして、いぎレゾナス。ラウラはデートみたいだとウキウキしてるし、シャルロットは友達と遊びに行くのが初めてとかでポワポワしてる。うん、人生色々あるしこれから楽しめばいいんじゃないかな。俺はなんにも言わん。

「ちなみにラウラが制服な理由は?」

「私服持っていないだつてさ……」

「学園生活に必要ななかったからな。待て、桐也。何故悲しそうな目をする」

「……うん、まあオカン。もう今日ついでに選んでやれよ」

「私はオカンじゃないから」

「じゃあ、こつちのオカンでいいか」

「俺もオカンじゃねえよ」

今が楽しいなら良しとしておこう。

水着売場。際どいブーメランパンツを取って一夏に渡す。無言で戻された。

「何で戻すんだよ、イカしてるだろ」

「あれを着ていくのはイカれてるだろ。明らかに出るだろ」

「間違いなく出るな。どこに需要を求めて作られたんだ……？」

「出るとは何がだ？」

「何がってそりやナニ」

「わああああああ！ 桐也シャルラップ！」

そんなどうでもいいことを駄弁りながらも、お互いに特に悩むこともなく数分で選び終わる。

そしてここからが本番。女子の買い物は長い。勝手な偏見だが女子って手が届く理想に対しては妥協しないよな。あとは選んでるっていう行為自体に楽しみを感じてるとかだろう。

ラウラが水着を眺めてしばし悩んだあとに物陰へ移動した。覗き込むとどこからともなく通信機を取り出し、俺と一夏とシャルロットが全力で止めた。知ってんだぞ、絶対クラリツサとかいうサブカルまみれにヘルプ送るだろ。

「むう、クラリツサの何がいけないのだ」

「日本に対する常識、間違った知識の布教」

「お前は知らない人間に対して結構辛辣だな」

「むしろ知らない人間だからな」

面と向かってとか言えねえ。チキンと罵るクラスメイトが脳裏に浮かぶのはなんだろうな、1組の空気に当てられ過ぎたか。

まあ、一夏を連れてゲーセンにでも行くかと身体を反転させたら、一回転してまた正面を向いていた。何を言ってるのかサツパリだが俺もサツパリわからん。シャルロットが肩に手を当ててることだけはわかる。ワザマエ怖っ。

「ふたりだけで遊びに行くのは駄目、水着選びに付き合っつて」

「シャルロットの買い物って絶対長いだろ」

「否定できないことを言っつて暗に断らないで」

「何故バレた」

「慣れかな」

これだから学習能力の高い奴は誤魔化しにくい。一夏も何か言っつてやれと言おうとすれば既にラウラに押されていた。パツと見で圧

倒的劣勢。

「嫁、私の水着を選べ。選ばなければ学園指定のものを着て嫁の趣味だと言いつらすぞ」

「どんな脅しだよ!？」

「失礼な、これはお願いだ。ただ断りづらいだけでな!」

「人はそれを脅迫って言うんだよ! ……はあ、わかったよ」

一夏、完封負けしてんじゃねえよ。シャルロットもじゃあ私もそう言うじゃねえよ。

別にここで断つても本当にやりはしないだろう。しないよな？

きつと恐らくしないだろうが一夏だけ置いていくのも面白、違った、しのびない。せつかく友人と外出してんにボッチで遊ぶのも面白くない。

「しゃーねえなあ。けど選ぶ手伝いとか出来んぞ」

「桐也の感覚で似合ってるかどうかぐらいで感想くれたらそれでいいよ」

「あいよ」

「嫁は選んでくれ、惚れ直すようなものをな」

「はあ、わかったわかった……」

ツッコミどころの多いラウラは置いておいて、しかし、女性用の水着売場は居心地の悪さが半端じゃないな。

恥ずかしいとかそっちの居心地の悪さじゃない。いざ来てみるとわかった。他の客の視線が微妙に刺さるけどスルー。一夏も一瞬眉をしかめたが何も言わずラウラに引つ張られていた。こういうのは敏感なのに何故好意には鈍いのか。

「なんかごめんね」

「気にしてないからさっさと選べっての」

「えつと、じゃあこれは?」

シャルロットは話題を変えるためか、適当に取ったっぽいワンピースの水着を身体の上に当てて聞いてくる。綺麗に取り繕った感想とか出ないし、感覚で感想が欲しいって言ってたし直球でいいか。

「下の上くらいの微妙さ」

「うんっ！ 思ったより飾り気なくハッキリ言うよね！ ちょっと本気で選んでくるよ！」

「行ったら、俺はトイレ行ってくる」

「決まったら呼ぶからどこかに行っちゃ駄目だよ！ あと知らない人に声かけられても着いて行っちゃ駄目だからね！」

「オカンか」

手をヒラヒラ振って通路へと出ると、解放感がパない。チラリと見えた一夏とラウラが親子に見えて微笑ましい。思わずポケットと眺めてしまう。

しかし、あれだな。1組の居心地が良すぎて割りと世間が女尊男卑だったの忘れてた。いや覚えてはいたんだが俺の基本的な生活圏じゃ無関係だったもんな。学園内でって範囲を広げればまた別だったが、あそこまで露骨に嫌悪感向けられたのは久々の感覚。たまに学園内でもそういう視線は感じはするけどここまで露骨でもない。

ほら、水着売り場じゃ一夏がタイムリーに妖怪厚化粧、推定妙齢の女性に絡まれてるし。加勢するべきだろうが、更衣室から水着のまま出てきたラウラが追っ払った。こういうことは同じ女同士の方が荒波たたなくていいよなあ。あー、トイレトイレっつと。

なんて考えてると不意に金髪が視界をかすめた。シャルロットかと思っただが、違う。顔を見るより早く声をかけられた。

「女性用の水着売場を眺めているそこな少年ほく？」

「すみません、連れを見ていただけなんで警備員は勘弁してください」相手の顔を見るより早く頭を下げたのは我ながらどうかと思わなくもないが仕方ない。外出して即問題起こしてみろ、織斑センセの説教確定じゃん。それは避けたい。

話しかけてきた目的不明のブロンドヘアーなお姉さんが苦笑してる気がする。どこかで見たような気もするんだが、気のせいかな？ うん、思い出せん。道ですれ違ったとか有名人に似てるかってところ。

「驚くほど早い謝罪ね。警備員を呼ぶ気はないから頭を上げなさい」「ういっす、何か用ですか？」

「用という用はないのだけれど、人によったら水着売り場を眺めているだけで不審者として貴方を捕まえようとするわよ。出路桐也くん？」

不意に名前を呼ばれて少し驚く。けど俺の名前って全国どこか世界中のお茶の間にお届けされてたわ。記憶力のいい人なら覚えてもおかしくない。覚えててもなんの得にもならんけど。この目の前の人はそれを覚えていたんだろ。

一夏に絡んでたオバサンは覚えてなかったタイプと見た。織斑千冬の弟って方が有名だろうにな、一夏ドンマイ！

「ご親切にどうもありがとうございます。ツレに連絡してちよつと距離取つときます」

「そうしなさい、ここで捕まってしまったもツマラナイもの」

「つまらない、というか切実に困るんですよ。うちの学園の担任が怒ると怖いんで」

「あらあら、ご両親より教師が怖いだなんて珍しいわね」

ご両親にはもう会えないで心配する必要がなくなっちゃったんですよねー。とか初対面の人に言う類いの自虐ネタとしてはセーフだろうか……ギリギリアウトか。だいたい保護プログラムのこととか話すのって駄目そうだ。適当に笑って誤魔化そう。織斑センセが怖いのも事実だしな。

——そもそも両親の怖さって織斑センセとはベクトルが違ったし。なにしでかすかわからない恐さだったしなあ。

父さんは取っておいたプリンを食べると寝てる間に股間に緑茶をぶちまけるとかいう仕返しに出るタイプ。母さんはもう一段階斜め上、友人を招くときに自室にコアなエロ本並べてくるタイプ。

ハハッ、どんな両親だよ。子の顔が見てみたいもんだ。チクシヨウ俺だった。

「ハハハ、そうなんですよ。担任が怖いなのって」

「ご両親には会えないからってのもあるのかしら」

「それで……ん？ 会えない？」

……うん？ あれ、重要人保護プログラムって一般的に知られて

たつてけか。知られてなかったはず、てか周知ならやる意味ねえよな。あれは俺がISに乗れるようになってしまったせいで、ふたりに降りかかってしまう火の粉から守るための措置だろうが、俺にすら事前通告なしで行われたつてのに。

目の前の見ず知らずの女が急に異質なものに見えてくる。口のかなが乾上がったかのようで、あー緊張してるなこれ。どうするかなあ、いや、決めてるんだけど。

顔は逸らさないまま待機状態の打鉄に意識がいく。あの人たちの脅威になるつてなら——ブチ

「ああ、ごめんなさい。IS学園つて全寮制でしょう？　なかなか会えないつてことよ。言葉足らずだったわね」

「そういうことでしたか。そうですね、会わないと怒られることもないですし余計にですかね」

「ふふっ、そういうものよね」

心底焦ったけど取り越し苦労だった！　映画やドラマじゃねえんだし、そう簡単に刺客みたいなのが来るわけねえよな。なんか勝手に警戒して緊張して恥ずかしいつたらない。

「じゃ、私はこれで行くけど最後にひとつ」

「どこかの刑事っぽいんですけど、なんですか？」

「おやおやおや、なんちゃってね。興味本意のなんでもない質問よ。土砂降りの雨は好きかしら？」

「台風レベルになるほど激しければ好きですね」

休校になるからな。あれ、IS学園つて休校になるのか？

そろそろ台風の季節なんだがその辺つて要領に載つてなかったよな。学園つて休校にならない気がするな。興味深げに頷いて去っていったお姉さんには申し訳ないがテンション下がってきた。

トイレから戻るとシャルロットから呼ばれて水着を見せられた、テンション上がった。我ながら男つて単純。薄めのオレンジベースのパレオ。シャルロットつて見た目も整ってるし、なんとというか眼福でもムラツとしても抑えよう。社会的に死ぬ。

「超、似合ってる」

「よしっ、勝ったー!」

「何にだよ」

「言葉にしにくい、私のなかで譲れないもの的なフワツとしたやつ。それに本気で選んだものを似合っていないって言われたら、さすがにへこんじゃうし」

さいでか。そのあと一夏とラウラも合流したが、おかしい。シャルロットは水着を決めたものと思っていたのだがまだまだ試着したりないらしく、ついでにラウラにまで色々とあてがい始めた。

追加で30分ほどかかった。だいたいシャルロットつてモノ選びのセンスもいいし、ふたりとも似合ってる以外の感想が出なかったわけ。まあ、それでシャルロットやラウラから文句を言われることもなかったからいいけど。

「桐也がいきなり言葉を飾っても怖いし」

「わかるぞ。なんというか、似合わないな」

「ははっ、気持ち悪いな」

「お前ら全員表出るや」

結局シャルロットが買ったのは一番初めに見せてきたやつで、ラウラが買ったのは一夏が選んでいたものだった。じゃあ追加の30分はなんだったんだとか不粋なことは空気読んで喉あたりで止めておいた。でつちー、やる気を出せば空気読むから、普段全くやる気ないだけで。

「途中からファッションショー見てる気分だったぞ」

「褒め言葉として受け取っとくよ?」

「どうぞどうぞ、なんとも受け取っとけ」

「実際にふたりとも綺麗だったしな」

「一夏のそういう、なんていうかストレートさはすげえよ……」

「きききっ、きれ!」

その後帰るまでラウラが使い物にならなくなった。ウブな乙女か……乙女か。残念ながらラウラの私服選びはまたの機会となった。別にまた時間かかるのか、ちよつと面倒臭いとか思ってたなかったから。おい、シャルロット、なんでジト目で俺を見る?

余談ながら帰ったあとに一夏が箒さんと鈴に絡まれてた。なんか明日もレゾナンスに行くとかなんとか。

「今日一緒に来ればよかったのにな……なんで微妙な顔してんだシャルロット」

「なんでも鈴が箒さんに試合を挑んだんだけ。前のタッグマッチで負けたのが悔しかったみたい」

「で結果は？」

「あたしの8勝7敗、タッグのときを合わせてトントンよ！」

「五分まで返したかったのだがな、アーリーナの使用可能時間になってしまったのだ」

やりすぎだろ。

25. 夏と心のオアシス

4時過ぎ、日の出のちよい手前の夜中と早朝の境目。そんな時間帯に起床を余儀なくされた俺は荷物を抱えて、うつらうつらとしていた。

多くの生徒が心待ちにしていたであろう臨海学校。それが今日から始まるのだ。普段なら海で水着でテンションがうなぎ登りつてところなんだが、フツーに眠かった。タッグトーナメント明けの試験がヤバかったこともあって、夜の予習復習を本格的に再開してたんだが起床時間を考慮してなかった。

学園をモノレールで出たあとには各々のクラス毎にバスに乗って出発。なんだが、意識がまだ覚醒しきつてない。とても、眠い。さつきから途切れ途切れに意識が飛んでる。座席についてから当然のように二度寝。

目覚めた頃には既にバスが海岸線を走っていた。どこだよ、ここ。

「お、ようやく起きたな」

「あとどんくらいで着く？」

「だいたい15分つてとこじゃないか？ 着きしだい今日は自由行動だぞ」

それにしても車内では海を見たクラスメイトの大半がテンションを上げている。海だー！ って叫んだり窓に張りついたり、ある意味お約束的などころを踏襲しつつ楽しんでる様子。

けどひとつ思うこととしては。

「海って学園でも見れるよな」

なにせ学園は海に面している、というか海に囲まれている。なんなら今朝もモノレールから見た。ついでに言えば毎日見てる。

「お前……風情ないこと言うなよ。なんかあるだろ、こういう行事だから楽しいことって」

「それはわからんでもない。気持ちこっちの海の方が綺麗に見えるな」

こういうのって中学の修学旅行以来か。懐かしさを感じるけどまだ一年もたつてないんだよなあ。その一年もたつてない間に色々でありすぎただけで。音信不通(強制)のアイツらは今ごろなにやっぺんだろうか……バカやってそうだ。

しかし思い出のなかのバカより今は目の前のバカを楽しもう、としたのだがレクリエーションの一環として一発ネタ振るのは止めろ。寝ときやよかった。

旅館に着いてからは女将さんに挨拶をして部屋割り。当然のように織斑センセたちの隣の部屋だった。理屈はわかる。万が一のハニトラとか、そもそも騒がしくなって旅館に迷惑にならないようにとかそういった配慮だろ。しかしハニトラ対策なら舐められたものだよな、俺がかかるわけ……わけ、なくもない。思春期の童貞舐めんな。ハニトラ対策の部屋割り、素晴らしいな！ 織斑センセが微妙にジト目向けてる気がするけど知らん知らん。むしろ精子くらいいくらでもやるからハニトラ来てくれないものか……おっと織斑センセの目から殺気が。

自室に荷物を置いたら着替えて海なわけだが、眩しいね。照りつける太陽に、それを反射する青い海と圧倒的肌色。

「学園に入学してよかったわ」

「……でそんなこと言われても困るんだが……」

「男の子なんだから仕方ねえだろ」

学園の生徒はなんで知らんが全員が全員美少女揃い。それが水着水着水着い！ テンション上がらねえとかわけわからん！

弾みたいなこと言うなあ、とか呟く一夏だがこの状況で平然としてるお前の方が非一般的な青少年だからな。その弾つて一夏の友人はなにも間違つてない。

「そんなもんなの——」

「一夏アアアアア！」

「嫁ええええ！」

「おぶあ!？」

んな会話しつつ準備運動をしていると小型人型ミサイルが二発一夏に着弾した。鈴とラウラか。

腹筋で受け止めることになった一夏がむせるもふたりは気にした様子もなくハシヤグ。楽しそうだな。

「一夏、遠泳しましょう! あそこのブイまで!」

「私もやるぞ!」

「あ、あのなあ! 人の腹に突撃しといて言うことはないのか!」

「腹筋なかなか固いわね!」

「もう少し綺麗に受け止めて欲しかったところだな」

「違う! そうじゃない! ああチクショウ、行くぞ!」

半ばヤケクソになった一夏が駆けていき、それを追うふたり。

待つてくれ、こんなところに俺を置いていくな。クソツ、乗り遅れた……この環境って見てる分にはいいがひとりで放置されるにはつらいんだよ。誰かこの微妙な機敏を察してくれ、頼む。

「でつちー、ひとりで突っ立ってどうしたの? ぼっちさんなの?」

「やめろ、布仏さんもとい、のほほんさん。あまり否定できないこと

言って人の心抉るのよくない」

近頃は慣れてきたクラスメイトでも水着でいられると話しかけにくいんだよ。なんでってそりや下心があること自覚してるからな。なまじ顔のいい奴しかいねえし、心頭滅却しようにも煩惱の前に理性が滅却されてしまう。視覚的にはパラダイスでも心の居心地的にはキツイ。はよ帰ってこい一夏。

まあ、そういう点では目の前ののはほんさんはありがたい。どこで買ったんだよとかツツコミたいところは多々あるものの全身を覆ったぬいぐるみ型の水着。これ水着なのか?

「水着だよ、なかにも着てるけど」

「そうか……」

「アハハ、ちよつと残念そうだねえ」

「そんなことナイゾー。それでのほほんさんはどうした? 入学時と
いい俺をポツチにしない係なのか?」

「おお、惜しいかな。でも隙を狙ってサクツとヤつちやう方が近いかも?。」

怖いわ。

「じゃああとで私たちとビーチバレーとかしよ。あとでおりむも誘ってさ」

「それはありがたい。そのときになったら誘ってくれ」

「ほいほい」

のほほんさんを見送り、またひとり。誰かと話そうにも視線が胸元とか行きそうで、てかどうやつても行くから無理。鋼の精神とか持ち合わせていないのでそりゃあ見ちまうだろ。光に群がる害虫のように男の子の視線は胸元や尻とかに向かっちゃまうんだよ。

……なんで女って視線に敏感なんだろうか? ハイパーセンサーもかくやつて精度なんだよな。

こうなると割りと男の友人が恋しくなってくる。隣で肩をトントンと叩く一時期男子だった奴もいるけど今は女だし、連絡つかねえアイツら元気にしてるだろうか。

「桐也さん、先ほどからシャルロットさんが肩を叩かれていますのが。とても頬を膨らませてますわよ?。」

「知ってる。あざといよな」

「あざといとか止めてよ。鈍い桐也にわかりやすく態度で不服を示してるだけだよーだ」

そうかそうか。態度でわかっても面倒そうなら気づいてないフリして無視するんだが黙っておこう。

「わたくしとも何故目を合わせないのでしょうか」

「どうせあれだよ、女の子の水着を直視できないとかだよ。桐也ってチキンだし」

「おう、待てやコラ」

シャルロットの煽りに乗りふたりへと視線を向けて、そのままスルー。海が青いし太陽がオレンジに爛々と輝いてる! 青を基調としたセシリアさんとオレンジなシャルロットの二人揃ってのパレオとか見てない。なにがとは言わんが英語圏ヤバイな。

「ふふっ、そうでしたの。案外ウブですね」

「でっちーがチキンかつウブと聞いて!」

「女の子の水着を直視できないとか聞いて!」

「どっから湧いたんだよチクシヨウ。ああ、やっぱり1組かよ! やめろー! 来んなあ!」

「桐也桐也、水着似合ってるかな?」

「ここぞとばかりに視界に入ってくんな! 似合ってるから!」

「えっへっへ」

声と反応は可愛いけど、にへらっ」と笑ってるシャルロットの顔は憎たらしい。チョップかますと頭を押さえて睨んでくるけど無視。

綺麗どころの同年代女子に囲まれた状況は内心ちよつと嬉しいが、今後の俺の評判的にこのままだとマズいので集まってきたクラスメイトは散らす。パワー負けして集られた。ひとつ言えることは、ありがとうファウルカップ、グツジョブ。さすが最新鋭の技術で作られただけある。

俺の下半身は気にしないでいいことを思い出したので遊び倒すことにした。しつかし、たまに視線が顔より下にいつてしまうし、それに気づいたクラスメイトには当然からかわれる。一夏は呆れた視線を向けてくるし味方がいねえ!

「シャルロット! お湯被ってシャルルになってきてくれ頼む!」

「私にそんな機能ないからね! 恥ずかしさでテンパってるでしょ! うっせー!」

思ったより俺の視線が理性より本能に従っちゃうんだよ! ハッ、それをわかって寄ってくる奴らは痴女認定してやろうか。その前に俺がスケベ扱いされんだけど、それは割りと学園にいるときにも言われてたな。ラウラのときとか。

「スケベー」

「エッチー」

「ま、男の子だもんね……ぶふっ」

「……………」

「あっ、でっちーが逃げ出した!」

「追えー！」

割りと言われてようが心に刺さるもんは刺さるんだよ。耐えきれずに逃げた。余裕で追いつかれましたがなにか？ 基本的なスペース差を忘れてた。

もう開き直った。でもやっぱりビーチバレーで揺れる胸とかビーチフラッグで尻とか色々大変だ。そのたびからかわれるし、シャルロットは〴〵にへらつ〴〵として茶化すし、全員叩いたるか。一夏あー！姉に見惚れてないで助けるー！

シスコン呼びわりしたら追われた、解せぬ。

そうして、さんざん遊び倒さ……遊び倒したはいいものの飲み物を忘れる失態。喉が乾いて仕方ないので面倒臭いものの旅館へと戻る最中。一夏たちには着いてこようかと尋ねられたが初めてのお使いでもあるまいし、あと数人から一夏を置いていけと視線で訴えられたため丁重に断った。

そんな道中、前から麦わらを目深に被り自転車を押す男が見えた。

一応ここらへんって学園が貸し切りにしてたから海まで行くと逮捕の危険性があるんだけどな。各国の金の卵揃いの美少女の水着盗撮とかしてみろ、色々な意味で終わる。

注意する義理もないけど、敢えて放置する理由もない。なんとなく放っておけない感じもしたので声をかけようとしたとき、自転車ごと男が転じた。籠に積まれていた小物が盛大に撒き散らされる。

「ちよ、大丈夫か!？」

「いつててて。あーあー、変に転ぶから擦りむいちゃった」

「……ん？ えっ、なんで……は？」

駆け寄ろうとして、止める。自転車の籠から落ちた物を拾いつつ顔を合わせない、ちよつと合わせれない。唾を飲んで震える喉を落ち着ける。

広いなながら横目に見た男は同年代、転げた拍子に落ちた麦わら帽子を今度は浅めに被り直した。お陰で顔がよく見える。見慣れた顔が、本当によく見えた。

「……なんでこんなところにいるんだよ、たつつん」

「イヒヒツ、水着美少女に囲まれて過ごしているでっちがいて聞
いてなあ。一縷の望みに賭けて来てみた的な？」

世界の茶の間に名前が知られてしまった俺だけど、でっちーなんて
渾名で呼ぶ奴は学園のクラスメイトくらい——でっちなんて呼ぶ奴
は昔ながらの友人だけだ。自己紹介のときにはでっちって言ったん
だけどな、でっちーの方が浸透してたし言いやすいから気にしてな
かった。

お互いに落ちた物をもたつきながらゆっくりと拾って、楽しげに笑
う男は口だけ達者に動かす。俺はちよつとマズい、泣きそう。

「なあに呆けた顔してんだか。よっす、でっち元気してつか？」

「バアカ、なんで来ちゃってんだよ」

「イヒヒツ、どうせ寂しがつてんだろうと思つてな。泣きそうになつ
てんじゃん」

「うっせえ誰が寂しがり屋だよ」

重要人保護プログラムだかんだかできあ、別れの挨拶もなしに家
族とも友人とも会えなくなつて、携帯も繋がらないわの会に行こう
にも遠いし元の住所に住んでるかもわかんねえし。もう会える可能
性はないつて薄々察してたのに、本当に馬鹿だよな。

二度と会えないと思つてた友人たっんに会えばそりや泣きそうにもなる
だろバーカバーカ。別にさっきまで女子にいいようにされてたから
余計に泣きそうとかそういうわけじゃない、断じてない。

散らばつた荷物を拾うのにもたつくのは、名残惜しさから。けど時
間をかけすぎてもどうせ誰かが様子を見に来てしまう。

「みーちゃんとかキレてたぜ？　なんででっちがIS学園入ってるん
よーつて。いつかウチがその座から落としたるつて伝言」

「なんつー理不尽、相変わらず怖えな。やれるもんならやつてみるつ
て伝えとけ」

「もう会わないつてタカ括つて大きく出たなあ。さすがでっちだぜ」
「うっせ、それでなんでここにいるんだよ」

「夏期休暇にカツコつけて隣街でバイトしてるんだよ。そいで今日は

休日だからサイクリング。しかし会えちゃったなあ、出来れば美少女との出会いがよかったのになあ」

冗談めかして言うが洒落になってねえんだよ。

「会ったのが学園の生徒なら通報されてんぞ。俺はひたすらからかわれた」

「うひゃー、やっぱ女って怖いな。俺もバイト先の先輩がさあ——」

なんでもないような話をして笑う。心底楽しくて仕方ねえ。ただ俺の両親がどこ行ったかはやっぱり知らないらしい。まあ、あの人はどこでもやっていけるだろ。

こっちの近状はなんとかやっているし、一夏も悪い奴じゃないからなんだかんだで楽しいと伝える。美少女に囲まれてハーレムじゃないいいじゃん羨ましいとか言ってこないあたり何かを察してくれているらしい。

「そっちは変わりなく過ごせてるのか？」

「まーなあ、お前に繋がるものがゴツイSPっぽいオッサンに結構回収されちまつたくらいかねえ。あ、そのときにみーちゃんは割りと抵抗したらしくて」

「念のために聞くけどみーちゃん大丈夫だったのか？」

「モチロン、痴漢容疑でSPっぽいオッサンが捕まりかけただけで済んだらしい」

「チツ、捕まればよかったのに」

「お前らふたりが口論しつつ仲良くできてた理由がよくわかるなあ」

なにしみじみしてるのか。てか口論になるのはアイツが事あるごとに人のことを単純だの馬鹿だの言ってくるからだつての。考えるだけ無駄とか何度言われたか。考えても答えがでないことが多いのは事実だけどもムカつくものはムカつくのだ。

「なんでもねー。まあ、連絡手段とか交換したいけどなあ。色々怖いから止めとくか」

「そりやそうだ……つと、拾い終わったな」

「……だな」

最後に拾った缶ケースを投げ渡す。たつつんは片手で受け取って

投げ返してきた。なんでだよ。

いぶかしむ俺にイヒヒツと笑うたつん。訳わかんねーと思つてると、時間をかけすぎた。後ろから足音が、わざと聞こえるようにしたかのような足音が響いてきた。

「おい、ここはIS学園が貸し切っている場所でそいつは学園の生徒だ。なんの用で立ち入ったか話してもらおうか」

よりにもよって織斑センセがおいでなすつた。なんで一夏じゃないんだよ、ハプニングに優しさが足りねえよ。たつんも口元がやべえつて連呼している。ついでに目は任せたと言っていた。丸投げかよ。

「なんか物騒つすよ織斑センセ」

「だろろなバカ者が」

ツカツカと距離を詰めてきたパーカーの襟首を掴まれて引き寄せられる。耳元で織斑センセが小声で早口に、しかし耳によく通るように話してきた。

「今ここが私の見逃せるギリギリなんだ。あと少しでも進んでビーチから、生徒たちから見えるところにも行ってみる。問答無用で捕まえるしかなくなっていたぞ——でコイツはなんだ」

最後の一言以外一息に言い切り襟首を離される。今は体裁上、図書館にいかなくてもわかるフレンズだよと言うわけにもいかない。ちなみに察するのが得意なフレンズだ。

「ああ……はい、どうにも迷ったみたいでこっから先は学園が貸し切っているから引き返した方がいいって話してたんすよ。そんできちよつと歳が近いから話し込んでしまいました」

「そーなんですよ、教えてくれてありがとな！ その缶ケースはお礼代わりに取つといてくれ！」

さすがマイフレンズ、小声の会話は聞こえてなかっただろうに、早々に空気を読んで口裏を合わせてくれる。あとは冷や汗をかいてなきやもつとイケてたと思うぜ。

「じゃあ、またどつかで会えるといいな！」

「まったくだ……もう迷うなよ！」

「肝に命じとくき！　またな！」

さつきまでのもたつきはどこへやら、颯爽と自転車にまたがって去っていくアイツに手を振って別れを告げる。

で、久しぶりの友人との再会を噛み締めたいところだが、隣に立つ織斑センセがそれを許してくれない。いや、既に色々許してもらったんだが。

「アイツ見逃しちやってよかったですか？　ここだって一応旅館への道ですよ」

「なんの話かわからんな……まあ、そうだな」

らしくもなく発する言葉を探している様子の織斑センセに首を傾げざるをえない。やがて当たり障りのいい言葉を探すのは面倒だと言わんばかりにため息ひとつ。

「ハア……お前は一夏に比べても急に無くなったものが多いことはわかっているつもりだ。これくらいならバチも当たらないだろう」

「ありがとうございます」

「だが世の中は都合がいい方へ転がることの方が少ないとは覚えておけよ、青二才」

「ういっす」

もしここに他の生徒がいたら、もしここで何処かの輩が覗き見していたら、もしここでやって来たのが織斑センセじゃあなかったら。見逃してもらえなかったかもしれないってことだろう。もう少し意味を含んでそうだったが俺に察せるのはここで限界。なんにせよ感謝するだけだ。

「あとは目尻をぬぐっておけよ。またアイツたちにからかわれるぞ？」

「泣いてねえっす。いや、ホントに」

「フツ、そうか」

織斑センセと旅館に戻り、本来の目的の財布を回収。ついでに缶ケースを開ければ、お守りが入っていた。厄除けと学業……なんとなく煽られてる気がするのは気のせいじゃないな。学業とやけに重たい厄除けのお守りは鞆へ仕舞っておく。学園に帰ったら制服のポ

ケツトか鞆にでも入れておこう。

そんなことをしている間に部屋の戸が開かれた。誰かと振り向けば一夏。

「桐也、まだかー？」

「一夏遅いわ！ 来るならもうちよつと早く来いよ！」

「なんで俺が言われてんだよ!?!」

そのあと戻ってからはからかわれようが気に止めずからかい返すくらいになった。なんとなく調子がよくなった気がする。

「きー！ でつちーのくせにー！」

「フハハハッ！ 負け犬の遠吠えなんぞ聞こえんなあ！」

「ファウルカップ入れてるくせにー！」

「やめつ、ヤメロオ！」

まあ、勝てないんですけどね？

▽▽▽▽▽

「ねえ、かの天災、篠ノ之束が理解できないものってなにか知っているかしら？」

トレーニングを終えて自室へと向かう途中、廊下の壁にもたれ掛かった上司に絡まれた。ウザイ。

「藪から棒になんだ。そんなものは知らん。存在しないものを尋ねて私の反応を楽しむつもりなら付き合う気はないぞ」

「付き合うだなんて、私は身体の関係だけでいいのよ？」

「おい、止めろ近付くな止まれ離れろ！」

蠱惑的な笑みを浮かべ近づいてくる上司を蹴り飛ばす。この場にヒステリー持ちの同僚がいればまた五月蠅く騒いでいただろうが、蹴り飛ばされた上司は肩を竦めるだけ。なんなんだコイツは気持ち悪い。なんで私はコイツの部下なんだ。

「連れないわねえ。あ、話が逸れちゃったわね」

「篠ノ之束にわからないものだったか……ああ、そうだ。ISコアのブラックボックスか」

ISが開発されてから未だ世界はコアの構造を解き明かせずにいる。お陰でコアを製作可能なのは篠ノ之束のみ。だが製作者本人ですらコアの一部は理解の及ばないブラックボックスと化している、らしい。あの世界から追われようと飄々としている狂人の言をどこまで信じていいのかわからないがな。

まあ、しかし。これで上司の求めていた解答を済ませただろう。さっさと出ていけという念を込めて視線を顔へと向ければ、何故かクツクツと笑っていた。なんだコイツ気色悪いな。

「私は彼女が理解できていないのは人の感情じゃないかと考えているのよ。理解というより共感ができないから、その感情が芽生える根本がわからないというべきかしら？」

曰く、統計的に人的環境や物的環境、その他もろもろを合わせた状況で人がどのような感情を発露するかということならば篠ノ之束にもわかるだろうと言う。しかし、それはあくまでも推察であり本当の理解かは怪しく、絶対的に共感ではない。人外じみた計算を元に思考は読めても、常人がなんとなくで察する心はわからない。それが篠ノ之束。

「なんてね」

「たしかにそうかもしれない。そうでなければ何の準備もなくISを披露したりしない。篠ノ之束の感性で凄いと感じるものを常人が一目で凄いとわかるわけがない」

「ない、ない、ない。否定尽くしね」

——まあ、それに関してはわざとじゃないかしら。

そう小さく呟かれた言葉は私の耳にも届いたが意味がわからない。問うつもりもない。早く本題に戻って話を終わらせてほしい。

「それで篠ノ之束が人の感情や心がわからないとして、だからなんだ？」

「ISのブラックボックスがまさにそこなんじゃないかと思って。ほら、ISコアには意識のようなものがあるって言われてるじゃない？」

当然、私たち常人にだって心は理解しきれないものだけど、感情だけは理屈抜きに篠ノ之束よりわかっていることよ」

「話が見えないぞ。篠ノ之束が心を理解できず、コアの心に当たるところも理解できないとしてだ。それがなんだ、それで何が出来る」

「彼女にとってのブラックボックス、実は私たちにとってはそうでもないのかもしれないって考えたわけ」

「楽しげに指先をくるくる回して講釈垂れる目の前の上司。そういえば元軍人だったか。なにか教える立場にあつたときのくせかもしれんが、私としては長話になるほどダレるのでさっさと結論を言っほしい。」

「もう、急かすわねえ。つまり、人の精神に対する働きかけとしてマインドコントロールや洗脳ってあるでしょ。」

「だから——ISの心の動きに指向性くらい持たせられないかしらと思つたのよ。出来ちゃつたわ」

「意識に指向性をか、相手が機械なのが吉と出るか凶と出るかはわからんが出来なくはないのか……？ おい待て、最後になんと言つた？」

「出来ちゃつたわ。取り敢えず街ひとつを落としてみるように大雑把なものだけど、出来ちゃつたわ」

「てへぺろ、とか言ってる目の前の上司に開いた口が塞がらない。三回も言うな鬱陶しい。なにが私たち常人だ、コイツも十二分に狂人じゃないか。」

「どうやって実行したか、どの機体を使ったかとか、まだ話続けていたがもう聞く気力もない。」

「享楽主義のコイツの興味を惹いた憐れな奴に少しの同情を向けるだけだった。」

「ああ、早く姉さんに会いたい。」

26. 思慕―暫定的結論―

期せずして友人に会ったその日の夜。旅館と言うだけあって和風の面持ちな宿だが、夕食はテーブルと座敷に別けて摂ることになっていた。IS学園は海外からの学生が多いせいなんだろう。それでも座敷、もしくは座敷に近いテーブル席に生徒がたむろうのは一夏がいるからか。

律儀に正座して既に足を痺れさせている奴も散見している。その内のひとりがシャルロットなんだけど足の裏つつきたくなるよな。我慢できずにつついた、普通に怒られた。

「料理をひっくり返しかけたよ!」

「ひっくり返ったのは声だけでよかったな」

「よくないよ! まったくもう……」

一夏は新鮮な海の幸に釘付け。一口一口噛み締めて味わってるし、ものによつては調理方法を推察し独り言が漏れている。一部の主婦か料理人ならあり得ても断じて男子高校生の食事風景じゃねえよ。今ちようど隣でワサビに鼻をやられたシャルロットの方がまだ可愛いげがあるぞ。バシバシ叩かれてるけど、なんでだよ、ワサビに関しては俺悪くないじゃん。

そんな思いを胸に視線を向けたら鼻をつまんで目尻には涙が浮かんでた。結構余裕がなさそうな顔をして笑う、余計に叩かれる。皿を見ればおろしワサビが丸々なくなっていた……全部食ったのかよ。

「あー、まずは鼻から息を吸って」

「スーッ」

「鼻から吐いたら――余計に痛くなるから口から吐けよ?」

「フーッ――イッ?!?!」

「だから鼻から吐くなよって言ったのったい痛い! 本気で叩くなつてのー!」

「いや、そこでフェイントかけてやるなよ……」

昼間の仕返し。近くのクラスメイト、相川さんやのほほんさんやらから度量がちっさいぞーとか聞こえるけど無視。そこらへんについ

ては自覚はあるのでいくら言われようと痛くねえんだな、これが。そんな声を聞き流しながらも視線を移すと箒さんがやや面倒そうな面持ちで出ていった。喧しいのが嫌だったのかつと、肩をぼすぼす叩くシャルロットからの猛抗議が止まらん。

「桐也のバカッ！ バカバカバーカ！ なんであそこで嘘、は言っていないけどフェイント掛けるのさー！」

「面白いかなって、俺が」

「私は面白くなかったよ！ まだ鼻の奥がツンツとするよ！」

「ならあとはデレさせるだけだな、ガンバ」

「わけがわからないよ!?!」

「シャルロット、桐也の言うこと全部を真に受けていたらキリがないと思うのだが……ほら、水だ」

「うう、ラウラありがと」

元気になった俺は今夜フルスロットルだぜ？ 多少失礼なこと言われようとも気にならんくらいには気分がいい。

まだ鼻を押さえつつ息も絶え絶えなシャルロットは額にじんわりと汗すら浮かんでいた。夏だし暑いからな、仕方ない。お前のせいだよ的な視線はオール着拒、言葉にされるまで気づかないフリはお手のもの。

「ばーかばーか」

「語彙力下がり過ぎだろ。そもそもなんでワサビを一気に食うんだよ」

「大根おろしみたいなのかなって……チューブのワサビしか知らなかったし」

「シャルロットって割りと抜けてるところあるよな」

「桐也ほどじゃないかな？」

シャルロットもだいたいぶん言うようになったよな。ただし、べーつと舌を出してるあたりの怒ったアピールの仕方が幼いというか可愛い。学園入学前とか普通にシバく蹴りを入れるの応酬が当たり前だった。口論にしてももう少し汚かったな。それに比べると可愛いこと。またはあざいとも言う。

顔がいいとなにやっても様になるしズルいよな。シャルロットがシャルルとして来たときの男装しかり。

——ああ、そういや男装の件は片付いたけどデュノア家関連のことはなにも解決してないのか。なんというか大変な家庭環境だよな、庶民平民な俺にとっては学園こくえんに来なきや縁縁が出来ることもないような話だ。

察しのいいシャルロットは向けていた視線から何かを感じたのか、プリプリ怒った様子を引つ込め小首を傾げる。相変わらず鋭い、こつちからしたら鋭すぎるのも困るんだがなあ。

「どうしたの？」

「なんというか、難というに値する話題だと思っつてな」

「話を煙に巻く方向にギア上げないでほしいなあ……読み取りにくいよ」

読み取れる方が凄いなだけだな。俺は口を回して煙に巻くけど。

シャルロットとは他の学園生徒に比べて親しいつもりだが、まあ家庭問題に自分から首突っ込んでどうなってるか伺えるほどかと言われれば違う。俺としては微妙な距離感を保っている、と思ってる。いや、普通に友人なんだが家庭っていうもう一線越えたところに顔を出すとか早々するもんでもないだろ。だいたいなんでこんなこと考えてんだか、カットカット。

しかし体力オバケのクラスメイトたちと丸一日遊んだせいかわいぶん身体に疲れが溜まってんなあ。入学前なら半日で倒れてた自信がある。

そう口に溢すと料理に舌鼓をうっていた一夏が反応した。

「お、ならひさびさにマッサージしてやろうじゃないか」

「あー、頼みたいとこなんだが一夏は疲れてねえのか？」

「桐也より体力あるからな！」

「事実だがなんとなく腹立つ」

この会話のせいでその場が色めき立ったのは気のせいだ、気のせいなんだ。



目の前に酒を煽ってる大人がいる。職業は教師で今回の臨海学校引率者である織斑センセだ。片膝を立てて缶ビールをちやぶちやぶと揺すっている姿は行儀の悪い酔っ払いそのもの。マツサージしている一夏から小さなため息が聞こえるが織斑センセはどこ吹く風。

一夏がマツサージをしてくれるというから来てくれと言われて着いていった先は隣の部屋。つまるところ教員用、織斑センセのところだ。この人にマツサージしてからついでに俺にするつてのはわからんでもないがなんでだよ。いいじゃん、自室でやれば。酒飲んだ大人とか面倒以外の何者でもねえよ。

「勤務中の飲酒ってどうなんすかね」

「労働基準法に基づき私の今日の勤務は終わった。もう8時間以上働いたからな……ぷはっあー！」

いや、終わってねえだろというツツコミは口に出さないでおく。この人たぶん絡み酒のタイプだ、いつもより饒舌というか発言が軽くなってる。

マツサージを終えた一夏が耳元でボソリと一言。

「桐也当たりだ」

「でお前たちはこれだけ女に囲まれていてアレな話のひとつもないのか?」

「マジでめんどくさいタイプじゃねえか……あ、一夏お前ひとりで相手するのが嫌で呼んだな?」

「ハハッ、なんのことだか」

「それでどうなんだ?」

「残念ながらねえですよ。てかさんなことあれば瞬く間に噂が広がってますから」

姉弟で水入らずの親交でも深めときゃいいのによ。

それに俺も一夏も風呂がまだだ。マツサージで解れた関節をくいくい回しつつ立ち上がる。適当な返事もほどほどに幸い手の届くほど近くにあった戸へと手をかけるが、止めにくるかと思つた織斑セン

セはニヤニヤとしたまま。やや不可解なものがなくもないが退散できるならこれ幸い。スパンツと戸を開けた。

——箒さん、ラウラ、鈴が雪崩れ込んできた。慌てて後退。絡み合うようにして倒れる3人から視線を上げれば気まずそうに顔を逸らすパツキンが2人。セシリアさんとシャルロット。なにしてんのこいつら。

大方一夏が入ったのを見てて聞き耳たてたとかだろうが、セシリアさんとかシャルロットは特になにしてんの？ 実は一夏に興味があつた？

「いや、その……初めは止めてたんだよ？ ホントだよ？」

「ですがなから色恋沙汰のお話が聞こえまして、わたくしたちも年頃ですので好奇心が押さええれず」

「なるほど、好奇心に殺された猫になるってことか」「えっ？」

織斑センセが俺を止めなかった理由がわかった。部屋の前の獲物×5を誘き寄せるためだったらしい。まあ、あれだ。絡んで酒の肴にでもするんだろ。

シニカルにニヤツと口角を上げる織斑センセと目が合う。手をヒラヒラしてるあたり出ていっていいぞってことか。一夏と俺が部屋を出て、あとの五人も素知らぬ顔をして出ようとするも。

「おい、盗み聞きの小娘どもは話がある」

「ヒツ……は、はい」

「だから止めようって言いましたのに……」

「あんたも途中からノリノリだったじゃないの」

普通に止められていた。満面の笑みで5人に敬礼して退室、恨みがましい視線を送られたがそよ風のように気にならんなあ！ むしろ安全圏からそういう光景を眺めるのは愉悦なんだ。しかし織斑センセの気が変わっても困るので早々に戸を閉めておく。一夏が呆れたような、なんか附に落ちたような顔をしてるがちゃっかり見捨ててるのは一緒だからな？

脱衣所で俺は適当に脱ぎ散らかし、一夏はきちんと脱いだ服も畳み

浴場へと入る。離れの小さな露天風呂だが、それでも景色はいいな。思わず感嘆の声をふたり揃って漏らしつつ、一夏が話を続ける。

「そうじゃなくてな。なんていうか、桐也は桐也だなんて思っ
「なんだそりゃ」

一夏の発言の意図が掴めず、なに急に染々と納得したような顔して
るのかといぶかしむ。ただそんな俺を気にした様子もなく爽やかな
笑顔で流される。

「なんだってんだ。ええい、肩をバシバシ叩くな。俺の周りなんて
なにかと叩いてくるんだよ。」

「いや、タッグトーナメントぐらいから訓練頑張ったり嫌がってたト
レーニングしたりして、あげく優勝してなんか変わったなあって思っ
てたんだけどさ。やっぱり桐也は桐也だよな」

「んなことか、人間そう簡単に変わるかっての……」
「だよなあ」

「だいたい知り合って半年足らずだぜ？ なんならお互いに知らない
ところなんてまだまだあんだろ。なら変わったよりも知らなかった
ところが見えてきたって可能性があるぞ？」

「あー、確かにそうだよな。学園に入ってからが濃すぎて……」

「言わんとしてることはわかる。たかだか数カ月のうちに手始めに
家族離散、続いて二人の例外を除いた女子校入学。そこからも何故か
イギリスの代表候補生と戦うことに、それでも学園内は安全地帯かと
思いきや無人機との戦闘。これで一息つけるかと思えば転校生、片方
は男装で片方は一夏との因縁ありだ。」

無人機なんかあれだ、絶対防御を謳い文句にしてるISに乗ってお
いて危うくナチュラルチーズのように溶かされる手前までいったの
は笑えてくるな。絶対なだけであって完全じゃない、絶対発動するだ
けで完全に防御しきるわけじゃないと。そんな大事なところで日本
語のややこしきで遊ぶなんての。

あとは、そうだな。やっぱりシャルロットの男装か。あのとき一夏
ならどうしてたやら。なんとなく視線を向けるが髪を流す一夏は気
づかない。ま、俺みたいに無駄な葛藤なく手を差し伸ばしたんだろう

な。

いつだったか。クラス代表決定戦のときにでも『守る』って言ったし、そういう行動を取ることを躊躇わない奴に思えてならない。なーにがそんなにさせるのやら。さっきも言ったが短くもないが、決して長くもない付き合いのなかでそういう印象を抱かせる一夏。まあ、ちよつとくらい踏み込んでもいいか。喋りたがらなければ直ぐに引つ込めばいい。

湯に浸かってびばのんのんしてる一夏に声をかける。

「なあ、一夏あー。聞きたいことがあるんだけど聞いていいかー？」

「なんだー、桐也あー」

「なんていうか、一夏って守るっていうのが行動理念にある感じがするってかだな。実際に口にしたこともあつただろ？ それってなんでなのか気になってだなあ……言いたくなきや聞かんけど」

間延びした声は温泉が心地よすぎるせい。最後の一言は予防線。

「ああ、それか。んー、どう言ったらいいんだろうなあ。というかどこから言ったらいいんだろう……」

頭をポリポリと搔いて、タオルの位置を直す一夏は悩ましがた。話すこと自体は嫌がついていないようでもよかつたが、踏み入りすぎた質問になつてゐるのではという懸念が浮かぶ。

懸念が当たつていた。

一夏が幼い頃に両親が行方を眩ませた。それからは姉、つまり織斑センセと一夏がふたりで暮らしていくようになったのだが幼い一夏に何ができるはずもない。織斑センセが一夏の面倒を見ている状態だったらしい。実際は知り合いの大人が手を貸してくれるところもあつたようだが、それでもだ。

そうして一夏も家事手伝い出来るようになり(すぎて織斑センセの家事力が底をつき)、ISが世界に浸透して世界大会が二回目の開催を迎えたとき。

一夏は誘拐された。犯人はわからずじまい、一夏は無事に保護された。ただし織斑センセが決勝戦を棄権するという形でだ。

そのときのこと、それだけでなく今まで、今も姉に守られている一

夏は自分もISに乗れるようになったことで、より今度は自分が力になりたいと思ったそうだ。自分が守りたいと思ったそうだ。

なんとも言葉に、感想に詰まる。一夏の行動の熱量やその信念の源泉はわかった。

「まあ、まだまだISも半人前なだけだな」

「そう、だな……」

けど、言いにくいが一夏もなにも返せていないわけじゃないと思うのは一夏に失礼だろうか。いや失礼なんだろうな。

周りに助けられて守られて育ったから今度は自分の番。皆を守らるって理念は正否は置いといて、別に悪いことでもない。

俺の喉元に引つ掛かっているのはただ一夏はそこまでしなさいといけないほど、そこまで思わないといけないほどの庇護を受けていたのかみたいなことだ。一言にまとめりやプラスマイナスの話。人は誰だって周りの助けがあつて生きてるだろ。それを皆に守られてきたから、今度は自分が皆を守るっていうのに言葉にできない違和感が出ただけ。

こりや俺が捻くれてるからか。俺が人を守る助けるって行為に損得勘定する、助ける前に自分の安全と助ける行為を天秤にかけてしまうタイプだからか。

たぶん深く突っ込むことでもねえだろ。考え方や行動の差は主に育ちとかが原因の一端じゃねえかな、うん。なあ、拝啓両親殿？

「しっかし織斑センセ含めて守るなら大変だな」

「ああ、千冬姉はなんたって最強だからな。明日の演習も頑張らないとなー！」

「そうだな。俺も予定じゃ試験装備が届くから練習しねえと……白式にもあるのか？」

「ない、な」

明日、専用機持ちは新装備なりなんなりと届き試験運転を兼ねての訓練予定なのだが、そうか白式にはないのか。つまり——学校のアーリーナと変わらない訓練になるんだな。

「なんのために来てるかわかんねえな」

「くつそお、白式が後付装備を受け付けないんだよなあ」

「お高くとまりやがってと。なにが白式で零落白夜だ、ただのブラツク零細企業じゃねえかと」

「いやそこまでは言っていないし後半の意味がわからない」

「俺もよくわからん」

「ハツハツハ！」

湯に浸かりながら共に笑う。ここで酒でも飲めれば格好もついていたんだろうが生憎未成年。なによりおつかない先生がいるからな。先生が飲んでいるって点には目を瞑る。

「一夏は聞きにくかったこととかねえのか？ 等価じゃないがこの際だしなんかさ、あれば聞くし答えるぞ」

「あー、そうだな。学園に入学するまでのこととか、その……どんな家族だったとか」

「そんなことでいいのか？」

「そんなことっていうけど……桐也はたまに自虐ネタにもしてるけど周りからしたら結構触れにくいんだぞ？」

触れにくいだろうからこそ笑いにしやろうとだな、なに笑えない？ 普段は野次馬根性丸出しでデリカシーなんて擲なげうってるくせに妙なところでだけ繊細だよな。親のことより俺の息子をネタにするの

止めてくれませんかね。

「ま、うちのことつつつても面白いことなんざなんもねえけどいいか？」

「聞かせてくれ」

「わかった、とは言えどなにかから話せばいいんだ。父さんはありきたりな社蓄、母さんはだな——」

結局、逆上のほせそうになるまで話すことになった。案外、話題に尽きない家族だったみたいだ。



男二人が露天風呂で盛り上がっている頃。酔っ払いに捕まった5人はというと、思い人について語らせられる何かの罰ゲームかのような惨事となっていた。とは言うものの3人の恋慕の相手などわかりきったものだ。箒と鈴、そしてラウラは隠しきれてない隠れブラコンの千冬に思いの丈を吐かされていた。それはもうゲロツと。

それに同情するかののような顔をしつつ、年頃の好奇心から聞き耳をたてていたセシリアとシャルロット。3人が語らえたところで矛先が向いた。酔っ払いは見境がないし、なにより恥ずかしいことを聞かれた3人も加勢に入り一気に当事者へとなってしまふ。

「セシリア吐きなさい！ 学園に入ってから男を見る目が変わったとか言つてたじゃないのよー！」

「たしかに変わりましたが、それはまだ小さなものですわ。この先はまだわかりませんが今はまだ殿方へそういった感情が芽生える兆しはありません」

「とか言ってる奴ほどコロツと行くものだ。なんにせよ簡単に一夏はやらんがな」

でしようか？ と千冬言葉に疑問符を投げ掛けるセシリア。彼女自身、既に入学前には嫌悪する対象だったものがたつたふたりの試合で価値観に変化があった前科があることに気づいていない。またどこか違う可能性として、クラス代表決定戦が切っ掛けとなり相手に惚れることもあったかもしれない。

なんにせよ千冬の言う通り、いつかコロツと靡く可能性は大いにあるのであった。

「シャルロットはどうなのだ？ いつも私の話を聞くだけでお前からそういう話をされたことがないのだが……まあ、嫁は渡さんが」

「ラウラ近いって。んー、好きな人かあ」

「桐也などはどうなのだ？ よく一緒にいるところを見かける。それに同室で短くない間過ごした仲なのだろう？」

そう箒に言われてはたと考える。そんな行程を挟む時点で恋心は抱いていないんだらうなとどこか客観的になりながら、考えてみる。シャルロットにとって出路桐也という人間はどういう存在なのか。

転入からのあれこれを想起して感情を整理してみる。

困ったときに助けてくれて、デュノア社に入れられてからの初めての友達。

「同室だったのはI S委員会の命令だったし、よく一緒にいるのは友達だからかなあ。それを言っちゃったらラウラとだつてよく一緒にいる方だよ？」

すぐラウラが一夏の方に行っちゃうからそう見えないかもしれないけど」

「うっ、それはなんだかすまない……」

「でも、たしかにラウラとはまた違った思いがあるかもしれないことも否定はしないよ」

途端に色めき立つ皆を手で制す。シャルロットは止めないとどんな噂が広がるかわかったものではないことを知っている。

「否定はしない、でもその思いの差違がなにか私にもまだよくわからないんだ……」

桐也と他の友人。シャルロットにとってそのふたつの差についてはわかりきっている。騙していた事実を伝えても、葛藤の末であつても、シャルロット自分を友人と言ってくれた。

それが明確な差として存在して、だからこそ悩む。ただの友人に想い焦がれるならそれは恋。ただどうしようもなかった自分に手を伸ばしてくれた、ので特別な感情を抱いたとする。それが恋心だ！と断言できるほどシャルロットは友人付き合いがなかった、というか皆無に等しかった。

だから、その感情がなんなのか。吊り橋効果で芽生えた一時のものなのか、それともずっとシャルロットの胸の内に残り続けるものなのか。これからの学園生活で知っていききたいと思っている。

「そんなわけで恋慕、つてほどじゃないのかなって」

「なんていうか不器用ねえ」

「自分で言うのもなんだけど人付き合いは器用な方だと思うよ？」

「そういう意味ではないということはさすがに私でもわかるのだが」

「シャルロットは案外鈍いのだな……」

「ですけどまさに青春って風ですわよ」

「え、ええー……鈍くないと思うんだけどなあ？」

「いやいやいや」

「そんなに綺麗にハモるほど!? じゃあ私も言うけど——！」

千冬はそんな話題と光景を肴にしつつニヤニヤとしながら酒を煽るのであった。

▽▽▽▽

彼女は彼女の声を認識しその機械音サウンドで応える。今日も彼女と飛ぼう、彼女と歌おう、彼女を守ろう。

問い、守るためにはどうするのか——コアネットワーク接続時にエラー発生——結論、害する可能性を秘めたものは全て排すことが最善。

「——La」

27. 九天の境界線

修学旅行の朝とか無意味に早く目覚めてしまうものだが、例に漏れず早朝の起床。隣を見れば一夏も起きていた。互いに浴衣からラフな格好に着替えて部屋を出る。

外廊下を歩けば夏の頭とはいえ、まだ涼しい時間帯。朝飯までの時間を潰しがてらに散歩にでも出ようかということになったのだが一夏が足を止めた。

「どうした一夏、部屋に忘れ物でもしたか？」

「そういうわけじゃない、んだけどだな……あれが気になって」

そう言っ指差した方へと視界を移せば庭先に、なんて言えばいいんだろうな。一夏が言い淀んだのもわかる。金属製っぽいウサミミ、としか呼べないものが生えてた。横には「抜いてください」と書かれたプレート付き。旅館の庭には似合わない一品が違和感と存在感をありありと伝えてきていた。

ふむ、これを見て一夏は戸惑っていたわけだ。押すなど言われれば押したくなくなる、しかし抜けと言われれば抜きたくなくなるそんな気持ちプライストレス。

「よし、散歩に行こうぜ」

「いやでも、あれを放っておくと録なことにならない気がするんだよなあ……」

「誰がやったかわかるのか？」

「確証はないけど、たぶん……でも抜いたら抜いたで厄介なことになりそうで困るんだ」

「じゃあ仕方ねえ、任せろ」

一夏が判断に迷い、埒が明かない。このままでは時間が無駄なので俺がつっかけを履いて庭に降りる。そして迷いなく引き抜いた。ウサミミを放置して、「抜いてください」と書かれたプレートをスポットと一息に軽快に。それをウサミミの横に置いて廊下に戻る。

抜いてくださいと書かれたものはしつかりと抜いて要望に応えた。のできつと推定一夏の知り合いも文句なからう。

「桐也は一休さんか……」

「誰がハゲだ」

「坊主をハゲって言うなよ」

「ハゲと坊主の髪隠し？ 惨めたらしい髪の毛だね、今日からお前はハゲだよ」

「その映画と全国の坊主に謝れ」

そんな雑談をしながら浜辺までの道を往復した頃には時刻的に朝食前。ほどよく時間が経過したようだった。旅館の塀の向こうが庭というところまで帰ってきていたそのとき。塀の向こう側が騒がしい。

『な、なんでちーちゃんが抜いてるの!? 早起きないつくくんが迷いながらもなんだかんだ引き抜くはずだったのに……ってプレートだけ引き抜かれてるし!』

『騒がしいぞ東、大人しく帰れ』

『おおっと、そうはいかないよ！ 可愛い妹にプレゼントを渡すまでは——あつぶな!? 躊躇いなく殴りに来たね！ 一時退却う!』

なんか着弾音のあとに拳が空を裂く音と、織斑センセと誰かの会話。一夏がなんとも言えない顔して庭と真逆の方へと視線を向けている。

対して俺は、いつたいななんだと塀の方へ向き直ったそのタイミングで視界が藍色九割ちよつと、ピンク一割弱に占領された。

藍色は少しなびいたあと落ちてきて、目の前には一人の女性がいる。つまり紫はスカートの裏地でピンクがパンツということだな。眼福眼福。

一瞬呆けた顔をしたあとに赤みがさし、俺の鳩尾に拳が刺さった。照れ隠しにしては殺意の高い一撃に思わず膝をついてえずく。あつぶねえ、飯のあとだったら間違いなく吐いていた。

「た、東さん!？」

「やあやあ、いっくんお久しぶりだね!」

人のことを殴っておきながら微塵も気にせず無視とはイイ性格してやがる。てかピンクパンツと一夏は知り合い、どころではなくてそ

の名前ってあれか。箒さんの姉のISの生みの親か。たしかに教科書で見たことあるような顔してるな。パンツに気を取られてすぐに気づけなかった。

パンツ∨IS開発者。なんにだって越えられない壁はあるし仕方ねえ。

パツと見て一夏との再会を満面の笑顔で喜んでる様子の篠ノ之博士（博士号なし）。勝手にパンツ見せといて殴った俺はアウトオブ眼中。これが箒さんのマイペースさの源泉か、いや親じゃないから厳密には違うんだらうけど。

それは置いておくとしても頭がいい奴はどこかおかしいって言うし気にすることもないか。IS作り出すほどの天才ならかなりおかしくても納得がいく。おかしい人間が皆天才とは限らないのがキズ。

こつちを気にしつつ話している一夏は篠ノ之博士の勢いに押されて引け腰になってる。こちらに視線を送られたが気づかわれたのかヘルプを出されたのか判断に迷う。

「よっこらせつと」

取り敢えず起き上がりながら、気にするなという意味を込めて手を振るっておく。

しかし、世界から追われてる人間が目の前にいると言われても実感が湧かない。正直どうでもいい。認識としては教科書に載ってる人間、もしくは友人の姉程度。

すぐそこに専用機持ちがウジャウジャいるので、俺の通報で捕らえられるかもしれない。そうすることで世界の科学は飛躍的に進歩するかもしれない。

でもそのうえで篠ノ之博士を逃がしちゃった場合には俺が目をつけられるじゃん？ そんな面倒事はノーセンキュー、世界の進歩より俺の保身を重視しますつての。

なにより織斑センセと会話してたっぽいしセンセが対処しているはず。なら俺は腹も減ったのでさっさと旅館に戻るだけだ。

一応、一夏へと声をかけた。

「はあ？　今は東さんがいつくんと話してるのに横から入ってくるなよ」

かけたのだが何故か言葉の返球は篠ノ之博士から唐突に不機嫌という変化球で来た。求めてない求めてない。

これが視線での不満の訴えなら気づかないフリして無視してたところ。だが、さすが天才。シャルロットと違って声に出してくる辺り面倒くさ、いや意思表示がハッキリしている。

さて、それにしたってなんと答えればいいか。

「横が駄目なら正面からですかね」

「は？」

「すみません、なんでもないうす」

考える前にいつもの癖で屁理屈こねたら絶対零度の視線を向けられた。駄目だ、完全に理系で理詰めなタイプだ。言葉でうやむやににくい相手って結構苦手だ。

——いや、この人の場合はそもそも俺とまともに意思疎通する気になさげなので、理系とか関係ないのかもしれない。ひたすらに面倒臭そうにしている。コミュニケーション下手なのか、他人に干渉されたくない極度のマイペースか、はたまた別物か。なんにせよここに長居する理由もないし早々に去るか。

くるりと身体の向きを変えて一夏に一言。

「そんなわけで俺は先に帰ってるわ」

「あ、ああ。東さんがごめんな？」

「全く気にしてねえよ」

天才って変人が多いし、と口に出さなかった俺グツジョブ。天才ならぬ天災と呼ばれる相手にそんなこと言ってみろ、どうなるかわかったもんじゃないやねえー。

早くどっか行けオーラをバシバシ飛ばしてくるし、今回ばかりは着信拒否せず素直に受信して早々に立ち去ろう。去るといっつか旅館に帰るわけだが似たようなもんだ。

結局、一夏が戻ってきたのは朝食の時刻ギリギリだった。

「ふう……」

「おつかれさん、なに話してたんだ？」

「この頃どう？　みたいなことを根掘り葉掘り聞かれたし、ちよつと白式のデータを見られた……あと箒が誕生日だしプレゼント持ってきたからまたあとでとか」

ん？　あとでとか色々気になるものの、なにより引つ掛かったワードがあるぞ。誕生日だど？　箒さんが？

「あれ、言ってなかったか？」

「聞いてねえよ、お前なんって言わねえんだよ。なんも用意できてねえ……！」

「し、知らなかったことを知らなかったんだ。すまん」

「まあ今さらどうしようもねえし仕方ないか」

またなんか適当に考えておくとしよう。

しかし篠ノ之博士がここに来たって他の生徒からしたらビッグニュースなんだろうな。だが俺にとっては知らない芸能人にあつちやつたくらいのもの。IS開発者、凄いだらうけどなあ。俺は別に興味ねえし。

「すごいや篠ノ之博士がIS作ったのって中学生くらいだったっけか？」

「あー、それくらいだったな」

「つまり、世界は未だに中学生の頭脳に追い付いていないと……世界頭よっわ」

「なんて手酷い解釈するんだよ」

「で、あの人はまた来るのか？」

「来るらしい……はあ、千冬姉に伝えとかないとな」

その後、一夏から話を聞いた織斑センセはとても頭が痛そうにしていた。

▽▽▽▽

今日は臨海学校で演習日。専用機持ちは一般生徒とは別に行動す

るわけだが何故か箒さんがいた。

「何故私はここに呼ばれたのだ？」

「俺に聞かれても……ちふ、織斑先生なんでなんです？」

「……もう来るだろう。少し待」

「ちいいいいちやああんっ！」

織斑センセの言葉を遮って土煙を巻き上げやってきた。今朝がた聞いたばかりの声。誰だと他の生徒はドヨめくと跳躍したその影。

織斑センセへ一直線に襲来、センセは見事な回し蹴りで歓迎。カエルが潰されたような奇声を上げつつ箒さんの方へと飛び、箒さんは熱烈な背面回し蹴りで迎えた。姉じゃなかったっけか。サッカーボールのような扱いじゃん。

「ふぺえ!? ちーちゃんと箒ちゃんの愛が痛い！」

「さっさと用件を済ませて帰れ、お前がここにいるだけで面倒事が舞い込んできそうだ」

「ひどっ！ いーもんいーもん、今日は箒ちゃんへのプレゼントを持ってきたんだし！」

「私への……ああ、昨日電話でなにか言っていましたね。夕食中でしたので聞き流していました」

「ええ!? すっごいの用意したんだから！ ええい、聞くより見ちゃえ、刮目せよ！」

篠ノ之博士が両手を大きく広げ空を仰ぐ。つられて空を見上げると飛来、というより落下してきた菱形の金属物が地面に突き立った。バシユツと排気されなから現れたのは——紅蓮のIS。

「これがあー！ 箒ちゃんへのプレゼントオ！ 第四世代ISの、あかつばき紅椿だアアアツ！」

第四世代。唐突に投げ込まれたその四文字に場の空気がざわついた。やけにテンションの高い篠ノ之博士とため息を吐く織斑センセだけが浮いて見える。

各国が持ちうる叡智を振り絞って造り上げた、単一仕様能力に代わ

る特殊兵器を搭載したIS、それが第三世代と呼ばれている。それだつて未だに安定して量産されるレベルには達してやいない。

第三世代は試験機なんてザラだからこそ、未だに戦闘における用途の多様化に重きを置いた第二世代が最も多く実戦配備されているのが現状だ。

そこに第四世代。しかも妹の誕生日だからお姉ちゃん張り切つちやった的なノリで持つて来られたとなれば、加えて言うならば持つてきたのがIS開発者である篠ノ之束となれば騒然ともなる。特にISに詳しい奴ほど尚更に。

俺と一夏は知識で覚えてるだけでどれだけ凄いのか具体的にはわからない。なので取り敢えず驚いた反応だけしてる。視線で『これつてすごいんだよな?』『世代が上だし凄いだろ、たぶん』みたいなやり取りはしてない。断じてしてなかった。

そして、そんなプレゼントを貰った箒さんはいえばだ。

「どうだいどうだい、箒ちゃん！ 私からのプレゼントだよ！」

「先ほど、姉さん凄くプレゼントと仰つたので期待していましたが」

「うんうん！ 予想以上だったかな！」

「これはどこが食べられるのでしょうか？」

「チクシヨー！ 箒ちゃんの食い気が予想以上だったよ！ 食べれないよー！」

露骨に残念そうな顔しないでほしいんだけど……ほ、ほら最新鋭でイケイケな機体だよ？ 展開装甲っていつて——」

かなり興味なさげだった。篠ノ之博士が第四世代について説明して周りが驚愕するも箒さんは頭上に疑問符が浮かぶのみ。

「すみません、専門用語が多くてわけがわかりません」

「なんで!? ちーちゃんに習ってるでしょ!?!」

「束、篠ノ之のIS基礎は赤点ギリギリだぞ」

「私の妹が思ってたよりもISに興味がなくてシヨッキング！」

「年がら年中脳内シヨッキングピンクな姉さんよりはマシかと」

「ビューッ！ ちーちゃん並みに言うよねえ！」

なんか楽しそうだよなあ。一夏と俺は暇になつてあの指の本数が

5になったら消える、名前がわからん指遊びで暇を潰す。専用機持ちからなにしてるんだって顔で見られるも仕方ないだろ。

お前らは諸事情もろもろ込みで関心あるのかも知れんが俺たちは興味ないし。

セシリアさんなんかは失礼になると視線で訴えてくるも、そこは大丈夫なんじゃねえかなあって。篠ノ之博士ってさつきから微塵も周囲の人間に焦点合わせてねえもん。シャルロットはそこらへんに鋭いせいか微妙な面持ちでこちらを見ている。注意したいけどする意味もないような、とか考えてそう。あ、負けた。

「使用目的に沿ったパッケージ換装を必要としない、自動支援装備と変幻自在の展開装甲を持ち、高速機動もこなすのが紅椿。わかった？」

「なんとなく、うつすらと、僅かながらに」

「かなり簡単に言っただはすなのなあ」

つまり万能機と。どれだけ凄いかはさっぱりだが凄いとすることはわかった。専用機持ちにこの会話が聞こえる範囲内にいた生徒の顔が驚愕に染まっているからな。

「やり過ぎるなど言っただはすだが……はあ、もういい。篠ノ之はソイツに紅椿の使い方を聞け。他の者は各自の訓練に入れ！」

そんな織斑センセの指示を聞いてもチラチラと篠ノ之姉妹を気にする生徒がいた。そのなかには羨望や嫉妬のようなものが混じっているように感じた。しかしタッグマッチ戦で箒さんは実力を示したわけで、声を大にしての不満は聞こえなかった。

俺はそれら全部含めて特に気にならないので早々に離れて打鉄を装着。なにしろ俺も簡単に専用機貰った身だからな。

「うおっ、なんだその打鉄？」

一緒に篠ノ之姉妹から離れていた一夏が打鉄を見て驚く。

それもそのはず。この臨海学校で訓練するために事前に打鉄にはパッケージ換装を行ったのだ。浮游盾を取っ払って大型の翼スラスターが二対。わかりやすいくらいに高速機動パッケージだな。

大型翼スラスターはV字を少し広げたようなフォルムをしており、

打鉄の半分ほどの全長。それが背面寄り、肩甲骨あたりに付いている。

「どやあ、これが俺の一式装備。その名も飛燕だ」

「くっそお、形体変化とかカッコいいよなあ。正直ちよつと羨ましいぞ」

「わかる、カッケエよな」

まあ、これは増設スラスターとパッケージ、その中間地点らしいんだがそのあたりは難しくよくわからなかった。浮游盾を完全に使用不能にしたわけじゃなくて、高速機動パッケージが駄目になったときのみ打鉄が自動再展開してくれるとかなんとか。パッケージを駄目にするとか早々ないんだけどって笑いながら言われた。

——臨海学校の直前。実際に打鉄を整備してくれている人たちが来て説明してくれたのだが、そこらへん途中から聞き流してた。

『スカタン、話聞きたいや』

所長と自称する女の人にバレてケツ蹴られたけど、なんで見た目も素行もヤンキーっぽいのに所長なれてんだろうか……賢いからか。

「厳密には増設スラスター、なのか……？ ま、早く飛べりやなんでもいいか。よし、試しに飛んでみるから離れてくれ」

「了解、ここなら壁にぶつかる心配はないな」
「うっせ」

何気に一夏の言ってることが凶星。なので短く返すだけにスラスターを点火、いつもの感覚で——いつもの感覚でやってしまった。

大型翼スラスターが唸り速力を跳ね上げる。瞬時に視界が引き伸ばされ機能が追い続けるように遅れて鮮明な視界へと復帰。しかし、みるみるうちに地面からは遠ざかり高度が笑えてくる勢いで上昇。

機体制御を意地で取り戻そうと直線的な軌道を傾けて、傾きすぎて次は下に向かって急降下。ヤバい、じゃじゃ馬だ。いや俺が下手なのか？ カッケエ名前の翼なのに使う俺がだっせー！

いつものように逆噴射とかしたらたぶん反動がエグいことになりそうなのはわかる。なんとか急降下から機体を逸らして弧を描くよ

うに、結果的に円を描くように飛翔。少し離れた位置で紅椿を駆る皆さんがミサイルを切り落とししているのが見えたが、そんなこと気にして暇でもない。

『なんで空裂のレーザーも雨月のエネルギー刃も使わずに落とすしちゃうかなあ!』

『射出型の武具は扱いなれてないので』

打鉄がなにか会話を拾うも気にして暇ないんだっての。

そのまま高速でぐるぐると回りつつ、どうしようかと悩んでいると通信が飛んできた。慌てた声の山田先生だ。

『出路くんっ!』

「あ、山田先生じゃないですか」

『あつ、あれ、落ち着いてますね?　もしかして機体制御はなんとかありませんか?』

「いえ、どうしようもなく逆になってやつです。ウハハ、降りれねえです」

『やっぱり駄目でした!?!』

やつぱりとかちよつと失礼だし予測してたなら事前に教えてほしかった。篠ノ之博士や第四世代IS参上に気を取られてたのはわかりますし、俺が知らない間に飛んじやっただらうけど。

この後、山田先生の適格な指導のもとシールドエネルギー半分削つた末に無事着水できた。落ちた訳じゃないから、着水できたから。ザッブーンなったけど、絶対防御は発動しなかったからセーフだろ。

「ただいま」

「おかえり、桐也が星になってしまったかと思つたわ」

「割りと冷や汗もんだつた」

「まさかの壁のない弊害だな」

「全くだ。壁がないことが壁として立ち塞がりやがつた……」

まあ、なんとか山田先生のおかげでちよつとは高速機動パッケージで飛べるようにはなった。速度は桁外れになるものの飛ぶっていうワンアクションだけだしな。複雑さはほとんどないから、まだなんともかなる。そのまま戦闘となるとまた難しそうだが……早々に高速機

動パッケージを寄越してもらえてよかった。うし、再開するか。

▽▽▽▽

出路桐也が水柱を何度か上げながらも飛行自体は比較的安定してきた頃。それを何人かの専用機持ちと一般生徒（主にクラスメイト）が生温かな視線で脇目に見ていた頃。

場を離れていた山田真耶が千冬へと慌ただしく駆け寄る。普段のおっとりさは何処へやら、一見手話に見える暗号でのやり取りをしていくうちに千冬の表情が次第に険しくなり曇った。特命任務レベルAとだけ千冬の口が動いたことを目敏く読み取った者はどれだけいただろうか。

どこからか小さな舌打ちが聞こえた、そんな風に誰かが思った直後に千冬が手を叩き全員の注目を集めた。

「全員注目！ 現時刻より学園教員は特殊任務行動へ移り、それにもない本日のテスト稼働は中止。各自ISを片付け即刻旅館へと戻れ！ 旅館では室内待機とし許可なく室外へ出たものは身柄を拘束する」

ザワめく生徒と即座に指示に従い動き始める生徒。その差がなにを表すのかは置いておき、ザワめく生徒へは千冬が早く戻るように急かす。

桐也が旅館に帰るか、クラスメイトのISを片付けることくらい手伝ってから戻るか悩みつつ歩を進めようとしたとき。

「専用機持ちは全員集まれ！」

千冬からの召集がかかってしまった。露骨に嫌そうな顔をする桐也。偶然、近くにいたシャルロットがポンポンと肩を叩きつつ集合するよう促した。同じように事態が飲み込めておらず呆けている一夏を鈴とラウラが引つ張り専用機持ちが集まった。

いや、新たに専用機持ちになったはずの篠ノ之箒がいないと千冬が周囲を見れば、足元に待機状態の紅椿が転がっていた。千冬のこめかみがひくついた。

紅椿を放置して旅館へ戻ろうとしていた筈も襟首を掴まれ引きずられ、ようやく全員集合となった。

そんな学園の面子を意識に入れることなくひとり上を向く彼女。篠ノ之束は、目を細め、まるで睨むかのようになにも見当たらない空を見据えていた。

28. 暗雲低迷

明かりが落とされた室内には空中投影ディスプレイが大きく浮かんでいた。どうでもいいけど薄暗い部屋で画面見ると目が疲れる。

「現状を説明する」

そんな中で織斑センセから現在の状況を伝えられる。代表候補生や箒さんは何故か落ち着いて座っているが俺は浮き足立っているのが自分でもわかる。一夏も少し落ち着かない様子だ。こういった事態への耐性はないんだ、当然だろ。

「ハワイ沖で試験稼働中であつたアメリカとイスラエルで共同開発されてきた第三世代の軍用IS シルバリオ・ゴスベル 銀の福音[”]が制御下を離れて暴走。2時間前に監視空域より離脱したとの連絡があつた」

ISって暴走とかするもんなのか？ 以前に、コアに意識があると習つたが、暴走に至るほど自我が強いパターンが存在するとは聞いたこともない。

いや、それよりも軍用IS、軍用って聞こえたぞ。アラスカ条約でISの軍事利用の禁止が定められていたろうに、なんでそんなもんを開発してんだよ。ルールは破るためにあるとか言っちゃやう痛い系なのか。

「銀の福音は50分後、2km先の空域を通過する。それを阻止することが私たちの役目だ」

……あー、軍事利用はせずに開発だけしてたとかそういう屁理屈か。まかり通らねえだろと言いたいところだが通すんだらうな。情報公開や共有も義務だつたはずだがされてなさげだし、まだ試験段階の完成品じゃないとかそういうた詭弁。情報公開と共有に関してはしてないところも多そうなもんだが、結局のところ軍事利用もそうなのかもしれないな。

「学園の教員は訓練機での空域及び海域の封鎖を行う。そして専用機持ちだが」

ああ、クソ思考が追いつかねえと悪態をつきつつ、不自然に言葉を切った織斑センセに顔を合わせる。合わせて驚愕、センセが苦虫を噛

み潰したような面をなされていた。

緊急事態に織斑センセらしくないと全員が疑問を抱くも続く言葉で合致した。

「代表候補生、いや海外の専用機持ち組は旅館及び周辺海域の防衛に当たれと各本国からの指示が来ている」

海外の専用機持ち組は待機ね……日本の代表候補生、簪さんは残念ながら今回の臨海学校には不参加。

それってつまるところだ、俺と一夏と箒さんしかいねえってことじゃねえか。これは遠回しな死刑宣告かなにかか。

——しかし、学園は外部からの干渉云々は何処へ行ったのだろうか。学園への干渉でなく、代表候補生と雇い主の国としてのやり取りみたいな屁理屈出ちやうか。屁理屈まみれだな。

「銀の福音についてのスペックデータは私の一存で公開させてもらう。ただしアメリカ・イスラエル二国間の機密のため口外はするな」
「……ちよいちよい引っ掛かってたんですけど、ISについての情報は公開義務がありませんでしたっけ？」

「ああ、そうだ。軍事目的の使用も禁止で我々が対処することすら本来おかしいことだろうな」

織斑センセの表情からはなにも読み取れない。表情翻訳家のシャルロットならわかるのだろうか。

交戦が不可能に近い代表候補生や教員は、銀の福音の情報をもとに相談を始めている。

「恐らく篠ノ之が紅椿を、第四世代のISを手に入れたと知ったのだろう。」

それで今回のトラブル。自国の代表候補生と専用機を投入して力を貸した際の損失と利益、それを天秤にかけた結果がこれだ。遠巻きからの銀の福音と紅椿、男性操縦者のデータ収集が一番だと判断されたりしない」

紅椿のことを知ったって、ついさっきお披露目されたばかりだっのにどこから——どこからもなにもないか。まあ、他の生徒だわな。篠ノ之博士がいて第四世代があつて、そういう目的ありきで来てる生

徒なら報告するよなまあ。

「俺と桐也、箒だけしか出れないって、無茶じゃないか？」

「本当にそうだよな……ああ、クソ。世の中いい方向に転ぶことの方が少ないってことですか」

「そうだな……ただ織斑、篠ノ之、出路。これは実戦であり、お前たちは代表候補生でもない。もしも辞退するというのなら、それでもいい」

「じゃあ辞退します。なんて即答しかけたが喉元まで来たそれを飲み下す。」

織斑センセがそう言ってくれているということは俺たちが出なくても無茶を通せば、なにかしらの手段は講じることが出来るんだろう。

でも、その無茶を通せなかつたら、その手段が通じなかつたら。

銀の福音がもたらす被害は未知数。ここは防衛できたとしても超音速で素通りされるようなことがあったとしたら。街で無差別に被害を広げるようなことがあるとしたら。

そんなもしもが頭をよぎる。

別に見知らずの人たちへの被害を心配している訳じゃねえ。残念なことにもそままで人間出来てない。

ただ、隣街にはたまたま偶然どうしてかバイトをしに来てる友達がいるんだ。家族だつてどこにいるのかわからない。この近辺にいる可能性だつてある。面倒事なんてなるべく避けて楽して生きたいのに困ったもんだ。

——恨まねえけど今度会ったら愚痴くらい聞いてもらおうぞ。

「俺は、やります。やってみせます」

腹をくくつてる間に一夏が決めてしまったようだ。俺も続いて意思表示してやらあな。

「俺もやります。まあ、俺と打鉄でどこまでやれるかはわかりませんが」

「そうか、篠ノ之は」

「自分の尻拭いもせず、漏らした糞を投げつけたあげくに処理まで任せられている現状に疑問が尽きないのですが、一夏たちも行くなら私も行きます。他人の尻拭いをすることに疑問が尽きませんが」

「二度も言うな……よし、では——」

こうして暴走した銀の福音への作戦は始まった。

超音速飛行中でたあるの福音へのアプローチは一回きりが限界。つまり一撃必殺が必要とされる。

一撃でという単語で歯噛みをしていた専用機持ち組や俺の視線が一夏に向かった、向けてしまった。

「一撃必殺なら白式の零落白夜、だよな」

「そうなるが……織斑、本当にいいんだな」

攻撃の要として白式が適任なのは誰から見ても明らかだが織斑センスは再度参加の意思を確認する。何故、二度も確認するかはわかりきっていることだがしかし、一夏の意味も固いようで頷くことで肯定の意を示す。

それを受け止めた織斑センセは一度だけ目蓋を落とし、すぐに開く。

「では目標への接近方法だ。繰り返すようだが銀の福音は超音速飛行中、よって同等の機動力が必要となる」

「高速機動パッケージが入り用ですかね？」

「わかっているなら上等だ。だが出路」

「わーってますよ。今日使ったばっかのパッケージを俺が使いこなせるはずないですし」

でもやらなきゃならねえならやる。義務感でも正義感でもなんでもねえ。愛国心なんて欠片ほども存在しねえ。なんならIS学園入学前の騒動で日本というか政府はちよつと嫌いになったくらいだ。ついでに銀の福音開発国はたつた今嫌いになった。

友達が危ないならなんとか出来るかもしれない俺が動くだけ。不安がないわけでもない。けど、たつんが俺が寂しがってるかもと会えるかもわからないのに来てくれたのと変わりやしねえ、別に寂しがってなかつたけどな？

なーんて考えてると突然の声が割り込んできた。

「はぁん、出来もしないことをやるっていうのは無能をひけらかすこととなんら変わりないって、どうしてわからないかな？ あ、無能だからだね」

「おい、東どこから入ってきた」

「上だよ」

天井から篠ノ之博士が落ちてきて見事な着地を決めた。尚、下着は逆光により見えなかったので罵倒されただけとなった。それよりもなんか急に絡まれたんですけど、しかも割りと痛いところをつつくんだよ。

「さっきようやく安定飛行出来始めたばかりのくせに軍用ISにいくんを乗せてどうにか出来ると思ってるの？

どうにかなると思ってるの？ なにかヒーローみたいにしチュエーションに合わせて才能が開花するだけでも？」

本当、この天才はズケズケと。

「状況に浸って浮かれて死ぬならひとりで死んでくれないかな。いつくんを巻き込んであの世への片道切符とか嘲笑ものだよ」

不安に思ってたところを的確に突いてくれる。

そりやそうだろ。俺が高速パッケージに振り回されてから半日も経っていない。そんな短時間どころか短時間の間に何が出来るようになったって、安定した飛行だけ。

その安定した飛行も戦闘を考慮したものではなくただ飛ぶだけの動作。回避行動や複雑な機動なんて一切やっちゃいない。スポーツカーを乗用車のように乗るか、直進でしか進めないとしても例えりやいのか。

「それでも」

「それでもやるしかないならやるって言うつもりかな。ちーちゃんの話聞いてた？ 無理強いはいしないって言ってたはずだけど。

出来ないことを出来ないって言わずに周りに迷惑をかける。それは間抜けを絵に描いたような無能だよ」

ボロツカスに言われてらあな……しっかし反論の糸口はないな。

むしろ口を開けば片っ端から正論に押し潰されちまう。それはもう誰もいないなら泣いて枕を濡らしそうなほど論破されてしまった。織斑センセや他の面子がなにか言おうとしてたみたいだが、両手を上げて降参のポーズを取る。

一応、別の案があるのかだけ聞いて、いやあるんだろうけど聞くだけ聞いてもう黙ろう。この人に勝てる気がしねえや。口で負けるとか結構へこむ。

「貴女の言う通りです。けど、でも対象への接近には拙くても高速パッケージがある俺が乗せた方が、エネルギー効率としてもマシに思えたんですよ。けど、貴女にはより安全な策があるんですよ」

「あるよ。別にちーちゃんや箒ちゃん、いっくん以外はどうなってもいいけど」

「おい東、いい加減にしろ。私の生徒に絡みに来ただけなら殴るぞ」

「ちーちゃんがわざわざ警告するなんて珍し……あ、本気だね。ちよちよいと待ってよ」

篠ノ之博士は織斑センセから半歩下がりつつ、箒さんに近づいた。

「あのね、ちーちゃん。箒ちゃんに渡したISは第四世代で万能型なんだよ?」

「つまり、高速パッケージとしての展開も出来るよ」

「そういうことだよ」

「しかし、篠ノ之は出路よりも高速パッケージの使用回数は少ない。と言うよりも皆無だろう」

「高速機動の経験は少ないどころかゼロ、でもそれより箒ちゃんの方が慣れにおいても戦闘においても分が上がるはずだよね」

やってらんねー。嘘偽りない真実に心ズタズタ、出したやる気を投げ出して、身も投げ出してゴロンと寝転がる。微妙に複数人から気遣う雰囲気を感じられて更に居たたまれねえ、むしろ寝転がったことを注意しろよ。放置されるとちよっと気まずいじゃねえか。

「ちーちゃん、私は難しいこと言っていないはずなんだけど。弱いやつより強い箒ちゃんに任せの方が勝算が高いっていう小学生でもわか

——」

「姉さん、それは違います」

不意に、今まで黙り通していた箒さんが口を開いた。

「その男は、出路桐也は弱いやつではありません」

「箒ちゃんが友人を庇うのはいいけどさ」

「庇うなんて行為を私がするとでも?」

「……あー、そうだね。箒ちゃんはそういうことしない。だって」

「貴女の妹ですから。貴女より少しばかり社会に生きやすくなったのが私です」

「うんうん、なら私が間違えてたね。箒ちゃんに免じて弱いわけじゃないことだけは認めようじゃないか」

不覚にも少し、さつきと別の意味で泣きそうに、いやいや俺別にそんな泣きっぽくないし。

けど箒さんがわざわざ姉に向かってそう言ってくれたことは嬉しかったりした。篠ノ之博士も数度なにか納得したように頷いて口を開く。

そして――

「でも箒ちゃんの方が武力的に強いじゃん?」

「それはそうですね」

この姉妹は平然とそんな会話を続けた。

くっそ、なんか色々台無しになった気がする。なんか一気にテンション下がった。不貞腐れ気味に姿勢を変えようとする。シャルロットと目が合った。器用にも表情で災難だったねって伝えてくる、本当器用だな。

でも知ったこっちゃないのでそのまま体勢ごと視線を降下、シャルロットの太ももロックオン……よし、心のゲージが回復した。なんか若干の怒気が伝わってくるが気のせいだろ。世界中の誰もが信じなくても、俺はバレてないって信じてるから。

正座して真面目に話の続きを聞く姿勢を取る。専用機組に背を向ける方向になったのはたまたまだ。別にやましいとかそんなことないから。

「け、けど展開装甲ってそんなに便利なんですか?」

おっと一夏が急な話題転換。たぶん俺を気遣ったのことだろうけど気にしてないぞ。事実にはショックを受けただけでもう復活したから。変わりに後ろで怒ってるかもしれない奴をどうにかしてほしい。パンツは見えてないし許してくれよ。

「うん、便利。調理器具がひとつで片付くって言ったらいっくんもわかりやすいでしょ?」

「あ、それは凄い」

「まあ、いっくんの白式にも展開装甲って使ってるんだよ?」

「えっ、ええ!?! 白式に!?!」

「言ってなかったっけ?」

篠ノ之博士はとぼけたように語る。

「いっくんの白式、正確には雪片式型は展開装甲だよ。元々欠陥機として投棄されてたのを束さんがちよちよいと弄ったんだけどね。」

当然の帰結として紅椿は全身のアーマーが展開装甲だから最大稼働時のスペックは比類なく強いよ? 敢えて最強とは言わないけど」

「私の方をチラチラと見るな」

「あっはっはー、白騎士の話までしてもよかったんだけどねー。これ以上関係ない話をしたらちーちゃん我真剣に怒りそうだしおーしまいい」

「チツ……」

「舌打ち!?!」

察しのよさに対して不機嫌さを露にしたのも束の間。

ここからの話はトントントン拍子。銀の福音のスペックを確認するも、広域殲滅を目的とした特殊射撃兵装付の第三代。オールレンジ攻撃と高速機動を特化させた機体とのことだが、速攻で落とせるのが最善のためプランに変更はなかった。

なので、銀の福音へのアタックは最新鋭の紅椿が高速で白式を運び、攻撃力ならピカ一の零落白夜で一撃必殺で決定となった。

「そして出路だが、紅椿と白式から僅かに遅れての出撃だ。万が一に備えろ、やれるか?」

「やります」

篠ノ之束の顔が露骨に歪んだ。不愉快そうにしているのが俺でもわかる。

けど蔑むような目はなんだかんだ慣れている。ほら、女尊男卑のご時世だから否応なく学園とかで時折感じるんだわ。あれだけの人数がいれば当然と言えはそうだし、感じるっていつても快樂的な意味じゃないけど。俺はマゾじゃねえし、察しているって意味だから。

まあ、なので気後れせずに、しっかりとお目目は合わせて向かい合う。目と目が合っても十中八九、いや十中十で恋は始まらないやつだ。けど、だからどうしたってんだ。学園の生徒と目の前の女の何が違うってんだ。

トップクラスとはいえ山盛りいる才女か、世界を手のひらで転がせるオンリーワンかの差だな。よし、やつべーわ。最悪の場合は箒さんに土下座して助けてもらおう……助けてくれるよな？ 助けてくれ。

「おい、なにボーツとしてるんだよ」
「あ、なにか」

「私と正面向き合つといて、なにかじゃないだろ……さっきの話をもう忘れちゃったのかな？」

「単純記憶には自信あるんで覚えてます。割りときたんで余計に」
「じゃあなんでお前は出ようとしてるのかな」

「友達を助きたいからですよ。微力でも、全力で」

隣街にいるやつとか、どこに居るのかわからんやつとか……まあ、ここににいるやつらとか。あと俺の両親も何処にいるかわかんねえんだ。

「邪魔になるとしても」

「ならねえようにします。俺はヒーローでもなんでもねえです。だからこそ、身の丈でやれるだけ全力で。」

誰に誇れなくても自分だけは納得できるように生きるってのが信条なんで」

「アホくさ……あつそ、精々箒ちゃんたちを巻き込まないようにしるよ」

拜啓オヤジ殿、貴方の言葉を史上最高に天才な女に呆れ顔でアホく

さいと言われつつも俺は元気です。世界相手に余裕こいてる天才に臆せず向かい合えるくらいに元気です。

膝が震えてるのはこれからのことを考えてな。間違はなく武者震いだ。脚部限定武者震いであって、断じて篠ノ之束にビビってたわけじゃねえし。

▽▽▽▽

ISを知るものならどうしても逆らわずにへつらいたくなる相手に意地を張った出路桐也。その事実だけをくりぬくなら中々どうして大したもののだが、やはりというか少しばかりの震えが見てとれた。

——周囲の友人が声をかけるも本人は虚勢を張るのだが。

「桐也、大丈夫か？」

「おう、銀の福音でもなんでもDon'tと来い」

「や、やる気は十分だな！」

まあ、あくまでも虚勢なのだが果たして語感からDon'tとい来ないでくれう、彼の真意を読み取ったのは何人か。返答に詰まりながらも額縁通りの言葉に敢えて乗った一夏、急に心配そうな顔になったシャルロットと眉を潜めた世界最強あたりが有力だろう。

「箒さん、わたくし高速機動の経験があるので不要かもしれませんが軽くレクチャーを」

「いや、頼む……希望を述べるならなるべく噛み砕いて教えてほしい」「善処致しますわ」

各々が準備を始める、実戦に駆り出される準備を。

「嫁、桐也よ。実戦は生きて帰れば一人前だぞ」

「ははっ、ラウラ少佐が言うなら間違いないな」

「むう、冗談ではなくてだな」

「わかっている、わかっているさ。なあ、桐也？」

「そりやもう、命あつての物種だ」

「ならばよしだ！」

どこか満足げなラウラを見て笑う一夏と桐也の後ろへ忍び寄るツインテール。両手を振りかぶり——バチンツ！

「気合い注入ウ！」

「イツデエ!?!」

「おっし、あたしからは以上よ！」

「おい説明、背中を思つくそ叩いた説明」

「やあね、説明とか不粋じゃない。察しなさい！」

ジト目を意にも介さず箒の背中も叩きに行き、危うく投げられそうになる鈴。

「あつぶ!?!」

「なんだ鈴か」

反射で投げる箒も大概だが見事着地を決める鈴も大概だった。鈴は、ちえーとか言いながら箒とハイタッチ。そのまま、箒は一夏や桐也へと寄ってくる。

そうして三人が揃ったところでシャルロットが声をかけた。

「無茶だけはしないでね？　桐也も一夏も箒も皆、意地になりそうな性格してるから心配だよ」

「言われてるぞ桐也」

「言われてんぞ箒さん」

「言われた通りだな一夏」

「……………」

なんとも言えない沈黙が場を支配する。シャルロットは額に手を当ててため息を吐くが、呆れられた対象の三人は揃って解せないといった顔をしていた。

「はあ、取り敢えず無茶は厳禁だよ？　最悪、三人が取り逃がしちやったときにはさすがに私達も動けるから」

「あいよ、任せろオカン」

「誰がオカンなのさ」

「帰ったら寝たいし布団よろ」

「だーかーら！　オカンじゃないし！」

少しからかいつつ、その余裕があるなら上等だといつものように言

い聞かせる桐也に、それを知ってか知らずか付き合うシャルロット。その様子を眺めていた一夏と箒もノってくる。

「ははっ、じゃあ俺は風呂沸かしてくれ」

「私は食事の用意を頼む」

「ああもう……わかったから気を付けてね！　いつてらっしやい！」

わらわらと要望を寄せてくる三人の背中を押しつつ、いつてらっしやいという姿はさながらオカンそのもの。

ただ行つてきますと返すのは何となく照れ臭かった桐也は無言で敬礼とかいう、なんとも不安を掻き立てる演出を残していったのであった。

29. 暗転急落

打鉄が銀の福音についてのデータを表示してくれている。

いつもより少ない情報量は隠匿されたものだからか。そんなものを多少なりとも検索できるISすげえって感じた。さすが科学の最先端、どんな物だつてちよちよいのちよいつてか。

ま、情報にざっと目を通すが目新しいものは無し。注意する点といえば、訓練用とは違う軍用といったところだろう。簡単にいうなら軍用ISはリミッターが外されている。シールドエネルギーの上限とか武装火力とか諸々。なので危険度は学内の試合とは雲泥の差。

——のはずなのだが、あまり緊張が湧かない。スペックが跳ね上がるとはいうものの、教科書で習っただけでわかるはずもない。知識としてあるだけで実感がないのだ。

いや、一度出力の高い奴とは戦ったことがある。クラス代表対抗戦のときの無人機だ。アイツは俺ひとりでなんとか撃退できた。

今回は一撃必殺を携えた一夏と、最新のISを纏う箒さんがいる。なら、もしかしてどうということもなく終わるんじゃないやねえかな。そう考えてしまうのは慢心だろうか——慢心だったんだろうか。

「LaLa——La!!」

「んのっ、クソッ！」

眼前の銀の福音、鋼の翼は大きく広げられ鈍く輝きを増す。

体感して初めて沸き上がる底無しの恐怖——地獄の釜が口を開いた。

▽▽▽▽

銀の福音へのファーストアタック、それがラストアタックになればベストだったのだが、現実はままならない。

零落白夜での初撃がなんなく躲かされてしまった。すかさず紅椿が雨月と空裂の二刀で斬撃を折り重ねるが、刃は翼の上を滑らせ逸らされた。

この時点でカタログスペック以上の戦力とエンカウトした一夏と箒さんはもちろん、後方の俺もまでが認識する。暴走とはなんだと問いたくなるほどの繊細な動きに戦慄するも遅い。既に火蓋は切られているのだ。

銀の福音が羽を振るいエネルギー弾幕を張るが紅椿が展開装甲を変形。スライドするように開かれた装甲の隙間よりスラスタが火を噴く。速度に乗った紅椿は弾幕ごと迂回するように接敵、袈裟斬りにするも急旋回した銀の福音を掠めるに終わる。

が、その先には白式が雪片式型を青く輝かせ——先程よりも高密度の弾幕に襲われる。一夏は零落白夜の出力を上げて弾幕を霧散させ対応するも、足止めを喰らい接近できず。さらにシールドエネルギーがかなり削られたのは間違いない。

さすがに自分も動くべきかと考えるが、何が出来るというのか。今の状況で足手まといになれば、それこそ洒落にならない。

一夏は下手をすればあと一度の零落白夜が限界かもしれない。なら銀の福音の動きを一瞬でも止められる可能性として参戦するのはありか……？

——それでも、ふたりならどうかかなるんじゃないかって思った。ここ一番では爆発力を持つ一夏と堅牢にして豪胆な強さを保持する箒さんならと。

実際のところ、一夏が足止めをされたときに箒さんは銀の福音の動きを止めた。それは刀と翼で打ち合うという持続的なものではなかったが、一夏が体勢を立て直して斬りかかるには十二分な隙。

苦し紛れにバラ撒かれたエネルギー弾は白式を止めるには余りにも数が少なく——しかし、一夏を止めるには効果的過ぎるものだった。

エネルギー弾の射線の先には船があった。何故どうしてと問うには遅すぎ、状況は早すぎた。

飛燕で戦闘区域後方より加速、拡張領域のマシンガンを顕現し撃ち込む。当たらず、見向きもされず、間に合わない。

箒さんが払い除けるかのように銀の福音に刀を振るうが、嘲笑うか

のようにいとも容易く躲される。

——密漁船を庇った一夏が爆炎に飲まれる。

ヤバい、落下する一夏は既に白式を纏っていない。

「一夏あー！ 一夏、目を開け！」

海面に叩きつけられるよりも早く箒さんが受け止め声をかけるが、反応は返ってこない。

あんまりな事態に思考が鈍くなるが銀の福音は速度を緩めることではない。一夏を抱きかかえる箒さんへ鋼の翼を振るい、紅椿が腕部装甲で受ける。

刀はどうしたのか。あのままでは一夏はもちろん、箒さんも危ない。断片的にしか浮かび上がらない思考に叱咤をかけ、メイスを展開し銀の福音へ振り下ろす。

避けられたものの紅椿から引き離すことには成功。ここでようやく俺が障害として認識されたのか、新たな乱入者に対して距離を取り停止する銀の福音。不気味だがちようどいい。

「刀が出なくなつた……それに一夏が、重傷だ」

「具現維持限界か……本当にヤベえな」

頼みの綱の紅椿はエネルギー切れ寸前、切り札の白式は既に消えており一夏も危険な状態。残つたのは予備戦力未満な俺。こりや一刻も早く皆で帰って一夏を治療すべきだろう。

けど、銀の福音が見逃してくれるか。いや、見逃してくれたとしてもそのあとがどうなるか。

旅館や市街地が戦闘区域になるのは明白。それにあんな範囲攻撃してくるなら流れ弾だけで大惨事が引き起こされる。

「出路桐也、一夏を連れて帰ってやってくれ。私は奴を落とす」

「ふつぎけんな、エネルギー切れかけてんのはわかってんだよ。箒さんが持って帰れや」

「だが勝ち目はあるのか」

「勝算がないのはいつものことだつての……ほれ、やつこさんが止まってる間にさっさと行けつて。今の一夏は一分一秒が惜しいだろ

うが。一並びで縁起がいいとか言ってらんねえだろ」

「……すまない」

謝んなつての、俺がここで死ぬみたいだろ。

紅椿が限界を迎える前に戦線を離脱。銀の福音が追っていったら俺が追いつけるか不安だったけど、微動だにしないな。

一度、もうかなり離れた紅椿へ意識を向け——眼前に銀の福音が肉迫。

「L a——!!」

「——ッ!」

テクノボイスの絶唱が開戦の合図。野郎、普通に俺を落としに来やがった!

翼の砲塔は全て俺に向けられ発光。吐き出されるのはエネルギー弾だが点としてではなく、線としてでもなく、面を越えた壁として撃ち込まれた。

視界前面が白に染まり、飛燕で我武者羅がむしゃらに急上昇。PICで殺しきれないGに身体が軋むが間一髪で範囲外へ離だ——鋼の翼に胴を風呂ぎ払われる。

「ガハッ!」

壁から逃れても銀の福音の領域から出れねえ。メイスの石突きで手早く返すが僅かに下がられ当たることはない。

さつきから打鉄が警告を出してくれている。ターゲットにされたときや、接近されるとき。そもそも戦線離脱を促すようなものまで。今まで専用機持ちと戦ったときには表示させることのなかった警告が目白押し。それほど差があるってことなんだろう。

翼を受け止めたメイスの柄がひしゃげる。パワーも段違いってか。軍用機かなんだが知らねえが嫌になるな。条約はどうした、戦闘用とか造ってんじやねえぞ。

前言撤回して、もう投げ出して尻尾巻いて逃げてえ。ぶっちゃけ超帰りてえ。もう死にそうなこんなところごめんだ。

「けど、逃げらんねえんだよなあ」

今だけは後退の二文字を自分のなかの辞書から消す。弱音を押し

殺せ震えを押さえろ、カッケエ自分を思い浮かべろ。

守るものがあるから強くなる、なんてヒーローじみた都合のいいことは起きない。けど、守るものがあるから意地を通す。それくらいならヒーローじゃなくても出来んだよ！

「LaLa」

「ラアアア！」

マシンボイス機械音と恐怖を掻き消すように叫び、再展開した新たなメイスを振るう。当たらねえ！

身を振るように避けられた。詰めていた距離をなんなく離され、何目かわからない弾幕が張られる。飛燕の最高速度は制御しきれず、押さえつつの回避行動。まだ比較的密度の薄い弾幕を瀬戸際で避けた先、銀の福音が翼を打ち付けてきた。

格ゲーでいうハメ技みたいになっている。パターンはわかっているのに手も足も出ねえ。やけくそになってボタンを押しまくるけど意味はなくてゲームオーバー。この戦闘もそうなりそうな予感が確信に変わりつつある。詰みが近づいてくる速度が尋常じゃなく速い！

それにコイツの戦闘パターンとか癖とかさっぱりだからタツグマツチのときな小器用なことも出来やしねえ。砕けた二本目のメイスも手離し盾を構える。重なる爆発を受け、みるみるうちに対エネルギー兵器用のコーティングがイカれる。

高速機動パッケージを使いこなせずに足を止めていることへ思わず舌打ちが漏れる。おかげで次から次へと被弾しては破壊される手持ちの武器。

無理矢理にでも動こうとしたが容易に追いつかれた。ついでに飛行操縦に意識が行ってたせいで防御が疎かになったところに一撃見舞われた。

左腕部の装甲が弾け飛んで、今は剥き出しの生身の左腕が曝されている。

『出路！ 無事か!?!』

生身が無事なだけよかったなんて、そんな場違いな考えがよぎった

とき。織斑センチセからの通信が入った。エネルギー弾の爆音と碎かれそうな盾の甲高い悲鳴が煩くて聞こえにくいつたらありやしねえ。「絶賛ピンチですね。てか一夏はどうなったんすか？」

『今は治療中だが一命は取り留めた！ それよりも旅館付近まで後退しろ！ そこまで来れば他の候補生も加勢出来る！』

退けと、健闘敵わず退いてしまえば周囲警戒を命じられた代表候補生も参戦できると。

そりやありがたい。是非ともそうしたいね。

——手の届く距離まで詰めた銀の福音をイカれてしまった盾で殴りつける。逆に鋼の翼が盾と右腕を裂いてきた。慌てて引つ込めるが、チクシヨウ右腕部もお釈迦だ。二度も繰り返して、中身の生身が無事なだけ喜ぶべきか。

救援は願ってもないので、飛燕の操作を捨てて直線加速。銀の福音は苦なく追従してきやがった。

全開に近いつてのに容易く並走されるのは、困ったな。バラ撒かれたエネルギー弾のうち数発が俺と打鉄を捉え爆発、背面からも何故か衝撃。爆発に揉みくちやにされながら海面に叩きつけられた。

「飛燕でも逃げれそうにねえ。ってかヤバいな、これ」

両肩に何故か見慣れた浮遊盾が見える——つまり、さっきの背面爆発は飛燕まで壊れたってことか。

拡張領域の武装の残りは対エネルギー兵器用のコーティング無し
の盾が二枚に、まともに当たらないマシンガンだけ。そもそも腕部装甲が破壊されてる時点で、まともに武器も扱えない。貧弱すぎて自爆特攻も満足に出来やしねえ。ごねてでもグレネード持つてきてりやな、いや当たんねえか。

海上で待ち構えている銀の福音も俺を見失ったわけじゃない。こちらを向いて出方を窺っているだけ。奇襲でも警戒しているのか暴走しているくせに慎重なことこのうえない。

考えても考えても打開策もなにもない。意地を通した結果がこれってのは我ながら情けねえ。これが最期ってのは嫌だよなあ。

銀の福音がゆつくりと降りてきている。仮初めの膠着状態の終わ

りも近い。今さら白旗振っても駄目だよな。そもそもなかの人の意識もなさげだし、泣きわめいても意味はない。

『……状況は』

「両腕部装甲全壊、高速機動パッケージ損傷により使用不可。武装もだいたい無くなりましたっつての」

シールドエネルギーは数発喰らったら落ちる程度。逃げの一手を取ろうにも簡単に追いつかれちゃう。気が触れそうなほどに詰んでる。実際、涙が止まらんし。海中じゃなきや織斑センセにもバレるとこだった。泣き虫って言われちゃう。我ながらだっせえことこのうえねえな。

「戦闘記録、というかりんち記録みたいなもんですけど送るときますね」

『そんなものはどうでもいい』

「カーツ、頑張ったんすけど、どうでもいいって手厳しいっすねえ」
通信は銀の福音に傍受されているのか。以前学園に来た無人機のうち一機はそんなことしてたらしいが……もしも傍受されているなら助けを求めた瞬間にアウトか。してなくても間に合わないだろうけどな。

抜け道もなさげで、いよいよ駄目そうだ。

『そういうことではない！』

「……わーってますよ。でも、どうしようもねえんですって」

足りない頭を総動員しても全く光明が見えやしない。ゲームなら迷わずリセットして旅館まで戻っている。

諦めた、なんて言えるほど達観してねえ。目眩か涙か視界はボヤけてるし、叫びだしたい。銀の福音が怖くて我慢しているだけ。未練は、かなりあるに決まってる。

『今から、何分持ちこたえられる』

「エネルギーシールドがですねえ、だいぶん、ね？」

救援を送ってくれるにしても、高速機動パッケージを換装している専用機持ちもいなかった。今から換装して、もしくは通常機体のままここに向かつて……まあ、結果はわかりきってる。

なーんでもっと早くに……って言いたい。八つ当たりでも言いたい。けど篠ノ之束にあれだけ言われたくせに、参加するか否かの最終判断をしたのは俺だ。

なによりも、曲げたくない信条だったから。シャルロットのときもそれに従って決めた。誰でなく俺が納得したことを覆したくない。

ここでその信条を曲げてしまったら、あの人たちを貶めてしまうような気がして、それだけは絶対に嫌だ。

『――』

画面の向こうでなにか言ってる。聞く余裕が無くなってきた。耳には届いても、意味を咀嚼できない。

――まあ、未練だらけなのも本当だ。学園でだって友人が出来た。たつつんとまた会いたかった。みーちゃんは、会いたくなくても宣言は曲げないだろう。

それに、父さんと母さん。あの人たちになにも返せなかった。このままじゃ親不孝者になっちまう。

自分の判断を後悔しなくても、しないと言い張っても、でも――

「……死にたく、……ねえ、なあ」

『――ッ！ 待ってい』

押し殺したはずの弱音が溢れた。それに織斑センサーが答えてくれた。

――銀の福音はそれを増援要請と見なしたのか、急速に俺への距離を縮めた。

翼の砲塔が周囲の海水を沸騰させながら光の弾丸を込める。逃げようとするが腕を捕まれる。咄嗟に通信を切った。最期を他人に押しつけたくなかった、最後のしようもない意地。

閃光と衝撃、痛い。腕を振り払おうとするが力負けしている。閃光と衝撃、意識が遠退く。約束を守れそうにない、また怒られるな。閃光と衝撃、警告音がけたたましいのに画面は真っ暗。

「……つたいに……し、な」

――もう、なにも見えなかった。

▽▽▽▽

無人機の撃退やタッグトーナメントの優勝、それらから出路もやるようになってきていると思った。一癖も二癖もあるアイツなら策を弄したうえで耐え凌げるかと、思ってしまった。

実際のところ、篠ノ之が一夏を連れ帰るまでもっていた。だから、退くことくらいならばなんとか出来ると、無意識のうちにタ力をくくってしまった。そうすれば、本国から命令を受けた専用機持ちも加われると。

——判断が甘かった。

ただ、出路は命懸けで時間を稼いでいただけだというのに。命令を無視させてでも専用機持ちを向かわせるべきだった。間に合わなくなるまで意地を通したアイツになにも出来なかった。

取り留めない後悔が流れるが、そんな考えを一度捨てる。言い方は悪いが、そんな暇はなかった。

現在、銀の福音はこの旅館から数十km地点で活動休止状態に入っていた。

あれは暴走しているにしては嫌に慎重だ。恐らくこの先にも障害があると判断し、僅かにであれ破損したパーツを自己修復しているのだろう。そのおかげで時間が取れているというのは皮肉か。

それにだ。出路の打鉄からの反応が途絶えてから専用機持ちへ、次々と銀の福音への積極的交戦許可が降りた。まるでこういう事態を待ち望んでいたかのような手のひら返しだ。

事実、待っていたのだろう。今、出路桐也を見つけ救出すれば大きな借りを作ったこと出来る。そうでなくとも——例え、出路が亡くなったとしても、その原因である銀の福音を討ち取れば、それだけで大きな功績となる。胸糞の悪い話だが、国としては理にかなっている。本当に胸糞は悪いがな。

一夏もまだ目を覚まさない。篠ノ之は紅椿の回復を静かに待って

いる。

凰やオルコット、ボーデヴィツヒにデユノアは国や企業や軍の意図を理解し怒っていた。怒り方は様々だった。ただ、それを命じた相手だけでなく、享受した自分達にも怒っていた。

普段なら青いなと笑っていただろうが、さすがに今回ばかりは私もしでかした。

私は学園にいる間は守ると言ったはずなのにな。とんだ嘔吐きになっってしまったものだ。

「お、織斑先生。諸外国から出路くんの搜索に協力要請が」

「全て断れ、海域及び空域の封鎖は絶対に解くな」

「はい。搜索は反応消失ポイントの海流から漂流地点を割り出して行います」

このタイミングで協力的になるということはなにをしようとしているか一目瞭然。出路の確保だろう。それだけはさせるわけにはいかない。例え生存が絶望的であっても――

▽▽▽▽

目を覚まして目に入った光景は異質なものだった。視界いっぱい幾つもの歯車、それらが回っている。

よく見てみれば歯車同士は噛み合わずに砕け散り新たに歯車が産み出され、砕け産み出されの繰り返し。そんな奇々怪々な光景とは対称的に雰囲気は暗くなく、むしろ眩しいほどに白い。まるで定型のない世界だ。

――間違いなく夢だな。夢を認識できるのは白昼夢って言ったか、なかなか珍しい体験。

座ったまま歯車を眺め続けても一向に合う様子もなく崩壊と再生の繰り返し。夢なのに眺めていて少し目が疲れ始めた、というか夢のくせしてやけに同じ風景が続く。

そう考えていると背中に温もりがあった。何かが当たったという感覚ではなく、いつの間にかそこにあった。いつからあったかもわか

らない、そんな自然な不自然さ。

ま、そんなこともあるだろ、夢だしな。恐らく背中合わせに俺を背もたれにしている誰か。俺の知り合いの誰かか。夢ならこう考えているうちにも対象は変化してしまいそうだな。

「んんー、ごめんなあ。うちはお兄さんに出会であうたことはないんよお」
「あ、いねえわ。確かにこんな喋り方する知り合いはいねえ……どちらさん？」

「うちはせやねえ……匿名希望の“Who”ってどこでどやろ？」
「ツツコミたいところだが夢の中だからなんでもいいわ」

この独特の話し方の相手はなんなんだろうか。俺が潜在的に望んでる個性がこれとかあんまり信じたくないんだが、きつと違う。

楽しげに身体を揺すつてるのが背中越しに伝わる。なにがそんなに楽しいのか。俺の夢なのに俺にはさっぱりわからない。

「ああ、せや。ちよち話し聞いてええかえ？」

「いいぞ」

「お兄さんには欲しいもんとかある？」

「金、権力、名声」

「即答なうえにメチャ俗物的やね……それはうちの力やとちよち厳しいなあ。甲龍シエンロンならいけたやろか」

「神龍シエンロンならいけたんじゃね」

「んー、あとから生まれた子に負けるんはなんか嬉しいような悲しいような、モヤツとするわあ」

なんだ、こいつ神様の類いか。夢らしく設定が滅茶苦茶になってきたな。背中からクツクツと可笑しそうに笑うのが伝わってきた。さつきから楽しく可笑しく過ごせているようで何よりだ。そろそろ俺にとつても楽しい夢になってくれてもいいんだがな、相変わらず歯車しか映んねえ。

「夢言うたら夢になるんかなあ。お兄さんこつから出たら臍へし氣にしか覚えてんやろうし。まあ、でもうちにも聞いときたいことはあるんよ……んー、姉あねさん真似まねて素直すじくに聞きこか」

「それがいい、俺は察さつしが悪いんだ」

「知つとるよお。いっつも人の内心を読もうと考え巡らせては思考を放棄しとるもんねえ」

夢の中くらい俺に優しくてもいい気がするんだが、どうにも後ろの女は手厳しい。

「手厳しいのは堪忍やわあ。一心同体なんやから、ついねえ。可愛さ余ってってヤツよ」

「一心同体ね、夢だけにそうかもな……んで質問はどうしたんだよ」

「せやせや。お兄さん、力は欲しくないかえ？」

「アバウトだな」

「せやけど意図は伝わってるやろ」

力か、力なあ。そういえば、似たような質問をされたことがある。たしか、ラウラだったか。あのときは強さって話だったな。結局、自己の肯定が強さに繋がるって答えてた気がする。

それは今も変わっていいねえし、こんな俺でも曲げれねえところはあ

る。

「強くはなりてえよ」

「なら力が欲しいってことやないの？」

「力だけの強さは求めてねえかな」

「ふうん、難しいこと言うんやねえ」

まだ相互理解が足りん言うことやろか。そんな眩きが耳に届く。ちよつと拗ねたような、残念そうな声音。

歯車の崩落が加速し、再生も加速する。珍しい体験だが輪にかけて奇妙な光景だ。

「ちよち、それはまだ、うちには解らん感情」

「成長すれば、そのうちわかかんじやねえかな……つつても俺もまだまだガキだけど」

「そらあ、違うないねえ」

互いになにが楽しいのか笑う。自分でもわからねえが、なんだか楽しいんだから仕方ねえ。

「残念やけど、うちにはまだお兄さんに力貸せへんようやね」

「なんのことかさっぱりだが、適当になんとかするわ」

「適当やなくて、死ぬ気でどうにかしい」

「嫌に切羽詰まった言い方するな」

「嫌なほど詰みみたいな状況やったんや。まだあの子は近くで休憩しとる。手のかかる子や、お兄さんと似てな」

「誰が手のかかる子だ」

そんなことよりだ、俺って起きたらそんなヤバい状態なのかよ？

てか寝る前ってどんな状況だったか思い出せないのは夢の弊害か。もしくは死にかけて記憶がトんでるとか……ハッハッハ、そんなわけねえか。

「なくないんやけどなあ……」

「え、なんだって？」

「なんもないえ？ でも、軽度熱傷で済んだんは悪運が強いというか、うちがめっちゃ頑張ったというか、色々言いたいんやけどなあ。思い出せんようやし止めとこーか」

「待ってくれ、なんの話だ」

夢にしたって訳がわからない。いや、夢みたいな荒唐無稽なわからないじゃねえ。意識がハッキリしたうえで会話も成り立ったうえで、重要なところだけをはぐらかされてるような解らないだ。

背後のふうは質問には答えず独白のように続ける。

「翼だけは必死こいて治したさかい、また飛び回ろーな？」

「……んん？」

「ほらほら、約束や。指切りげんまん、嘘ついたら……ああん、背中合わせやとしにくいわあ。もう指だけ切つとこか。ゆーびきつた」

とぶって、もしかして飛ぶことなら、そんなこと出来るのは一人。いや人じゃねえけど意思あるなら、ええい、なんて数えるのかわかんねえけどお前ってまさか——！

「ほな、またいつか会えるとええね。でも元気にしといてえな」

「図ったかのようなタイミングで終わんなつての……！ あー、なんだ……ありがとうー！」

白ずんだ世界が完全な白に変わる。眩しさに目を細める直前、かろうじて見えたのは少女の後ろ姿。ひらひらと軽く手を振っている。

かけた言葉も聞きたいことも山ほどあったんだが、世話になってる相手には礼だけでもいいか。

——なにがなんだかわからんが！ もう一踏ん張りしてやらあ！

なんかグツと拳を握りながら消えていった出路桐也を見送り、その場に残った少女はひとりごちる。

「うちの相棒さん、お礼やなんて水くさいわあ。

……それで姉さんの方は、もうちよつとかかりそうかえ？ そかそか。なら、うちらが時間稼いだるさかい早^{はや}うしてえな」

その意味がわかるものは誰もいなかった。が、少女には少し焦ったような姉の反応がわかったのか、クツクツとひとり笑うのであった。

30. 重見天日

思考を鋭角に尖らせる。広げるだけ収集がつかなくなるだけだ。視野を狭める、余計なものは捨ててしまえ。昔からよく言われてたじゃねえか、バカなんだから単純に考えろって。その通りだよ、腹立たしいことに全くもってその通りだ。

だから今はあれよこれよと何をやれるか考えるんじゃないやねえ。これと決めたひとつをやり通すため動くだけだ。

あとはいつもと同じだ。震えちまいブルッそんな心はカツケ俺を思い浮かべて心に焰を灯せよ。相棒の翼には炎を灯せよ。

うっし、これで準備万端。真上で呑気に胎児みたく丸こまってるアイツにかましてやろうぜ！

——轟ッ！ と飛沫を巻き上げ海面を突き抜ける。それは脚部から蹴破るように、そして銀の福音を蹴り飛ばすため。

休止状態にあつた銀の福音の反応は平時よりも遅く、ついでに完全に落としたはずの俺を見て僅かに動きが鈍った。処理が追いつかなかったのかなんのか知らねえが、お陰さまで打鉄の足底がやつこさんを捉えた。金属同士が激突する甲高くも重い音を響かせ二転三転して、銀の福音が弾かれる。

それを肉眼では見届けることなく——飛燕での加速。向かう先は銀の福音？ 冗談じゃねえ、万全のポテンシャルで勝てねえ相手に深追いするかつてのバーカ！

なんか修復がえらく早い気がするが直つてんのは高速パッケージの飛燕とエネルギーだけ。腕部は未だに生身のまんま。俺自身の火傷もそんなままで正直かなり痛い。

だから、むしろ真逆の真反対。銀の福音と対角に、旅館の方へと全力で空を駆けるんだよ。

逃げるが勝ちってな！ 戦術的生存的撤退イ！ そのためだけに思考を絞れ。最悪の第二ラウンドが始まったときの可能性なんざ考慮するな。どうせ録な答えも出ずにふたつの案が共倒れするだけだ。

シンプルにひとつの回答のためだけに頭を使って体を動かせ。

加速のため、例えるならクラッチを踏み込みギアを上げる、その極々僅かな停滞の時間。

そこで銀の福音が打鉄の脚部をガギリと掴んだ。時間をコマ送りにしたような意識の中で、耳に届いたのは金属で金属を絞め殺すような音。装甲が砕け火花が散る様をスローモーションで視界が認識する。

化け物じゃねえか。性能差か、初速から打鉄への距離を詰めやがった。馬鹿みてえな機動力を再認識して頬はヒクついちまう。

……脚部を掴まれたつてことは銀の福音引き連れたままの高速飛行。今さら停止もできず、加速の最中に引き剥がせるわけもなく、逆に一方的に攻撃されて――。

▽▽▽▽

「で、出路くんの打鉄の反応見つかりました！」

真耶が声を張り、室内の面子へ打鉄の発見を伝える。千冬が即座に何処かの確認を行う。

既に出路桐也の打鉄から反応がロストして数時間。捕まった海流によつては領海から出ていることも覚悟していた。しかし、彼が見つかったのは遥かに予想外な地点。

「打鉄がロストした点から、ほとんど動いてません……つまり銀の福音と同地点です！」

「どうしてアイツはそんなところでも虚をつくのだ!? 専用機持ちをすぐに召集だ！」

そんな旅館的一幕。

専用機持ちたちは出路の無事に喜色を現したのも一瞬。

「すつ、既に銀の福音と交戦中でつ、ああ!?! 脚を掴まれ――」

また銀の福音と戦闘になつてうえにかなりピンチと聞いて、慌ただしくもスピーディーに出撃する専用機持ち組であった。

▽▽▽▽

弾き飛ばしたはずのアドバンテージどこにいったんだよ。結局無駄な行動しちまってんじやねえか——なんて、後方へと置き去りにした銀の福音をハイパーセンサーで確認しながら内心で悪態をつく。

火花を散らしていたはずの脚部は見る影もなく、淡い粒子を尾引くばかり。脚部装甲の解除によって、握撃をスカした。

先程より少々長めに、またも静止した銀の福音。まるで予想もしなかった。いや予測していなかった事態に見舞われたとでも言いたげなその様を見て思わず、ヒクついていたはずの頬が“にへらっ”と動くのが自覚できた。

——桐也自身に自覚はなかった。その不意を突くのは十八番だと言わんばかりの、そのイタズラが成功した子供のような表情。その面持ちが“してやったり”と語っている、そんな面をしっかりと銀の福音は認識していた。

「La——!!」

あるはずの脚部を失い、所在なさげとなった手のひらで虚空を握りしめた銀の福音が吼えた。それは絶叫のようであり絶唱のようであり、行動が無為に終わったことへの怒りか、俺への怒りかはわからなかった。

銀の福音が握りしめた手の内から溢れるのは光の粒子のみ。脚部限定の解除によって拘束から逃げ仰せた。ページは基本だよなあ！掴まれたのが腕だったらどうしたか、なんて考えてねえ。泣いたに決まってるんだろ。けど効率的な銀の福音なら、より近い脚部を狙うって信じてたぜ。

不意を突かれたお返しとばかりに正攻法で、単純なスペック差による速力にも言わせた銀の福音。今度こそ瞬時にとまではいかなかったが、それでも追いついてきやがる。追従してくる銀の福音はバレルロールのように回転し、鎌を振りおろすように鋼の翼を振られる。防御はできねえし停止しての回避はもつてのほか。前を取られたら、もう抜けるわけがない。けどこのままじゃあ並走された瞬間に

切り落とされる。

——なら今が飛燕の最高速度だろうが加速しかねえよな。前に出での回避しかあり得ねえ。それにこれは打鉄の最高速度じゃねえ。

飛翔のためのエネルギーを微量無駄に排気する。銀の福音との距離は縮まり、排気されたエネルギーを取り込み再燃焼した飛燕が突き放す。

高速パッケージでの瞬時加速。

「オ、オオオオオオ！」

相手が軍用スペックのクソツタレってなら、俺も高速パッケージ×瞬時加速だ！　ウハハハツ！　殺しきれねえGがメツチャ重い！　でもクツソ速え！

雲を引き裂き音も置き去り。最っ高にイカれた速度に脳内麻薬の分泌が止まらねえ。速力が落ちる前に重ねて瞬時加速オ！

今のコンデイションは過去最低っていつても差し支えねえのに最速で駆けていると確信できる。飛燕に換装してる今なら白式の加速力にも劣らねえ、拮抗できる自信が湧いてくる。問題点は曲がれないってことだが緩やかな曲線を描くくらいは出来らあな。

あとは俺が旅館付近の海域へタツチダウン決めればいいだけ。もうクタクタなんだからそこまで行きやあバトンタッチしても誰も怒んねえだろ——背筋に悪寒。超高速飛行の最中、肉を鋼で打ち付けられ絶対防御発動。脇腹の衝撃が胃液をせり上げて臓物をシャッフル。込み上げたものは堪えずに吐き出す、オゲロツ。

「ガアツ——!？」

俺は真下に叩きつけられた衝撃と前進していた慣性に従い、鋭角に海面に激突し水切りのように数バウンド。減速し反跳が終わって沈む。

打鉄が銀の福音の個別連続瞬時加速の使用を伝えてくる。んだよ、その完全な上位互換っぽい技は。暴走してるくせに繊細で慎重で効率的な動きしやがって、腹立つウ！

空中に銀の福音、海中に打鉄おれ、まるでデジャヴの状況。しかし今回、先んじて動いたのは俺。それでもイニチアシブを取るのは銀の福音。

飛沫を上げて飛び出す打鉄に余裕を持って対応される。ドンピシャのタイミングで鋼の翼で横一文字に横凧ぎ。もうエネルギー弾を放つほどでもないと最適化され効率的な、それでいて胆が冷えるほどに鋭い一撃。端からみたら惚れ惚れするだろうな。喰らう俺は肝が冷え冷えとするけどな。

生身にだけは貫うわけにはいかねえ。鋼で出来た装甲なら破碎されるだけで済むが肉はダメだ。絶対防御が発動してエネルギーが無くなる。

砕けかけた脚部の装甲を盾に、成す統べなく切りつけられ打鉄の絶対防御が発動。脚部装甲で防御を行うことすら間に合わなかったしモ口に喰らったアアア！ 反射的にかざした腕は生身、てんで防御にならねえ。

腕越しに肺が叩かれ歯を食い縛った口の端から空気が吐き出されながら大きく吹き飛ばされる。それでもバカの一つ覚え。再三にわたる打鉄の瞬時加速。吹き飛ばされた勢いを相乗して逃走を図る。が直ぐに加速は途絶えた。

シールドエネルギーが果てる寸前ってか。やっぱりモ口に貫つちまったのは痛かったか。物理的にも痛かったさ。腕がまだジンジンしてやがる。

銀の福音は動いていない。ただ光を蓄積した翼を振るい放射する。高速飛行なんざ見る影もねえ、浮遊したまま慣性で動く打鉄に、エネルギー弾で構成された光の壁が迫る。

——スラスター全開ならあと30秒もいらねえってのに。あと少し、そんな距離まで来てるってのに、その少しが途方もなく遠い。

慣性に従って緩やかに吹き飛んでいるだけの俺。成す術はもうなにもなかった。

弾幕の明るさに思わず目を閉じ、脳裏に駆ける誰かの顔。走馬灯なんて冗談じゃねえと頭を振るい、爆音が轟いた。重低音は身体を打ち抜いてくる。けど、爆破の衝撃も痛みもいつまで経ってもやってきや

しねえ。なにがあつた？

疑問に従い閉じてしまった目蓋を上げれば——橙色のI.S.が掲げた盾から噴煙が上がっていた。視線を動かせば、涙ながらに笑みを浮かべる友達の顔がそこにはあつた。

「助けに来たよ、マイフレンド！」

「つたく、遅えよ……けど助かつたぜ。サンキュ、マイフレンド」

会ってないのはたつた一日足らずのはずなのだが、何年ぶりになるかと錯覚しちまう懐かしさと頼もしさ。ブルリと背筋が震えた。感涙しちまいそうだ。

「生きてるよね、生きてるよね桐也！」

「このピンピンした俺が目に入らねえの？ 視力落ちたか？」

「ボロボロにしか見えないよ！ 火傷してるし腕なんて腫れてるし、もう……でも、生きててくれて本当によかつた。あんまりにも帰ってくるのが遅いから、迎えに来ちやつたよ」

「しつこい追っかけにあっちまつてな、ちよつと追い払つてくれ」

まあ、むしろ目に涙溜めてたのはシャルロットだったし。冗談めかしたことを言ってるわりには目尻に水滴が見えてるし、あとで謝ることを善処しよう。でも今はそれどころじゃないんだよ。なにせ、銀の福音が増援を認識してエネルギー弾を撃とうとしている。

銀の福音が翼を振るうより速く、紫電を撒き散らし飛来した砲弾が炸裂。ラウラのレールカノンか。見事に銀の福音を捉え動きを制する。

稼いだ時間でラウラが寄ってくる。

「シャルロット！ 再会を喜ぶのはいいが、奴を倒してからだ！」

「わ、わかつてるよラウラ！」

「桐也は、よく生き延びた」

「ハハッ、まあ後任は任せませラウラ少佐殿？」

任せるけどごめん、こんだけやつといて銀の福音がピンピンしててなんかごめん。

なにしろ俺は逃げるだけだったからな！ 銀の福音のシールドエネルギーはほとんど削れてねえぜ！

「おっしや！ 俺ひとりじや歯が立たなかつたが覚悟しやがれテメエこの野郎銀の福音！ 俺の友達は強えぞ！」

「あんためちやくちや他力本願よね！ でもッ！ その通り、よっ！」
鈴の叫びと共に龍咆が吼える。換装装備「崩山」による炎熱を伴った衝撃波。不可視の衝撃波を辛うじて可視とする代償に火力を底上げしたそれは、やはり当たらずに終わった。けど、無駄撃ちされたわけではなく銀の福音の軌道を制限し動きを止める。

そこへ叩き込まれるのは四本の蒼き光線^{レーザー}。誰が撃ち込んだかなんて確認するまでもない、セシリアさんのブルーティアーズ。縦横無尽に撃たれるレーザーは更に銀の福音の行動の選択肢を狭めていた。

「シャルロットさんは桐也さんを守っていてください。今度こそ、無事お帰りになられるよう援護しますわ」

「俺も手伝うぜ？」

「足手まとい未満はお下がりにくださいます？」

「辛、辣ウー！」

事実なんだがな。残り一桁手前のシールドエネルギーの心許なさつたらねえよ。一度の瞬時加速だつて出来やしない。

「これでも怒つて、いえ心配してますのよ？ 懐かしい台詞を言っている暇があるなら早く下がりにさいな」

「一応なんだが銃火器が一丁残つてたんだが——素手だからいつもよりブレるだろうけど」

「味方から背中を撃たれる趣味はありませんので大人しくしてなさい」

「オーケー、わかつた下がるよ。あと、心配かけてすまんかった」

「とりあえずは良しとしてさしあげますわ」

実はおこだったセシリアさんから、ではなく戦線から離脱に入る。とは言うものの銀の福音はオールレンジの範囲攻撃を得意とする。故に中途半端に下がっても弾幕密度が多少薄くなる程度。

シールド一枚貫えりや適当に下がっとくんだがな。

「駄目だよ。高揚してて感覚が鈍つてるだろうけどボロボロなんだから。一発でも被弾したら堕ちちやうよ」

「つても優秀なシャルロットを俺の護衛だけに裂いてちや駄目だろ」

素直に守られているのがいいのはわかってんだけど、それでも相手はあの銀の福音。戦力があるにこしたことはねえだろう。

「ならば、私が落としてやろう」

そんな葛藤を箒さんが振り斬る（not誤字）。雨月と空裂を携え、どこか見覚えのあるシニカルな笑みを浮かべる。

「お前の不安もあの銀の福音も、全て私が斬り伏せてやる。それとも、一度は敗走した私では不安は拭えないか？」

「俺がなんて答えるかわかりきつてて聞いているだろ……なら、俺が逃げのための時間を稼いでくれるか？」

「逃げなどと言うな、凱旋の先取りだ」

「ハハッ、箒さんが勝つてくれるならそうなるな。じゃ、任せた」

「委細承知。あの翼、今度こそ斬り落としてやろう」

ああ、この笑みは織斑センセに似てんだ。カッケェよ、やっぱり俺が女なら惚れてた。だが男だ。

空を縮めた紅椿の刀が銀の福音へと喰らいつく。それを阻もうとする鋼の翼に刃が食い込み火花を散らす。力任せに弾かるが、その様子を遠目に見ているシャルロットが言葉を漏らす。

「第四世代紅椿、改めてみると凄いな。展開装甲が目まぐるしく変わってる。速力重視のためにスラスターを展開したと思った矢先には、近接特化仕様で防御主体になって次々と換装されてる……」

「高速切替が十八番のシャルロットがいうならそうなんだろうな」

「うん。乗ってる本人が強いつても大きいと思うけど、それでもかな」

軍用として膨大なエネルギーを保有する銀の福音に対して、訓練機のスペックの専用機組は短距離走のようにハイペースで詰めていく。ただし、いくらテンポが早いとはいえ雑なわけではない。1に対して10の労力で無理に早めるのではなく、10を1で終わらせる効率的な加速。必要時に出し惜しみなく使っているだけのことだ。

紅椿は展開装甲に合わせ、先の戦いでは見せなかったエネルギー刃やレーザーも使用しエネルギー弾幕を相殺している。ブルーティ

アーズも縦横無尽にレーザーを張り、動きの制限と弾幕相殺を兼ねている。

「鈴はよくあのなかで銀の福音に突っ込んでいけるよな」

「エネルギー弾を他の人が払ってくれるからこそだろうけど、あれは度胸がないと無理だね」

機動力を削がれた銀の福音の懐に潜り込んだ甲龍が双天牙月を振るい、更に徐々に動ける先を狭めていく。おい、新パッケージの崩山はどうしたと突っ込みたくなるが、想定外の方へ逃がさないよう要所で撃ち込まれている。避けられることを前提に、しかし逃げる方向を誘導している。

そうして狩人が獲物を追いたてるよう、追い込んだ先にはシユヴァルツエア・レーゲン。眼帯を外し越界の瞳を露にしたラウラがAICを張り巡らせていた。

エネルギー兵器は止められずとも銀の福音は別。相性の悪い武装は別の面子が処理し、タイムマンならば屈指の強さを誇る停止結界に捕らえた。

あとは作業だった。直接触れば停止結界に巻き込まれるのでエネルギー兵器を中心に集中砲火。いくら桁外れのシールドエネルギーとはいえ、一方的に放たれては成す術があるはずもなく。紅椿の光刃が鋼の翼を切り裂き、銀の福音は海へと落ちていった。

それらを目視可能な距離にいた俺は一息つく。

「終わったな」

「うん。暴走体じゃなかったらこうもいかなかっただろうけどね。でも、私がいなくてもなんとかなったでしょ？」

「ああ、回避しきる暇すらないとは恐れ入ったっての。さすが代表候補生」

いくらシャルロットが流れ弾に注意しつつ退っていたとはいえ、まだ目視できるんだぞ。

——《CAUTION! CAUTION!》——

「はっ?」

打鉄が勝手に解放回線でアラートを鳴らしたことに虚を突かれ驚いた。それで、次になにに対して警告を発しているのか。それを疑問に感じたときには光の翼を生やした銀の福音が天を舞っていた。

「え、なんだあれ、変身とかすんの?」

「セカンドシフト第二次移行だよ! けど、どうして!」

このやり取りのうちに一番近接で戦っていた鈴が光の翼に飲まれた。包み込むように、球体状に丸々機体ごと全方位の光の握撃。音もなく甲龍が落ちていく。現実を疑うほど呆気なく、強者が欠ける。

エネルギー弾単発で相当の威力だった。それを束ねたような光の翼の攻撃力は想像を絶していた。

そして、それに意識を取られたのは仕方のないこととはいえ、銀の福音の速さが頭から抜け落ちていた。瞬時加速もかくや、だが予備動作なしで遠方でライフルを構えていたセシリアさんを——いつの間に近づいた——飲み込み、また落ちる。

ラウラが背後からA I Cで捕らえようとするが、第一次移行体とは比にならない、全方位へ放たれた空を埋め尽くす弾幕に吹き飛ばされた。それだけの弾幕が一機だけの被害で終わらせるはずもなく、紅椿やこちらまでウン百の凶弾が襲い掛かってきた。

シャルロットがシールドで防ぐが対エネルギー兵器のコーティングが今にもイカレそうな音が連なる。一回防いだけでひとつのシールドが廃棄物になるとはふざけてるとしか思えねえ威力だ。

「ハア、ハアツ……無事?」

「こつちのことは気にしなくていいぞ。んな暇もねえだろうし」

箒さんは、なんとかまだ飛んでる。ただ一戦目の燃費の悪さを鑑みるにそろそろマズい。この面子を単騎で打倒とか嘘だろ……それは、反則だろ。

「万策尽きたってか、クツソ」

「ううん。絶対を守るから。桐也がひとり耐えてたんだよ? なら

私だって、任せて安心しててよ、ね?」

「……別に不安になんぎ思ってたねえよ」

やった、イケメンばっかじゃねえか。だっせー、恥ずかしいったらありやしねえ。残り一桁に差し掛かったシールドエネルギーが憎らしい。

戦うのは怖えけど、こういうときに守られるだけってのは、やっぱり嫌なものだ。恥ずかしいってのもあるけど、それも結構あるんだけど、でも仲間としてどうか友達としてな？

「桐也、シャルロット。私が斬り込む……可能な限りあの弾幕を落としてもらえるか？」

「うん、箒に当たるのは落としてみせるから、真っ直ぐに進んで！」
光翼の一撃を寸前で躲した紅椿がこちらへ来る、のも一瞬だけだった。

一言のやり取りを交わし直ぐに銀の福音へ再接近。途中放たれたエネルギー弾はシャルロットの弾丸が先を取って爆破、それを突っ切った紅椿が光翼と斬り結ぶ。

細心の注意を払って撃ち込んだ俺の弾丸は明後日の方向、隙あらば紅椿を飲もうとする光翼にシャルロットが要所で牽制。薄氷のうえに立つかのような危うい均衡状態に陥った。あれ、俺いらないな。

「返すための一手が足りない……ッ！」

歯噛みするシャルロットの気持ちはわかる。薄氷と比喻したものの、その薄氷自体も溶け始めているのは明白なんだ。箒さんやシャルロットは落とされても怪我しちまうかもしれないが、保護機能で死ぬことはないだろう。ただ、俺がカスッただけで打鉄が消えちまうだけで。

危惧していた限界は足早に訪れる。

当然ではあった。さっきから短距離走を駆け抜けるような戦闘だったんだ。紅椿の刀が一本消え、光翼に薙がれ吹き飛ぶ。

追い討ちをかけるかと思ったが、銀の福音はこちらに向かってきた。シャルロットが俺を庇いつつ逃げようとする暇もなかった。高速機動パッケージでもないラファールでは速力に彼我の差があった。

そこに割り込めるのはこの場に一機のみ。離れていたはずの紅椿が銀の福音を羽交い締め引き剥がし、瞬時に優先順位を変えた光翼

が反転し紅椿を飲み込む。球体状に包み込み大きく膨張した光翼が収縮を始める。

「マズ——ッ！」

ここで箒さんが落ちるのは本気で不味い……ッ！ 戦力的にもだが、具現維持限界寸前だった紅椿があれを喰らったらどうなるか。火を見るより明らかじゃねえか！

シャルロットが高速切替、引き金を引くよりも銀の福音が早くどてっ腹を蹴り吹き飛ばす。蹴られながらも投げ渡してきた銃を受け取り撃つが数発程度じゃビクともしねえ！ 光の圧搾が限界へと達しようとしたとき——

「箒イイー！」

ここ数カ月で聞き慣れた声が耳に届いた。

蒼白の光刃が白銀の壁を切り裂く。光翼から解放された紅椿を左腕で抱き寄せ、まるで白馬の王子様じゃねえか。髪止めが焼けてしまったのか、その長い髪を風に靡かせる箒さんはさながらお転婆姫。

「遅いぞ一夏ア！」

「悪い！ けど間に合っただろ！」

「ヒーローよろしくギリギリすぎんだよ！」

悪態のような言葉を交わしながら、安堵し今度こそ涙腺が緩む。目を一度だけ腕で擦って一夏を見据える。

全身の火傷は見当たらず、雪片式型を握ったその姿は、元の白式から大きく変わっていた。そっか、一夏もセカンドシフトしたのか。カッケエなあ畜生。

「ここからは俺の仲間はずれ一人としてやらせはしねえ！」

「いち、か……？ 一夏ッ！ 傷はどうしたのだ!？」

「お、おおう、大丈夫だ。箒も無事でよかった。それとな、ちようどよかった。誕生日おめでとう」

珍しくも慌てふためく箒さんへ、一夏がどこからともなく取り出したりボンを手渡した。ロマンチック過ぎて邪魔するのが悪いんだがな。

「オツラアアアア！」

「せやあッ！」

白式へと迫った銀の福音へ打鉄とラフアールが蹴りをかます。シールドエネルギー残り5オ！　こんなときにいい雰囲気かましてんじゃねえよ！

「ちようどよくねえよ一夏！　さきに銀の福音倒せ！　おらさつさと行けや！」

「おいやめっ、蹴るな！　シールドエネルギーが減っちゃうから！」

白式の振り払うような動作、左腕の爪が打鉄を引っ搔いた。ビーという嫌な音、目が点になる俺と一夏、フツと消える打鉄。

「アア、アッアアアアアい!?　落ちいいッ!?」

「と、桐也あ!?!」

浮力から見放され重力に引き寄せられようになった俺をシャルロットが受け止めた。

「す、すまん！　そこまでギリギリだったとは！」

「もういいからさつさと行けや！　ちやつちやと倒して帰るぞチクショウ！」

「あ、ああ！」

無駄な行程が些か多すぎたように感じるが、やっと一夏が銀の福音へと斬りかかった。

箒さんはポケーとリボンを眺め、微笑をたたえ胸に寄せ、そしてそのリボンで髪を結う。惚れた相手が今まさに死闘を繰り広げてるけどそんな悠長にしていいのかよ。さつきはペース崩したとか思ってたけど一瞬だけだった。

白式と銀の福音の戦闘はわかりやすいものだった。光刃と光翼がぶつかり合い、刃が翼を喰らう。圧倒的破壊力を秘めた翼を理不尽なまでの絶対を有する剣が切り裂く。近接は不利と悟った銀の福音が距離を取ろうとするが白式の左腕から放たれた一条の光の矢が翼を穿つ。

完全に流れを掴んでいるのは一夏で、焦りを浮かべているのもまた一夏だった。

「あの左腕、荷電粒子砲だよ」

「燃費は？」

「機体に直接ついてるから、たぶん悪いかな」

「焦ってるのはそのせいか……」

零落白夜に光翼を一度掻き消された銀の福音だが消されるのは翼全てではない。消失しなかつた翼でもつて一夏に牙を向く。反射的に雪片式型で受けようとする一夏だが振り切った刀を戻す動作は間に合うはずもなく、光翼は胸を薙ぐ間際。

銀の福音がピンボールのように弾かれていった。黄金色の光に包まれた紅椿の蹴りが砲弾の如し速さで炸裂していた。具現維持限界を迎える寸前だったはずでは？ そんな疑問は黄金色に輝く紅椿を見て喉元で止まった。

——ワンオフ・アビリティ単一仕様能力、絢爛舞踏。

エネルギー切れを起こしたはずの打鉄がモニターだけを起動させ、観測と解析と分析で目まぐるしく更新される画面。働きすぎだろと内心呟くが画面に写された結果に目を見張る。それはISの競技において、いや実戦を含めて、ずば抜けた能力であった。

「箒、それは……？」

「気にするな。今はやつを倒すぞ」

紅椿が白式に触れると同じ黄金色に包まれた。エネルギーが尽きていたはずの白式が携える雪片式型から弾けるように光刃が噴き出す。

——絢爛舞踏、その効果はシールドエネルギーの回復。零落白夜という絶対的必殺に相対するかのような擬似的無限。

弾かれ距離を取った銀の福音が幸いとばかりに一斉射撃による掃射を行う。空を白銀に染めるエネルギー弾は、更に蒼き輝きをもった刃に塗り替えられる。展開装甲を解放し速力に転換した紅椿が刀を投擲する。砲弾かと言わんばかりのそれを弾いた銀の福音の目前には雪片式型を振り上げた白式。

「これで、終わりだアアア！」

縦一文字。ビシリと銀の福音の兜に輝が入り、砕け散った。続くように翼が消失しアーマーを失う。ISスーツだけとなった操縦者の

女性が露となった。

あとは重力に従って落ちるよな。海面^{トボー}激突手前で慌てたシャルロットが再びキヤツチした。

なにせよ、ようやくこのIS暴走事件に終止符が打たれたのであったとき。

「あー、疲れたあ。ってか全身がクソ痛え……」

「桐也、苛つくのはわかるけど操縦者さんを小さく蹴るのはやめなよ」「ハツハツハ、そうだなこの人も被害者だろうしな」

だが断る。てめえの国のせいでおつちは散々な目に、邪魔すんなシャルロット！

31. 小さなナイト

首に三角巾を引っかけ腕を吊るしている。なんでって折れてたからだよ。

銀の福音の出力がゴリラ過ぎて絶対防御を貫いた衝撃でポツキリ。やけに腫れているとは思ってたんだが折れているとは思わなかった。

今までの人生で骨が折れたことなんぞなかったんだがIS学園入学してから既に二回だ。今度お払いでも頼みに行ってみるか、対象は俺じゃなくて学園にだけどな。無人機の襲撃受けるわ、レーゲンにVシステム仕込まれてるわ、臨海学校に来てまで暴走した銀の福音に襲撃されるわ。神頼みはしない方だが疫病神の存在はこの頃感じ始めている。

今回なんて正に骨折り損（物理）のくたびれ儲け。打鉄のダメージレベルが表示不可を吐き出していたので今は企業へと輸送されている。また壊したのかと愚痴られそうだが俺のせいじゃねえし。酷使したのは悪いと思うが、やっぱり銀の福音のせいで俺は悪くねえ。

俺は俺で左腕骨折、全身至るところに軽度熱傷。風呂に入ると痛い、てかこの臨海学校では安静指示が出た。お陰でもう温泉にすら入れず仕舞い。つかしいな、一夏の方が重症じゃなかったか？ なんてピンピンしてるのか。

かくして俺は最終日前日の夜だったのに温泉にもつかれず海岸沿いに佇んでいるのであった。なーんて目的がない訳じゃないんだけどどな。日付が変わる前にどうしてもやっておきたいことがあったわけ、背後から砂を踏みしめる音が近づいてきた。箒さんだろう、呼んだの俺だし。

「こんなところに呼び出して何の用だ？ 養生してないと皆が心配するぞ」

「寝てたいのは山々なんだがな。今日を逃すといけない用事があったんだよ」

一夏のやつが伝え忘れてやがったせいで用意するもんも出来てないんだけどカタチだけでも一応な。

「お誕生日おめでとーって」

「ああ、そのことか。ふむ、その言葉はありがたく受けとるが……なにもここでなくてもよかつただろう?」

「それがよくねえんだな。誕生日といえばプレゼントだからな。ほら、こういう満天の星空、月の輝く海辺ってロマンチックじゃない?」

「ふつ、この光景が贈り物など臭いことをいう奴だったか?」

「ねえよ」

思わず真顔になってしまった。気持ち悪くてさぶいぼがたった。腕をこすつて、ちくしょうギプス邪魔だ掻けねえ。

「まあ、なんだ。こういうシチュで好きな奴といれたら嬉しいもんじゃねえかなってお節介焼いてみた」

「ん……? それはどういう」

「んじや、ハッピーバースデー」

またザックザクと静かな浜辺に足音。その姿が朧気にしか見えないうちにとつとと退散する。

「あれっ箒? 桐也に呼ばれて来たんだけどな、アイツどこに行ったんだ……」

「そ、そういうことか。粹なことをしてくれる」

「何か言ったか? お、さっそくりボンつけてくれたんだな」

背後から聞こえる会話に半分満足、半分リア充死ねと思うのは決して俺がおかしい訳じゃない。一夏はあとで適当にギプスパンチしてやろう。正当な暴力? いいや、一方的な私怨だよ。まあ、今回だけは箒さんが喜んでくれたならそれでいいさ。キスでもチューでも接吻でも好きなだけしろや。

みじつたらしい思考を投げ捨てた頃、ほどよく旅館に到着する。

入り口の逆光で見にくいなんか仁王立ちしてるのがふたりいるな。ちんまいのがふたり、ツインテールとロングを風になびかせてるがやや毛が逆立っても見える。ツインテールが吼えた。

ちよつと膝が折れそうなほど疲れてるんだから勘弁してくれ。

「桐也ア! なに一夏と箒をいい雰囲気らせてんのよっ! 怪我してなきや蹴りの二、三発は入れてるわよ!」

「フッフウハア！ 怪我しててよかったあ！」

「ま、一発くらいいいわよね」

「よくねえよ、やめろ」

飛び掛かろうとした鈴がつんのめり、前傾した重心そのままに爪先で地を蹴つてその場でバク転着地。その回転で何者かに掴まれていた肩が解放され、勢いよく振り返った。俺からはバク転した鈴に目を丸くしているセシリアさんが見えていた。

「セシリア邪魔するんじゃないわよ！」

「怪我人に飛び掛かろうとしてたら、さすがに止めますわ。はあ、恐ろしい素晴らしい身体能力ですね」

「褒めてもなにも出ないわよ？」

「言葉の裏を探ってくださいまし」

「鈴が止められたか、ならば私だけでも」

「はい、ラウラもストップ。あんまり騒いだら織斑先生呼んじゃうよ？」

次は私だとばかりに前に出ようとしたラウラがシャルロットの言葉により一瞬で撃沈。よくやった、小さいくせにラウラと鈴は身体ポテンシャルが巨人並みだから今の状態じゃ敵わねえ……万全でも負けそうだけどな。

「それは反則だ！」

「反則とかないからふたりとも大人しくしようね。誕生日くらい多目に見てあげようよ」

「そういうシャルロットが実際の立場になると一番見逃しそうにないな」

「あーわかるわ」

「わかりますわ」

「どういう意味かな!？」

うっせー、声が身体と頭にぐわんぐわん響いてくる。ツインちゃんまいはツインぱつきんに任せて自室へと戻ろう。制止されたような気がせんでもないが耳を塞いで着信拒否きこえねー。

自室の襖を開ければ敷かれた布団が、ありがてえ。途端に筋肉が仕

事を放棄して布団に沈む。ぐへえ、疲れたもう眠い学校やめたい引きこもりてえ。心地よい柔らかな布団の感触駄目だこれ意識と身体を投げ出しておやすみなさい。

▽▽▽▽

月明かりに照らされた薄暗い崖の上。海を一望できる場所でそんな景色など完全無視^{スルー}して、空間投影画面を眺める女性がひとり。藍色のドレスは夜の暗かりに溶け込みそうに、けれど機械^{メカメカ}なウサ耳が月明かりに反射して彼女の存在を伝えていた。

「ん、今回は駄目駄目かな。望外の箒ちゃんの成長はナツシン。引き出した紅椿のスペックは50%程度。

ちようどいいから使ったけど、箒ちゃん的には気の乗らない戦闘だったからかな？ 必要なのはシチュエーション？ 我が妹ながら解りにくいや」

本来なら絢爛舞踏までで成長が止まる予定ではなかったとひとりごちる束の感情は読み取れない。ただ、エネルギーの回復というチートスキルで白式の欠陥を埋めるだけではない。

第四世代の象徴たる展開装甲。それを超近接戦闘特化まで昇華された上で白式と並び立ち、紅椿の無限と白式の零の互いが互いを唯一落とせるような関係になる、までが束の目標だった。まあ、これに關してはなったらカッコいいのに、くらいの気持ちで立てられた目標なので達成できなくても問題はまったくないが。

「身内最良で計算を高く見積もっちゃった束さんの失敗かな？ いくくんも第二形態移行したけど、燃費の悪さに振り回されてるしなー」崖から足をプラプラさせてブーブー唇を尖らせる。スカートははためいて、行儀が悪いことこの上ないが咎めるものは誰もいない。ここにいないのではなく、世界に誰も存在しな——ボスツの束の頭に軽い衝撃。

「いたっ……あ、ちーちゃん」

束が振り返れば、世界中でただひとり束に対等に意見できる存在の

千冬が立っていた。

「行儀が悪いし落ちても知らんぞ」

「へへっ、もしも落ちたらちーちゃんが助けてくれるでしょ？」

「ハッ、自力で上がってこい」

「相変わらず厳しいなあ……でも、よく見つけたね」

「親友だからな」

「それは理由になってないけど、唯一無二な親友ちーちゃんだしっか」

クスクスとおかしそうに笑う東は妹と接するときも他人を視界に入れるときとも違う顔をしていた。千冬はその少女のような笑い方を見るたび、いつもそうであればと思ったものだ。いつもそうでないからこそ、東は世界に適応しなかったわけだが。

「今回の件は誰の仕業だ」

「さあ？ 察しはつくしたぶん当たってるけど今のところは興味ないからね。東さんはノータッチなのだ」

「私の弟とお前の妹が危機に陥ったというのに薄情な奴だ」

「あんなの別に危機じゃなかったじゃん」

一度は瀕死ともいえる傷を負った一夏や絶体絶命ともいえる状況に陥った筈。だが、あの程度はなんてことないと言う。

「そう言えるのは、白式のコアが白騎士のものだからか？」

「お、さすがちーちゃん。気づいちちゃった？」

「一夏の傷が癒えたことでようやくな。大したものを使ってくれたな」

「うん、いつくんが使うからね……それくらいないと」

「そうだな、助かる」

「いーよ」

親友の弟だから。それ以外の含みが込められた意図を読み取った上で千冬は頷く。だから助かったではなく、助かると言う。

しみりしかけた空気を払拭するように東は別の話題を口にする。「でも強いて言えばさ、死にかけたのはちーちゃんの生徒のアレだけだよね……あー、駄目だ。顔も名前も出てこないや。シングルN.O.のコアの子に乗ってるやつ」

「出路桐也のことか」

「それ、聞いても覚える気はないけど。でもアレのISだけはちよつと興味あるかも」

「止める、お前が関心を向ければ録なことが……いや、待て。シングルN.O.のコアだど?」

「うん、初めは気づかなかつたけどね?」

というかそもそも欠片の興味もなかつたと束は言う。一夏と箒が逃げる時間を稼ぐためか、銀の福音と無謀にも戦い、落とされるところまで見ていた。それでも興味は湧かなかつた。むしろ、どうせ死に体になれど保護帰納でギリギリ生きてるだろうし、痛い目見てザマアと思つたくらいだ。

ただピンピンとして生還したことには首を傾げた。より正確にいうならば、打鉄が飛行可能な状態にまで回復して復帰したことが束の予測を超えていた。

「それで調べてみたらシングルN.O. だったよ。でもだからって機体の修復速度には何も関係ないから意味わかんない」

そこまで言い切つて千冬の顔をうかがえば頭上にはハテナマークが踊っていた。だよねえと内心で親友の人並み頭脳力に理解を示しつつ、ピツと指を立てて説明する。

「私が心血注いで作ったのがコアN.O. 1。その志みみたいなものの残りカスで作ったのがシングルN.O. のコア。あとの456個は惰性で量産だね。」

そして箒ちゃんの紅椿は今までの私の技術の結晶、つていいんだけど、ちーちゃんが押さえろつていうし押さええ気味。だけど本気のコア」

結論を言えばだ、最初と最後のコアが束にとつての傑作。シングルN.O. のコアは秀作、他はただの手癖で作つた凡作といつたところ。「でも別にシングルN.O. っつてISの^{ポテンシャル}自我が^{多少}ちよつと^{高い}強いかもしれないけど、何が変わるつてわけでもないんだよね。」

そのうえであの打鉄は機体の自己修復の速度が桁ひとつ違ったんだよ。ダメージDを越えてから数時間でパッケージまで直すとか

「ちーちゃん見たことある?」

「少なくとも私はないな。確かに異常な早さだ」

以前、タッグトーナメントでVTシステムにより大破したレーゲン。あれもダメージレベルで言えばCとDだった。そのレーゲンは自己修復ではなく予備の装甲を使うことで長期間の修理を避けていた。

しかし、銀の福音に破壊された打鉄はものの数時間で修復してしまった。

出路桐也が無事だったことや銀の福音が健在であったことで千冬は流してしまっていた事だが、こうして事象を比べれば異常性がハッキリとしてくる。

「それにあって第二形態移行もしてないし、ましてや単一仕様能力でもないんだよ」

「白騎士の、白式の生体回復機能みたいなものか」

「単一仕様能力じゃないって点ではそうだね。ならどうして発現したのかってのはわからないんだけど」

「ほう、お前がか?」

千冬はその言葉に驚きを示す。目の前の親友といえど手のひらで世界を転がしているようなイメージだったものだ。本人に伝えたところどんなイメージだよと珍しく真顔で突っ込まれましたが。

そもそもブラックボックスは束でもわかっていない、束にもわからないことはちやんと存在するのだ。それが極端に少ないだけで。

「そもそもアレがイレギュラーな存在なんだけど、あーあ、予想外な事態は続くって本当って始めて知ったよ。別に支障がある訳じゃないけどさー」

「そこまで関心を向けておいて名前を覚ええないのか?」

千冬の不意な質問にそっぽを向いてしまう束。その顔は割りど嫌悪感丸出し。他人に興味なしがデフォルトな束にしてはこれまた珍しい。

たっぷり数秒間黙りこくったあと、苦虫を噛み潰したような声音でボソボソと答えを口にする。

「……だってアイツ、出会い頭に私のパンツ見たし、つていうかなんか、普通に嫌い」

「はっ？ パンツ……ああ、あのとき、ふはっ、ハハハハハッ！ そうか、パンツを見られたから嫌いか！」

「パンツっていうか、それよりもなんとなく感覚的につていうか……ちーちゃん、どんだけ笑うのかな？」

腹を抱えて身を振って笑う千冬。下着程度を見れたくらい気にも止めないはずの親友が、それを乙女のように恥ずかしがり嫌悪を示す様が可笑しくて仕方なかった。

——無関心じゃない、嫌いという感情。一個人として認識してしまっているじゃないか。他人と同じ無関心を装うために名前を覚えてないが、覚えられないではなく覚える気がないと言っていたではないか。しつかりと嫌いになつてるじゃないか。

「くっ、ハハハッ！」

「ちーちゃん笑いすぎだろ！」

「だつてお前が、他人にパンツを見られくふっ」

「もおおお！ なんなんだよ！」

怒り心頭な束がぶおんぶおんずばんっ！ と拳を振るう音と千冬の愉快そうな笑い声が、静かな夜にしばしの間響き続けた。

▽▽▽▽

「ねえ、桐也。どうして拳握ってるのかな」

「あそこに銀の福音のパイロットがいるだろ？ 察して手を離せよ」

「察した結果、意地でも離せなくなったかな」

「おいおい勘違いすんなよ？ 俺のちっぽけな拳じゃアメリカは殴れ

ねえ……だからあの人に八つ当たりすんだよ」

「大当たりだよ、察した通りだよ。怪我してるんだからジツとしてほしいんだけど」

バスのなかでギャーギャーと騒ぐ出路を見て、千冬は軽い頭痛を覚える。昨夜の話を思い出すが、どうにもアレがなにか持つてるように

は見えなくて困る。

目の前の女にも困ったものだが……と視線を戻した先にはニコニコとしているナターシャ・ファイルス。銀の福音のパイロット、今回の暴走事件に巻き込まれたひとり。鮮やかな金髪は日差して輝き、タイトなスーツに身を包んでいるが、暴走した無理な稼働の反動か襟首などからは包帯が見え隠れしていた。

「あんな様子だが話がしたいのか？」

「もちろん、織斑くんも出路くんもなかなか話せない子達だし……なによりも私たちを止めるために頑張ってくれたからね」

「篠ノ之はいいのか？」

「博士に目をつけられる可能性はノーセンキュー」

そう言つてウインクするナターシャ。どこまで本当なのか怪しいものだ。

千冬はどうなつても知らんぞと言つてふたりをバスから呼び出す。一夏は怪我を負っている彼女に少し同情のような感情を交えながら、どう反応するか迷っているのが見てとれる。

桐也は鼻息荒くズカズカとナターシャに近寄り、拳の届く距離になった途端に手を彼女へ勢いよく突き出す。

「そらあー！」

「イツ——たあい!？」

全力のデコピンが放たれた。バチツンツ！ と小気味良いを通り越した普通に痛い音がした。ナターシャは涙目で額を押さえ、桐也も中指をギプスで押さええて若干の涙目。爪が、爪が割れると呟く声は間抜けそのものだった。

なにしてんだ、阿呆だという二種類の視線が突き刺さる。しかし、気にするつもりもなく、その余裕もない彼は指の痛みが引いてきた頃にナターシャへと向き直る。

「い、今のであんだ個人への恨みつらみはチャラにしてやる」

「いつつう……こんなのでもいいのかしら？ 貴方もその彼も死にかけたんでしょ？」

「それに関してはよくはない。銀の福音開発国は大嫌いになったし暴

走の原因作った奴は死ねって思う。けど、あんたへの恨みは大方八つ当たりだしな！　ほうら、織斑センセがメツチャ睨んでる怖い帰ってえ！」

やりたいこともやりきって、バスに逃げ込もうかと思う桐也だが残念。バスの入り口に仁王立ちした千冬を見て諦めた。桐也は一夏の後ろに回り掠れた口笛を吹き始める。

それに呆れつつも前に押された一夏がナターシャへと応対するこ
とになる。

「桐也がすみません……それで話ってなんででしょうか？」

「貴方たちみたいなお子供に迷惑をかけて、危ない目に合わせてごめん
なさいって言いたくて。それと、あの子を止めてくれてありがとうつ
て伝えたかったの」

「だってよ、桐也」

「やめろ、ここで俺に話題を振るなよ。八つ当たりした俺が恥ずかし
くて死にそうになる」

短慮にやってまったと額に手を当ててる桐也。その様子をバスか
ら眺めていた友人はため息を吐いていた。

ナターシャはそんな彼を見て楽しげに笑う。年相応なところのあ
る少年だと、それ故によく銀の福音を止めるために動いてくれたとも
思う。それを溢すと桐也は睥睨したような顔を隠しもしない。

「ちよいと譲れないものがあつたと言いますか……でも二度目があつ
たら俺はもう参加しませんよ、死にかけるなんて懲り懲りだ」

「それでも貴方は、きつと参加しそうね」

「はい？」

「それで織斑一夏くんはどうしてかしら？」

「皆を守るためです。まだまだ力不足って思い知らされましたけど」

千冬のような眩しさと、力と心が足りないが故の危うさを秘めた少
年だとナターシャは思う。真っ直ぐに進めばきつと姉のような存在
にだってなれるかもしれない。でも困難な道だろう。

話は終わったかと勝手に結論出してバスに戻ろうとしている少年
は、弱くても脆くても譲らない芯を持っていると見た。折れれど曲が

れど傷つけど、きつとどれだけ擦り切れても通そうとするものを持つている。

子供ふたりにして毛色の違う強さと危うさが有るなあと大人ナターシャは困り顔になる。ISと心を寄せているナターシャの個人的見解でしかないが、当たらずとも遠からずだろう。

そんな思考に区切りをつけて離れる少年を引き寄せ、近くの少年を抱え込む。

「ありがとう、小さなナイトさんたち」

「いえ、そんな、えっ?」

「ナイトとか柄じゃ、ね——うえ?」

少年ふたりは抱き寄せられ頬にキスをされた。それが今回の事件に尽力した報酬、それが今回の臨海学校のイベントの締めとなった。

「それじゃ、ばーい。また会いましょうね?」

「……は、あ」

「あ……え?」

固まった初な少年たちに手を振り、揺れるバスから離れた彼女は千冬に近づく。後ろには駆けていく少年と追いかける少女たち、踞る少年と囃し立てる少女たちとなんとも言えない顔の少女がいた。

「いい子たちね」

「私の生徒だから当然だ……お前はいらん火種を残してくれたがな」

「ごめんなさいね。頑張りようが愛らしくなっちゃって、つい」

「まったたく」

今年に入ってから増えた溜め息の数を更新させつつ千冬は頭を振る。

「今回の件で銀の福音はどうなる?」

「一時凍結になってしまったわ。本当なら一時なんかじゃなくて正真正銘凍結処理がされるところだったのだけれど、そこだけは不幸中の幸い」

銀の福音が初めて意思を表出化させたときされるISであるからか、それとも他の理由があるのか。事件の深刻さと被害の割りには軽いともいえる処分がくだされた。

とは言えどさすがに軍事的な開発の方向性は完全に途絶えた。また別のプランが組み立てられることになるだろう。

「私はまたあの子と空を飛べればいいから、いいんですけれどね？あの子を暴走させた奴らだけは許しません」

細まり鋭いものへと変貌した視線を受けとめつつも、千冬は少し顔を背ける。ナターシャのデコが赤くなり始めて吹きそうになったとかではない。

「私もな、銀の福音は正直どうなったところで関係はない。ただ私の生徒を危ない目に合わせた輩は許せんな」

「そうですか。ではまたいずれ」

「ああ、銀の福音と飛べるようになったら遊びにでも来るといいさ」

「ふふっ、本当に行きますよ？　って露骨に嫌そうな顔しないでくれませんか？　ねえちよつと」

「いつまで騒いでいる馬鹿ども！　帰りの支度をしろ！」

「ちよつとー！」

32. 夏休み一幕

陽射しは牙を剥く。サンサンと照りつけるのではなくギラギラと焼きつける。

なんてことはない夏休み、帰省とか旅行とかでいつもより少しばかりガランとした校舎。一夏は倉持技研に行っちまったし遊ぶ相手もおらず暇だ。シャルロットたちの買物誘いを受けときやよかつたかもしれん。でも買うもの選ぶまでが長いんだよなあ。ラウラもわかっていてかテンション低めだった。頑張れよ華の乙女。

宛もなく校舎を徘徊してもやることは見つからない。目につくのは事務のお爺さんに部活で走る生徒くらい。いつそのこと身体を動かそうかと思うも左腕に巻かれたギプスが却下と告げてくる。外れるまであと数日、それが長い。

窓の向こう、太陽を睨み付け目を押さえてから視線を下に向ければ、おつと見慣れた友人が外に。窓から身を乗り出して着地、上履きだけで見られてなきや怒られんしバレなきやよかろう。さも元から外にいたように自然体で声をかけて手を振る。

「あら、桐也さん。ごきげんよう、どうかなさいましたか？」

「おつす、セシリアさん、ごきげんよう。めっちゃ暇だ」

「……朝方にお買い物に誘われてませんでしたか？」

「断った結果がこれだ」

穏やかだった視線が質を変えた。これは俺にもわかるぞ、馬鹿を見る目だ。

かくいうセシリアさんは淡い水色基調のノースリーブのワンピース。見慣れない私服を纏って何処へ？

「期待しても何処へも連れていきませんわよ？ イギリス 本国へ帰郷ですわ」

「あー、帰郷かあ」

「そろそろ迎えが校門に来てる頃ですよ」

「ほーん、なら校門まで荷物持つの手伝うわ」

「あら、助かりますわ。気の利く殿方は素敵でしてよ？」

「褒めてもなにもでないけど増長するぜ？」

「それは人として不適ですわ」

少々手厳しい返しにあいつつも、迎えてここモノレール使わないと来れないのにわざわざ？ 執事とかメイドが来るのかよ。

そんな風に話のネタにしようとしてたら本当にメイドが来ていた。はっはあ、同じクラスにいて忘れがちだけどセシリアさんってかなりのお嬢様だったな。

そのメイドはスカートの裾を両手でつまみ、交差させた足を軽く曲げ挨拶してきた。うっわ本物のメイドだ。

「初めまして、私はチエルシーと申します。いつもお嬢様がお世話になっていきます」

「ご丁寧にも、出路桐也です。こちらこそ、いつもお世話になりっぱなしで。学友させてもらってます」

「あら、お嬢様のボーイフレンドではなかったのですね」

「ハッハッハ、振り返るのが怖くなる会話のパスボールは止めてもらえませんか？」

「別に気にしてませんわよ。チエルシーはいつもその調子ですもの」

適当にお辞儀して数歩下がる。明け透けなジョークに困ったとかそういうんじゃない。後ろのお嬢様が引け腰ですわよーとか言ってる気がしないでもないが気のせいだ。ウッフ、アハハと空っぽの笑顔で間を測る。

「それにしても歳の近そうなメイドさんだよな」

「ええ、古くからの付き合いですの」

セシリアさんに話題を振ることで測った間を埋める。

「これで執事だったらボーイミーツガールが始まってたかもしれないってわけだ」

「いつから私が女とお思いで？」

「えっ？」

「いえ、チエルシーは女ですわよ？」

メイド、あらためチエルシーさんはチロリと舌を出して微笑む。可愛いし、もうなんでもいいわ。認めるさ、現在割りと手玉に取られるよ。誰に向けるでもなく降参と両手を掲げヒラヒラ。

「道中、気を付けてな。お土産よろ」

「ええ、美味しい紅茶……はあまり味がわからないですわよね。菓子にしましょうか」

「お心遣い痛みいりまあーす！」

香りのよさしかわからないし、苦味のある紅茶は飲めるが味わえないので助かる。わざわざいい紅茶を砂糖ミルク増し増しで飲むのも悪いし。

荷物をチエルシーさんへ渡し、ふたりを見送ったあと。再びやって来た暇な時間。企業さんから返ってきた打鉄が時刻を知らせてくれるがまだ10時か……俺も外に出ようかね。たまには一人で気ままに徘徊したっていいだろ。

外出の申請書を手早に書き込み適当な教員を探す。たまに見かける生徒の会話は足早にすれ違うのであまり聞こえない。織斑センセか山田先生が一番話しかけやすいわけだが、この広い校舎でわざわざふたりに絞るのも手間だ。誰でもいいから遭遇しないかと不精な考えをしていると耳に鼻歌。この頃CMでよく流れているやつだが微妙に音が外れてる……これミスト先生だわ。

「はアい！ 出路くん！」

予想的中。いつもよりご機嫌で小躍りしそうなほど嬉しがつてる、愉快的な先生に適当に挨拶を返す。髪とバストを揺らして、やつぱりアメリカすげえわ。臨海学校から嫌いになったけどすげえわ。

「夏休み、満喫してるかしら？ 私は明日から連休よオ！ 超HAPPY！」

「俺は超暇なんで外出しようかって感じなんですけど」

「予定がないのね。なら、ちょびつと書類整理手伝ってくれないかしら？」

「いや、外出しようかと」

「お昼奢っちゃうわ！」

「出路桐也、微力ながら全力で手伝わさせていただきます」

「固い握手、安い契約がここに結ばれた。外出届は手荒にポケットに振り込んでおいた。」

——これは見ていいのか？ そんな資料が多分に含まれた書類を仕分けつつ雑談に興じる。ミスト先生は軽い調子でフレンドリーさがあるの、山田先生と同じく話しやすいんだよな。話しやすさのベクトルは別物なわけだが。親しみやすい先生と親しげな先生、ニュアンスの違いみたいな。

「んー、私がティーチャーになった理由ねえ……興味が向いたから？」
「軽くないすか。IS学園の教員ってそんな楽になれるもんでもなさげですけど」

「そうねっ、私が就職したなかでハードな難易度だったわ」
「就職したなかでって、職を転々としてたんですかね？」

ミスト先生がニマアとした笑みになる。指がひとつピンツとあがる。ピンピンピンツと次々上げられ口から羅列される単語はさまざまな職種。

「テストパイロット、アメリカ軍、OL、整備士エトセトラって感じで……今の私かしら？」

「え、なんでそんなに」

あり得ねえ、アメリカとかの感性だとあり得るのだろうか。てかまだ20代にしか見えないこの先生はどんなペースで職を変えてんだ。

「面白そうだったからと、飽きちゃったから辞めちゃったのよネ！
こんなキャラだから軍はスピーディーに3ヶ月でクビになったけど、他は辞めてばかりかしら」

よかった、そこが長かったら一身上の私怨でミスト先生を避けそうだった。

「けど、飽き性ってわりにISに関係するものが多いですよね」
「イエース、全部そうね。学園のティーチャーも飽きが来始めてたのだけれど、貴方たちが入学してからはそこそこ楽しいわ」

あ、この先生は真性の飽き性か。しかも騒ぎが好きなタイプだ。

けど、飽きる度に新しい職に就けてるってことは、よほど賢いかなにか持つてるんだろう。今も例のCMを鼻歌しつつ両手で別の書類分けてるあたり、先生の処理能力の高さが窺える。ただし鼻歌の音程は外れてる。

ほどほどの時間が経過して終了。早めの昼食のためミスト先生と食堂へ行き、日替わり定食を奢ってもらう。ついでにデザートのリールパスでプリンパフェを追加。

……今さらだが織斑センセに見つかるかと揃って叱られそうな気がしてきた。上級生の成績一覧の整理とか手伝わせないで欲しいし、昼飯くらいでホイホイ承ってる俺も大概だった。

「センキュー、出路くん。助かったわ！　ひとりじゃ飽きて仕事にならなかったのよー」

「いえいえ、飯っ……ミスト先生のためならこれくらい」

「本音が溢れてるわよ。まっ、お世辞に免じて追加でプレゼントフォー、ユウー！」

ピツと取り出されたのは、割引券。@クルーズと書かれたそれを手の内に握り込まされる。

「期限が今日までなんすけど」

「いつてらしやーい、外出届はもらっとくわネー！」

ひらひらと手と外出届が振られている。いつ抜き取られたのかサツパリで、しかも外に行つたからといってこの店に行くと決まったわけでもない。

行くけどな？　食うの好きだし甘味好きだし、なによりまた暇。ごめん、誘いに乗ればよかったシャルロット。

▽▽▽▽

「お客様、@クルーズへようこそ」

シャルロット・デュノアは不機嫌そのものであった。

今日は同室のラウラの部屋着および夏服が不足していることが問題視され買い物へと出掛けることになった。問題視といつてもラウラは気にしておらず、シャルロットが引きずってでも買い物に連れ出す勢いだったのがそれはさておき。

ラウラは一夏を誘おうとして連絡がつかずじまい。そんなラウラを慰めつつ、恐らく帰省することも出来ず暇そうにしてる少年が彼女

の思考を掠めた。誘ってみようかな？　と思い行動に移したところ。笑顔で見送られた。顔に面倒と書かれていた。今度は頬を膨らませるシャルロットをラウラがなだめる番だった。

それからはラウラを着せ替え人形のようにしつつも服を買い、昼食をしている最中にシャルロットのお節介センサーが発動。人手不足に悩む店長にお願いされるがままだに@クルーズという喫茶店でバイトをすることになった。ラウラはメイド服で、シャルロットは何故か燕尾服で。

その@クルーズに笑顔で見送った少年が客としてやってきた。白シャツにボーダーTシャツとラフな格好の彼、一瞬なんだこの美少年と現実逃避しかけたがシャルロットと正しく認識。なんとなく怒気も伝わっているがそこは出路桐也だった。

「お客様、一名様でしようか？」

「一名、案内よろ」

仕事中なら怒られねえだろとサラリと彼女の怒りを着拒し、問題を先伸ばしにした。

案内された先でメニューを選びオーダー。男性客なので女性、特にこの日人気であったラウラが注文を取りに行く。シャルロットが出ようとしたがラウラが先んじる。なんとなく今この友人を桐也のところへ行かせると面倒なことになりそうだと思ったのだ。

「注文を取りに来たぞ」

「ああ、ラウラは話し方ブレねえのな」

「これでも評判らしい」

「ハハッ、日本終わってんな」

コアな客の多い店だと思いなながらも注文を伝える。オーダーを取ったラウラは、しかし直ぐには去らず彼へと問いかける。同室の気のいい友人が怒っていることもその理由もわかっていたからだ。なにか力に成れはしないかと慣れぬお節介を焼こうとした。

それは愚直なほど真っ直ぐな彼女の、素直なふたりの友の助けになりたいという思いの現れ。

「外に出るならどうして誘いを断った」

「出る気はなかったけど気が変わった」

「なら仕方ないな」

しかし悲しいかな。彼女の感性は世間からのズレがあり、今回はその感性は桐也寄りであった。そしてラウラはその言葉をそのままシャルロットに伝えてしまう。

現在、桐也がどう理由付けて、説明する^{いいわけ}か考えている内容が、全てパーになった瞬間であった。

シャルロットは眉間を揉みほぐす。理解はできるけど納得できないといった様子。正直なところ、フランスにいた頃はデユノア社のかでのビジネスな人間関係ばかりだった。そこではこんな説明で流せることはなにひとつなかった。

だけれど、友人関係としてはどうなのか？ 気の置けない仲ならありなのかもしれない。そして、シャルロットとしては桐也はそういう仲の友人だと思ってもいる。

——なのはどうして、やきもきとしてしまうのだろうか？

理論はわかる
気持ちを追いつかない
理解はできる、でも納得できないのだ。

「ううー、難しいなあ」

「シャルロットちゃん！ 3番席と5〜7番席でオーダーお願いー！」

「店長、身体が足りません！」
「ファイー！」

なんて、仕事は気持ちの整理の暇もないほどに忙しかった。取り敢えず彼にはあとで文句の一つくらい言ってやろうとだけ決めてオーダーを取りに向かう。4番席にひとりで座る彼に舌を出してしまったのは、仕方がないことなのかもしれない。

そうして客足のピークが過ぎた頃。桐也がギプスをしているのになぜこんな食べにくいものを頼んだのかと、首を傾げながらもジャンボパフェとの格闘を終えたそのとき。手を使わず蹴りを入れられたドアがけたたましくドアが開かれた。

「全員動くんじゃねえ！」

屈強な男が四人、手にはそれぞれ銃器を持っていると素人目にも確

認できた。反射的にはなにが起きたか理解できなかった店内の従業員と客だが、僅かに遅れて入ってきた人間の風貌がどういった乱入者か認識が追いつく。

ただ、代表候補生のラウラと企業お抱えのテストパイロットたるシャルロットは状況を冷静に見極める。対象の体躯と武装と動き。それらを分析した上で動き出そうとし——鉄の壁が店内を風ぎ払った。

銃口が威嚇のため天井に向けられ、制止させるため客や店員へも向けられたときだ。威嚇を含む怒声が喉を突いたとき音声として形作られる前に、銃器という暴力はISという圧倒的暴力に打ち払われた。

テーブルと椅子を巻き込み塵を払うかのように強盗四人を容易く掃いた。

店内を再び沈黙が満ちた。若干三名を除き、彼らはなにが起こったのか理解しきれていない。

理解していたのは、やはり学園の生徒であるシャルロットとラウラ。そして事を巻き起こした張本人、出路桐也。

強盗の所持する武器にいち早く気づいたのはラウラとシャルロット。ただその脅威に対し躊躇わなかったのが桐也。銃口の先の対象を認めた直後、打鉄の浮游盾を限定顕現し、躊躇なく風ぎ払った。

数百キロの金属に衝突された強盗は意識をとどめているはずもなく、店内の装飾と同じく破壊されたオブジェとして路上で昏倒していた。

その一連の出来事に皆が呆気にとられていた。多くは何が起きたかもわからないまま。そしてシャルロットとラウラは彼の躊躇のなさに驚いていた。

代表候補生は不足の事態へ対応できるだけの技術を生身で習得させられている。だから今回のこれも恐らく対応はできた。彼がそれを知っているかと言われれば知らないだろう。

「……命の危機による超法的な措置に、たぶん適応するだろ、うん」彼の言い分は間違っていないわけではなく、通せなくもない理屈で

はある。ただ、そう考えての行動かと言えば明らかに違う。シャルロットは桐也が反射的にISを使ったと確信していた。

まあ、法的に通つても担任にすこぶる叱られるのではないかという想定に今さら辿り着いて震えてたりもするのだが。

それにしたつて、店内はちやぶ台を返したかのような惨状。後片付けは誰がするかと言えば公的機関の人間であり、もちろん散らかした人間は叱られるのがものの通りだった。

「シャルロット、私は教官に連絡を取る」

「うん、お願い」

「逃げ、逃げたら不味いよな……」

「その桐也はジツとしててね。ちよつ、こそこそしないで、本当に逃げたら駄目だからね！」

「ここでフリとかやるなシャルロット」

「フリじゃないよ、むしろフリーズだよ」

——それから身柄を一時預けられた桐也が解放されたのは、真夏の長い日照時間をもつてしても日暮れとなっていた。

引き取りに来た千冬は桐也を連れて署内から出る。

「出路、お前は案外思い切りがよすぎる節があるな」

「ですかね。俺としては危機的状況と判断して防衛しただけなんですけど。自身の生命の危険が降りかかった際には、ISの例外的使用の許可はされていますし」

「そうだな。だが今回はボーデヴィツヒやデユノアが居合わせていただろう。ならば、ISがなくとも十二分に対処できたはずだ」

「俺にとつての危機を判断するのは、俺でしょう？　なら誰がそこにいたとしても関係ない。そも、俺はその誰かが対処できる力を有していたも知らないわけで」

「つまりお前にとつての危機であることには変わりないと……はあ、相変わらず口は達者だな」

もういいから先に帰っておけと背中を押し出す。お土産買ってから帰りますと敬礼した桐也は走り去っていった。直帰しろよと言おうとしたが先回りされた形になってしまった千冬であった。

——店内に備え付けられた監視カメラを見返せばわかる。

たしかに銃口は桐也へと向けられている。だが、どうしても千冬は違和感を拭えなかった。どこかが噛み合っていないと、喉に引っ掛かった小骨の正体を探す。

そして、その正体がわかった。

「……そういうことか」

違和感の原因は桐也の視線の先だ。彼が見ているのは自分に向けられた銃口ではなく、他人に向けられたものを見ていた。その先にいるのは従業員、より正しくはその日たまたま臨時のバイトとして働いていた少女——鉄の盾が強盗を吹き飛ばした。力加減はされているが手心も手加減もない。

千冬は吐きそうになった溜め息を飲み込み眉間を揉みほぐす。今まで見えてこなかった出路桐也の人物像がようやく見え始めてきたといったところか。

わかりやすい子供でガキらしさが強くて、口が達者で物事を煙に巻くことが得意。努力が嫌いというくせに、ふとした切っ掛けさえあれば努力を惜しまない。

わかりやすく見えていたのはそういうところ。けれど、それだけじゃなかった。それだけのはずがなかった。

「まだ15歳の子供ということを忘れそうになっていたな……」

わかっていたつもりだが、所詮はつもりだったと今度こそ溜め息を吐いてしまう。

——どうも意識的にか無意識的にか隠して、なにかを抱えていそう

だ。
千冬にはおおよその予想がつくものの、二の轍を踏まないように確定せずにおく。どこかで発散させてやるかと思うが、思ったがそこで問題がひとつ。

出路桐也が割りといつも自由にしている印象が強いせいでもう既に発散してそうなイメージしかない。

「いや、待て違う。なにか抱えてるはず……なんだが、くそっ、わからなくなってきたぞ！」

まあ、つまるところ。出路桐也は手のかかる生徒のひとりということであった。

その晩、山田真耶が先輩に飲みに誘われたのはまた別の話。

▽▽▽▽

「散々な目にあつた……学園に入ってからトラブル率が跳ね上がったんじゃないか。これ呪われてんじゃないか」

「大変だったな」

「ああ、陳腐なドラマみたいな展開で思わずちやぶ台返しちまつた」

実際はちやぶ台じゃなくて店内のものを諸々だけどな。賠償はちやんとされるらしくて一安心。実は支払い能力もないのについて反射的にやつてしまつて、結構な冷や汗をかいていたのは秘密だ。

さて、大きな問題は片付いたんだが他の諸問題が残ってるんだよね。シャルロットのこととかシャルロットのこととか、あとシャルロットのこととか。なんでああも鉢合わせてしまうのか。

「話を聞くかぎり、割りと桐也が悪いと思うぞ？ いや、駄目なわけじゃないけど相手の心象として良くない気がする」

「なんでこういうときだけ察しよく客観的に判断するんだ」
「こういうときだけってどういうことだよ」

素直に謝るのが一番なのは知ってるけどな。そのために浅はかにもお土産を買ったわけだし。誠意と書いてワイロと読む。

「晩飯行くときに一緒に謝ってきたらどうだ？俺もお土産があるしついでに行くしき。それに桐也待っててお腹ペコペコだし早く済ませてもらおうぜ」

「はあ、そうすつかね。てか待たせてすまん」

「気にしなくていいぞ。男ひとりで食うのが嫌だったつてのもあるし」

「それはわからんでもない」

なんて駄弁りながら食堂の前にシャルロットとラウラの部屋へ。ふたりが同室で手間が省けたとか思っていたりなんてしない。

「シャルロットいるかー？」

ノックと一緒に声をかけるとドツタンバツタンと音が聞こえた。何してるんだかと疑問に思うが直ぐに解決。なかからラウラが扉を開けてくれた。何故か猫の着ぐるみパジャマを着ていたが似合ってるし特に言うことはない。けど、シャルロットが見当たらねえ。

「おお、桐也に嫁ではないか」

「お、黒猫のパジャマか。似合ってるぞ」

「そ、そうか。ふふん、そうだろう。なにしろシャルロットが選んだのだからな」

一夏とラウラの会話を聞きつつ、不躰ながらチラリと部屋を覗くももうひとりが見つからん。あ、いやたぶんいるわ。なんか布団膨らんでるわ。

「ラウラ、あれなんだ？」

「シャルロットだな。お前たちが来るまで私ににやんにやん言わせていたのだが、何故か急に布団にくるまってしまったな」

「そうかそうか、着替え中とかじゃなかったんならよかった」

「ハハッ、心配せずともそういう場面に出会うのは嫁くらいのもものだろう」

「なんでそこで俺なんだよ!？」

なんでもだよ。しかし、困った。普段なら布団をひつpegがしている。それで猫パジャマを着てたら、不意に来た訪問者にテンパってるであろうシャルロットを拝むんだが。一応、謝りに来たのでなんか怒らせそうなことをするのは気が引ける。いや、めっちゃやりてえ……。

「桐也、なんで苦渋の決断を強いられてるみたいなの顔してるんだよ」

「いいや、やったれ」

「葛藤からの決断が軽い!」

バサア! とはいかなくなった。なかで必死に抵抗されてるのかグイグイ引っ張る形になる。ギプスのせいで片手しか使えず力が拮抗して余計に取りにくい。

「シャルロット、謝りに来たから顔合わせて話そうぜー」

「声が、声が笑ってるよ!? 謝りに来た態度じゃないよね!」

「土産もあるし出てこいよ。ほら、なんかよく知らない閉店間際の屋台のクレープ屋で売ってた菓子だ」

「お土産のチョコイスが荒い! って、それって公園で売ってたやつ?」
城址公園つてところのだな、そう言い切らないうちにシャルロットは布団から出てきた——顔だけ。気持ち悪っ。

「カオナシかよ。どんなパジャマよりよっぽど面白いことになってんぞ」

「し、知らない!」

「まー、いいけどな。ほれ、土産だ」

「わっと……!」

「ラウラもほいっと。誘いを断って悪かったな。あとせつかくの休日を台無しにしちまった」

投げた菓子をふたりが受け取ったのを見て謝る。

断りたいときは断るので前半は割りと誠意がないものの、後半には誠意を込めておいた。厄介ごとを引き起こした自覚はしつかりとあるからな。

「まあ、お店でのことは仕方がないし……いいよ、このお菓子でチャラにしてあげる。その公園つて、ちょうどラウラと行こうとしていたところなんだ」

「そりゃなんとも奇遇で。ま、許してくれるなら助かる。俺も今度からは誘いを断ったあとに出るときには一声かけるように善処するわ」

「まず誘いを受けようよ」

「ええ……シャルロット買い物長そうだし」

「甲斐性なし。そんなんじゃないよ?」

「おう止めろ、俺が傷つくだろ」

シャルロットの正論に思わず膝をつきそうになる。しかし、キャッチしたときに布団がかなりズレてんだが、黙つとくか。なるほど白猫パジャマな。

黙っていても視線で気づかれたか、慌てて布団をかぶり直したシャルロットが睨んでくるが遅い遅い。にやおんと小声で言ったら枕を

投げられた。

後ろではラウラが既にクッキーをパクついていた。

「ふむ、このキイチゴとブルーベリーのクッキーはなかなか美味しくいな」

「もう食べてるの!? って木苺とブルーベリー……あ」

「そうだ、クッキーで思い出したんだが俺もお土産があるんだった。ほら、@クルーズってところでもらってきたクッキーなんだけど、チヨイスが被っちゃったな」

「@クルーズ、だと……?」

「ミックスベリーってもしか……え?」

「なん、だと……?」

「え、どうしたんだよ? そーいや店に行ったとき結構な惨状で——」
なんともニアミスをしていた夏休みの一日であった。

33. 彼らの家は。

アリーナの壁と擦れて火花を撒き散らす。ブレーキがイカれた自動車、車体を壁に擦らせて無理矢理減速するかのように装甲を擦らせての減速。

機体制御がすっぽ抜けたときには下手にブレーキ踏むとつんのめると学んだ。飛び出した枝豆みたいに予期せぬ方向へ幾度となく吹き飛んでようやく学んだともいう。

加速が落ち着いた頃によく遠心力から解放されて一息。

「飛燕の扱いはまだまだか」

臨海学校で企業から送られた高速機動パッケージ。それをなんとかモノにしようとしている今日この頃。複雑なものの覚えの悪さは相変わらず。操縦ならそこそこと自負してるんだが超高速飛行下で他の、例えば銃を構えて狙って撃つみたいなの並行作業したらあらぬ方向へ。

夏休みも折り返し、新学期を思えばため息が増すのも仕方ない。この調子じゃあ間に合うか微妙過ぎる。

未だに制御がすっぽ抜けて壁に衝突し、シールドに弾かれながらブレーキもままならず。加速が切れるまで装甲を大根おろしよろしくしながら突き進んでしまう現状に頭が痛い。

うんにや、進むなら壁に擦れててもワンチャン……あるか？ 機動はともかく軌道はどうせ外壁に沿ったものになるわけで、ちよつと考えてみるか。

「お、いたいた。桐也ー！」

「んあ？ どうした一夏」

碌でもないことへと思考が傾き始めたところに声をかけられた。アリーナ出入口から一夏が手を振っているのが見える。少しばかり熔解しかけている右腕の装甲を解除しつつ、ふよふよと漂いながら近づく。何で消すかって、恥ずかしいからに決まってるんだろ。苦笑してるのを見るにバレてそうなんだが。

まあ、一夏と駄弁つて再展開したところには自動修復が終わってるだ

ろうし、指摘されても知らぬ存ぜぬしてやろう。

なんて恥隠しの算段は意味がなかったようで。一夏はちよつとした誘いに來たらしい。

「明日、家の掃除に帰ろうと思うんだけど桐也も來ないか？」

「もしかしなくても一夏の家にか」

「え、嫌だったか？」

全くそんなことはない。友だちの家に行くってのは久々だった思っただけの話。

「あ、でも掃除も手伝えってことだよな」

「バレたか。まあ、ご飯は振る舞うしどうだ？」

「余裕で行くわ」

「桐也つてたまにチョロいよな」

「いつだつて俺はチョロQだ」

「十円差し込んだら走るのか」

「現金な奴つてことだよ」

素直に上手いこと言うなと笑う一夏。

たぶん、いつの間にか煽り力の上がったフランス娘あたりは、つまらない男つてことなんだね！”とか言いそうだとなんとなく思った。勝手に想像しただけなんだが腹立つな。

しかし、つい最近も某アメリカン教師に昼飯を餌に何度も書類整理を任されたりしてたことも事実。

そこで覗い、もとい目に入ってしまった資料によると学園のセキュリティの向上が急務だとか、一学年に集まりすぎた専用機持ちをどう管理していくかだとか。頭の痛くなる内容ばかりで、間違いなく俺が見たら駄目そうなやつだった。そろそろあの先生、軍に続いてクビになるんじゃないかな。

一旦、一夏と別れて手早く着替える。男の着替えなんて早いものでものの10分たらずで合流。これが外出用に着替える女になると下手すりゃ三倍かかるのが不思議でならない。

ラウラなら数分で出てくるんだが、軍勤め特有の早着替えとどこか抜けてるのが相乗してるんだろ。近頃はシャルロットが引き留めて

おめかしを叩き込んでくると面倒臭テレそうにしてた。

もつとも、ここに来る前の友人も早かったが。

『ウチは元がええからな。けど荒野に花咲かせるのはそりや時間かかるやろ』

とか化粧に長めのタイムロスがある他の女を平然と敵に回すこと言う奴だった駄目だった。自己卑下しない自重しない高慢ちぎの高性能、あいつも参考にならんわ。俺が奇をてらうタイプならアイツは正面からブツ壊す系で基本負け、あー思い出すだけでもなんか腹立つうー！

「なんだか形容しがたい顔になってるぞ」

「向ける矛先のない怒りが表情筋を突き動かしたんだよ」

「そんなに嫌なこと、というか嫌いなもの思い出してたのか」

「いや、嫌いじゃない。イヤな奴で顔を合わせたら喧嘩はするんだが嫌いじゃねえ腐れ縁みたいな……」

「あー、親友って書いてライバル的なやつか」

違うんだが近い。なにかといがみ合ってたつもりなんだが、たつっん曰く根本的なものが近いとか。

なんとなしに、胸ポケットに押し込んだ御守りへと無意識に触れる。臨海学校で渡されたそれは、やけに重いあたり中身が碌でもなさげ。しかし、御守りを開ける気にもならずそのまま身に付けるに落ち着いた。

まあ、目に見えないものを信じてなさげなみーちゃんとかはガバツと開けて、中身入れ換えたりしてんだろうけどな、何入れやがったんだ。

「桐也、行きすぎ行きすぎ。ここだ、着いたぞ」

「おっと、ここが一夏の家か」

思わず普通に通りすぎそうになった。それほどまでに普通の家。世界最強と謳われるブリュンヒルデが住んでるとか、ISを動かせるその弟が住んでるとか一見して全くわからない平々凡々な住宅だった。

「なんだ、屋敷とか城みたいな家じゃないのかよ」

「どっからそんな発想になったんだ……変なこと言っていないで上がってくれよ」

「あいあい、お邪魔するぞ」

気軽にひよいと玄関口を跨いで——思わず足を止めてしまった。なんてことはない、一夏の家が余りにも普通すぎたら、不意に“家”って雰囲気懐かしくなっただけ。学園寮って高級ホテルみたいな感じだし、恥ずかしながらホームシックちつくなあれに見舞われた。ついさつきまでバカな親友たちのことなんざ思い出してたもんだから余計にだ。

小さくため息を吐いて、一瞬よぎった感傷に蓋をしてさよならバイバイ。招かれるままに靴を脱ぎ捨てて、いざ織斑家。

リビングと呼ぶよりは、床は畳であり居間。どことなく落ち着かないのは学園で見かけない畳だからか、他人の家だからなのか。

しかし、掃除をしに言って言ってた割りには綺麗な状態である。なんだかんだ掃除しに帰ってきてたんだろう。所々にうっすらと埃が積もっている程度、俺はいったい何をしに来たんだ。飯を食いに来たんだったか。

「桐也は窓拭きをしてくれるか？」

「あいよ」

どこからともなく持ち出された雑巾を受け取り、窓を拭き始める。ほどなくして、一夏は風呂のピンク汚れを滅殺してくると劇画タッチの顔で居間を後にした。

さて、こうなると暇だ。黙々と窓を拭いてるだけでは楽しくもなんともないに決まっている。取れた窓の汚れが心にそのまま転換されるレベル。基本的に学校の草刈りとかと友人と駄弁って真面目にやらなかったしなあ。

よって、思考が迷走し始めるのは割りといつも通りである意味当然の帰結であった。

「……量子変換したら汚れて一瞬で取れんじゃねえかな」

強いて言えば、中指の指輪が目に入ったのが悪かった。打鉄が自己修復を行う際に汚れもある程度は落ちることを思い出したのは尚悪

かった。

窓枠が織斑家から瞬くほどの間だけ消失し——やつべうわマジかよ——光の粒子が霧散する。目蓋を開けたときそこには新品同然に綺麗な窓が存在していた。

「……………」

やってやったぜとやってしまった感が半端ない、なんなら若干後者が優位。量子変換理論とかその応用とか収納容量に色々な浅い理論が脳裏によぎるも出来てしまったものは仕方ない。

……もしかしてISの武装のようにロックされていない無機物ならば、拡張領域に収まる容量のものならば何でも量子変換出来るのでは？ しようもないようでエゲつない。ぶつちやけ目視可能な範囲ならいくらでも量子変換出来る気すらしてきた。

絶対防衛とか抜いても世界最高峰の兵器ってのは領ける。そんなことを掃除中に考える自分の思考には領けない。

「そっちは終わったか……ってメチャクチャ綺麗になってるな!？」

「ハハハッ、本気でやればこんなもんだぜ」

「本当に新品同然に綺麗だな。どうやつ、なんで顔を合わせないんだよ」

禁則事項だからに決まってるんだろ。主にISの扱的に、学園の外での無断使用禁止だったわ。

その後、のらりくらりというよりは全力で話題を逸らして昼食とまった。

適当に二人分の食材を近所で買い出し、一夏製作の昼飯の冷やし中華を啜りながら話題は夏休み前半の話へと移った。

「そーいや箒に誘われて祭りに行ってたんだよ」

「知ってた。タッグトーナメントのときのやつだろ？ 箒さんが勝つたら二人で出掛けるってやつ」

「それぞれ、それで箒の叔母さんのところの祭りに行ってたな」

——そうか、箒さんもしか保護プログラムは適用されてたはずなんだがな。叔母には会えるのか、俺にや関係ないけど。うちって血縁関係が片方の祖父母除けばさっぱりだからな。他人からどう思わ

れても自分が納得できれば、って公言してるあたり何があったかは察してるつもり。

そもそも一夏も箒さんも叔父叔母どころか二親等の姉に会えているじゃねえか。俺にも兄弟がいれば一縷の望みくらい、ねえな知ってた。少なくとも俺の存在してない兄弟には世界最強かIS同等の発明でもしてもらわねえといけな。遺伝子的にねえーわー。

しかし、一夏もせつかく二人で行った先の祭りで友人の妹と出会うつてもねえわ。なんのためにタッグトーナメント優勝したと思ってるんだよ。俺はデザートフリーパスのためだよ。

そういうところも含めて一夏は鉄壁なんだよな。なんでギャルゲみたいな環境にいるのに攻略される側なんだよコイツ。

「今度はさ、桐也も一緒に行かないか？」

「いいけど、他の誰かに誘われてから俺を誘うなよ」

「なんでだよ」

恋路の邪魔をするつもりはない、以前の問題で。人の心なんて読めないもので、誰も彼もが皆と一緒に楽しいわけじゃない。

「他人と他人の交遊関係なんざ早々わかるもんでもねえし、俺はあんまり無闇やたらと誘いをかけるのは好きじゃねえかな」

「たまに桐也ってシビアというかストイックというか」

「これは俺だけじゃないと思うぞ。いやいやマジだって、俺がおかしいみたいなのはやめろー！」

俺だけじゃないよな？ え、俺の器がなんか狭いだけかこれ!?

そんなコミュニケーションの自信のなさから不安が湧いてきた頃に通信端末が震えた。残った中華麺を掻き込んで啜りきってから通話ボタンを押す。

「電話終えてから食べればいいのに……」

麺が伸びるのはいいが温くなった冷やし中華とか嫌なんだよ。

「あいよー、どちらさん？」

『もしもしシャルロットだけど、今どこにいるかな？』

「世界最強の産地」

『……えーと、一夏の家かな』

「正解、なにか用事でもあったか？」

正面の一夏がなんとも言えない顔をしている。なにかあったのだろうがサツパリ皆目見当つかないぜ。

『ううん、今度こそ一緒に買い物とかどうかなくて思ったんだけど、それならいいや。男の子だけで楽しんでるならお邪魔しても悪——』

シャルロットの言葉を遮るようにインターホンが鳴った。玄関に向かった一夏、ほどなくしてドタバタと鈴が上がってきた。

「たつた今男だけじゃなくなつたわ。鈴が……あー、箒さんにセシリアさんも上がってきたな。どういう面子だよ」

『アハハ、篠ノ之さんたちが……ちよつらウ』

『桐也よ！ 嫁の住所を教えろ！ 今から乗り込む！』

シャルロットの会話から織斑家に恋敵たちが潜入したことを察したらしい。ラウラの声が電話口から鼓膜を叩いた。

念のためと一夏に確認したら苦笑しつつも快諾。どうせなら皆一緒の方が楽しいだろうとは如何にもらしい。俺は余計に混沌とする気しかない。

「あー、いいらしいがシャルロットとの買い物はいいのか？」

『今回は私が誘われてたわけじゃないぞ？ たまたま隣にいただけで……しかし、シャルロットだけ残していくのも悪いか』

電話口を押さえたのか向こうでボソボソと話す声が聞こえるも詳細まではわからず。次に聞こえた声は再びシャルロットのものだった。

『そういうわけで一夏の家にお邪魔することになったよ』

『そういうわけだな、わかった。一夏には伝えとくわ』

『えっ、どういうわけか聞かな』

用件は終わったので通話終了のボタンを押す。なんか言つてたよ
うな気がしないでもないが気のせいだろ。

ポケットへ通信機器をしまいながら一番近くにいる人物へ、失礼を
承知で気になったことを尋ねる。

「こう言っちゃなんだがセシリアさんが来るとは意外だわ」

「わたくしもそう思いますわ。鈴さんに声をかけられあれよあれよという間に手を引かれて、気づけば一夏さんのお宅に」

「なにより、別に暇そうにしてたんだからいいじゃないのよー」

「ええ、別にお誘いを受けたことはむしろ喜ばしいというのが本音ですし、学友との仲を深めるいい機会とは思いますが。けれど、なんの آپもなく押し掛けるのは」

「固く考えすぎだろう。友人の家を訪ねるのなど呼び鈴ひとつ鳴らせば充分……一夏、私も小腹が空いた」

台詞半ばで放棄し、箒さんが空になった器を横目に暗に冷やし中華ヨコセと要求。さすがのマイペースだが幼馴染みの一夏は慣れたものと言わんばかりに一皿用意。

「友人といえどこここまで遠慮ないのも、日本はこうですか？」

「人による。遠慮がなくてもよかったり、出会えば喧嘩するのに縁が続いたり、お国柄ってより人によりけりだな」

「なに話してるのよ。そんなことよりゲームしましよ！ 色々持ってきたのよ」

「お、ボードゲーム。うっわ、これクソ懐かしい」

冷やし中華を啜る横でボードゲームが開始された。特にルールに疎いセシリアさんに説明しつつ、けれど優秀な脳味噌を搭載しているからか飲み込みは早く対等に接戦して。

食後の箒さんが混ざろうとしたあたりでインターホンの音。シャルロットたちだろうという予想は当たっており、一夏が玄関に出てから程なくして上がってきた。

「お邪魔しまーす」

「シャルロット、通話切って悪かった」

居間にやって来たなり直ぐ様、シャルロットに謝る。目をぱちくりとさせてちよつとビツクリ顔になった。

「あれっ。らしくなく素直に、もしかして間違っって切っちゃったとか？」

「いや、先に謝つとけば、んなに怒られねえかなって」

「思った以上に駄目な理由だった!？」

「ほら、反省してんだし水に流してやろうぜ」

「それを言うのは間違っても桐也じゃない！」

いつものようにプリプリ怒るシャルロットにケラケラ笑う。こういう会話をしていると、もしかしたら会話で今一番バカできる相手かもしれないと感じる。バカな遊びをやれるのは一夏なんだが、なんとなく違う。

「よし、この人数なら神経衰弱やろうぜ。わかりやすいしな」

「神経、衰弱……？」

「全部裏を向けたトランプで二枚ずつ捲る。それでペアにならないければ裏に戻す。ペアが出来たら自分の得点になる、って感じか」

簡単なルール説明。単純明快なもののため理解に困ることもない。適当に裏向けたトランプをぶちまけて準備は整った。

そして終了。手元には誰よりも札があった。

「フハハハ！ 勝った！」

「あんた、なんでノーミスで回収できてるのよ！」

「この人数なら一周で相当枚数捲れるわけだ。暗記力だけはいいからなあー！」

「そうだった……！ 奇抜なこと思いつくこと多いから忘れがちだったけど、桐也って記憶力もよかつたんだ……！」

「あの顔、腹が立ちますわね」

悔しがる面子に「へらっ」としてドヤる。普段勝てない相手にゲームとはいえ勝てるのは気持ちがいいもんだ。

「おめでどう桐也。今度はスピードしようよ？」

スピードって台札に続くカードを自分の場から出して行って、手札を早く全て出した人が勝ちのゲームだったか。ほとんどやった覚えがないな……ふむ。

「いや、二人でやるものより皆でやるやつの方がよくないか？」

「一回でいいからさ」

あの手この手で躲そうとするがニコニコしてるくせに能面のような圧力に負けた。

余裕で負けたよね。砂漠の呼び水みたいな戦法取るような、

ラビッドスイツチ
高速切替使う奴に勝てるか！

にへらつとしてるのが腹立つ。いつからこんな煽る風になったのやら。そしてなにげに負けず嫌いだよ。

「結構ね、知らなかった？」

「知らなかったな。言つとくけど、転入した当初からだいぶ変わってるぞ」

「そうかな。私はあんまりわからないんだけど」

「たしかに。なんというか遠慮より地が見えてきた感じはするな」

「距離が近づいた気はするわね」

「私はよくわからん」

思い思いにシャルロットについて口にだし、当の本人が少し恥ずかしそうな反応をする。それを微笑ましく眺めていた数人がふと思いついたように口を揃えた。

「「あとあざとい」」

「なんでそこハモるかなあ!？」

シャルロットの絶叫が織斑家に響いた。

▽▽▽▽

「晩飯は皆で一品ずつとか……インスタント味噌汁ってどう思うよ？」

昼間に食材の買い出しはしたわけだから予想外に予定外の来客が来たお陰で普通に食材が足りず。流れて皆で近所のスーパーまで来ることになった。

だけならよかったんだが、どう話がこじれたのか一人一品、晩飯で振る舞おうって流れになった。誰も彼もが料理できると思うなよ。

「便利だけど駄目だからね？ そんなに料理できないの？」

「出来ねえよ。高校一年の男子っていったらそんなもんだと思うんだが、普通に母さんが作ってくれてそれを食ってたし。一夏がおかしいだけだったの」

それが余りにも当たり前だったから自炊なんて全然だ。学園に来

てからも食堂ばっかり、料理なんてさっぱりだ。ある日、味噌汁作ろうとして出汁も取らずに味噌水が出来たこともある。

「そっか……なんかごめんね」

「どんな意味で謝ったかわからんが気にすんな。シャルロットはどうなんだよ」

「私も小さい頃はお母さんが作ってくれてただけど、亡くなってからは結構、自分で作ってたよ」

実は料理って得意な方なんだと朗らかに笑みを浮かべる。気を使われたんだろうか。シャルロットのことだし、使われたんだろうな。なら遠慮なく乗って流れを変えよう。

「じゃ、一品ずつ交換するか。俺は黒い謎の物体Xを譲るわ」

「それ焦がす気満々だよ。せめて焦がさない努力はしようよ」

「抑えろ打鉄……！ この卵は、半熟で焼くぞ……ッ！」

「打鉄使ったら焦げるどころか蒸発するから」

「真顔で言うなよ」

「桐也なら火力が足りないとか言ってる勢いで本当に打鉄出しそ、なんで顔を合わさないのかな」

おっとデジャヴですよ。

つい半日前にもう使ってしまったとか言えるわけねえ。

「そういうシャルロットはなにを作るんだ？」

「んー、近頃練習してる和食を作ってみたいかなあ」

「フランスパンとかどうだ？ 郷土料理だろ」

「当たってるように微妙に違うんだけど、カテゴライズとかバケットだけじゃないっていうか」

手をわきわきさせつつ、フワツとしたフランスパンについての説明をされるがよくわからん。長くて硬いのだけがそういう呼称ってわけじゃないことだけ伝わった。

「珍しく抽象的な……なあ、セシリアさんがとことん赤い食材と調味料をカゴに入れてただけど」

「なに言って……うわあ」

止めようとするもレジにサツと向かわれた。口をつぐみモサツと

した顔になった俺とシャルロットは、無言で手早く食材を選び……おい、シャルロットその手を放せよ。インスタント味噌汁でいいだろ無言で首を横に振るなよ。俺のこととか放っておいてセシリアさんのところ行けよ……おい、沈痛な面持ちで首を横に振るなよ。晩飯が恐くなんだろ！

「ぐふっ!？」

「かはっ……」

一夏が床に沈んで箒さんが片膝をついて舌と喉が受けたダメージに震えている。調理過程を見ていたのに勧められ断れず食した一夏と、他人の調理を特に見ることなく淡々と自前の調理を仕上げた箒さんが摘まんで犠牲になった。そう、セシリアさんの料理の犠牲にな。

——セシリアさんの苦手発見。料理だ。整えるのは色彩じゃねえよ、俺でもわかる、味だよ。

食品サンプル並みに色が綺麗なだけ質が悪い。興味本意で舌に少量乗せた鈴とラウラがのたうち回る横で気まずそうなセシリアさん。なにやっつてんだよ。

「……いえ、わたくしの料理が不味いことは知っていたんです。ただ、一人一品と言われると退くに退けず……全力で色を整えたのですが」「理論尽くしのISはどこいったんだよ」

「たまにははっちゃけたい年頃ですよ」

「はっちゃけるとどこか爆発だ。味覚の爆発、芸術の域だつての」
まさに飯テロ、つていうか爆破テロ。フツと愁いだ様子で頬杖をうついても、この部屋の惨状はなにも変わらんぞセシリアさんよ。

一夏と箒さんが復帰するまで夕食は中断。

チエケラじやない透明のラップをかけつつ……ふと思ったんだが、このセシリア産の一品もとい逸品の前には俺の料理もそれなりになるのではなからうか。そう思っつて卵焼き、を作ろうとして結果的にスクランブルエッグになったものをシャルロットに差し出してみる。モグモグゴクンと咀嚼嚥下を済ませて簡素に一言。

「んー、普通」

ま、そんなもんだよな。

「セシリアさんの食ってからもう一回いってみようぜ？ マジで旨くなるかもしれん」

「わたくしの料理みたいなものを引き合いに出して恥ずかしくないのですか？」

「料理みたいなものって開き直ったな!？」

——なんとも意外なものを見た夏の一幕。

▽▽▽▽

夏の終わりがけ、カーテンを締め切った一室にて彼女らは会談する。

「部活に入っていない生徒が二名。その件に関する苦情が鬱陶しいレベルになってきちゃったわ」

「それは貴女が対応せずに溜めていくからではないでしょうか？」

「そろそろ対処した方がいいんじゃないかなあ」

「ふむ、仕方ないわね。諸々一緒に片してしましましょうか」

「あの、無茶はしないでくださいね？ 片したあとの後片付けが面倒になりますので」

「心配しないで大丈夫よ。私は無茶させるだけよ」

「言葉遊びじゃないですか……」

——新学期に向け、企てるものが不特定多数。主に水色が主犯。

34. セカンドシーズン

新学期、無事に課題も終わらせた俺たちは平穩にいつものように授業を受けようとしていた。そんな更衣室で――

「隙あり」

突然現れた先輩は扇子と手刀を俺たちの首元に突き出してそう言った。わかりやすく一夏は誰この人と顔に出る。個人的には頭おかしい人に絡まれたという感想以外特になし。

女尊男卑な世の中じゃこういうタイプの女はよくいる。学園内は少ない方だがやっぱり会うときには会ってしまうもので、それだけなら面倒な人に絡まれたで終わる。ただし、それだけで終われなかった。

「んふふ、驚いたかしら？」

そう、俺たちはこれから授業で、ここって男子更衣室なんだよ。驚くに決まってるんだろ。

思わせ振りにロツカーの影から出て不意をつくのはいいんだが場所考えろよ。リボンの色からして二年生の彼女は扇子を口許に当てて笑みを浮かべる。どこか余裕を醸し出している態度がもう男子更衣室ってだけで台無しだ。

未知の生物に出会った感覚。けど、ひとつだけわかることがある。あの笑い方はよく覚えがある。

「あっ」

と声を上げて俺たちの背後を指差した先輩に釣られて一夏が後ろを向いて、俺は先輩から視線を逸らさない。

「あ、あら？」

だってこの笑い方は――何故か俺の周りでよく見かける――碌でもないことを考えている奴の笑い方。ちえつと軽く拗ねた様子の先輩は扇子をパツと開いた。天晴れと書かれたそれを一度、閉じてすぐさま開けば、そこに文字はなにもない。

思わず怪訝な顔になってしまい、それに満足したのか彼女は言う。「それじゃあね、急がないと織斑先生の授業に遅れるよ」

「……やっべ」

「まずっ!? 急ぐぞ桐也! もうグラウンド十周はごめんだ!」

「今回は俺たち悪くねえだろ!」

「そんな言い訳通ると思ってるのか!」

「思わねえええ!」

慌ただしく足をもつれさせながらも全力で駆け出した。ここでの出会いが初めて——って訳でもなかったらしいが短くも会話を交わしたのはここが初めて。

僅かに遅刻した俺たちは慈悲なくグラウンドダッシュ。こちらへんで先輩殿への怒りが一ニヨツキ。

その翌日には全校集会が行われた。内容は9月の中旬に行われる学園祭について大まかなこと。

前方の壇上に現れた女子に小さくウゲツと漏らした俺は悪くない。そりゃ、昨日の遅刻の原因があんなところに居れば声もあげたくなる。目が合う前に前列のクラスメイトの頭に焦点を移す。たぶん、目を合わせると碌でもないことになる。

「さてと、本当なら夏休み明けの集会で挨拶するところだったけど、色々立て込んでいてすっかり挨拶出来てなかったね。必要ないかもしれないけど、何人かは知らないだろうから名乗っちゃうね。」

私の名前は更識楯無、生徒の長に当たる者よ。以後、よろしく」

……えっ、あれが生徒会長とか嘘だろ。つい顔をあげてしまった。結局、微笑みを浮かべる生徒会長と視線が合ってしまったものの、手のひらを横に振っていやいやねえよと真顔で返す。微笑みに若干輝が入った気がした。

そいで始まる学園祭の説明は聞き流しつつ、中学の学園祭に思い馳せる。おかしなことにまともに頑張った記憶がない。合唱はクラス全員で事前に録音して本番口パクとかそんなことしかしてなかった。

「今年は趣を変えた——『各部対抗男子生徒争奪戦』を開催する!」

体育館が歓声でドツと震撼する。気温が上がったんじゃないかという熱気だが頬につたる汗は冷や汗だ。一夏を求む声が多数なのがチラホラと俺の名前も聞こえる。やったね、やってねえよバカ。

チクシヨウ、この学園も頭おかしかった。ここで怒りが二ニヨツキ。

「ふあつきん」

「桐也、漏れてる漏れてる」

名簿的に真後ろのシャルロットから小声で注意されるが知ったこつちやねえ。

熱を帯びた体育館内で若干二名のテンションだけドン底なんだよ。学園祭はふけてやろうか。

▽▽▽▽

「じゃあ、織斑くんと出路くんを前面に出す方向性で行くつてのはどうかな……あ、駄目そうだね。男子二人揃って不貞腐れてるよ」

学園祭で一組は何を出すかという議題のHR。織斑センセに山田先生は教師がいては決めにくかろうと粋な計らいで職員室に引っ込んでいた。そんななか俺と一夏はわかりやすくやる気がなかった。

協調性がないとかクラスの和が乱れるとか雰囲気よくないのはわかる。わかるがこつちも勝手に景品にされてどうしてやろうかと考えているのだ。

サボりたい欲がかつてなくわき起こるが口に出せば、さすがにブーイングがくるだろうし、そこまでクラスの雰囲気壊すわけにはいかない。別に担任が怖いからとかそういうわけじゃない、断じてない。「嫁に桐也よ。集会でのが理不尽だったのは私でもわかる。だが、クラスで文化祭を楽しむというのはまた別の話ではないか？」

腐った蜜柑のような俺たちに寄ってきたラウラが少し悲しげな瞳で語りかける。カビが取れてきた。

「それに私的なことなんだが、私は文化祭というものが初めてなのだ……だから」

「よしっ、やるか桐也」

「おうよ、お祭り騒ぎの時間だぜ」

急にやる気を出した様にクラスメイトの大半が目丸くするなか、

クラス委員長の一夏が前に出て仕切り直す。

さすがにラウラにここまで言われて、やる気ないままではいられない。軍属だし文化祭が初めてな理由も色々あったんだろう。そこらへんの事情を聞く気はないし、知ってそうな一夏もやる気出してんだしやらいでか。

集会でのことは文化祭とは別枠って考えようじゃねえか。こっちはこっちで楽しむ、あっちはあっちでまあなんとかしよう。生徒会長の飲み物に下剤混ぜるとかそういう方向でいこう。

「ダアーツ！　なんで俺たちがメインの出し物ばつかなんだよ!?!」

「我がクラスの目玉じゃない!」

「もつと普通のでいいだろ！　ラウラも初めてなんだぞ！　変な趣向じゃなくてだな」

「キヤーツ！　ラウラの初めてだなんて織斑君大胆っ!」

「桐也に向かいがちなセクハラが俺にも……!?!　これが、文化祭パワ……!?!」

一夏が腐っていたことを恥じるように皆の意見を募って、クラスの出し物を決めていく様は委員長の姿にふさわしかった。白熱したHRも落ち着くところに落ち着き、メイド喫茶を催すことに決まった。需要を見越して利益と効率のよさ、なによりも楽しそうという理由が決定打。

——そんな様子を眺めてる俺だった。委員長でもなんでもないかな、今やる気出してもやることなかったわ。あと俺にセクハラが向かうのがデフォオみたいに言うなや。

催し物が決まれば伝えに来いと言われていた一夏は教務室に向かう。俺もそれに同行する。

なぜか俺も来るように言われていた。最近なにかやらかした覚えはないのだが……いや、ちよつと、それなりにあるかもしれないけど、バレたら現行犯で呼ばれる類いなのでバレてないはず。ちよいちよい自室でIS一発芸とか言って遊んでるとか知られたら説教確定だしな!

「喫茶店か。お前たちにしてはまともな案で安心したぞ。発案者は誰

だ？」

「ラウラですけど」

一瞬、織斑センセがポカンと呆けた顔をした。失礼ながらこのとき『あ、この人もこんな顔するのか』なんて考えていたが、途端に声をあげて笑い始めた。

なんなのだろうか、この情緒不安定な世界最強は。正直怖いんだけど。

「そうかそうか！ アイツがか！ ククツ、素直なだけに拗らせていたがボーデヴィツヒも変わってきたな」

「拗らせていた、ですか？」

「ああ、嫌いな相手には出会い頭に蹴りを入れるほどに愚直だったな」

あー、と懐かしげに納得。そして転進、目指せ出口。

「人は変わるってことでしようね、ってことで失礼しますね」

「まあ、待て出路。なんのためにお前たちを揃って呼んだと思う？」

「一夏と揃って叱られることをやった覚えはないんですけど……」

「ひとりでならあるのかよ」

「そうか、出路とはまたの機会にじっくり話すでしょう」

「ヒューツ！ 墓穴ウ！」

穴があつたら入りたい！ ただしそこは墓穴！ みたいな！

話が進まないから一度黙るように言われた。話を振ったのは織斑センセなのに理不尽な。

「学園祭には各国の軍事関係者からIS企業の重鎮、他にも色々厄介な身分な者が来場する」

「織斑センセの本音がポロリしてるんですけど」

「ラウラのこと話してからガサツな地が出て——アイデツ!？」

デコピンが額に炸裂し一夏の頭が後方に弾けた。被弾部を押さえうずくまて蹲ったのを尻目に真面目な顔を取り繕う。お前の犠牲は無駄にはしねえ。

というか企業の重鎮ってことは俺の打鉄のメンテしてくれてるとこの所長も来るかもしれんのか……んー、どう考えてもケツ蹴られる気しかしねえ。

「んんっ、それでだ。一般人の参加は基本的には不可能だ。ただし生徒一人につき一枚配られるチケットで入場できる」

「へー、全校生徒の人数分だけ素性不明の人間が学校に入れるんですね」

「お前は時たま勘がいいな。だが本題は次だ」

渡す相手いねえって独り言は辛うじて飲み込んだ。貰ったら紙飛行機に挟んで屋上から、おっと織斑センセの視線が鋭くなったよ。

「それでだ。特にお前たちは良くも悪くも注目されている……なるべく阿呆なことはしでかすなよ?」

「なるべくじゃなくて、それくらい言われずともわかってますって。いやいや本当に」

「そうだよちふ、織斑先生。俺たちだってバカじゃないんだからさ」

「いや、お前たちは馬鹿者だろう」

織斑センセが真顔になった。一夏も俺も視線を逸らす。

「でもですね。俺たちがなにもしなくても何か起こる気がするんですけど」

「たしかに。今のところ事あるごとに乱入とか事故ったり暴走したりしてるもんな」

「俺たちなんもしてないのにな」

「……」

今度は珍しくも織斑センセが視線を逸らした。そのまま生徒の数だけチケット配って来場可能にしたら、セキュリティレベル下がるのは確かだと言われた。

しかし、学園自体が普段は他国・企業からの不干渉を貫いているため、こうして時にはリスクを孕みながらも学園の透明性を示す必要もあるらしい。

「だからこそ馬鹿は控えろと思っていた、のだがな」

ひとつ特大のため息を吐いた。

「既に大バカを仕出かした学生のトップがいたな。あれも考えなしな訳ではないが、お前たちからすれば堪ったものではないのは理解しているつもりだ」

シニカルな笑みを浮かべた織斑センセはなにかを振り切っていた。

「——構わん、お前たちも盛大にバカをやつてしまえ」

「え、ええ!? 織斑先生!」

「自分と周りを危険に巻き込まないなら、余程でないかぎり学園祭に限っては私が責を負ってやろう」

「……マジです?」

「大マジだ。人は集団のなかで生きざるをえないからこそ我慢すべき事が多い。だがお前たちばかりを抑圧するつもりもない——あとは文化祭で必要な物品や費用をまとめて提出しろ。話は以上だ」

さっさと帰れと手をぞんざいに振られ呆気に取られたまま職員室をあとにした。

お互いに関抜け面を合わせて無言のまま片手を上げて、全力で叩きつけ合いハイタッチ。

「よっしやあああッ!」

——織斑センセのいう、真正銘馬鹿者ふたりの魂の咆哮が学園に響くのであった。

▽▽▽▽

廊下から聞こえてくる叫び声に頭を押さえるのは千冬であった。少し早まったかと小さくぼやきながらも口許には僅かに笑みが浮かんでいた。

「織斑先生。よかったですか?」

「更識か。ノックもなしに入るな」

「ふふつ、扉の音もなしに入るとは! って感じですか」

「窓から入るな馬鹿者ということだ」

「バレてましたか」

悪びれた様子のない楯無。どうせ正面から指摘しても笑みと話術で煙に巻いて自分の流れにするだろう。半ばこういう性質の人間とカテゴリしている千冬は敢えて叱ることなく話を進める。

「それでなんの用だ」

「わかってらっしやるくせに。どうして彼らに好きにしろだなんて言っただんです？ 安全を考えるならなるべくこちらで動きを把握できるようにした方がいいはずですよ」

「だからこそその男子生徒争奪戦か。確かに部に所属していないことへの他生徒の不満とアイツらの安全、まとめて解決できるのかもしれないな。」

「だがアイツらの不満は溜まるばかりだぞ？ 安全のためには聞こえはいいがな」

立場が変わったので行動を弁えろ。身柄の安全を保障する代わりと思えば、ある意味当然のことではある。常に好き勝手する人間なんてとてもじゃないが守れない。

ただ、それにも限度がある。あれもこれもそれも我慢しろではいつか自棄つぱちになって、大惨事を起こす可能性だって大いにある。

「わかっているつもりです。今回は彼らのストレスになりかねません。だから限界を迎えるまでには発散させる機会は設けるつもりではあったのですが」

「もう限界だろうな」

「……はい？」

今日の天気は晴れだよ。とそれほどになんてないこと言うかのよ
うに、気負った様子なく返された楯無は思わず流暢な弁が止まった。
「織斑はともかく出路の方は限界だ。なにせ入学までの人間関係の一切を切り捨てられているんだ」

合わせて二度死にかけている。

無意識かはわからないが外へと感情を出さず、自分のなかで消化したと錯覚させることが多くなっている。ように千冬には見えた。もう限界、というのは早計かもしれない。だがこのまま放置すれば遠からず、とも感じていた。

「あとは一夏の存在か。比較する対象がいるだけ余計にだな」

「織斑くんは家族がすぐそばにいるから、ですか」

「そうだ。私自身が既に特殊な立場だったから仕方ないと言えばそれまでだが、感情は理屈じゃないからな」

「ふむふむ、私が妹と距離感が微妙なようにですね」

「それは知らん。どうせお前のせいだろう」

軽口を一刀両断。会話のペースを一切渡す気がないのが伺える。

「出路自身は自覚があるのかわからんが、やけに入学前のことを思い出すような素振りが増えている」

「素振りでそこまでわかるのは織斑先生だけだと思えますけど……わかりました。彼らを自由にさせたうえで護衛して見せますよ」

「ふんっ、任せたぞ更識」

「ええ。でもよくわかりましたね。よっぽど彼らのことを気にかけてらっしゃるの？」

「たわけ、嫌でも目に入るだけだ。それに出路桐也はISを動かしたときに警備員を蹴り飛ばして暴れたような奴なのを忘れたか？ それにしては大人しすぎるだろう」

まあ、バカには変わりないがなと千冬は付け加えた。

それにしたってよく見ていないと気づけないはずだと楯無は思う。彼女だって書面ではいえ彼らの経歴や行動の把握はしていたし、心情の動きも推察はしていた。しかし、直接かれらを見ていた千冬には一歩及ばなかったようだ。

そして、その考えは当たっている。絶対に千冬は口に出さないが一夏と桐也に他の生徒より注意を払っていた。

たとえば死に瀕した一度目、無人機の際には恐怖を口にしてそれを払うように狂ったように笑い感情を発露させていた。それが正常だ。喜怒哀楽、どのような感情でも理性で制御しきれなくなったときに何らかの形で肉体が反応を起こす。

ならば二度目、銀の福音のときはどうであったか——いつものように怒っただけだ。クラスメイトにからかわれたときのような、死にかけたにしては感情のブレ幅が余りにも小さかった。

勘の鋭い千冬にはそこが引つ掛かった。

「アイツはな、意図的か無意識か知らんが自分の負の感情に蓋をするようになってきている。だから、いつも変わらないように見える、見えてしまう」

だが蓋をしたからといって無くなるわけじゃない。発散されなかった感情は煮詰まりよりドス黒くなるだけだ。

そもその前提がハードモードとも言える。少年の今までの人生すべて、15年分の人間関係から周囲の環境全てを強制的に取り上げられているのだ。今だつてどれだけのものを溜め込んでいるのか、何を支えに耐えていたのか。

「溜め込めばいつか溢れ出す——勘弁してくれ。出路は元から予想できんやつなんだ。爆発の方向性も被害も予想できん」

本当に面倒事を目の前にしたかのように頭が痛そうな千冬に楯無も苦笑で返すしかなかった。

しかし、楯無からすれば織斑千冬がここまで生徒を見ていたことに驚きであった。世界最強の彼女がここまで人の内面を見ることに長けていることに驚愕していた。

公的な場ではカリスマを誇る彼女が私生活ではズボラのように、秀でた戦力の反面で人の心を推し測ることは苦手なのではという先入観。

「ククッ、脳筋かと思っていた私が存外他人を思いやれて意外か？

実際のところ説得より殴って黙らせる方が得意だがな。得手不得手の問題だけでやってやれんことはない」

——なんとなくではあるが負けた気がして少し悔しい楯無であった。更識としても、彼らの年長者としても。

▽▽▽▽

世界最強から好きにやっちゃってしまえよとお墨付きをもらった俺たち。果てしなくテンションが上がったものの、やっていいと突然言われてもなにをするか悩むはめになった。さすがに全校生徒のスカートめくりとかそういうバカをしていいってわけでもなからうし、こういうときこそ塩梅が大事なんだ。

しかし、目的は直ぐ様見つかった。目下、俺たちの最大の敵は——生徒会長。

「勝手に景品とかされてちや堪ったもんじゃないもんな」

「つてわけで第一回アンチ生徒会長会議を開催だ」

「いえーい！」

こういう中身がないような内容で盛り上げられるのが男子だ。その中身のない会議で被害を被る予定の生徒会長は震えて眠れ。

「権力者へのスタンダードな嫌がらせってネガキャンか」

「なんでサラツと権力者への嫌がらせが出てくるかは置いて例えれば具体案ってあるのか？」

「淫らな関係みたいなの、スキヤンダラスなのがあると楽だよな。なくてもあるように吹聴できればいいけど」

「普通にゲスい……ってか女子がほとんどの学園でそういう関係って風潮したら俺たちのどつちかにも被害がいかないか？」

「おいおい一夏なに言ってるんだよ。女同士でもいいだろ」

「桐也の方がなに言ってるんだよ。やめよう、もうちよつと他の手段にしようぜ」

割りと効果的そうだったんだがなあ。一夏には合わんか。

このあと何個か案をあげてみたものの一夏の倫理観に拒否され続けた。おつかしいな、自由にやっていいならこれくらい普通じゃねえの？

「普通じゃないだろ!! 会長の食事に下剤仕込んだうえに全トイレ封鎖して交渉とか！」

「まあ、それは他の女子にも邪魔されそうだし廃案だよな。わかるわかる」

「問題なのはそこだけじゃないからな！」

「ええい、この綺麗好きめ！ お前本気で俺たちの争奪戦を止める気あるのかつての！」

「あるけど、あるけど……桐也の案って基本的に『うわあ……』つてなるやつじゃねーか！」

「犯罪じゃないしセーフだろ」

「……で素のトーン、だと……!?!」

そんなこんな、なかなかどうしてうまく話はまとまらなかった。俺

の出す案が尽く生徒会長になにかしら被害を負わせるのが一夏としてはNGらしい。俺のニヨキニヨキした怒りをぶつけたかったんだが仕方ねえなあ。

まあ、それだけ話せば主題から脱線もするもので。ISの話題になったり、待機状態の話になったりしていた。たしかISを使った案から話題が逸れた。

「白式ってガントレットみたいだけど邪魔じゃねえの？」

「邪魔というか目立つのが困るかな。けど無くしにくいのはいいな」
「なるほどね。指輪だと確かに無くす」

「おい、無くすなよ」

「大丈夫だ。呼べばだいたい出てくる」

「ペットかよ」

相棒だよ。

「その感覚わかるかもしれないなあ。一緒に戦っているとISってただの道具って思えなくなってくるし」

「そのうち会話できたりしてな」

「ハハッ、そうだと面白いな」

——なんかガントレットと指輪がカタカタと震えてる気がしたんだが地震か？

ほどなくして揺れが収まり、話題も元の路線に戻った。少々、渋い顔をした一夏が聞いてくる。

「というかここまで思いつくなら穩便なものもあるんじゃないのか？」

「あるにはあるけど。要するに俺たちが部活に入っていないからこういうイベントを催しやがったんだろ」

「あー、なるほど。そういうことになるのか」

「なら俺たちで部活を作ればいい」

「えっ？ ……えっ？」

「部活をしよう」

俺たちによる、男子のための、その場しのぎの部活だアー！

35. 友人定義

「えっ、ちよつとこれなに？」

生徒会長の楯無は自身の仕事場ともいえる生徒会室にて珍しく狼狽していた。原因はその手に持った一枚の紙。

彼女が発した疑問に答えたのは眼鏡に後ろ手で三つ編みに髪を纏めた三年生の女性。楯無と同じく生徒会所属の布仏虚であった。

「織斑一夏くんと出路桐也くんの二名による部活立ち上げの申請書です。必要事項は埋められています。なにか問題でもありませんか？」

彼女は代々更識家に仕える家系の者であり、定数までは生徒会長が好きにメンバーを選べるというシステムに則って生徒会に所属する者であった。とんだ生徒会だが学園創立から今に至るまで不思議なことにキチンと仕事は成されている。

「あるわよ、大ありよ。今度の文化祭でなにやるか忘れたのかしら」

「……ああ、各部対抗男子争奪戦でしたか」

「そうよ。こここのところ、バカみたいに寄せられてきている部活に無所属なことへの対処としても有効だったのに」

「彼らからしたら傍迷惑でしょう」

「わかってるわよ。けど、こうすることで彼らの安全含めて色々解決できたんだけど……」

言葉が途切れる。何事かと顔をあげた虚になんでもない手を振って、楯無は織斑千冬の言葉を思い出す。ストレスの限界とは本当だったのか。

——『更識』は対暗部用暗部。名称がややこしいが要するに暗部へのアンチテーゼ。裏工作などをより表に出ないところで揉み消す日本お抱えの一族。

その17代目当主たる楯無が限界を見誤っていたか否か。いくら書面による情報収集が主だったとはいえ、その道の専門とも言える楯無がだ。あの忠告が他の教員なら彼女は迷わずに己の手段を通してにかかった。

ただし、相手が織斑千冬なら話は別。底を見透かしたかのような振る舞いをする彼女だが、千冬は底が見えない。肉体面も精神面も、本当に得意なものはないで苦手があるか。

その彼女からの忠告が一抹の悩みとして引つ掛かる楯無であった。「けれど、織斑先生のことを抜きにしたって部活設立とはやってくれるわ」

「いひひく、こういうこと考えるのはおりむーじゃなくてでっちーだねえ〜」

そして布仏といえば、一夏と桐也のクラスにも一人いた。のほほんとした雰囲気からそのまま渾名付けて呼ばれている、布仏本音もそこにいるのであった。

「本音、もしかしてこうなるって予想してたんじゃないの?」

「してないよ? なにかするかもとは思ってたけどね〜」

普段と変わらぬ雰囲気のまま、ケラケラと笑いながら楽しんで菓子を口へと運んでいる。大好きと公言しているお菓子を食べているときもお仕えしている更識の当主が困っているときも変わらずニコニコ。目も細く弓形に笑みを示しているせいで瞳から真意を読むのもまた難しい。笑顔がある意味ポーカーフェイスと化している。

こういう面では姉よりも曲者の本音。目に見えて優秀な姉に対して、目に見えないものが多い本音。小言が多い姉に自由奔放な妹。

どちらも可愛いお仕えなものの一筋縄じゃないわね、と内心で独りごちる楯無の頭には特大ブローメランが突き刺さっていた。

「この書類握りつぶせないかし……認め印のひとつが織斑先生なのね」

「見なかったことには出来ません。認めるしかないかと思えますが?」

「ここで負けを認めたら生徒会長の名が廃るわ」

「廃らせてしまえばいいと思いますよ」

飽きれ顔ながらもいつものことと半ば流しつつ他の書類を処理。会長がイベント好きの型破りなせいもあり無茶苦茶な要望も多く仕訳が地味にめんどい作業。それを不真面目モードな会長の相手をし

つつとなれば尚のこと面倒。いくなれば子供をあやしつつ家事をこなす主婦の気持ちに近いか。

「虚、なにか私に対して失礼なこと考えてないかしら」

「口よりも手を動かしてほしいなんて露ほども思っておりません」

「さて、部活を認めたとしても兼部が駄目って校則もないのよ」

「聞いてますか？」

「私を出し抜こうなんて甘い、砂糖菓子のように甘いわ」

扇子が空を叩き開かれる。いつの間にか達筆な筆で書かれた文字は徹頭徹尾。あくまでも当初の予定を貫くつもりである。

つもりではあるものの黙々と書類整理をする虚、笑みを絶やさず菓子を頬張る本音に協力する気があるのかは甚だ怪しかったが——更識楯無はひとりでもやつちやう女だ。残念なことに、やらかす女だった。



生徒会的一幕より遡ること数日。男二人は食堂にて顔を合わせて作戦会議。

「部活をつくるって、なにをするんだ？」

「正直、真面目にやるつもりはねえんだよなあ」

「おい」

いや、だってメジャーな部活は既に存在するし打ち込みたいものとかねえし。あのイベントへの対抗策に考えただけだから仕方ねえだろ。

「でも欲を言えば俺たちが楽しめるか利益になるものがない」

「けど調子に乗りすぎたら部活の設立すら出来ないぞ。たぶん千冬姉から却下される」

「だな。あくまで好きにしているのは文化祭だけで恒常的にやる部活は範囲外だろ」

例えばの話。俺たちが向上心の欠片もない、私情による我欲のための利益目的の部活を仕立てあげたとする。小難しい話をするまでも

なく部活の設立すら却下されるだろう。間違いなくバカをしてい
いっていうのは存分に楽しめつてことで道徳的なものを無視してい
いってわけじゃない。一応それくらい弁えている。

よって、そこらへん上手く誤魔化しつつ幽霊部員ならぬ幽霊部活を
つくりたいんだが。

「IS勉強会部、とか」

「聞くだけでテンション下がるんだが詳細は？」

「部活動って週一とか月一の活動でもいいんだろ？ それで俺たちつ
て他の皆より知識がないわけで結局ISについて勉強は必要だから、
いっそそれを部活動としてやってしまえばいいかと思って」

「なるほど……一夏天才かよ」

他の学生はISの知識なんて元からあるから、俺らがやるようなレ
ベルの勉強なんて興味が湧くはずもない。ついでにこの学園の生徒
だからこそつてのものもある。

なにせ選りすぐりのエリート揃い、向上心の塊たちだ。俺たち男が
いるだけって理由で今打ち込んでいる部活を辞めてまで入部して
くはるはずもない！

俺たちは元から必要な学習をするだけに集まり、今まで自由だった
時間を拘束されることもないッ！ と思う。この学園の学生って優
秀なのに頭のネジが足りない人やや多めで断言できねえのが悲しい
けど。

「あとは部活の名前を決めるか。あああ部でいいか？」

「なんで適当に入力した名前みたいなの……ま、いつか。名前がなん
でもやることは変わらないもんな」

「よしっ、織斑センセに行こうぜ」

かくして俺たちの部活が始ま——

「お前たちにしてはまともな部活を考えたな……名前を変えたら認め
てやる」

らずに普通に却下された。一夏は別行動のなか織斑センセに承諾
印を貰おうとしたのだが名前が気に入らなかつたらしい。

「すっ飛部とか？」

「お前をすつ飛ばしてやろうか。勉強会部とか適当に決めればいいだろう」

「適当に決めたら却下したんじゃないすか」

「適して当てはまるものにしろと言っている。適さず当てはまらないものにするな」

あれ、織斑センセつてもうちよつと口論ならなんとかなるタイプじゃなかったか？ ……なかったか。シャルルするときも普通に嵌められてたわ。

しかし、言われていることが正論なので言い返せない。決して織斑センセに勝てなさそうとか怖いとか思った訳じゃねえよ、思った訳じゃねえつての。ややだせえ自己への言い訳をしつつ改名案は思い付いた。

「勉めるために座す部活とかそういう意味合いを持たせた名前がいいすかね」

「それならばいいが」

サラツと書き直した部活名に織斑センセの判子が押された。これで部活設立に同意したと示す判がひとつ。我らが担任に承認をもらえたなら心強いことこの上ない。上場たる出だしだろう。

「……待て、部活名を声に出して言ってみろ」

「べんざぶ勉座部」

「おい、申請用紙を返」

「失礼しましたア！」

スタコラサツサと逃げ出すように職員室をあとにする。織斑センセの声が聞こえた気がしたときには既に扉を閉めたあと。我ながらあああ部の方が音の聞こえとしてはマシだった気もするが後の祭り。勉座部は設立への第一歩を踏み出した。

しかし判子は最低3人分必要。もうひとつの当てはあるが残りのひとつもとい、ひとりはどうしたものか。正直なところあまり知らない先生と話すのは気が重いし面倒臭い。普段、一組の担任・副担任と接している姿を客観的に見るとそんなことないように見えるが、あれは例外。古今東西、学生つて生き物は教師つて生き物が苦手なことが

多いんだよ。

なんて内心でぼやいていると、またその人も例外といえる教師がやって来た。気さくでフレンドリーで固いイメージの教員職とは思えない軽さのあの人。

そう、タイミングよくやって来たのはミスト先生だった。

何気にこの先生はいつもタイミングが良い。転校したてのラウラとの争いするとき然り、夏休みに暇なときに現れては仕事を手伝わさせられたりと。

一番おっかなくて頼りになるのが織斑センチで一番親身で優しいのが山田先生なら、ミスト先生はなにかと一番タイミングが良い先生だった。

「ミスト先生、ちよつといいつつか」

「はいはい、なんでも聞いちゃうわよオ？　でも面倒ごとはノーセンキューよー！」

「それを明け透けに言うのはどうかと思うんですけど、そんなことよりこれを」

「オーケーオーケー！　面白そうじゃないの、頑張りなさいネ！」

あらましを説明して判子をお願いする、間もなかった。申請用紙を見せた途端に一も二もなく押ししてもらえた。楽しそう、面白そうの理由で即決された感が半端なく何度目かわからないこの人の教師適正の疑問が湧き出す。

というか珍しく忙しげ。さつきも走ってないものの早歩きより明らかに速度が出ていた、正直気持ち悪い。

「判子どもつす。それにしても急がしそうっすね」

「秋が来ると忙しいのよオ！　色々騒がしくなるもの！」

「新学期が始まって早々に文化祭とかイベントがありますもんね」

「そーいうこと！　部活楽しみなさいネ！」

パチツとウインクとサムズアップを残して先と同じ歩法らしきもので去っていった。あれだ、上体がブレてないから走って見えねえんだ。見た目に反しISの操作技術の高い山田先生然り、学園職員はナチュラルにスペックが高くて正直引く。

「あと訓練もサボっちゃ駄目よオー！ しつかり強くなりなさいね？」

用事も済んだので今度こそ一夏と合流しようと踵を返したとき、去った曲がり角のさきから聞こえた教師らしい捨て台詞めいたもの。思わず振り返ったがとつくにミスト先生の姿はない。

いや、驚いた……あの先生から勉強や訓練の類いを勧められたのは初めてじゃなからうか。

こんなときくらい訓練なんてほっぽってはちやけちやいなさい！ って言うならまだわかるんだが。あんな台詞はむしろ織斑センセの領分。なんか中身が入れ替わったかのように台詞が真逆だな。ふたり揃って夏の暑さにやられたのか？

ま、そんなことはどうでもいいわけだ。2人分の承諾が降りれば誰の頭がパーになってようが問題ない。あとは普段から放課後補習でお世話になってる山田先生に頼めば、きつと快諾してもらえるはず。

「はい、もちろんいいですよ！ おふたりが部活にしてまで頑張ってくれるのは嬉しいですよ！」

案の定、ひとつ返事でオーケーを出してくれた。ただ、なんとか予想以上に好感触だった。一夏と顔を見合わせてアイコンタクト。別にやる気出したわけじゃなくて部活を設立することだけが目的、とは打ち明けられないなど。どうでもいいときにだけ俺たちの連携は輝くんだ。

日頃の感謝やら俺たちもまだまだ頑張らないといけないやらのべつまくなしに捲し立てた。山田先生は素直に嬉しそうで大変心苦しい。

いや、山田先生の補習に対してやる気がないわけでもなく、むしろあるって言えるレベルで頑張る気もある。なので丸つきり嘘という訳じゃねえし、と誰にでもなく言い訳。

かくして、目映い山田先生の笑顔と後ろめたさを隠した俺たちの笑顔のもと——勉強部設立が決定した。

「あのつ、出路くん！ 部活名がおかしくないですか!？」

「俺も聞いてないぞ!? あああ部じゃないのかよ!」

「それはそれでおかしいですよ!？」

「部活名程度でうろたえるな！ 別にやることは変わらねえだろ!」

「変わらないけど勉座所属とか名乗りたくないだろ」

「……たしかに」

——今からでも部活名変えられねえかな？



そんな男たち^{バカ}の一幕より数日後の生徒会での出来事とほぼ同時刻の食堂にて。

「二夏たち部活始めたんだって」

ふと鈴が呟いた言葉に食堂に集まっていた1組と2組の専用機持ちたちは耳を傾けた。どうしてこの面子が集まっているかといえば、なにかと専用機持ちという理由で集まることが多いのと、1組と2組での合同授業が度々あるからか。上半期では所々薄かった縁は今ではそれなりなものになっているようだ。

「二夏がか。中学では帰宅部を貫いていたと言っていたが」

「どうせ桐也が言い始めたんじゃないかなあ。ほら、前の集会で二人が景品にされてたし」

「それに対抗というわけですか。彼にしては珍しく正攻法ではないですのね」

「二夏がいたからだろうな」

「そうねー、昔っから正面突破の真っ向勝負って変わってないんだから」

やれやれと肩を竦める鈴と同調して頷く箒。他の面子も思い当たる節はあるのか納得していた。幼き頃からの知り合いがいれば変わった変わっていないと話題に上がるのも必然か。

逆に出路桐也などは誰も彼もがIS学園からの付き合いのため、彼のキャラクターは見たままで固定されている。比較対象がないので

変化の議論もない。

「そういえば桐也の昔の話って、あんまり聞かないかも。断片的に家族のこととか仄めかす台詞はあったんだけど」

「シャルロットが知らなければ皆知らないだろうな」

ラウラの意見に頷く頭がみつっ、横に傾いた頭はひとつ。誰が誰かは言わずもなが。ええー、と若干不服そうながらも満更でもなさげな彼女の心境は如何程か。

「一夏のことならわかるがな」

「そりや箒もあたしも、一夏と少なからず一緒に過ごしてたからね。

まー、あんなだけ一夏は一夏で疲れてるみたいよ？ 弾とまた遊びてえとか愚痴ってくるもん」

「中学生のときの友人か……鈴と箒よ、私にも嫁の過去話を詳しく教えてくれんか？ 正直、その、嫁の交ざれなくて疎外感が辛いのだ」
「いいわよ？ 特に隠すことでもないし」

「私も別に構わんが、私は飯を食べ終わったら自室に戻りたい」
「待て、追加で注文しろ！ 私が奢る！」

ドイツ軍人はうろたえないが慌ただしいのか。ラウラは跳ねるように席を立ち食券売り場へ走り出した。箒はそれならば良いかと放置し、鈴も楽しげにするだけで気にする様子はなく。

それを全体図として眺めていたセシリアは気づく。普段ならストッパーとして動きそうなシャルロットが思案げにするのみで惚けているのだ。

——ふと、シャルロットは思う。切っ掛けは鈴の発言。

彼はどうなのだろうか。織斑一夏が学園に来てから変わった環境に対して溜め込んだストレス。それを姉や再開を果たした親友という、深い縁で繋がれた相手に本音を曝せているとするのなら。

出路桐也の過去は全てまっさら、新たに形成された仲で本音を打ち明けられているのだろうか。

孤立無援と言える状況で学園に送られたシャルロットだからこそ、ある意味彼に一番近い立場故に気づいたしこりは彼女に違和感を訴える。

これはデユノア社にいた頃にはなかった問題だった。人との距離の測り方に長けた彼女はしかし、友人以上の踏み込んだ距離には慣れず思えば悩む。

「シャルロットさん？ 急に曇った表情になってますが」

「えっ？ あ、いやなんでもない、かな？」

「わたくしに聞かれても困りますわ。相談に乗れることでしたら」

「ううん、今は大丈夫。本当にそうかもわからなくて」

ラウラが大量のお盆を抱えて躓いて、鈴がずば抜けたバランスで足先で受け止め、箒が縮地でふたつのお盆をかつさらい。ラウラも自分で傾いた姿勢から残りをキャッチし直す。

悩ましげなシャルロットの表情の奥でそんな曲芸が行われて、話題にいまいち集中できないセシリアは悪くない。

「例えばなんだけど、セシリアはここに来るまで愚痴を吐く相手とかいるの？」

「オルコット家の当主としてそのような姿見せるわけにはいきませんが、と言いたいところですがいますわ。学園に来てからも時折連絡を取ってますし」

幼い頃からずっと傍にいる使用人を思い浮かべて答えるセシリアは、いつもより少々表情が柔らかい。

「長い付き合いになりますわが、そういうシャルロットさんはどうですか？」

「んー、残念だけどいなかったかな」

「そうでしたか……ですが過去形ですね？」

「うん、今はそうでもないからね」

普通、子供が同年代の人間と触れ合い自由に過ごし、その自由のなかで大人からルールを学ぶ期間。それはシャルロットのなかにはほとんど存在せずに母が亡くなったあときから、彼女は社会の一員として育てられていた。

厳格で私情を垣間見させない父は社長でしかなく、周囲には友人でなく同僚と上司のみの環境。生来、効率のいい彼女にとって生き辛くはなかったが息苦しかったことには変わらない。

だからこそ、彼女は今が好きで仕方がなかった。悩ましげにすれば心配してくれる友人。後ろできつと思ってもよらない光景を広げている友人たち。そして一緒に笑える友人がいる。

——だから。彼女は彼に一番近い立場だったが、一番の理解者というわけではなかった。

織斑千冬が卓越したところ観察眼と直感とその他諸々で出路桐也の心情を推察したのなら、彼女は自身と似通う欠片を元に臆気に気づいただけ。

「私も長い付き合いじゃないけど辛さを受け止めてくれる友達はいる、って私は勝手に思ってる」

「ふふっ、貴女がそう思うのならきつとそうですわ」

「かなあ、そうだといんだけど……」

「そうですとも。何故ならわたくしもその友達のひとりですから」

「……セシリアってちよつとかっこいい？」

「かっこいい!？」

だから、だからこそ彼女は考える。考えて悩んで苦悩しつつも己へと手を差し出してくれた彼が困っていないか。

まだ彼が困難な状況にあるかも不透明な現状で、困っているなら今度は自分から手を差し出せるようにと。

それが彼女の、シャルロット・デュノアの不器用な友達としての在り方であった。

「わ、わたくしがかっこいいかはさせておき、実際のところ桐也さんは窮してらっしゃるのかしら?」

「桐也のこととは言っていないんだけど」

「あら、そうでしたでしょうか? わたくしにはそう見えませんでしたので」

「……知らないっ!」

些か器用な友人に恵まれた、彼女の在り方であった。

36. 定義——不明瞭——

勉座部設立の翌日。通信端末に届いた学園メールが現実の無慈悲さを知らせていた。

「各部対抗男子争奪戦の詳細だと……」

「な、なんでだ?!」

本当になんでだ。わざわざ織斑センセにまで承認をもらって握り潰されないようにしたつていうのに、部活をつくった意味の大半が無に帰したんだがどうしてくれんだ。

そうしてあてのない思考に没頭しかけていたさなか。

「隙あり」

「またかよ」

また、突然現れた先輩は扇子と手刀を俺たちの首元に突き出してそう言った。わかりやすく一夏はなんでこの人がここにと顔に出る。個人的には今一番面倒な人に絡まれたという感想以外特になし。いや、言いたいこと色々あるけど言うドツボに嵌まりそうなんだよ。嵌まりそうというか嵌められそうというか。

なんでこの生徒会長は男子更衣室に現れるのか。変態か？

「なんの用ですかね」

「あら、素っ気ない。とは言うものの用という用はふたつほどかしら。ひとつめはキミたちの顔を見に来たくらい——学園内メールを見て驚いている顔をね」

「なんでそれを知ってるんですか」

「そりゃあ私たちが部活動の承認をしているもの。キミたちが新しく部活を始めて文化祭のイベントを白紙にしようとしたことくらいお見通しよ。」

けれども知らなかったのかしら？ 学園は兼部が認められている

のよ」

「ふあつく」

「桐也、本音が漏れてるぞー!」

クソ、マジで闇討ちプランにしとけばよかったか。いや、なんか相

当手酷い仕返しと説教が来るのは容易にわかるんだが、これだって決め打ちした一手を軽く返されると正攻法が使えないもののような気がしてきた。

俺たちが見落としてただけと言われたらなんも言えんけど、嘘だろ兼部認めてるのかよ。

「上級生に暴言はよくないわよ」

「サーセンっした」

「もうちよつと真面目に謝れよ」

「よろしい」

「よろしいんですか!？」

一夏が慌ただしい。間違いなく俺が適当な対応をしてるからフォローしようとして予想外な方向に空振ったからなんだろう。しかし、会長さんは俺の粗雑な態度に苛立った様子もない。というか何を考えているのかさっぱりわからん。

「んでふたつめのご用件はなんですかね」

「そうそう、そつちが本題なの。男子の争奪戦は投票で行うのだけけれど、その投票戦の景品にしちやった交換条件として私が鍛えてあげる」

思わず一夏と顔を見合わせた。即頷き合い意志疎通完了。

「いや、結構です。既に指導者には事欠かないので」

「ってことでいらねえです。優秀なコーチは揃ってますんでむしろ投票戦なくしてくれませんか？」

「んー、そうなの？」

提案を断られたにも関わらず、変わらずニコニコとした会長さん。ついで吐いた言葉は全否定だった。

「でもキミたち、弱いままじゃない？」

「なっ!？」

一夏が驚き先程までの丁寧な物腰はどこへやら。不満ですと顔に書いたまま反論する。意外と意地っ張りで短気なところのあるやつなんだよなあ、ここらへん最近わかってきた。入学当時は人当たりのいい好青年みたいなのやつと思ってたが、俺と同じで餓鬼っぽいところ

もあって実は安心してたりする。けどエロに関してももう少し興味示せよ寂しいんだよ。

——閑話休題、というか脱線した。

拳を握ってから緩める。この手の安い挑発は流すに限るってわかってるんだから流せばいいんだ。ややムキになっている一夏を一度クーリングさせようと、手を伸ばそうとし、止めた。

「それなりには強くなってるつもりです」

「ううん、全然駄目。超弱いわよ？ だから私が鍛えて上げようって提案してるの」

「ッ！ なら勝負しましょう。俺が勝ったら投票戦はなしです。負けたら従います」

流してもいい、流さなかったところで今俺たちの気分がちよつと悪くなるだけだ。だからここは冷静に対応してこの場を早々に去るべきだ。

——なんて真面目腐った考えは糞喰らえだ。

「出路くん、キミもそれでいいかな？ それともキミは奇策を練って弱さを隠して私に挑むかい？」

学園に来てからの俺の今までを知ったかのような挑発。そよ風程度にしか心の逆鱗を撫でない煽り文句で誰が乗るってのか。そんな言葉に乗るわけがないに決まってるだろうが。

さっきの一言で十分にトサカ鶏冠トサカに来てんだからこれ以上の誘いの煽りなんざいらねえ。

「上等だ。その挑発に乗ってやるよ」

「桐也、いいのか？」

「お前……啖呵切ってから確認取るんじゃないやねえよ」

「す、すまん」

謝らんでいいっての。謝る一夏の肩を軽く叩いて笑いかける。だから俺も相当餓鬼っぽいんだ。わかっても直せねえし、大人ぶって譲りたくないところはある。

正直なところ俺が弱いつてのは、俺が否定しきれないところだから気にもしてない。けどそこじゃねえ。

「……へえ、キミも乗るんだ。こんな挑発は適当に流してもっと考えたり悩んだりしないなんて予想外」

「普段ならそうなんすけどね」

普段あるものつてのは無くしてからじゃねえと大切さに気付けないってよく言うけどな。一回無くせばもうどれだけ大切だったかは俺がいくらアホでもわかる。そんで俺にとって今がどういうものなのかって話だが――

俺が弱くて駄目なせいで否定されたものが頭を沸騰させた。半分は八つ当たりみたいなのもんだが、もう半分も会長さんにや取るにたかねえもんかもしれねえが、俺はそれを捨てたくない。

みーちゃんにはバカなんだから単純にいけとよく言われたが、今はあの言葉に従ってやろうじゃねえか。

「てめえをブツ飛ばして投票戦をお釈迦にしてやらあ！」

「いい威勢だね。ま、吠えるだけなら犬にだって出来るけれどね？」

吠え面かかせてやろうと心に決めた。

▽▽▽▽

一夏と会長さんが畳道場の真ん中で組み合っている。この試合のルールは至って簡単だった。

俺たちの敗北条件は二人揃って戦闘続行が不能になったとき。対して勝利条件は更識楯無を床に倒すこと。

言外に、いや明らかに相手にならないと舐められている。もしくは本当にそれだけの實力を持つってことか。この学園基準で考えれば後者だよな。

「それがどうしたって話なわけだ」

正面から距離を詰められたにも関わらず、一夏が反応できずに掌打を打たれた。ワケわからん技術使ったんだろう、以上のことがわかるあたり学園に毒されてきたか。

というか箒さんのせいだなこれ。篠ノ之流の空拍子とかいう意識の隙間を縫うような歩法。人間が認識から行動に移すまでのタイム

ラグに意図して合わせることで、相手の意識の空白を突く。

たぶんあれと同じだろう。加減を知らない箒さんに散々使われて軽いトラウマになりかけた。赤子を捻るように散々床に叩きつけられた。

「まだっ、まだアー！」

「甘い」

今の一夏もだいたいそんな感じだった。やつこさんの技の錬度や多彩さが圧倒的すぎる。

——そんなわけで最後は一夏が会長さんのブラジャー御開帳して終わった。なにがそんなわけでは俺も知らん。ただ、技術力で敵わないと悟ったのか一夏が勢い任せに掴みかかって、投げ技に持ち込もうとして、胴着はだけさせてブラジャーをだな。それで鮮やかな連続技で一夏の意識は刈り取られたとき。

ラッキースケベというかただのセクハラ野郎だったが、なんとというか漢らしすぎる最期だった。

「ふうっ、次は出路くんだね。お姉ーさんの下着姿、高くつくわよ?」
「俺は勝手に見せられただけなんで踏み倒します」

胸元を直した会長さんの軽い挑発を受け流しつつ臨戦態勢。記憶を掘り起こして使えそうな技術を検索したいが、駄目だISならともかく生身で真似できそうなものがねえ。関節の稼働域とか明らかに違うだろ。

会長さん相手としてはなにをどうやっても半端になる気しかしねえ。見よう見まねの構えなんざやらねえ方がマシか否か。俺は会長さんを床に叩きつけるだけでよくて、別に勝たないといけないわけではない。自己流で押し通そう。

「じゃあ強制的に回収しちゃうよ」

——眼前に会長さんが詰めてきた。平然と縮地とかやめろつてえの!

結果、中途半端な構えのまま遮二無二に放った拳は絡め取られる。

「もーらい」

「しまっ、カハッ!?!」

背負い投げ。畳に叩きつけられた衝撃は肺を突き抜けて空気が漏れた。子供の頃に道端でカエルが潰れてるのを見たことがある。空気がどこるか内蔵も出てたんだろうが、今俺もそんな気分だ。

「ちよっ、セイッー！」

苦し紛れに比喩なく足元を掬おうと腕を振るが難なく一步退かれ空振る。空振りの勢いで追加の見様見真似の足払いも同様。

無理矢理空気を吸い込んで萎みきった肺を膨らませる。酸欠で呆けた頭がややクリアになった。冴え始めた脳ミソがもっかい理解を示す。やつぱり勝ち目とかねえと。

這いつくばった姿勢から跳ね起きる。追撃が来るかと思っただが、會長さんは余裕をぶっこいて追撃を噛まさずにいた。強者の風格とでも言うつもりか。

「キミ、先輩をそんな目で睨むものじゃないよ」

まるで学園に来たばかりの頃、セシリアさんと戦ったあのとときのようなどうしようもない力量差があるのはわかる。わかっちゃいるがムカつく。セシリアさんのように全力を尽くしてこないことに腹が立つ。

そりゃ、俺が弱いから出すまでもねえってんだらうよ。本気を出させることが出来ねえ俺が悪いんだらうよ。

「見くびんなっつーの」

「男の子ってものなのかしら。お姉さん思わずドキツとしちやうわ」

妖艶な笑みは劣情を煽らず普通に俺を煽った。額で血管が疼くのがよくわかった。この會長さんはどうにも合わねえ！ 無性に腹が立つ！

「……結構本気で嫌悪感出すの止めてほしいのだけれど、ちよっとかんちゃ、嫌なことがフラツシユバックしそうなの」

「散々煽つといてんなこと言われても知らねえですよ」

何故だか僅かに傷ついた顔が一瞬ちらついた。かんちやつてなんだよ。

……まあ、知ったこっちゃねえ。全部わかった風なフリして手のひらの上で転がしてる雰囲気漂わせてるのが気に食わねえ。箒さんの

姉もフラッシュバックするし——パンツしか覚えてねえ——しなかつたわ。けど、わかつたふりをされるってのは気持ち悪いもんだ。

大振りはカモになる。コンパクトに手数を、一撃貫うと嫌でも効く顔だけは守る。武術なんざ授業以外でまともに学んだこともねえし、格闘技なんざ知らねえからこの程度しか出来ねえ。ここに来るまで興味は欠片もなかったんだから当然と言えば当然。

仕切り直しに左を二発打ち込めばご丁寧に二回叩き落とされる。そらそうだ、ジャブなんて上等なもんでもない。ただの喧嘩。パンチに、喧嘩キック！ ハハツ大振り上等だ！ カウンターが脇腹を穿つた痛い！

「ととつ、躊躇いなく顔を狙うのね」

当たればいいダメージ入んだから狙うに決まってるなに言ってるんだ。昔みーちゃんと喧嘩してたときも、ISを動かしたあの日の警備員にも普通に顔面キックを狙ってた。

だいたい俺にそういう配慮を求められても困る。デリカシーとかそういうのは母さんの腹に残してきた。もしくは元から遺伝子に組み込まれてねえんだよ！

拳が蹴りが頭突きが全て受け流され払われ打ち落とされる。そのたびに芯に痺れが残留するが構うものか。

「躊躇いのなさど勢いやよし。けれど他が伴ってない」

「倒れる膝つけ死ねやおらあー！」

「会話する気ゼロなのかしら……」

足背を踏み抜くつもりで出した脚が払われる。重心が行き場を失ってつんのめった。下降する視界に掌底を打ち上げようとする會長さ、マズッ！

脳天を突き抜ける衝撃が顎に打ち据えられた。

意識は現実を手放しておねんねしそうに——火花が散る視界そのままに頭突きを真下へ盲打つ。容易に躲された、もしくは元々当たってなかったのか畳にクリーンヒット。鈍い打撃音が道場と脳内に響いた。

クソ痛いが目覚ましがわりにはなつたのか。頭は晴れた。いや、

ちよつと鈍痛が残って辛いが痩せ我慢でどうにかなる程度。顎にイイの貰ってこんだけの被害ならまだ安いもんだ。

「ふうーっ」

「ふうーっ、じゃないよ。キミって格闘技はてんで駄目だけど、もしかして喧嘩だけは慣れてる?」

だけとか言うなよ、しかも慣れてはいねえよ。よく友達と意見が食い違って言葉か肉体かで争ってただけのこと。そんでよく負けてロボロになって帰って父親にダサイと散々煽られて軽い親子喧嘩までが一通りの流れだっただけだ。

喧嘩上等、喧嘩売られたなら買っちゃまえ。舐められて気に食わねえからぶん殴ってその認識改めさせる。シンプルイズベスト!

「意地張ってなんぼだろうが! バァーカ!」

けど今答える義理はない。代わりに返すは超軽量級の煽りと軸足を捻り側頭部狙いの回し蹴り。それなりの勢いをつけたはずだがしかし。柔らかに受け止められた蹴りはまるで手応えがなく――

「じゃあ見せてもらおうかな、キミの意地を」

世界が反転した。ISでは感じ得ない浮遊感に疑問が生じゼロコンマー1秒のうちに本能が最大級の警鐘を鳴り響かせた。ヤバいやバいやバいや!

直後、身体は重量を取り戻す。如何にして俺が俺の身長ほどの高さまで放り投げられたのか、そんなもの重要なことじゃない。投げ終えた会長さんが俺に向けて扇子を構えているのだからどうでもいい。主観が会長さんなら技の解説でも悠長に出来ていただろうが残念ながら俺は現状打破に手一杯。

――なにせ俺の頭部が畳に向けて垂直だつてことがクソやべえ! がむしやらに身体を振り向きを修正する。いや、修正なんて丁寧なものじゃない。気合いで床に向けて垂直から平行になっただけ。

要するに受け身もなにもなく、俺が胸部に腹部とついでに顔面を畳に強打してもなんら不思議はなかった。ゴキヤツと自分と畳がたてた嫌な音を全身で感じる。

「ゴヒュッ! おえ、っ、ゴフツゴホゴホッ!」

「……つと、私が意地になっちゃったかしら。やりすぎてしまったわね」

荒ぶる痛覚が視界に思考に動く意思に研磨を掛けて削いでくるなか、どこか反省を孕んだ声が耳に届いた。

だからなにを勝手に俺を測ってるのか。別に俺個人がどう言われなくても聞き流すし気にも止めねえけどよ。

——あの言葉はちよつと、いやかなり滅茶苦茶イラついたんだ。それを思い出せば痛みに削がれていた勢いを吹き返すには十分だった。加えて今の台詞に含まれた同情は俺が意地を通そうとするには十二分だった。

俺はそんなにか。俺は駄目の一言で片付けた奴に同情されて終わるほどに弱いのか。今までもらった全部を無駄にしてなにも見返せないまま終わる。

冗談じゃねえ。そんなの死んでも嫌だ。どうせ敵わないという理屈は感情で叩き伏せる。通らない通りは条理を振じ伏せる。

「ダツリア!!」

腕を地面に叩きつけ跳ね起きる。起き上がりきれなかった身体は再び倒れそうになるも、右足で踏ん張り倒れる勢いを利用。眼前まで歩み寄っていた会長さんに自重を乗せた拳を叩きつける。先程の蹴りと同じく受け止められ、しかし今度は確かな手応えを感じて彼女にたたらを踏ませて数歩後退させた。吃驚した顔してんじゃねえよ。

ぐらつく身体を気力で支えて拳を握る。あ、駄目だ足が動かねえ、てか踏み出したら膝から崩れる。

「ッ!? ……まだ動けるのは、さすがに予想外よ」

ボタボタと垂れる鼻血が畳に斑点模様をつける。会長さんの驚愕にどうしても苛立つままに強引に袖で拭って、どうしようもなく燻っていたものを吐き出した。身体が動かなくても口は働きの者でなりにやだ。

「るっせえー！ てめえの尺定規で俺を、俺たち測んじゃねえ！ 勝手に駄目だって決めつけんな！ 弱いから駄目だって一言で俺の今まで否定してくれてんじゃねえー！」

一夏と並んで互いの無知さに笑いながらも学んだこと。箒さんにしごかれて足腰震えながら鍛えたこと。セシリアさんに理論尽くしで教え込まれ理解力の乏しさに一緒にため息ついたこと。鈴に手玉に取られながらも喰いついてはしこたま叩きのめされたこと。ラウラに断りたいのに断りきれず善意100%でドイツ軍式体術を身体に叩き込まれて開始数秒で意識が飛んだこと。シャルロットは困ったときにはなんだかんだでいつも付き合ってくれたこと。

どれもこれも絶対に駄目なんかじゃなかった。

血塗れの面がインパクト的過ぎんのか。目を見開いて動きを止めた会長さんに内心を吐き出す。

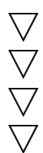
「ボロボロで牛歩で無能な非才かもしれないねえけどな、それでも俺に色々教えてくれた奴らがいるんだよ——それを否定することだけは絶対に！ 絶エエエ対にツ！ 許、さ……」
ねえ。

あとそれだけは言い切りたかったんだが言えなかった。たぶん学園入学以来かつてなく意地と気合いと根性を総動員して踏ん張ってたわけなんだが。

散々殴られ蹴られ投げられて、叩きつけたかった言葉を吐き出しきる直前に、もう言い終わると思ったが最後。踏み出そうとした一歩でガス欠を起こした。緊張の糸が途切れて意図も途切れて身体の支えも途切れて、あと一息吐き出せばというところで俺の身体が崩れた。く、クツソダツセエエ！

——拝啓、バカ親父。あんたの息子は啖呵をいっちょまえに切るだけ切ってぶっ倒れる無様を晒してます。あんたは何て言うでしょうか煽るでしょうね煽るだろうな知ってたよ！ 俺だってこんななるって思わなかったわ！ もうちよつと働けよ俺の口！

小恥ずかしさと羞恥心と自己嫌悪を含めた心の中の絶叫を最後に、俺の意識は沈んでいくのであった。



思わぬところで彼の逆鱗に触れてしまっていたか。楯無は軽い反省を胸に抱く。

代わりに出路桐也という少年のことが少しわかった。彼は自身の精神的パーソナルスペースを犯されることを酷く嫌っているようであった。その範囲は測りかれなかったものの楯無は大まかに掴めた気がした。

彼自身の否定よりも、彼を構成してきた家族や友人といった親しい者への否定に過敏な少年であった。

出路桐也が弱いという言葉には苦笑しながらも流すくらいに対応であった。しかし、楯無が『今までのやり方では弱いまままでんで駄目』と言ったときの彼は、その言葉は必ず否定してやるという確固たる意思が見えていた。

想定では挑発は軽く流されるとして、他の餌をもとに釣る予定だった楯無はひとつため息をつく。

記録から判断した情報の集まりたる抽象的な虚像を見すぎ、実像を真つ直ぐに見れず見落としたものがあつた。

「私の直すべき点かしら……あ、かんちゃん思い出して辛いわ」

セルフでトラウマを掘り起こしてへこむ。目的達成のため他のことが疎かになることがままある楯無の一番の失敗例を思い出し、最大の心の傷に塩を自ら塗り込む。

あのととき以降、更識簪——妹——との仲は歪なままだ。彼女自身はそれはもうイチャラブするレベルで仲良くしたいのだが、妹からは親の仇を見るかのような視線を向けられている。少なくとも楯無はそう感じているし、どう関係性を直せばよいかもわからない。己の言葉で更に険悪になったらと考えるとどうしても踏ん切りがつかない。

反省点があつたと思うもののどうすればよかつたのか。それは今でも楯無のなかで答えの出ていない課題であつた。

「……はい、反省終了。今はこの子たちのこと」

織斑一夏はわかりやすい。守るといふ漠然としながらも筋の通った目標がある。なにせ臨海学校では仲間の窮地にセカンドシフトまで漕ぎ着けたほどのものだ。そこを刺激すれば反応があることは予

測できた。

しかし、出路桐也を刺激するに当たってつつく場所が不明瞭であった。不本意ながら彼が学園に来て以来、命を懸けてしまう場面はいくら存在していた。だが、そのどれもが客観的に見るならば成り行き上で仕方なく命を懸けているようであった。

「実際のところのキミの心境はわからないのだけれど……でも今回の件でお姉ーさんなんとなーくわかつちゃった」

出路桐也の軸は彼自身よりも周囲に依存している、のかもしれない。だからこそ、彼が友人と過ごしてきた過去をないがしろにするような煽り文句にいと也容易く乗ってきたのではないだろうか。

それは出路桐也が学園に来たことで大切な者から引き離されたが故か、元来の彼の性格かはまだ定かではない。けど楯無は思わず微笑んでしまう。

——推測でしかないがもしも本当にそうであるのならば。

だって彼が彼女に激昂したということは、少なくとも彼にとって学園でできた友人もまた大切な人と思っっているということなのだから。「災難としか言い様のないなかで、君がそれだけ想える人が出来たらお姉ーさんはちよつと安心かな。けど短慮で短気は治さないとね。

ま、織斑くんともどもビシバシ鍛えたげるから泣かないようにしてもらわないとね。意地を張りなよ男の子？」

誰が見てるでもない格技場の真ん中で、扇子で口許を隠して微笑む。前途多難な彼らの今後を思い軽く同情をするもの、目下の多難の数割を請け負っているのは彼女だったりする。同情をするならイベントやめろという、楯無は絶対にやめないのだが。

さて、と。笑顔を潜めた楯無は誰にでもなく、何処にでも呟く。

「……この伸びたふたりどうしようかしら」

——彼女の声に答えるものは当然誰もいなかった。

37. 変化≠逆戻

布仏本音は些か驚いていた。生徒会室に男児二名が運び込まれたのは約半刻前。楯無が息も絶え絶えに抱えてやってきたのだ。

それを見た本音の姉、虚は肩を落としてつつ何があったのか問えば、バトってきたと。見ればわかることだった。

「だからそこに至るまでの、いえもうお嬢様が唆したことはわかりましたのでいいです」

「お嬢様じゃなくて会長。あとその私に対する信頼感なんなのかしらん？」

「ご自分の胸に聞くのが一番かと」

「いやん、虚ったらセクハラ」

「……………」

「ちよつとー、無視はよくないわよー」

問答を聞き流しつつ、呻き声を上げている出路はなにを夢見ているのか。本音の主観から見れば夢見が悪そうなのだが辛そうに見えるのがやや不思議。

しかし、その有り様はボロボロなもの、ふたりしてさほど間を開けることなく目覚めそうだ。一夏は体力のあるうちに落とされたから、出路は夢見が悪いがゆえにと理由は真つ二つに別物だが。

「かいちよー、それでどうでした？」

「まあ概ね良好よ」

「概ねに入らないところが気になるかなあ」

「本音ちゃんは間の抜けた喋りなのに鋭く痛いところ突くわねえ」

「えへへえ、それほどでも」

適当な席に男子二名を置きたため息ひとつ。ため息が疲れたからなのか、やや良好にいかなかったことを思っただけは本人のみぞ知る。

「出路君に嫌われちゃったかも、テヘツ？」

「テヘツ？ じゃないですよ。なにしているんですか……………」

「キャラが想像よりも違ったのよー」

「資料ばかりに頼るからですよ」

「いえね、話したことはないけど何度か実際に見かけたことはあつて……学園こくえんに来る前のことはそりや資料だけだったのだけれどね？」

けどそれも彼と親しかつた友人たちから更識関係の者が直接情報収集されたもの。主観による多少のズレはあれど楯無であればそこは些末な問題だったはずなのだがどういうことか。

ちなみに彼の両親は頑なに話してくれなかったそう。訪問時にぶぶ茶漬けを出されてたとかインターホン押せばひたすらセールスとして対応されたとか訪問時に扉の前に塩が置かれてたとか。なんかもう保護プログラムが適応されてるから許されるギリギリのラインの失礼さを突つ走っていた。

よくよく考えればそんな両親から生まれた彼が、彼の友人から聞き及んだようなただただ平凡な没個性なものだろうか。学園に来てから性格に変化があつたにしても、有りすぎる。

「可能性としては彼のお友だちが適当に語った、もとい騙つたかなのだけれど」

「……そりやああれだろ。友人つてのがたつつんとみーちゃんなら揃つて口裏合わせて嘘吐いたんだろ」

いつの間にか起きた、鼻が痛むのか眉を顰めている出路がいた。散々に打ちのめされたせい気怠い身体を起こしながらなんてことないかのように言った。

「勝手に環境変えられて、好き勝手に根掘り葉掘り身の回りを調べられて、挙げ句の果てには人間関係とその相手のことまで話せて言われりや……言われなくてもやりそうだなアイツら」

たつつんとみーちゃん。このふたりがどのような人間か真に知るのでは出路のみ。その彼が懐かしそうにしながら笑みを浮かべている。「嘘のひとつやふたつ吐かれたんだろ……というかアイツら俺のことなんて言つてたんだよ。むしろ俺が心配だぞ」

「そう、それなら納得だわ。君の在り方にもあの怒りようにも。友人に想われていたのね」

「俺は納得いかねえけど、というか私怨じゃねえかと思うんだが」

「納得がいなくても君は負けたんだから従つてもらおうわよ？」

楯無は扇子で口元を隠しながらムフフとイヤらしく笑う。その扇子には「絶対服従」の文字があるも出路は腕をクロスさせてバツをつくる。

「断る。俺はその条件を承諾してねえ」

「いやいや、出路君はたしかに乗ると言ったよ」

「ああ。挑発に乗るとは言ったが誰も一夏と会長さんの勝負事に乗るとは言っていないぞ」

その言葉に楯無は停止して記憶を掘り起こす。

「……あつれー、たしかに言っていない」

「よっしゃ。じゃあこの話はここまででってことで」

「いやいやいや、待ちなさい。一夏君を置いていってもいいのかな？」

「いつだって平和は誰かの犠牲のもと成り立ってんですよ」

揚げ足取りのように煙に巻いて、それらしいことを吐いてサラリと友人を見捨てていこうとする。口の回転が上々なことに併せて頭の回転も比較的良好。あの挑発に乗ったときには一夏に提示された条件に自分も乗ったつもりでいた。

のだが避けられるなら避けたいわけで。思いつきにしてはうまく躲けたのではないかと自画自賛しつつ、桐也は更に先を考えてみる。

……先がどこにあるのかわからずいつも通り思考が脱線。勝手に環境変えられてとか、誰かの犠牲と言えばシャルロットって割りと不憫な理由で学園来てたなあ、なんて関係ないところに思考が飛んだ。「男友達をひとり置いていくのは忍びくないかい？」

「……あー」

悩んでるような適当な生返事をして目の前の楯無へ思考を修正しつつ、桐也は一夏をどうするか再考。

「ほらほら、遅刻しそうな一夏君を待って、逆に自分が遅刻しちやったくらいのキミなんだから、ね？」

「なるほどなあ。会長さんはあのとときのこと知ってるのか」

知ってるというか見てたし声もかけたんだけどね、という呟きは楯無の口のなかで留まりニコニコとしたフェイスを保つ。

桐也は記憶を掘り起こして、なるほどたしかに見覚えがあった。二

十五キロマラソンをしてたときに声をかけられていた。覚える気も余裕もなかったために顔を見ても思い出せなかった桐也だが、芋づる式にあのときの記憶が呼び覚まされた。

——一言で言えば超しんどかった。

「けど俺はこう思ったんだよ——やめときやよかったってな！ 帰るわ！」

マラソンついでに桐也はひとつ思い出した。シャルル、つまりシャルロットが転校してきた翌日の学食でも楯無に話しかけられていた。二人前食べることをつつかれてたが、もしかしたらなにか知っていたんじゃないだろうかと邪推する。

しかし、帰る気満々で特に確認するつもりもないのであった。

「待った待った。本音ちゃーん、出路君のこと引き留めといてー」

「あいまむー。いひひつ、そういうわけで、でつちーここを通りたくば私を倒すことだ〜」

タイムを要求した楯無により召喚された本音はゆるゆると生徒会出入口を塞ぐ。小脇を抜けようとするもフラフラとした動きが出路の進路を上手く遮ってくる。

「……一夏と一緒に生徒会に監禁されたって織斑センセに言えば、ワンチャンIS使っても許されねえかな」

「でつちー真顔で私にIS使うか検討しないで〜！」

「いや、のほほんさんにじゃなくてだな。壁抜きとかそういうんだ」

視線を窓や扉に向けて思い出すのは織斑家での大掃除。打鉄の拡張領域でも十分に量子変換して収納できるかの確認。

しかし、道が出来たところで部屋の隅でヒソヒソと虚と話している水色が彼を組伏せるだろう。生身でもISでもだ。

「まーまー、落ち着いて。かいちよーは強いし権力も下手な先生たちより上なんだよ〜」

「……クツソ、またIS学園が俺の中の常識を壊していきやがる！」

「加えて更識家っていうのはね〜」

「これ以上変な情報を言うのはやめろのほほんさん！ 俺の脳の容量キャパが一気に溢れるだろーが！」

制止はサラリと無視して更識家についてユルツと伝えるのほほん劇場が始まった。

日本には古来より暗部というものが存在した。時代によってそれは忍やスパイと名称を変えたものの公にできない、もしくは伏せておきたいことを遂行するための存在しない組織として機能する。縁の下の力持ち、見えないが重要な役割を果たした彼らとはある時代に最盛期を迎えた。

「けどね、暗部が横行すると存在しないはずの組織の存在感が大きくなつてきちゃったんだよね。それに権力を持った組織つてよく横暴になつちやつたりして」

国のお偉いさんが暗部処すか。そう言ったそうなの。

実際のところはもつと厳格な言葉ややり取りがあつたかもしれないが一言でまとめると大体あつている。暗部が行き過ぎた行動を取らないための抑止力、及び国のための暗部もしくはもとより敵サイドの暗部を叩くための存在。

それが対暗部用暗部『更識家』。

「つてわけだよ」

「重いわ。急にのほほんと語られた内容にしては濃すぎるし胃もたれ起こしそうだ……え、ガチもん？」

「本物つて書いてマジもんだね」

「対暗部用暗部つてややこしい名称も？」

「そうだね。まー、会長に限らずこれだけ多国のエリートが集まつてる時点でさ、スパイとかつて確実にいるよね」

「……まあ、学園のスパイはどうでもいいか。どうせ男にとつては嫌いな相手にも笑顔で語らえる女子なんて皆スパイみたいなものだ」

空を仰いで現実離れたゲームの設定のような現実の事実を飲み込もうとする。いや、上を向いたところで染みひとつない天井が見えただけなのだが。

「よし、一夏連れて帰るわ」

「かいちよー、信用度が減っちゃったよ」

「本音ちゃんもつと頑張つて！」

「あいあい。でっちーもうちよつとお話タイムだよ」
「帰ってえ」

出入口は布仏本音に塞がれ窓からワンチャンは普通に楯無に止められる、桐也は頭を抱えるしかなかった。

「まーまー、そう落ち込まない落ち込まない」

「落ち込んでねえ……」

「なら、諦めた？」

「ねえわ、そりやねえわ」

「でっちー、なんか諦め悪くなった？」

「……そうか？ 元々こんなだぞ」

本音はそろそろこのグダリ始めた空気に流されて、クソ面倒くさそうにしつつも仕方ないと折れるかと予想してたのだが。予想に反して折れてくれない。ダボついた袖をパタパタしながらどうしようかなどシンキングタイム。

桐也は桐也で現状に悩む。一夏を見捨てるかどうかで言われれば置いていってもブーブー言われるくらいで問題はなさそうではある。しかし困ったことは他にある。視線の先にはまだ虚と話しているブルーヘッド、つまりは楯無。

——どう考えても出し抜けなさそうなの生徒会の面々から、この場を切り抜けたとしてもどこかで詰みに入るんだろうなあ。

鍛えられることは嫌ではない。避けられないし強くなるべきなことも理解してるし強くもなりたい。ならなんで断るかと言われれば、単純に桐也が楯無のことを苦手になっている、好ましくないと感じているだけ。

「でっちー、お菓子あげるしゆっくりしていきなよ」

「露骨に引き留め方が雑になってんぞ。ちなみになんだが、更識家ってどれくらい力のがある？」

「ゴリラかオランウータンくらいかなあ」

「物理的にじゃね、待て物理でも怖いわ」

「冗談冗談。権力でも実際のところ強いよ？ 国家間で問題が起きたときに更識家に対応することもあるからね」

「そうか、そうか……よし」

足りない頭での奸計は終わったようだ。本音はニツコリと笑みを浮かべる。

いつの間にか虚との会話を終えていた楯無も桐也を向いていた。

「会長さん、ちよつといいか？」

「ちよつと言わずドンと来なさい」

「Don't come na sai? 帰れってなら帰るんだが」

「違うわよ。君の耳どうなってるのよ」

「まあ、冗談だ。本題は別でだな……会長さんがまた本気で俺を巻き込もうとしたら逃げ切れる自信はねえや」

頭を搔いて心底嫌そうな顔をしているが本気で言っているのが楯無にはわかった。だから諦める、というわけでもなさそうなのでおどけながらも続きを促す。

「あらら、後輩君にこんなにも信用されてて照れちゃうわ。それで出路君はどうしようというのかな？」

「どうしようってほどのことでもねえよ。提案がある。あんたの条件を飲む代わりに俺の頼みも聞いてくれ」

「聞くだけでいいのかしら？」

揚げ足を取るような言を返して開いた扇子には「口約束反故」と書かれていた。それを宴会芸の小道具かと桐也は流す。

「……たぶん割りに合わないこと頼むからな。考えてくれるだけでも俺の悩みが軽くなる」

「へえ、聞くわ」

——彼の話はわかりやすく単純だった。楯無、いや更識家当主であれば叶えられなくもない。彼がそこまで考慮していたかは定かではないが、なるほどたしかに一考の余地のある頼み事であった。

ただ気になる点があるとすればだ。

「ふうん、けれどいいのかしら。その願い事は君に対してメリットがないよ。卒業後の安全確保とかいいのかしら」

「あ、やっべ……」

なにもいいことはなかったらしい。いつもの考えなしの思いつき

で提案したようだ。面倒くさそうにしながら思考を巡らせ、ようとして止めた。先に提案したことも、卒業後の己の安全もどちらも大切だが天秤にのせて比べるようなことじゃない。早々にその結論に落ち着いたらしい。

「それは追々考えるわ。まだ2年半以上もあんだ。先に目下の悩みごと解決してからでも遅かねえだろ」

「アハハツ、いいね。君のそういうところお姉さん好きよ？」

「ほーん」

「褒めたんだから照れるかしたらどうかな？」

半目で見られるが桐也はいつもの着信拒否。口にされないかわからないと言いながらも、ときには口に出されても無視するのが彼であった。

「条件は飲んでくれるのか？」

「いいよ。前向きに善処するとも約束してあげようじゃない」

「ならいい。正直元々がマイナスしかねえ状態だったんだ。その口約束引き出せただけ俺的には頑張ったわ」

口には出さないが出路にとって鍛えてもらうこと自体は悪くない。その対価に強制部活加入は釣り合わないとも思うが、出路にとって今の条件を飲ませたことである程度釣り合いは取れた。

楯無はメリツトがないというものの、自身だけの力で解決困難な問題に助力を得られただけで助かる。いや、もしかしたらお節介でしかなく無駄な懸念かもしれないのだが、それでも彼にとっては気にせざるをえない問題なのだ。

「じゃあこれからよろしくね」

手を出さずに桐也が無言で数歩下がる。

「ちよつと？　ここは交渉成立して仲良くしていくところじゃないかな？」

「いや、なんか私怨込みでプライベートでは踏み込みたくねえなって」
「君ってそんなに失礼なキャラだったっけ」

「だからもともとこんなだったの。さつきからなんだ人が変わったみたいによ。人間そうそう変わるねえよ」

人が変わるなんてのは、それこそよっぽどのがないとおかしい。言外にそう含みを持たせたかのような発言に楯無は内心で眉をひそめる。その物言いはまるで出路桐也にはよっぽどのが起きていないとでも、自身に変化を与えるほどのことが起きていないかのような言い方じゃないか。

そんなはずはない。

桐也は変わってなんかいない。ただ環境の変化に合わせて――

▽▽▽▽

「――だから私が『僕』でいたのはただ取り繕ってただけなんだよ。学園っていう女所帯の環境じゃなくて少人数の男の子に紛れ込むためにね」

「ふむ、なるほどな。根底の変化というほどのものではなく、ペルソナを被っていたようなものか」

「んー、ザックリいうとそうかな？　でもラウラってば急にどうしたのき。私が入学してきた頃の話なんて」

「ん、なに。大したことはない。クラリツサが僕っ娘？　というものにハマっているらしくてな。そういえばシャルロットは昔そうではなかったかと」

「昔ってほどじゃないけどね」

シャルロットは喉仏なんかで性別がバレたことを思い出して思わず苦笑する。あれから連絡を取っていない父もどう思っただろうか――どうしてもよかったのかも知れない。チクリと胸が痛くなるが頭を振って切り換える。今の話題はなんだったか、学園に来たときに比べて伸びてきた、ミディアムほどの長さになってきた髪の毛を指先で弄りながら思い出す。

……僕っ娘とかいうものだったら切り換える必要はなかったのかもしれない。

「えっと、だから人が変わることはそうそうないかな。ラウラはどう思う？」

話題も切り換えることにした。

「そうだな……私はあり得ると考える。いや、私がそうだったというべきか。前にいつか言ったかもしれないが私は試験管ベイビーでな」
「待って待って聞いてない聞いてない！ そんな軽く言っちゃっていいの!?!」

大慌てでラウラの口を閉ざすがペロツと出された舌に思わず手を引いてしまった。

思わずキョロキョロとするもそこは自室。よかったと心底安心しながら気まずそうに舐められた手のひらを見る。ラウラは気にせず話を再開。

「む、そうだったか？ ……シャルロットならいいだろう。私がそう決めた。異論は認めん」

「え、ええ、ラウラがいいなら私はなんにも言えないけど……なんだかちよつと織斑先生みたいだったよ」

「そうか、教官に似ていたか。フツ」

何故か満足げな顔をしたラウラだった。しばし無言の間が続いて、はたと手を打つ。

「話の腰が折れたな。なんやかんやあった私は軍で落ちこぼれとなつてな。下しか見ることが出来ない人間に、人間以下のなにかに成り下がっていた」

色々とツツコミを入れ損ねたシャルロットは黙って話を聞くことにした。ラウラ節の唐突さであれ、それはシャルロットを信じて話してくれることであつたから。

「無駄に資源を消費してただ生きているだけ。ああ、やはり人ではなかったのだろうな。肉袋に命が入っただけの何かだった私は織斑教官と出会った。強烈で鮮烈で滅裂なあの人にな」

「滅裂は褒めてないよラウラ」
「語呂がよかったのだ流せ。教官は厳しかったが私を直ぐに人に変えてしまった。人が変わる、とはまた違うのかもしれないがな。」

だが似たようなものだろう。そこまで落ちた状態でもよほどの幸運に恵まれれば人は変わる」

「そっか。ラウラの持論は実体験に基づいてるんだね」

「ああ、なんならもうひとつあるぞ?」

ニヤリとシニカルっぽく笑みを浮かべる様はやはり何処か織斑千冬の面影を思わせる。それほど強烈に彼女のなかにあった存在だったのだろう。そして、あとひとり。

「それなら私でもわかるよ。一夏だよな?」

「む、当たり前だ。嫁に対して私は初め敵意を抱いていたからな」

「それが今ではこんななべた惚れだもんねえ。うんうん、たしかに人は変わるねえ」

「ぐぬぬ、そういうシャルロットはどうなのだ!」

にへらつとしたシャルロットに頬をつつかれたラウラは反撃の狼煙をあげた。ドイツの冷水と呼ばれた彼女、男に惚れて割りと温水になっちやったがただでやられはしないのだ。

「私……?」

「急に学園に来ることになっていい気はしなかったはずだ。だが今は私をからかって笑えるほど楽しんでるではないか!」

「ああ、ごめんごめん。そんなに怒らないで」

「……怒ってなどいない。それでどうなのだ?」

「んー、私は変わったというよりも」

フランスにいた頃。それも母と暮らしていた頃。

優しくかった母と外に出て駆け回ってお花畑にダイブして泥んこになりながら笑っていた。家のなかでも落ち着きなく花瓶を割ってしまったこともあった。結局母は叱らずに優しく諭されて心配されたのもいい思い出。

何が言いたかったって、結構やんちゃにしていた。

さすがに母を煽ったりしてはいなかったけど、方向性の違いや環境による多少の影響だろう。

「うん、私は変わったっていうより戻ったっていうのが近いのかもしれない」

「戻った?」

「そうそう、今からじゃ想像できないかもしれないけど、昔の私ってや

んちゃだっただよ?」

ラウラは口元に手を当て少し考えてキツパリ言い切った。

「いや、普通に想像出来るぞ?」

「ええー!?!」